

一般国道8号
糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書V

前波南遺跡Ⅱ
伝極楽寺跡

2010

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道8号
糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書V

前波南遺跡Ⅱ
伝極楽寺跡

2010

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道8号は新潟市を起点とし、日本海沿いに北陸地方を縦断し、京都市に至る総距離561.2kmの幹線国道です。新潟県と北陸地方及び京阪神地方を結ぶとともに、新潟県の産業・経済・文化の交流発展に大きな役割を果たしてきました。

しかし、現在の糸魚川市域の国道8号は、交通混雑に伴う渋滞・騒音、事故等の交通環境の悪化が深刻な問題となっています。国道8号糸魚川東バイパス建設事業は、このような問題を解決し、幹線ネットワークの充実と強化を図り、幹線道路としての役割や地域の生活道路としての機能を回復させるために計画されました。

本書は、この糸魚川東バイパスの建設に先立ち、平成19年度に実施した前波南遺跡・伝極楽寺跡の発掘調査報告書です。調査によって、前波南遺跡では古墳時代から古代の河川跡や溝が見つかり、多くの遺物が出土しました。滑石製の白玉を主体とする玉類、田下駄や大足と想定される農具、多種多様な建築部材、曲物類、形代類など、土器以外にも様々な種類の遺物が見られ、当時の人々の暮らしを知る貴重な資料となりました。また、「出雲」と墨書きされた木簡は当地と出雲地方の密接な関係（交流）を示唆する資料として注目されます。一方、伝極楽寺跡では寺院の痕跡を直接示す遺構を確認できませんでしたが、多数の柱穴があり、多くの掘立柱建物が存在していたことが分かりました。珠洲焼、青磁・白磁、土師質土器などの遺物と合わせ、実際に立地する12～13世紀の小規模集落の様子を知ることができました。

今回の発掘調査で得られた資料や本報告書が、埋蔵文化財の理解や認識を深める契機となり、地域の歴史資料として広く活用されることを期待しています。

最後に、この発掘調査に対し多大な御理解と御協力をいただきました糸魚川市教育委員会、並びに地元の方々、また、発掘調査から本報告書の作成に至るまで格別な御配慮をいただいた国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所に対して厚く御礼を申し上げます。

平成22年3月

新潟県教育委員会

教育長 武 藤 克 己

例　　言

- 1 本報告書は、新潟県糸魚川市大字大和川字前波ほかに所在する前波南遺跡、同じく大字田伏字高畠 1175-1 ほかに所在する伝極楽寺跡の発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は一般国道8号糸魚川東バイパスの建設に伴い、国土交通省から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したものである。
- 3 発掘調査は県教委が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼した。
- 4 埋文事業団は、掘削作業等を株式会社古田組に委託して発掘調査を実施した。
- 5 出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料は、一括して県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。遺物の注記は、前波南遺跡の略記号「07ゼンナミ」、伝極楽寺跡の略記号「ゴクラ」とし、出土地点や層位等を併記した。
- 6 本書の図中で示す方位は、すべて真北である。
- 7 本書に掲載した遺物番号は種別を問わず通し番号とし、本文及び挿図・遺物観察表・図面図版・写真図版の番号は一致している。
- 8 引用・参考文献は、著者及び発行年（西暦）を中心に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。「第Ⅲ章4 自然科学分析」については、引用文献を節末に掲載した。また、本文中の敬称は略した。
- 9 調査成果の一部は、遺跡速報会（平成19年12月8日）、広報紙『埋文にいがた』等で公表しているが、本書の記述をもって正式な報告とする。
- 10 自然科学分析の内、樹種同定はパリノ・サーヴェイ株式会社に、放射性炭素年代測定は株式会社加速器分析研究所に委託した。
- 11 造横断面図のトレース及び各種図版作成・編集は、株式会社セビアスに委託した。
- 12 本書の執筆は、石川智紀（埋文事業団 班長）、樋口重正（同 主任調査員）、相羽重徳（株式会社古田組 主任調査員）、松永鶴知（同 調査員）、高橋敦（パリノ・サーヴェイ株式会社）、鹿又宮隆（株式会社加速器分析研究所）があたり、編集は石川が担当した。木簡（「出雲真山」）の読解は田中一穂（埋文事業団 編訳員）が行った。また、第Ⅱ章については、「六反田南遺跡 前波南遺跡」[春日ほか2008] から再録し、変更か所に下線を付した。執筆分担は以下のとおりである。

第Ⅰ章1・2A2)・4、第Ⅲ章1・2B1) [河川1]・3B・3D・5…石川
第Ⅰ章2A1)・2B1)・3…樋口
第Ⅱ章A…小川真一（埋文事業団文化財調査員）
第Ⅱ章B…加藤 学（埋文事業団班長）・春日真実（同班長）
第Ⅰ章2B2)、第Ⅲ章2B6)・3A〔中世以後〕、第Ⅳ章…相羽
第Ⅲ章2A・2B1)～5)・3A〔古代以前〕・3C…松永
第Ⅲ章4A…高橋敦
第Ⅲ章4B…鹿又宮隆
- 13 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力をいただいた。ここに記して厚く御礼を申し上げる。（敬称略　五十音順）

安藤正美　伊藤啓雄　今村 克　岩崎 満　金子拓男　木島 勉　土田孝雄　長澤展生
長澤博之　能芝 勉　細井佳浩　水落雅明　宮田進一　森田喜久男　山岸洋一
糸魚川市教育委員会　糸魚川市田伏区自治会　糸魚川市大和川自治会　大雲寺

目 次

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯	1
2 調査経過	2
A 前波南遺跡	2
1) 試掘確認調査	2
2) 本発掘調査	2
B 伝極楽寺跡	4
1) 試掘確認調査	4
2) 本発掘調査	4
3 調査体制	6
A 試掘確認調査	6
1) 前波南遺跡	6
2) 伝極楽寺跡	6
B 本発掘調査	6
4 整理作業と整理体制	7

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境	8
2 歴史的環境	9

第Ⅲ章 前波南遺跡

1 概要	13
A グリッドの設定	13
B 基本層序	13
2 遺構	14
A 概要	14
B 各説	15
1) 自然流路	15
2) 溝状遺構	16
3) ビット	16
4) 土坑	17
5) 性格不明遺構	17
6) 杭	17
3 遺物	18
A 土器・陶器・土製品	18
1) 概要	18
2) 遺構・自然流路内の出土遺物	18
3) 遺構外の出土遺物	20
B 石器・石製品	21
C 木器・木製品	25
D 金属製品	29
4 自然科学分析	30
A 樹種同定	30
1)はじめに	30
2)試料	30
3)分析方法	30
4)結果	30
5)考察	32

B 放射性炭素年代測定(AMS測定)	36
1) 測定対象試料	36
2) 化学処理工程	36
3) 測定方法	36
4) 算出方法	36
5) 測定結果	38
5 まとめ	40
第IV章 伝極楽寺跡	
1 調査の概要	42
A グリッドの設定	42
B 基本層序	42
2 遺構	44
A 遺跡の概要	44
B I 期	44
1) 捩立柱建物	44
2) 碇石建物	46
3) 樽	46
4) 溝状・不明遺構	47
5) 沢状落ち込み	47
C II 期	47
1) 溝状遺構	47
2) 土坑	47
3) ビット	47
D III 期	47
3 遺物	48
A I 期	48
B II 期	49
C III 期	50
D その他の遺物	51
4 まとめ	52
A 出土した土器・陶磁器からみた遺跡の消長	52
B 伝極楽寺跡における土地利用の変遷	54
《要約》	55
《引用・参考文献》	56
《観察表》	59

插図目次

第1図 系魚川東バイパスの法線と遺跡の位置	1
第2図 前波南遺跡の試掘確認調査トレンチ位置と 本発掘調査範囲	3
第3図 伝極楽寺跡の試掘確認調査トレンチ位置と 本発掘調査範囲	3
第4図 調査範囲と埋設管位置図	4
第5図 遺跡の位置と周辺の主な遺跡	11
第6図 前波南遺跡グリッド設定と基本層序	14
第7図 遺構の長軸方向	15
第8図 白玉の外形(長さ、幅)別数量表	24
第9図 白玉の厚さ別数量表	24
第10図 白玉の孔径別数量表	24
第11図 河川2周辺の遺物出土分布図	27
第12図 木材顕微鏡写真(1)	34
第13図 木材顕微鏡写真(2)	35
第14図 歴年較正結果	39
第15図 前波南遺跡の遺構分布図	41
第16図 伝極楽寺跡基本層序	43
第17図 建物分類表	45

表 目 次

- 第 1 表 樹種同定結果 31
 第 3 表 伝極楽寺跡出土遺物一覧 53
 第 2 表 放射性炭素年代測定の結果 38

図版目次

【図面目次】

- 図版 1 前波南遺跡 遺構全体図
 図版 2 前波南遺跡 遺構分剖図(1)
 図版 3 前波南遺跡 遺構個別図(1)
 図版 4 前波南遺跡 遺構分剖図(2)
 図版 5 前波南遺跡 遺構個別図(2)
 図版 6 前波南遺跡 遺構個別図(3)
 図版 7 前波南遺跡 遺構分剖図(3)
 図版 8 前波南遺跡 遺構個別図(4)
 図版 9 前波南遺跡 遺構個別図(5)
 図版 10 前波南遺跡 遺構個別図(6)
 図版 11 前波南遺跡 遺構個別図(7)
 図版 12 前波南遺跡 遺構個別図(8)
 図版 13 前波南遺跡 土器・陶磁器(1)、土製品
 図版 14 前波南遺跡 土器・陶磁器(2)
 図版 15 前波南遺跡 土器・陶磁器(3)、瓦
 図版 16 前波南遺跡 石器・石製品(1)
 図版 17 前波南遺跡 石器・石製品(2)
 図版 18 前波南遺跡 木器・木製品(1)
 図版 19 前波南遺跡 木器・木製品(2)
 図版 20 前波南遺跡 木器・木製品(3)
 図版 21 前波南遺跡 木器・木製品(4)
 図版 22 前波南遺跡 木器・木製品(5)
 図版 23 前波南遺跡 木器・木製品(6)
 図版 24 前波南遺跡 金属製品
 図版 25 伝極楽寺跡 調査前地形測量図・グリッド設定図
 図版 26 伝極楽寺跡 I期・II期 遺構全体図
 図版 27 伝極楽寺跡 I期 遺構全体図
 図版 28 伝極楽寺跡 I期 遺構分剖図(1)
 図版 29 伝極楽寺跡 I期 遺構個別図(1)
 図版 30 伝極楽寺跡 I期 遺構個別図(2)
 図版 31 伝極楽寺跡 I期 汚・堆積状況
 図版 32 伝極楽寺跡 I期 遺構分剖図(2)
 図版 33 伝極楽寺跡 I期 遺構個別図(3)
 図版 34 伝極楽寺跡 I期 遺構個別図(4)
 図版 35 伝極楽寺跡 I期 遺構個別図(5)
 図版 36 伝極楽寺跡 I期 遺構個別図(6)
 図版 37 伝極楽寺跡 I期 遺構個別図(7)
 図版 38 伝極楽寺跡 I期 遺構分剖図(3)

- 図版 39 伝極楽寺跡 I期 遺構個別図(8)
 図版 40 伝極楽寺跡 I期 遺構分剖図(4)
 図版 41 伝極楽寺跡 II期 遺構分剖図
 図版 42 伝極楽寺跡 II期 遺構個別図
 図版 43 伝極楽寺跡 III期 石垣・平・側・断面図
 図版 44 伝極楽寺跡 土器・陶磁器(1)
 図版 45 伝極楽寺跡 土器・陶磁器(2)、石器(1)
 図版 46 伝極楽寺跡 土器・陶磁器(3)、石器(2)
 図版 47 伝極楽寺跡 土器・陶磁器(4)、土製品、石
 製品

【写真図版】

- 図版 48 前波南遺跡 遺跡近景
 図版 49 前波南遺跡 遺構個別写真(1)
 図版 50 前波南遺跡 遺構個別写真(2)
 図版 51 前波南遺跡 遺構個別写真(3)
 図版 52 前波南遺跡 遺構個別写真(4)
 図版 53 前波南遺跡 遺構個別写真(5)
 図版 54 前波南遺跡 遺構個別写真(6)
 図版 55 前波南遺跡 遺構個別写真(7)
 図版 56 前波南遺跡 土器・陶磁器(1)、土製品
 図版 57 前波南遺跡 土器・陶磁器(2)、瓦
 図版 58 前波南遺跡 石器・石製品
 図版 59 前波南遺跡 木器・木製品(1)
 図版 60 前波南遺跡 木器・木製品(2)
 図版 61 前波南遺跡 木器・木製品(3)
 図版 62 前波南遺跡 木器・木製品(4)
 図版 63 前波南遺跡 金属製品
 図版 64 伝極楽寺跡 遺跡近景(1)
 図版 65 伝極楽寺跡 遺跡近景(2)・遺構個別写真(1)
 図版 66 伝極楽寺跡 遺構個別写真(2)
 図版 67 伝極楽寺跡 遺構個別写真(3)
 図版 68 伝極楽寺跡 遺構個別写真(4)
 図版 69 伝極楽寺跡 遺構個別写真(5)
 図版 70 伝極楽寺跡 遺構個別写真(6)
 図版 71 伝極楽寺跡 遺構個別写真(7)
 図版 72 伝極楽寺跡 遺構個別写真(8)
 図版 73 伝極楽寺跡 土器・陶磁器(1)、石器(1)
 図版 74 伝極楽寺跡 土器・陶磁器(2)、石器(2)、
 土製品、石製品

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯

「一般国道8号糸魚川東バイパス」は、糸魚川市間脇を起点に、同市押上に至る延長6.9kmの幹線道路である。交通渋滞の解消、地域ネットワークの充実強化、沿道環境の改善などを目的に計画され、平成元年度に事業化された。その内、間脇～梶屋敷間3.8kmは2車線区間、梶屋敷～押上間3.1kmは4車線区間であり、平成4年度から用地買収、平成10年度から工事着手して整備を進めている。これを受け、建設省（現国土交通省、以下、「国交省」）と新潟県教育委員会（以下、「県教委」）との間で、事業用地内の埋蔵文化財の取扱いに関する協議が本格化した。

梶屋敷～押上間の分布調査は、県教委から委託を受けた財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埋文事業団」）が平成11年10月に実施した。調査の結果、道路法線上に周知遺跡は存在しないが、5か所の遺跡推定地が存在し、これらについて試掘確認調査が必要である旨を県教委に報告した。

前波南遺跡に係る試掘確認調査は、埋文事業団が平成17年9月から11月にかけて実施した。古代が主体の遺構・遺物を検出し、前波南遺跡として新規登録した。この時点で報告した本発掘調査必要面積は、3,848m²である。その後の取扱い協議で、市道横道線及び埋設管の切り工事に関係する範囲1,150m²が優先か所となり、埋文事業団が平成18年4月3日から7月31日にかけて本発掘調査を実施した。

伝極楽寺跡に係る試掘確認調査は、埋文事業団が平成18年7月から8月にかけて実施し、石垣で方形に区画された平坦面や中世以前の遺物を検出した。地元の聞き取りで寺院跡の可能性があること、石垣の積み方が戦国時代末から江戸時代初期の特徴であることから、伝承にある極楽寺跡と判断した。周辺に調査不可の範囲があったが、本発掘調査必要面積を2,170m²と推定し、県教委に報告した。

平成19年度の本発掘調査か所は、ほかの公共事業との調整もあり、最終的に平成19年3月に決定した。国交省から調査を受託した県教委は、埋文事業団に実施を依頼した。埋文事業団は前波南遺跡2,300m²の調査終了後、伝極楽寺跡2,170m²に着手することとし、4月23日から調査を開始した。



第1図 糸魚川東バイパスの法線と遺跡の位置〔原図 国交省作成 2.5万分の1を縮小〕

2 調査経過

A 前波南遺跡

1) 試掘確認調査

前波南遺跡に係る試掘確認調査は、平成17年9月15日～11月10日に実施した。一般国道8号糸魚川東バイパス用地約26,400m²を対象として、約737m²を調査した。掘削深度の目途を2～3mとして調査範囲内に調査坑（トレンチ）を任意に設定した上で、重機（バックホー）及び人力による掘削・精査を行い、その後、土層の堆積状況、トレンチ位置、遺構・遺物の検出状況等を図面・写真等に記録した。

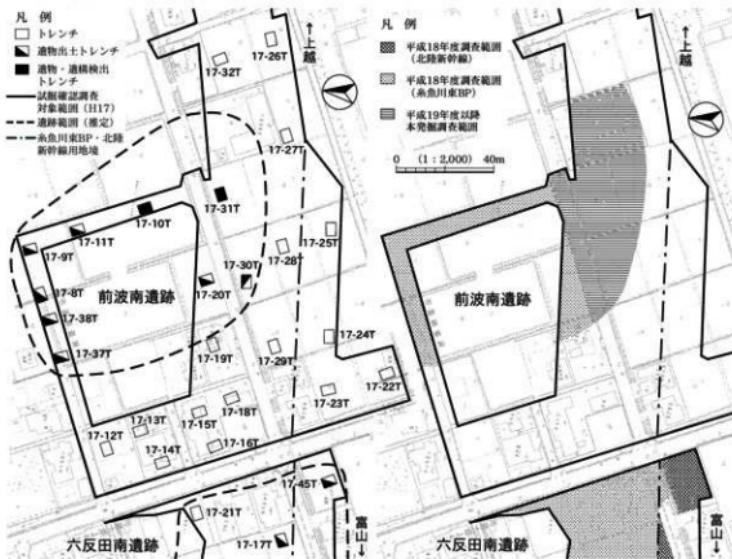
45か所のトレンチ（以下、T）を設定して調査した結果、遺構は3Tで土坑1基とピット1基、4Tで土坑1基、6Tで炭化物の集中1か所、7Tで溝1条、10Tと31Tで溝各1条が確認された。遺物は23か所のトレンチでⅢ層（平成19年度調査区内は黒褐色砂質土）を中心に、土師器・須恵器・中世陶器・繩文土器・砥石・ヒスイ・鉄石英・軽石・木製品が出土した。

遺構・遺物が検出されたトレンチは、前川を挟み東西に分かれてまとまりのあることが確認できた。共に遺跡新発見の地点であったことから、東側を前波南遺跡、西側を六反田南遺跡と呼称することとした。前波南遺跡については3,848m²の本発掘調査が必要と判断した。

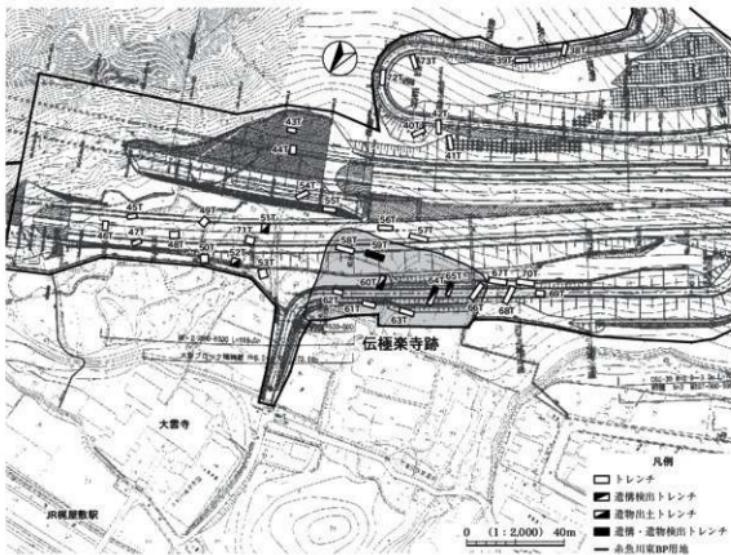
2) 本発掘調査

本発掘調査はバイパス建設工事の工程に合わせ、平成18年度と平成19年度の2か年にわたることとなり、平成18年度は市道を切り回す範囲の約1,150m²について調査を実施した。平成19年度は県教委からの依頼（平成19年3月30日付け教文第1601号の2）に基づき、当初2,300m²を対象に実施する予定であった。しかし、対象範囲内の、平成18年度調査区と隣接する市道は使用中であり、また埋設されている生活関連管や工業関連管も機能中であった。そのため、その範囲の取扱いは、周辺の遺構・遺物の検出状況から後日決定することにした。また調査対象範囲の南側の一部に工事用の仮設道路が建設されており、調査範囲に係る部分は国交省に除去をお願いした。

4月23日から宅地の盛土の除去、排水捨場の整備などを開始した。また地元から排水対策を十分に講じるように要望があったため、沈殿池を事業用地内に設け、遺跡内の溜り水が既存の排水路に直接流れ込まないように配慮した。表土掘削は4月27日から5月11日の間で、調査員立会いのもと重機（バックホー）で行った。基本層序を把握するためのベルトは調査区を3分割するように20mおきに設定し、表土層から残すこととした。また遺物が希薄な地点については包含層も含めて連続して掘削し、作業の効率化を図った。排水対策としては、表土掘削に平行し、調査区縁辺に開渠を人力で掘削した。包含層掘削・遺構確認・遺構掘削は、西側から東側に向かって順次作業を進めることにした。西側の範囲では、浅く広い不整形なプランを多く検出し、市道を挟んだ平成18年度調査区と同様の状況であった。流路など自然形成の痕跡である可能性が高かったが、耕作痕の可能性もあるため、一部について記録作業（図化・写真撮影）を行った。調査区中央部で自然流路（河川1）を検出し、トレンチ調査の結果、堆積土中に含まれる遺物は希薄だが、加工の認められる木材が多く含まれることを確認した。また溝（SD1）との合流部付近から木簡が出土したため、小型の木片についても調査員が選別した後に保管・廃棄を決定することにした。東側の低地に調査が進むにつれ、包含層は厚くなり、木製品も多く遺存している状況になった。調査は予



第2図 前波南遺跡の試掘確認調査トレンチ位置と本発掘調査範囲（[春日ほか2008] を一部改変）



第3図 伝極楽寺跡の試掘確認調査トレンチ位置と本発掘調査範囲

定どおり7月中には終了の見込みであったが、最も東側に自然流路（河川2）が存在し、その堆積土中に加工された部材や古墳時代の遺物が含まれていることが判明した。河川の対岸の一部は調査区外であること、またその近辺で遺物が多く出土したことなどから、東側へ拡張する必要が高くなつた。7月25日に国交省と現地協議し、8月10日までに現地作業を終了することで了解を得た。また本発掘調査の着手を保留していた市道下部分については、周辺の遺構・遺物の状況から不要と判断した。

拡張する範囲以外は7月25日に空掘を実施した。7月30日から拡張区の表土掘削を開始し、拡張した範囲内で河川の立ち上がりを確認した。その後、8月7日に県教委の終了確認を受け、8月10日にすべての作業を終了して国交省へ引渡した。

B 伝極楽寺跡

1) 試掘確認調査

伝極楽寺跡に係る試掘確認調査は、平成18年7月6日～8月23日に実施した。大雲寺の南側にある畑と杉林の調査対象面積は約6,000m²であり、そのうち約270m²を調査した。掘削深度の目途を2mとして調査範囲内に調査坑（トレンチ）を任意に設定した上で、重機（バックホー）及び人力による掘削・精査を行い、その後、土層の堆積状況、トレンチ位置、遺構・遺物の検出状況等を図面・写真等に記録した。

大雲寺の南側は、標高105.1mを最高点に北と東に急傾斜面を持つ。オクノエン（奥の院の転流か）と呼ばれる畑の一角には、寺院跡と伝えられる石垣を持つ平坦面と谷を埋め立てた一段低い平坦地が確認された。35か所のトレンチ（以下、T）を設定して調査した結果、遺構は59Tでピット4基、64Tの盛土層（礫を含む黄土色粘土）上面でピット2基、炭化物集中1か所、礎石状の石1基を検出した。65Tでも同様に盛土層上面で土坑1基を検出した。遺物は51Tで京焼風陶器碗1点、52Tで土師器9点（同一個体）、59Tで土師質土器4点、60Tで土師器2点が出土した。

石垣を持つ平坦面の規模は東西約30m、南北約23mで、これを画するかのように三段ほどの石積がある。石垣は北面と西面の二辺に存在し、最大高約2mを測り、裏込め石も認められた。築造年代を特定できる遺物は検出できなかつたが、積み方と伝承から戦国時代末から江戸時代初期の遺構の可能性があった。したがつて、寺域と推定される範囲の約2,170m²について本発掘調査が必要と判断した。

2) 本発掘調査

4月9日の国交省との協議から、調査対象範囲内には使用中の工業用水管（石綿製）が埋設しており、また埋設管の移設先も調査対象範囲内であることが判明した。埋設管の敷設は古く、正確な位置も把握されておらず、埋設深度も浅い場所では約30cmと予想された。埋設管は石綿製で破損しやすく、位置・深度が把握されない状況では、重機の使用・排土方法・湧水対策など調査する上で支障が



第4図 調査範囲と埋設管位置図

大きいことから、その現状把握と移設予定の時期・方法が判明後、調査工程を決定せざるを得なかった。国交省側による位置把握後、7月6・10・11日の協議を経て、移設先となる調査区北側の範囲を先行して引渡すことに決定した。

本遺跡は「極楽寺」の伝承地である。方形区画と石垣が遺存しており、それに伴う寺院施設等の遺構が検出できる可能性が高いと判断した。したがって、現地形測量及び石垣の調査を先行して行い、遺跡の年代とその全容を速やかに把握する手掛かりを得る必要があった。7月下旬から石垣の表面清掃などを先行して開始し、8月20日から本格的に発掘調査を開始した。層位確認ベルトを残しつつ、裏込め土の一部掘削などを行った。裏込め土上位からは近世陶磁器が出土したものの、12世紀代の遺物も散見され、中世段階の遺跡も発見される可能性が生じたため、方形区画内を掘り下げ、遺構検出を行うことにした。方形区画内は遺構確認面までの深度が10～20cmと浅く、重機を使用すると遺構を破壊するおそれがあつたため、人力で表土除去を行い、9月20日までにほぼ終了した。併行して遺構確認を行つたが、寺院に関連する明確な遺構は検出できなかつた。9月10日から14日までは、石垣から西側の低位面（下段）の表土掘削を重機で行った。包含層（Ⅲ層）は認められたが、遺物量が少なかつたため、包含層も重機で慎重に掘削することにした。9月15日からは下段の遺構確認及び遺構発掘を行い、9月21日には掘削作業を完了した。そこで、上段（方形区画及び石垣）と下段の遺構検出状況を空撮することにし、準備を行つたが、9月24・25日の集中豪雨で、近隣のバイパス建設に伴う工事現場から土砂が調査区内に流入した。その復旧に3日間程要したが、10月1日に空撮を行つた。

上段の方形区画内から明確な遺構が検出されず、石垣の構築年代が不詳であったことから、空撮終了後に石垣の断ち割り調査を行つたところ、近世後期以降の築造であることが判明した。また、下段で地山と認識していた層の約20cm下位の面でピットが検出できることから、石垣の断ち割りに併行して間層を人力で除去し遺構確認を行つた。遺構は一部の範囲に限られた。調査区北側の石綿管移設予定範囲の調査が終了したため、10月18日に一部を国交省に引き渡した。11月12日には石綿管の撤去工事が始まり、その間1週間ほど調査を休止した。管の撤去後、残った範囲の表土掘削に着手したが、石垣から東側は重機の進入路がなく、石垣や遺構を破壊するおそれがあつたので人力で掘削することにした。石垣から南西に位置する丘陵は標高が急激に高くなるため、遺構の存在する可能性は低いと予想された。遺構・遺物の有無についてトレーニング調査したが、検出できなかつた。当初予定範囲までの調査は順調に進行し、11月末にはほぼ終了できる見込みであった。しかし、上段平坦面の東側と南側は調査区際まで遺構が集中しており、さらに奥まで遺構が存在する可能性が生じた。そこで、11月29・30日に調査区の東側と南側に複数のトレーニングを設定して調査を行つたところ、東に約4m、南に約10m、遺構が延伸していることが判明した。12月5日に国交省と現地協議を行い、調査範囲を約390m²拡張して平成19年度内に調査を行うことが決定した。仮設工事用道路の撤去も必要であり、冬期間の調査となるため、降雪時はテントを張るなどして作業環境の向上に努めた。12月27日には遺構の発掘作業をおおむね終え、ローリングタワーで完了写真を撮影した。その後、記録作業及び一部層位確認掘削作業を行い、平成20年1月23日にしてすべての発掘調査及び遺物水洗・注記を完了し、現地を国交省に引渡した。その後、図面整理・遺物整理及び撤収作業を行い、2月4日に撤収した。

なお近隣住民を対象に、12月8日に横マクリ遺跡現地事務所で遺跡速報会（スライド説明、遺物展示）を開催し、43人の参加があった。

3 調査体制

A 試掘確認調査

前波南遺跡と伝極楽寺跡に係る試掘確認調査は、以下のような期日と体制で行った。

1) 前波南遺跡

調査期間 平成17（2005）年9月15日～11月10日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）

調 査 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

總 括 波多 俊二（事務局長）

管 理 長谷川二三夫（総務課長）

庶 務 長谷川 靖（総務課班長）

調査総括 藤巻 正信（調査課長）

調査担当 寺崎 裕助（調査課 課長代理）

職 員 田中 一穂（調査課嘱託員）

2) 伝極楽寺跡

調査期間 平成18（2006）年7月6日～8月23日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）

調 査 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

總 括 波多 俊二（事務局長）

管 理 斎藤 栄（総務課長）

庶 務 長谷川 靖（総務課班長）

調査総括 藤巻 正信（調査課長）

調査担当 田海 義正（調査課 課長代理）

職 員 田中 一穂（調査課嘱託員）

B 本発掘調査

平成19年度の本発掘調査は、以下のような期日と体制で行った。

調査期間 平成19（2007）年4月23日～平成19年8月6日【前波南遺跡】

平成19（2007）年8月1日～平成20年1月23日【伝極楽寺跡】

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）

調 査 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

總 括 木村 正昭（事務局長）

管 理 斎藤 栄（総務課長）

庶 務 長谷川 靖（総務課班長）

調査総括 藤巻 正信（調査課長）

指 導 寺崎 裕助 (調査課 課長代理)
調査担当 石川 智紀 (調査課班長)
職 員 橋口 重正 (調査課主任調査員)
支援組織 株式会社古田組
現場代理人 竹内 一喜 (遺跡調査研究室 管理課主任)
調査員 相羽 重徳 (同 調査課主任調査員)
松永 篤知 (同 調査課調査員)
補 助 員 安達 鉄雄、風間 梢、丸山 信子、葭原美恵子

4 整理作業と整理体制

平成 19 年度の整理作業は、現地作業と平行しながら進めた。遺物の水洗・注記及び接合の一部、台帳類の整備などを現地事務所で行い、遺物の注記の一部、接合・復元・実測・写真撮影、図面類の修正・レイアウト、原稿執筆などを株式会社古田組遺跡調査研究室（上越市柿崎区）及び埋文事業団（新潟市秋葉区）で実施した。平成 19 年度の整理体制は本発掘調査の体制と同じである。平成 20 年度に原稿執筆・編集・校正を主に実施し、平成 21 年度に印刷・刊行した。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

前波南遺跡・伝極楽寺跡が所在する糸魚川市は、平成17年3月19日に旧西頸城郡能生町・同青海町と合併し、新潟県の最西端に位置することとなった。市域の北は日本海に面し、南を長野県、西を富山県と接する。糸魚川市は、古くから史跡松本街道の日本海側起点として知られている。「塩の道」とも呼ばれるこの古道は、糸魚川から長野県松本までおよそ30里(120km)に及ぶ険な山越えの道であり、海をもたない内陸部へ塩や魚介類を送る道として重要な役割を担ってきた。現在も姫川沿いに長野県へ通じる国道148号線とJR大糸線、海岸線沿いを通過する北陸自動車道・国道8号線・JR北陸本線の交点にあたる交通の要所となっている。

糸魚川市には、南北に流れる姫川とほぼ一致するように、フォッサマグナの西縁にあたる「糸魚川一静岡構造線」が分布する。この構造線を境界にして、地質学的に西南日本と東北日本に分けられている。構造線以西の地層は、主に古生代石炭紀～ペルム紀に至る青海一蓮華変成岩帯など、古生代・中生代の堆積岩・火成岩より成り立っている。青海一蓮華変成岩帯は、その断層面に蛇紋岩・輝緑岩・変はんれい岩などが介在する複雑な構造を有しており、ひすい輝石岩・青海石・奴奈川石など希少な岩石が含まれている。なかでも、「ひすい輝石岩」は小瀬川や青海川で産出されることが知られており、「小瀬川硬玉産地」・「青海川の硬玉産地及び硬玉岩塊」が国の天然記念物に指定されている。一方、この構造線以東の地層は主に新第三紀・第四紀の新しい時代の堆積岩・火成岩より成り立っており、構造線の東西で地質が大きく異なることがわかる〔鈴木2000・小林2000〕。

市域の南側には、飛騨山脈の北延主稜と西頸城山地がある。飛騨山脈には、県内最高峰の小蓮華山(2,769m)をはじめとして2,000m級の山々が連なる。その主稜は北に進むにしたがって高度を急速に減じ日本海に没している。この急崖が「親不知・子不知」である。石灰岩からなる黒姫山(1,221m)・明星山(1,188m)では山岳カルストが発達しており、日本最深の白蓮洞(513m)など多数の洞穴が存在する。市域には、ここから産出する石灰岩を資源とした化学工業地帯が形成されている。

西頸城山地は、新第三紀以降の堆積層が隆起した丘陵と、長野県との県境をなす雨飾山(1,963m)や海谷山地など火山性岩石を主体とする山塊から構成されており、さらにその背後には焼山(2,400m)が位置する。標高400m以下の小起伏山地では、主に新第三紀の砂泥岩層から形成されており、地下水が増大する融雪期、梅雨期、初冬などには、崩落・地すべりが発生する〔鈴木2000〕。地すべり等防止法制定のきっかけとなった福口地すべり(1947年発生)など、著名な地すべり地が多い地域である。

これらの山地を源流にして、青海川・田海川・姫川・海川・早川などが北流し日本海に注ぐ。その中でも姫川はこの地方最長の一級河川であり、全長約60kmに及ぶ。長野県青木湖北部の湿地を源流とし、長野県小谷村を経て糸魚川市で日本海に注いでいる。これらの河川沿いには河岸段丘がみられるが、特に姫川と海川の河口岸に発達している。この段丘は高位の洪積段丘から低位の沖積段丘まで6段に細分されている〔鈴木1982〕。高位の段丘には繩文時代～弥生時代、低位の段丘には繩文時代～古代、沖積段丘には古代の遺跡が分布しており、遺跡の時期が下がるにしたがって高位から低位へとその分布する主体面

を移動させている〔寺崎1988〕。

これらの河川はいずれも急流で、かつ海底が深いため、沖積平野は発達していない。最も広い沖積地は姫川と海川の河口間に形成された扇状地で、この扇状地を中心狭い海岸平野が広がる。このほかの平坦地は、河川沿いにわずかな谷底平野が細長く形成されるのみである。また、北東～南西に平滑に広がる海岸線沿いには砂丘列が形成されており、姫川河口左岸の須沢では最大幅300m、最大高11.5mを測る〔鈴木1982〕。市街地や主要幹線は、この砂丘上と沖積地など、限られた平坦地に細長く展開している。

2 歴史的環境

糸魚川市域における弥生時代～中世・近世の主な遺跡分布は、第5図のとおりである。姫川右岸の糸魚川地区では、標高100m以下の緩傾斜の丘陵が発達し、特に標高50m前後の河岸段丘上に遺跡が多く分布する。また、近年、北陸新幹線建設に伴う発掘調査等によって、狭い平野部においても遺跡分布が濃密であることが明らかになっている。居住に適した平坦地が限られるため、土地利用が特定の範囲に集中した結果と考えられる。

弥生時代

弥生時代の遺跡としては大塚（新削）遺跡（12）、原山遺跡（46）、一の宮遺跡（18）、後生山遺跡（20）、笛吹田遺跡（22）などが存在する。

大塚（新削）遺跡・原山遺跡は姫川右岸に位置し隣接する。ともに縄文時代晚期から弥生時代前期の遺跡である。大塚（新削）遺跡出土の弥生時代前期の土器は、遠賀川式系・水神平式系・浮線文系・亀ヶ岡式系などで構成され、当地が東西日本あるいは日本海側と内陸（を通じて太平洋側）を結ぶ結節点であることをよく示している。また、ヒスイや滑石を素材とした玉作も行われている。玉類の組成や製作技術は縄文時代以来の伝統を受け継いだものと指摘されている〔寺崎・田中ほか1988〕。

一の宮遺跡は、延喜式内社奴奈川神社の論社である天津神社境内に所在する。古墳時代の滑石製玉類の製作遺跡として著名だが、弥生時代中期・後期の土器も確認できる〔糸魚川市役所1986〕。

後生山遺跡は、姫川と海川に挟まれた丘陵上に位置する弥生時代後期を中心とする遺跡である。竪穴建物4棟、土坑、溝などが検出され、北方に広がる平野部との比高差は約30mであり、いわゆる高地性集落と考えられる。ヒスイ・緑色凝灰岩の原石や砥石などが出土しており、集落内では玉作が行われていた〔木島ほか1986〕。また、3号住居跡から出土した土器群は北陸系土器を主体とし、後期初頭に位置づけられるもので、新潟県内における弥生時代後期土器編年のはじまりとなる〔滝沢2005など〕。

笛吹田遺跡は後生山遺跡の北方に広がる平野上に立地する遺跡であり、弥生時代後期の方形周溝墓と推測される溝が検出されている〔安藤ほか1978〕。

古墳時代

古墳時代の遺跡は、玉作に関連する遺跡が特徴的に発見されている。姫御前遺跡（21）と笛吹田遺跡（22）は近接する遺跡である。笛吹田遺跡は弥生時代後期から続く遺跡であるが、前期～中期を中心とする玉作遺跡で、白玉・勾玉・管玉・砥石等が出土し、玉作用の特殊ビットや方形周溝墓とみられる遺構が検出されている〔安藤ほか1978〕。また、近年、都市計画道路建設に伴う発掘調査が断続的に行われ、竪穴建物、井戸側や釣瓶を伴う井戸の検出や琴柱状石製品の出土などの成果が注目されている〔山岸2006・2007〕。なお、笛吹田遺跡と姫御前遺跡は、昭和50（1975）年に別個の遺跡とされるまでは、

「姫御前遺跡」という名称で同一の遺跡として捉えられていた〔土田 1978〕。両遺跡の間に遺跡の空白が存在することが確認されているようであるが、年代的に重複することから相互に関連する遺跡であろう。

大角地遺跡（5）は、昭和 10（1935）年の朝日新聞に「石器時代の玉作り遺跡か。倉若七郎氏が青海町で発見した考古学上の宝庫」と紹介されている。その後、青木重孝氏によって蓄積された資料が契機となり、学会で注目されるようになり、勾玉の製作過程「オガクチ技法」〔寺村 1966〕の標識遺跡としても知られるようになった。昭和 45・48（1970・73）年には、都市計画道路建設に伴う発掘調査が行われ、工作用特殊ビットをもつ玉作工房跡が検出され〔寺村・安藤ほか 1979〕、中期の滑石製玉類の製作関連資料が多数出土している。また、平成 17 年には北陸新幹線建設に伴う発掘調査が行われ、勾玉・白玉の製作関連資料が出土している〔加藤ほか 2006〕。

田伏遺跡（34）は、中期～後期の遺跡である。昭和 45（1970）年に行われた発掘調査では、滑石製の白玉・管玉・勾玉・子持勾玉や紡錘車の製作関連資料が多数出土しており、玉作遺跡であることが明らかにされている〔閔 1972〕。また、祭祀系土器の出土や滑石製模造品の大量出土から、玉作に伴う祭祀が行われた可能性が指摘されている〔糸魚川市役所 1986〕。

一の宮遺跡（18）は、天津神社境内に所在する。大正 8（1919）年に高橋健自氏によって発掘調査されており、後期の土器とともに有孔円版・勾玉・白玉等の祭祀遺物が多数出土している〔糸魚川市役所 1986〕。樋山林維氏は一の宮遺跡を祭祀遺跡としており〔樋山 1972〕、一の宮遺跡から出土した玉類は、笛吹田・田伏・大角地など、近隣の製作遺跡との関連性が指摘されている〔閔 1972〕。なお、天津神社境内の奴奈川神社は、「延喜式」神名帳に記載される「奴奈川神社」の論社である。

三ツ又遺跡（45）は姫川右岸の山間に位置する遺跡で、古墳時代中期の竪穴建物 3 棟、土坑などが検出され滑石製白玉・勾玉・管玉・紡錘車・有孔円板やこれらの未製品、ヒスイ原石・剥片・勾玉未成品、綠色凝灰岩原石・剥片や砥石が出土している〔木島 1988a・1989a〕。

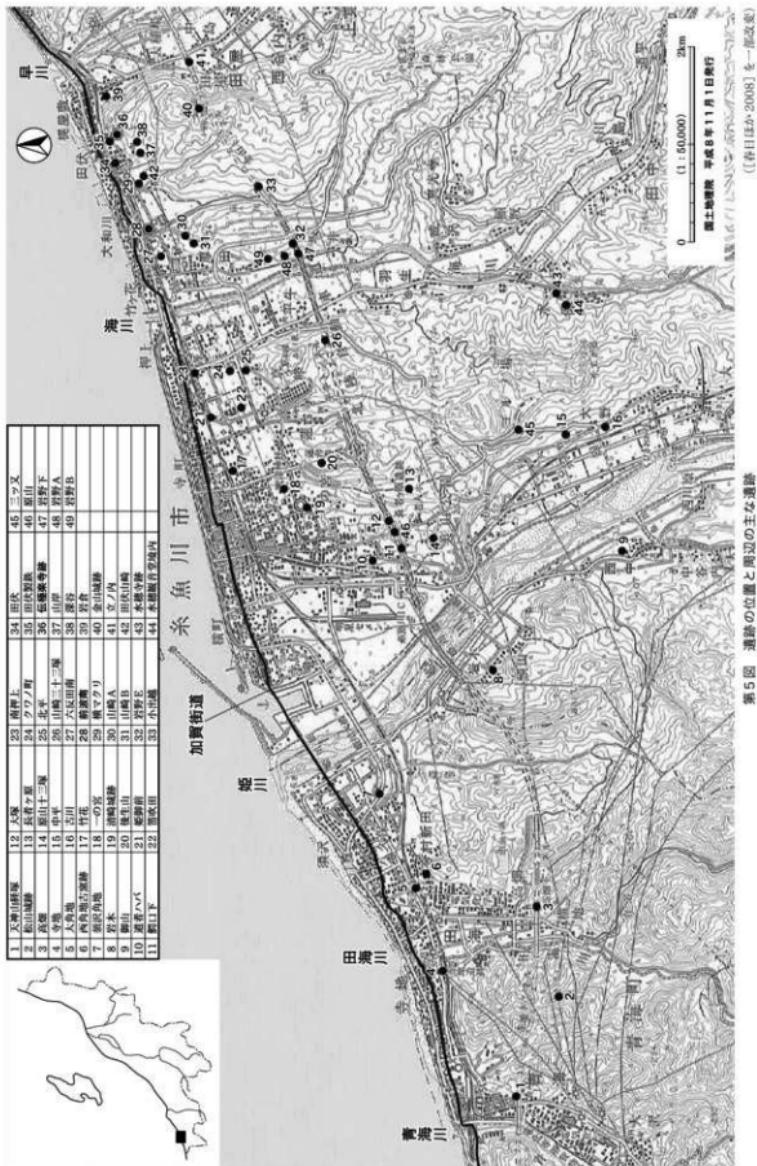
このように糸魚川地域では、滑石製の玉作が盛んに行われた遺跡の存在が特筆される。また、北陸新幹線建設に伴い発掘調査された六反田南遺跡（27）、姫御前遺跡（前期）（21）、横マクリ遺跡（前期）（29）においても玉作の存在が確認されている〔新潟県教育委員会ほか 2007〕。小規模な集落においても、数は多くないものの未製品を含む玉類がほぼ例外なく出土しており、玉作が行われていたと考えられる。ヒスイ・滑石等の石材原産地を控える当地域においては、縄文時代以来、伝統的に玉作が盛んに行われていた。

古代

青海地区（旧青海町域）における古代の遺跡は、集落跡と窯跡が検出されている。姫川河口近くに位置する須沢角地遺跡（7）は、昭和 62（1987）年・平成 17（2005）年に発掘調査が実施され、7世紀～10世紀の集落跡であることが明らかにされている〔土田ほか 1988、辻 2006〕。また、須沢角地遺跡の西南西 1km の丘陵裾には西角地古窯跡（6）が所在する。窯体の一部・窯壁・焼土とともに多量の須恵器が出土しており〔寺村・安藤ほか 1979〕、8世紀末～9世紀初頭の窯跡と考えられている〔春日 1998〕。

糸魚川地区（旧糸魚川市域）の姫川右岸に位置する道者ハバ遺跡（10）では、掘立柱建物や井戸といった遺構とともに、多量の須恵器・土師器のほか、灰釉陶器・綠釉陶器が多く出土した。当地方の中心的役割を担った遺跡と推定されている。また、詳細は不明だが近接して須恵器窯も存在する〔山岸 2001a〕。

糸魚川地区的うち海川と早川に挟まれた田伏・大和川・梶屋敷周辺では北陸自動車道建設に伴い、岩野下（岩野 D）遺跡（47）、岩野 A 遺跡（48）、岩野 E 遺跡（32）、小出越遺跡（33）、立ノ内遺跡（41）等が調査され、近年では工場・県道などの建設に伴い山崎 A・B 遺跡（30・31）が調査された。



岩野下遺跡は8世紀後半から10・11世紀にかけて断続的に営まれた遺跡で、掘立柱建物7棟、竪穴建物1棟が検出され、土師器・須恵器・灰釉陶器・墨書き器・転用硯・土錘・フイゴ羽口などが出土している〔高橋・遠藤ほか1987〕。岩野A遺跡は岩野下遺跡の北東に近接する遺跡、岩野E遺跡は岩野下遺跡の東に近接する遺跡で、ともに墓穴の可能性が考えられる長方形の土坑がまとまって検出された。このうち岩野A遺跡では焼土とともに9世紀後半頃の土師器無台椀がまとまって出土している〔高橋ほか1986〕。

小出遺跡では9世紀前半を中心とする土師器焼成構や竪穴建物などが検出されており〔鈴木1988〕、立ノ内遺跡からは焼上造構とともに大型平底の製塙土器、フイゴ羽口など出土している〔高橋1988〕。

山崎A・B遺跡では大型の掘立柱建物に近接して数百点に及ぶ土師器食膳具を廃棄した土坑などが発見された〔木島2007〕。これらの調査成果により、丘陵部における奈良・平安時代の多様な生活が明らかになりつつあるが、六反田南遺跡・前波南遺跡の立地する平野部の遺跡については不明な点が多い。

中世

青海地区では、山城跡や経塚の存在が知られている。勝山城跡は、標高328mの勝山山頂に築かれている。天正年間（1573～1582）頃、越中への前進基地として築城されたといわれており、戦国時代は同方面を押さえる要衝であったと考えられている〔平野・渡辺1986〕。寺地の南方、松山の尾根上に南北500mにわたって築城された松山城跡（2）は、標高170mの地点に本丸跡があり、空堀や帯郭・櫓郭で幾重にも固められている。石垣に所在する天神山経塚（1）は、1919（大正8）年に調査され、仁安2（1167）年の銘のある珠洲焼の經筒が発掘されている〔金子1975〕。寺地遺跡（4）・須沢角地遺跡（7）は、造構は明確ではないが中世の陶磁器が一定量出土している〔佐藤・相羽ほか2002、土田ほか1988〕。

糸魚川地区では、御山遺跡（9）・中平遺跡（15）・古川遺跡（16）・水保観音堂境内（44）・北平遺跡（25）・クワノ町遺跡（24）・竹花遺跡（17）等が知られている。

観音菩薩立像（重要文化財）を安置する水保観音堂境内からは中世陶磁器類を出土していることから、水穂寺跡との関係が考えられている〔山岸・田村2004〕。また、段丘～丘陵上には、中世後期～近世初期の原山十三塚（14）や山崎三十三塚（26）〔木島1989b〕が分布する。

糸魚川地区的うち田伏・大和川周辺では、岩野B遺跡（49）・山崎A・B遺跡（30・31）・立ノ内遺跡（41）・岩倉遺跡（39）等の調査が行われている。

岩野B遺跡は海川右岸の台地上に位置し15世紀後半頃と考えられる東西約50m、南北約60mに溝を巡らせた方形館とこれに伴う掘立柱建物跡などが検出され、青磁碗などが出土している〔山岸2001b〕。

立ノ内遺跡は、早川左岸の台地上に位置し15～16世紀と考えられる1×9間（4.6×19.7m）で二面に縁もしくは脛（1.1m）が付く大型の掘立柱建物を中心とする建物群が検出され、多量の土師器皿が出土した〔高橋1988〕。西側の山頂に位置する金山城跡（40）は立ノ内遺跡に隣接する山城と推測でき、要害と居館の関係と考えられる〔高橋1988〕。

岩倉遺跡は早川左岸の平野部に位置する遺跡で、15世紀の水田跡、中世末～近世初めと考えられる礎石建物が検出され、轡・小札・鉄鎌などの馬具・武具類や鉄鍋などが出土した〔山本ほか2003〕。また、近年の北陸新幹線や国道8号糸魚川東バイパス建設に伴う山岸遺跡（37）、横マクリ遺跡（29）等の調査が行われている〔新潟県教育委員会ほか2007〕。これらの調査により、平野部における中世遺跡の様相が明らかにされつつある。

第III章 前波南遺跡

1 概 要

A グリッドの設定 (第6図)

前波南遺跡のグリッドは、前川を挟んで西側に隣接する六反田南遺跡と共にしたものが平成18年度調査時に設定されており、平成19年度調査区もそのグリッドに合わせた。ただし東西方向は算用数字の起線を越えて東側に延伸するため、東側に向かい「-1・-2…」とした。

グリッドの主軸方向は、糸魚川東バイパス建設予定地内のセンター杭No.56とNo.57を結んで東西ラインとし、直交する南北ラインはセンター杭No.56を基準交点として設定した。その結果、グリッドの基準線の方位は真北に対して7度16分30秒西偏している。グリッドは大小2種あり、大グリッドは10m四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを2m四方に25等分したものである。大グリッドの名称は、南東隅の杭を基点として東西方向を算用数字、南北方向をアルファベットとし、両者の組合せにより「1F」のように表示した。小グリッドは1~25の算用数字で表し、南東隅を1、北西隅を25とし、「1F13」のように大グリッド表示の後につけて呼称した。また必要に応じて、小グリッドを1m四方に細分した。ア~エのカタカナで表し、南東隅をア、北西隅をエとし、「1F13イ」のように呼称した。今回の調査区にあたる杭の座標値（世界測地系）は、2F杭（X=116498.242, Y=-53498.759）、-2F杭（X=116502.043, Y=-53469.001）を示す。

B 基 本 層 序 (第6図)

平成19年度調査区の基本層序は、平成18年度調査区に合わせることを前提とした。しかし、平成18年度調査区には存在しなかった層がほぼ全域で確認できたので、新たに1層（II'層）を追加し、I・II・II'・III・IV層の5層に大別した。同一の地層でも土質に多少の差異があり、各層はさらに2~3層に細別が可能である。平成19年度は、II層が室町時代～江戸時代初期の遺物包含層、II'層が古代の遺物包含層、III層が古墳時代の遺物包含層及び古代の遺構確認面、IV層が古墳時代～古代の遺構確認面で地山である。調査時は便宜的にII層を黒色層、II'層を茶色層、III層を暗灰色層、IV層を灰～青灰色層と呼称した。以下に、各層の詳細を述べる。

I 層：水田耕作上。上から順に、暗褐色（10YR3/3）土のI a層、褐灰色（10YR4/1）土のI b層、暗灰黄色（2.5Y4/2）土のI c層に細別が可能である。

II a層：黒色（10YR2/1）粘質土 粘性弱く、締まり強い。φ1~3mmの橙色（7.5YR6/8）粒子を多量に含み、炭化物を少量含む。

II b層：黒色（7.5YR1.7/1）粘質土 粘性あり、締まりあり。有機物、小礫、灰黄褐色粘質土を少量含む。

II a層より赤みを帯び、粘性が強いが、締まりは弱い。SD1の上面で確認できる。

II'a層：にぶい黄褐色（10YR4/3）腐植粘質土 粘性弱く、しまり弱い。有機物、小木片等が多く含まれる。炭化物も少量含む。

II'b層：灰黄褐色（10YR4/2）腐植粘質土 粘性あり、しまり弱い。基本はII a層と同じだが、下層の粘

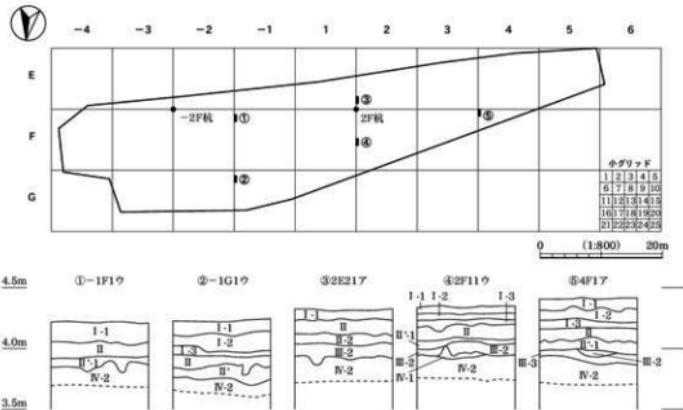


図6 前波浪遺跡グリッド設定と基本層序

賀土が多く含まれる。根による搅乱か。

II'c層：灰黄褐色（10YR4/2）腐植粘質土 粘性あり、しまり弱い。灰黄褐色粘質土を斑状に少量含む。

II'd層：黒褐色（10YR3/2）腐植粘質土 粘性あり、しまりあり。有機質を多く含む。III b層を斑状に多く含み、混入物が多い。

III a層：褐灰色（10YR4/1）粘質土 粘性あり、しまりあり。比較的均質な土。炭化物を少量含む。

III b層：灰黄褐色（10YR5/2）粘質土+灰白色（10YR7/1）粘質土の混じり。 粘性あり、しまりあり。下層との混じり土で斑状になる。踏み込みの痕のような混じり。

III c層：灰黄色（2.5Y6/2）粘質土 粘性あり、しまりあり。下層に極めて近い。III b層より混じりが少なくなる。

IV a層：褐灰色（10YR6/1）シルト質土 粘性あり、しまりあり。地山の中に所々帶状に含まれる。

IV b層：褐灰色（10YR6/1）粘質土 粘性強く、しまりあり。粘質土が基本だが、IV a層に似たシルト質土が帶状、あるいは斑状に含まれる。

2 遺構

A 概要

今年度調査区では、自然流路2条、溝状遺構4条、ピット21基、土坑2基、杭状遺構22か所、性格不明遺構25基を検出した。それらのうち自然流路の一部（河川2下層）が古墳時代に遡ると見られるが、それ以外は基本的に古代の遺構と考える。不整形な遺構や小規模な遺構が大半を占め、その配置も疎らなことから、本調査区は居住域とは考えられない。平面形が不整形であるにも関わらず、遺構の長軸が北西→南東方向でおおむね一致していることから（第7図）、これらの多くは人為的な掘り込みではなく、自然に形成された落ち込みであった可能性もある。ただし、2条検出された自然流路からは多量の木器・木製品が出土しており、注目される。また、自然流路の内外で杭状の木を地面に突き立てた遺構を多く検出し、

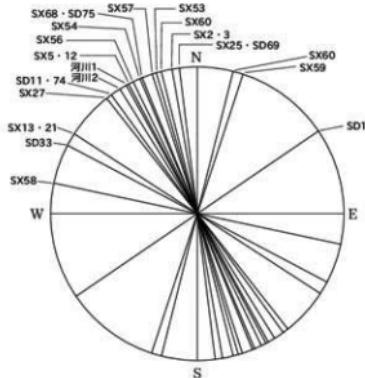
流路に伴う施設であった可能性が指摘できる。

B 各 説

1) 自然流路

河川1 (図版4・5・6・49・52・53) 調査区中央を海側に向かってほぼ南北に横断し、底面や壁面が多段を形成する様相（断面階段状）から、人工的に開削された溝ではなく、自然流路と考える。南東から北西方向に流れ、1F9グリッド付近でSD1が合流する。II'層以下で検出されたが、中央部は低地となっていたためか基本層序II層及びII'層が堆積する。中位以下の層は砂と粘質土の互層となり、加工木と共に多量の自然木、有機物等が出土した (168~193)。砂の粒径は基本的に下層にいくほど粗くなる。中位以下から出土した土器等は少なく、覆土が堆積した時期は判別し難いが、古代の遺構と想定できるSD1との関連から考えて、古代には開口していた河川と考える。また1F13グリッドの下層から出土した加工材 (185) の放射性炭素年代測定をした結果 (第Ⅲ章4B参照) でも、 1420 ± 30 BP (AD610~655年) の値を示している。南側で幅広であった底面は、1F7グリッドで一段落ち込み、そのまま緩く傾斜しながら北側 (海側) へ続く。この一段落ち込む部分は、SD1との合流部 (1F9杭周辺) に近く、その水の流れ込みで削られた結果とも考えられ、また合流部で検出した小規模な数段の段差もその要因によるものであろう。そのような自然に形成された傾斜を持つ段とは異なる水平な平坦面を、1F22、1G2・3・8グリッドで検出した。この平坦面は幅が広い場所で約1.6mあり、滑ることなく立つことが可能である。その底面標高は、砂が多く含まれる覆土の上面標高とほぼ同じであり、通常時は水が被っていないかった範囲と考える。この平坦面に伴う明確な施設は検出できなかったが、水際を利用する作業場として、人工的に掘られた可能性がある。

木製品の集中区を2か所で検出した。1か所は1G3グリッド付近に位置し、上記の人工的な平坦面に隣接する。そのまとまりをSW1と仮称した。もう1か所はSD1との合流部付近で、SW2と仮称した。SW1では192・193のような長さ約170cm、幅4cm、厚さ0.5cmの薄く細長い板材が、川の軸に合わせて十数枚敷き詰められたような状況で検出した。北側は既設の用水路で破壊されている。また、その板材を取上げた下にも1cm程度の土を挟み、同様の板材が方向を同じくして敷かれていた。漁具のドウなどが潰れた可能性も考えたが、ほかの部材や組などと結節したような痕跡は認められず、また水流によって移動したような状況でも無いことから、その場に意図的に敷き並べた可能性が高い。位置的には平坦面の脇際にかかるが、平坦面の底面から15cm程浮いた状況であり、平坦面が機能していた時期とは若干時間差がある。南側の一部に突き刺した材もあることから、自然流路が半分以上埋まった状況で、まだ埋まりきらないその低地部を利用する目的で設置した施設の一部と考える。SW2は合流部で検出した木製品・自然木のまとまりで、堰などの施設が想定できた。合流部ではSW2を含めて多くの木製品 (166~176) が出土している。杭のように底面に突き刺したものは何本かあったが、互いの関連性は見出せず、また横木などと組んだような加工や痕跡も認められないことから、水流で集まつたものと判断した。この



第7図 遺構の長軸方向

木材の集積で流れが阻害されたためか、それから北側のSD1寄りで小形の棒状木製品が多く出土し、木簡（166）もここから出土した。また河川1からは形代状木製品（178・179・182）が出土しているが、覆土中位の砂混じり層からの出土であり、祭祀的な様相はうかがえなかった。

河川2（図版7・9～12・49・54・55） 調査区東端（-3F・-3G・-4Fグリッド）を、北西（N-32°W）に向かって蛇行気味に走るもので、自然流路と考える。断面弧状を呈し、幅5.6～11.4m、深さ64～74cmを測る。覆土は、大きく分けて1層：基本層序Ⅱ～Ⅲ層が落ち込んだもの、2層：腐植物や炭化物粒子を含むシルトまたは粘質シルト層、3層：腐植物などを含む細砂層または粘質シルト層から成り立っている。一部に4層：地山に近い粘質シルト層、5層：腐植土層が存在するが、これらの層は縄文時代後期〔小林2004、山本2001〕の局所的な倒木（放射性炭素年代測定の結果、曆年較正年代2025～1935BC）に由来するものと見られ、河川の基本的な覆土は1～3層となる。各層の出土遺物（13～31）から判断して、1～2層が古代、3層が古墳時代に堆積した可能性が高い。また覆土の堆積状況や遺物の出土状況を勘案すれば、古墳時代と古代では流路が若干異なることが推測できる。この河川の覆土中からは、極めて多くの木器・木製品（194～225）が出土しており、特に建築材などの加工木が多いことから、本遺跡の近隣で木材加工を行っていたことが推測できる。また、東岸（-3F16・21・22、-4F13・15・25グリッド）からは古墳時代の土器（19～27）と玉類（132～147）が比較的まとまって出土しており、注目される。

2) 溝状遺構（図版2～5・7・8・12・50・53）

今年度調査区では、溝状の遺構を4条検出した（SD1・33・69・75）。ただし、直線的なもの（SD1・33・69）、蛇行するもの（SD75）、幅広で長いもの（SD1・75）、幅狭で短いもの（SD33・SD69）など形態や規模は様々で、それぞれ機能的な共通性はないものと考える。特にSD1としたものは、河川1・2と比較して深度が浅いことから調査過程で便宜的に溝としたが、比較的大規模（検出長さ19.7m、幅4.48m）であり、自然流路の可能性もある。ただしほかの溝状遺構や性格不明遺構が基本的に南北に長軸を持つのに対し、SD1だけは東西に長軸を持ち、河川1とほぼT字状に合流する。河川1・2ほど木製品の出土は多くないが、大足の横木（150～164）などが沿うように散在しており（図版12）、また合流付近では棒状木製品が多く出土している。少なくともSD1と河川1が無関係であるとは考え難い。なお、これらの溝状遺構は、覆土などの特徴からいずれも古代に属すると考える。また細片のため固化していないが、土師器・須恵器も出土していることから、古代の遺構であることが確実である。

3) ピット（図版2～5・51）

調査区西側を中心に、平面円形・梢円形の落ち込みを21基検出した（P4・6～8・14～20・22・26・28・29・31・34・36・61・62・70）。いずれも遺物が出土しなかったため明確な時期は分からぬが、ほかの遺構の覆土との比較で、すべて古代に属するものと考えたい。ただし、SX21の底面で検出したP36と、SX68に切られるP70は、古代の遺構の中でもより古いものと見られる。これらは概して規模が小さく、長径24～80cm（P31を除けば24～48cm）、短径20～36cm、深さ3～26cmの範囲におさまる。また平面配置が不規則で、断面弧状を呈するものが大多数を占めることから、少なくとも建物の柱穴である可能性は低いと考える。断面形・覆土などから見て植物の根痕とも考え難いが、自然に形成された落ち込みであった可能性も否定できない。

4) 土 坑 (図版2・3)

梢円形に近い平面プランで、規模が前述のビットよりも若干大きいものを便宜的に土坑とした。SK30・32の2基で、いずれも調査区西部の3Fグリッドに位置する。SK30は長径76cm、短径50cm、深さ8cmであり、SK32は長径67cm、短径30cm、深さ4cmである。覆土の特徴などから判断して、2基とも古代に属するものと考える。ただし、2基とも断面弧状で掘り込みが浅く、覆土中から遺物も出土していない。のことからこれらの土坑も、ビットと同様、自然に形成された落ち込みであった可能性がある。

5) 性格不明遺構 (図版2~5・7・8・50・51・53)

今年度調査区では、性格不明の落ち込みが25基検出された (SX2・3・5・9~13・21・25・27・35・53~60・66~68・74・76)。いずれも、覆土などの特徴から古代に属するものと考える。これらの平面形を観察すると、不整形ながらも軸を同じくして長く延びるものが多く(第7図)、また断面形を見ても浅い弧状のものが多い。それらの特徴を総合すれば、前述のビットや土坑と同様、人為的な遺構というよりも自然に形成された落ち込みとして捉えるべきかもしれない。覆土中から遺物がほとんど出土しなかったことからも、その可能性は十分考えることができる。特にSX53は、落ち込み内から巨大な自然木が出土しており、明らかに倒木痕と考える。ただし河川2に接するSX76では、木組み状の構造物も検出しており、自然流路に伴う施設であった可能性がある。またSX35では、田下駄と考える木製品(148)が出土している。河川1・SD1などでも形態の異なる水田関連遺物が出土していることから、これらの一群は耕作で形成された可能性も残す。しかし、いずれにしても遺構の具体的な性格は不明である。

6) 杣 (図版4・5・7・8・12・55)

地面に刺さった状態で検出した加工痕のある木製品を杣として報告する。掘形がなく、打ち込まれたものと考える。

杣は、71・72・77(149)及び杣101~105・107~120の22本が該当する。河川2の周辺からは杣101~105・107~119をまとめて検出しており、その並び方から3列の杣列が想定され、仮にA~C列とした(図版12)。いずれも、河川2の水流方向に対し、直交方向に列をなし、河川2に伴う施設の可能性がある。ただし、それぞれの杣の規模や深度、調整方法などに規則性は認められず、樹皮や節がついたままの材を使用しているなど、概して丁寧なつくりとはいえない。A列とB列は河岸に近い杣を、岸に対して斜めに打ち込む傾向が認められる。C列は、浅瀬の最深部に並列して2本打ち込んでいるので、断面ではほぼ垂直に見えるが、若干杣の頭部が上流方向に傾いている。検出された杣の内、もっとも残りの良い杣102(219)と杣118(218)を図化した。

杣列の年代については、A列を構成する杣102に対して放射性炭素年代測定を実施したところ、 1520 ± 30 年BP (AD460~480年(6.1%)・530~600年(62.1%))との結果(第Ⅲ章4B参照)が示されており、古墳時代後期頃に構築された可能性がある。また、B列を構成する杣103の底面とC列を構成する杣104の底面同士が接合することから、B列とC列は同時に構築された可能性が高い。B列とC列は河川2の本流に対し、南東方向から流れ込む浅瀬の合流部に位置する。この浅瀬からは古代の遺物が主体的に出土しており、これらの杣列の構築年代は古代まで降る可能性もある。

3 遺 物

A 土器・陶磁器・土製品（図版13～15・56・57）

1) 概 要

縄文時代～江戸時代の遺物が出土した。基本層序（第Ⅲ章1B）で述べたとおり、I層は水田耕作土で、すべての時期の遺物を含む可能性がある。遺物包含層はII層が室町時代～江戸時代初期、II'層が古代、III層が古墳時代に堆積した可能性が高く、それぞれの時期の遺物を主体的に含む。自然流路（河川1・2）以外の遺構から出土したものは少なく、大半はこの遺物包含層から出土した。調査区の東側ほど低地であるためか各遺物包含層は厚くなり、遺物もそれに伴い多い傾向にある。

中世以降の各遺物の分類・編年及び年代観については、青磁は〔上田1982〕、白磁は〔森田1982〕及び15世紀の青磁・白磁については〔水澤2004〕、青花は〔小野1982〕、瀬戸・美濃焼は〔藤澤1993・1995〕、珠洲焼は〔吉岡1994〕、越前焼は〔田中・木村2005〕、越中瀬戸焼は〔宮田1997〕、肥前系陶器は〔大橋1993〕、中世土師器は〔水澤2005〕を参考にした。

古代の土器には須恵器と土師器があり、施釉陶器類は出土していない。編年及び年代観については、〔春日1999〕を参考にした。

縄文時代～古墳時代の土器は、その大半が自然流路（河川1・2）の覆土中または付近から出土しており、本来はより上流に該期の遺跡があった可能性がある。ただし、調査区東端の河川2から出土した古墳時代の土器は、玉類などとともに比較的まとまって出土しており、原位置を大きく離れていない可能性が高い。

1・9・38・101・102は弥生土器である。古代・中世の遺物包含層（II層・II'層）及び遺構、表土層（I層）から出土したものばかりで、明らかに原位置を離れた混入品である。

2・8・19～27・98～100・110は、古墳時代の土器である。これらのうち2・8・98～100は、古代・中世の遺物包含層または遺構内から出土した破片資料で、混入品と考える。それに対し19～27は、河川2の下層（3層）からある程度まとまって出土したもので、比較的遺存状態が良い。これらの土器の多くは、形態や調整などの特徴から判断して、古墳時代中期、〔川村2000〕編年でいう8・9段階頃に属すると見られる。ただし2・24・108については、より新しいものと見られ、古墳時代後期の可能性がある。

2) 遺構・自然流路内の出土遺物

SD1（図版13・56-1・2）

SD1は河川1に注ぎ込む深さ28cm程の深い溝（または流路）である。大足などの木製品が本遺構の左岸及び隣接するSX25でまとめて出土した点が特筆される。しかしながら、出土した土器・陶磁器類は小片のみで、散見的であり量も少ないため、本遺構の年代は特定できない。わずかに器形の判断できる資料を図化した。1は土師質の紐状の製品で、弥生後期の高杯の一部である可能性があるが、他時期のものである可能性も否定できない。2は古墳時代後期の須恵器で、壺の体部片と考える。タキヒキとカキメ痕が認められる。TK47～MT15様式壺の所産か。

河川1（図版13・56-3～12）

3～6はII'層対応層からの出土である。3は須恵器長頸瓶の口縁部である。春日V～VI期（9世紀～10

世紀初頭）の所産と考えられる。4は小泊産の須恵器甕の胴部片である。5は土師器鍋の口縁部で、断面がやや肥厚した方頭形を呈する。6は土師器の皿で、その形状・胎土から中世（13～14世紀）の所産の可能性がある。7は土師器無台椀またはロクロ成形の中世土師器皿の底部で、SD1との合流部から河川の深部へ落ち込む底面で出土した。その形状・胎土から中世前期の所産の可能性が高いが、同層出土の他の遺物年代より明らかに新しく、混入した可能性が高いと考える。

8～11は最下層からの出土である。8は古墳時代の甕の体部片で、内面がヘラナデ調整される。9は甕の口縁部で、緩い段を持つ。弥生時代後期頃の位置付けが考えられるが、破片資料であり、古墳時代前期に下る可能性もある。10・11は縄文土器で、調査区中央部の最下層から出土した。10は結束羽状縄文が施される深鉢体部で、縄文時代前期前半に位置付けられる。11は網代痕を有する底部で、網代の編み方は2本超え1本潜り1本送りである。網代の種類や胎土から見て、おそらく後期～晩期のものであろう。12は管状土錐で、II層対応層からの出土である。一部を欠損するものの、残存部からいわゆる「太型」[関1990]の範疇でとらえられる。外面には手づくね成形された際の指押さえの痕が明瞭に残り、両端部には面を作出する。

河川2（図版13・14・56-13～31）

河川2は調査区東端に位置する自然流路で、土器類と共に大小様々な木製品が出土した。南東から北西方向にかけて蛇行する比較的深い部分と、南西部から流れ込み、杭列B・C付近で合流する浅い部分からなる。深部は1～3層に分層され、浅部は2層に分層されるが、浅部は深部の1～2層と対応する。

13は1層からの出土で、珠洲焼の片口鉢である。吉岡IV2期（14世紀第2四半期頃）に比定される。

14・16～18は2層からの出土である。17は深部から、そのほかは浅部からの出土である。15は浅部のプラン内に設定した開渠内からの出土で、出土層位は不明であるが、14・16・17との共通性から2層内の可能性が高い。14～17は須恵器である。17は杯蓋で、内面には墨痕が広範囲に認められることから、転用硯である可能性が高い。14と16は有台杯、15は無台杯である。14の底部中央には回転糸切り痕が明瞭に残る。18は土師器で、浅身の椀である。底部は回転糸切り技法で切り離されるが、渦巻き状（外→内、右巻き）の墨書きがある。なお、渦巻文については12m程離れて出土した曲物側板（229）にも同様な文様が刻印されており、注目される。小出越遺跡4号住の出土品〔鈴木・遠藤1998〕に器形が類似することから、9世紀前半に位置付けられよう。

19～27は古墳時代の土器である。19は畿内系の屈曲脚を有する高杯で、直線的な口縁部が大きく外に開く。内外面ともに、ヘラケズリとミガキで調整される。22は河川2から出土した短頸の小型鉢で、内外面ともヘラケズリ調整される。23は河川2から出土した小型丸底壺である。球形の体部に、大きく開く口縁部が付く。20は河川2から出土した小型器台の脚部で、透かしのない脚が大きく開く。21は椀形の鉢で、内外面ともハケ調整される。24～26は甕である。下層からの出土で、比較的残りがよい。26は口縁部がく字状に屈曲する甕で、体部が丸く、底部が台状に突出する。体部内外面ともに、ハケ調整されている。25は口縁部が逆コ字状を呈する甕で、丸みを帯びた体部の内外面がハケ調整される。24は甕上半部で、口縁部がく字状に屈曲する。外面に縱方向のハケ調整を行い、長胴気味の器形を呈することから、他の甕よりも新しい時期（古墳時代後期）のものである可能性が高い。27是有段口縁甕で、口縁部が厚く、頸部が短い。壺としてはかなり歪て作りが悪く、有段部の粘土接合痕も明瞭である。調整は若干不明瞭であるが、外面がミガキ・ハケ調整、内面がハケ調整されている。

28～31は縄文土器で、東部拡張区の地山上面から出土した。刺突や沈線によって文様を描く体部片で、

4点とも同一個体の可能性が高い。遺存状態の悪い破片資料ばかりのため詳細な時期比定は難しいが、文様や胎土などの諸特徴から判断すると、晚期初頭の御経塚式期またはその前後のものであろう。

以上から、河川2の1層が中世後半以降（II層併行）、2層が古代、3層が古墳時代の堆積と判断する。

3) 遺構外の出土遺物

ここでは、遺構以外から出土した遺物を報告する。出土遺物は、層ごとに年代的なまとまりが認められることから、層位ごとに詳述する。なお、I層（表土層）から出土した遺物は、本来的に原位置をとどめていないと判断されるが、各層の器種を補うものとして掲載した。

I層（表土層）（図版14・57-32~38）

32・33は瀬戸美濃焼である。32の天目椀が大窯2~3期（1530~90年）、33の志野皿が17世紀前半に位置付けられる。34は手づくね成形の土師器皿である。口縁部内外面にはススが付着し、灯明皿として使用された可能性が高い。胸部下半に指頭圧痕が認められる。35は肥前系陶器皿で、見込みに胎土目積みの痕跡が認められる。36・37は越中瀬戸焼で、36は天目椀、37は鉄軸が施された皿である。

38は弥生土器で、有段口縁の壺である。外に聞く有段口縁で、調整はミガキが施される。また内外面には赤彩が施されている。弥生時代後期、新潟シンポ編年〔日本考古学協会新潟大会実行委員会1993〕でいう2~3期頃の位置付けが考えられよう。

II層（中世後半~近世初頭）（図版14・15・57-39~102）

39~49は舶載陶磁器である。39~44は龍泉窯系の青磁で、すべて椀である。39は外面に弁幅の広い蓮弁文を片刃彫りしたB-I類の椀である。40・42・43は無文の椀であるが、40の口縁が内湾するのに対し、42・43は外反する。40は上田E類に比定され、42・43は軸厚端反椀〔水澤2004〕に比定される。41は緩やかに内湾する器形の椀で、外面口縁部下方に二重の沈線が巡る。44は外面口縁帯に崩れた雷紋を巡らす椀で、直線雷紋帶椀〔水澤2004〕に比定される。45・46は景德鎮窯系の青花である。45はC群〔小野1982〕の椀で、見込みに二重團線と花文を描き、外面側部には二重團線と蝦蛄文を、底部境には一重團を配する。46は小野B1群の皿で、外面に草花文、内面白縁部付近に二重團線を描く。47~49は白磁である。47・48はⅣ類の皿で、48の見込みには割花文が施される。49は軟質の胎土を有する皿で、抉高台全面施釉皿〔水澤2004〕である。見込みには重ね焼きの痕跡が2か所認められる。舶載陶磁器の中で最古のものは47と48で、12世紀後半に比定される。また、39は13世紀末から14世紀初頭に比定されることから中世前半の遺物もないわけではない。ただし、その出土量は極めて少ない。大半は、上記のような14世紀中頃から16世紀に比定される青磁・白磁・青花で占められる。

50~57は瀬戸美濃焼である。50は古瀬戸後期様式I期の灰釉平椀である。51~54は天目椀であり、51の内面には褐色の付着物が認められる。55は口縁部に灰釉を施す綠釉小皿である。56は鉄皿である。片口が部分的に遺存していたことから、全体を復元して実測した。57は鉄軸を施す耳付水注である。各個の年代はさまざままで、古瀬戸中期様式~大窯期（14世紀~17世紀初頭）まで含まれる。

58~67は土師器の皿である。58~63はロクロ成形、64~67は手づくね成形である。64の口縁部にはススが付着し、灯明皿として使用された可能性が高い。また、66・67の胸部下半には指頭圧痕が認められる。いずれも、15世紀~16世紀の所産である。

68~79は珠洲焼である。68~76は片口鉢で、口縁内側に平坦面を作出し、櫛描き波状文を施すもの（71・73~75）が目立つ。77は注口部を欠損しているものの、水注と考えられる。78は樹文を籠描きし

た壺の胸部。79はタタキ成形による壺である。いずれも吉岡IV～VI期に含まれ、14世紀～15世紀後半に比定される。80は越前焼の壺の口縁部で、16世紀代の所産である。

81～83は肥前系陶器である。81・82は見込みに胎土目積みの痕跡が認められる皿である。83は部分的に鉄軸を施す擂鉢の口縁部である。大橋I～II期前に含まれ、16世紀末～1640年代頃に比定される。

84～89は越中瀬戸焼である。89は擂鉢の口縁部で、内外に赤褐色の鉄軸を掛けるが、口縁端部は平滑になっている。同様な事例は姫御前遺跡【相羽2008】にも見られる。84は丸椀、85～87は皿である。87は鉄軸、85は灰軸を施し、86は両者を掛け分ける。88は灰軸を施す向付である。いずれも、16世紀末～17世紀前半に取まる。90は近世瓦である。鼠色に焼き締められており、無釉である。1681年に魔城となった清崎城出土の瓦に類似する。

91～102は、II層中からの出土であるが、II層ないしはIII層中からの混入と判断されるものである。91～97は古代の土器である。91・92が須恵器の有台杯、93が無台杯である。産地は92・93が小泊窯、91は産地不明である。94～96は須恵器の杯蓋である。97は土師器の小壺である。春日V～VI期（9世紀～10世紀初頭）の所産と考えられる。

98～100は古墳時代の土器である。98は小型器台の受部で、内外面ともに赤彩が施される。99は台付鉢（または台付甕）の底部と見られ、ミガキやユビオサエで調整される。100は壺の底部と見られるもので、内外面ともハケ調整され、さらに両面に赤彩が施される。

101・102は弥生土器である。101は壺または壺の口縁部で、ゆるい有段口縁に幅約1mmの擬凹線文が施される。口縁上半を欠損した小破片のため、詳細な時期は不明であるが、弥生時代後期【金子ほか1999】に位置付けられよう。102は壺または壺の口縁部である。端部を面取りした口縁が、外に大きく開く。口端面には刻み目が、内面には綾杉状刺突文が施される。北陸系櫛描文土器の一種であり、弥生時代中期後半【高橋1990、田中・丸山1999】に位置付けられる。

以上から、II層は14世紀中頃～17世紀初頭を中心とする年代が与えられよう。

II層（古代）（図版15・57～103～108）

103～106は須恵器で、103が有台杯、104・105が無台杯、106が杯蓋である。103の底部は回転ヘラ切りされた後に高台を貼り付けているが、底部中央には一本の直線的な割線が認められる。104は底部を回転糸切りで切り離され、「大」字に類似した墨書が認められる。産地は103が東頭城窯、104が西頭城窯、105が小泊窯の可能性がある。107はロクロ成形の土師器無台椀で、春日V-2期（9世紀中頃）の所産と考えられる。

108は内面を黒色処理した鉢の口縁部で、若干外に開く。古墳後期の所産である可能性が高い。

III層（古代～古墳時代）（図版15・57～109～110）

109は古代の土師器無台椀である。ロクロ成形で内面を丁寧にナデ、外面胴部下半はヘラケズリ調整を行う。春日IV-2～V-1期（8世紀末～9世紀初頭）の所産と考えられる。110は古墳時代の有孔鉢の底部で、内外面ともハケ調整される。

B 石器・石製品（図版16・17・58）

横刃形石器（図版16・17・58-111～120）

円盤から剥離された横長剝片を素材とするもので、近年の糸魚川市域における発掘調査で類例が増加している。姫御前遺跡では、北陸地方の弥生時代の遺跡で認められる形態であることから、その名称を用い

「横刃形石器」とした〔加藤2008〕。横マクリ遺跡ではその砥面の有無及び砥面形成部位に注目し、寺村光晴氏によって提唱された「浜山型内磨砥石」〔寺村ほか1969〕を含む形で再分類を行い「内磨砥石」と報告している〔桑原2008〕。また、その素材の形状から、岩野E遺跡〔小池1986〕、六反田南遺跡〔岩野2008〕、前波南遺跡（平成18年度調査区）〔矢部2008〕などでは「貝殻状剥片」と呼称している。ここでは機能を限定したイメージを与える、またその形状自体がそのまま使用可能な剥片であることから、「横刃形石器」の語を使用したい。なお石核と考えられる117・118、形状は異なるが同じ機能が想定される119・120もここで報告する。

石材の面から見ると、姫御前遺跡では細粒・緻密な砂岩が多く用いられているのに対し、横マクリ遺跡では粗粒の砂岩が多く用いられている。使用目的に応じて石材を選択していた可能性もある。今回図示した石材の内訳は、黒色の頁岩（111）、黒色で細粒の砂岩（112・113・119）、粗粒の砂岩（114～116・118）、安山岩（117・120）であり、特に石材に偏った傾向は認められなかった。また姫御前遺跡例で観察されている、素材剥片の「打点付近が著しく凹む」特徴は、すべての石材において共通に認めることができた。

111は節理が発達しており、刃部（打点と対称となる範囲）にも剥落が認められる。中央部はやや押し潰されたように見えるが、剥離は観察できない。112は刃部付近で階段状に剥離が進行している。刃部に二次加工的な細かな剥離が認められるが、打点部がやや潰れたようになっており、両極石器に見られるような正裏面に同時進行した剥離かもしれない。一方、113にも刃部に二次加工が認められるが、剥離は急斜度であり、鋸歯状の刃部となっている。114及び116には使用痕が確認できるが、様相は少し異なる。114は背面に二次加工を施すが、腹面は打点付近にしか見られない。また腹面の使用痕（幅2～3mm程）が光沢を持つに対し、背面上は元々滑らかな自然面のためか判別できなかった。116は縦長の素材であるが、打点の凹みや階段状の剥離面を呈するなど、ほかの資料と共通性が多い。幅3mm程の使用痕が、刃部を回むように連続して認められる。打点と離れた部分が最も顕著で、幅10mmに達している。115は幅16.9cmの大型品で、刃部に二次加工が施される。117・118は横長剥片を得るための石核と考えられる。117は長軸方向に打点を設け、両極石器のような様相を呈する。118は何度も剥離が施されており、階段状の剥離が顕著に認められる。119は背面に見られる剥片を作出した後、打面転移して剥離されたことを示す資料である。剥離後、右側縁部に二次加工が施されている。120は剥片とは異なった礫の破片であるが、正裏・側面・稜線部のほぼ全域に使用痕が認められる。特に刃部となる側縁部は、度重なる使用のためか面を成している。この使用痕の状況は、130の内磨砥石の側縁の状況に類似している。今後このような礫片に対しても、使用痕の有無を注意していく必要がある。

磨石類（図版17・58・121～124）

磨痕・敲打痕・凹痕の認められるものを磨石類とした。石材で器面の風化程度は異なり、機能面が認められずに搬入礫と判断したものの中にも磨石類が含まれていた可能性がある。またその逆も同様である。特に磨痕のみの磨石類は判別が難しく、本遺跡のように河川の下流部または海岸が近い場合は、礫の摩滅が進むためその誤認の確率が高いものと思われる。121は安山岩製で、器面は荒れている。正面の大型の凹痕は径5.2～5.5cm、深さ0.7cm程である。扁平梢円礫は多く出土しているが、特に122は器面が滑らかであったため磨石類とした。右側縁中央部に浅い凹みが認められる。123は粗粒砂岩製の棒状の梢円礫で、磨痕以外にも上部（頂部）の器面がわずかに荒れているので、敲石として使用された可能性がある。124は花崗岩製で、123同様に敲石として使用される場合が多い石材である。

石 錘 (図版17・58-125~127)

125~127は安山岩製の礫石錘である。125は横断面円形の円錐で、縄掛け部として幅2cm弱、深さ0.3~0.4cmの溝が、短軸方向中央部に横位に巡る。河川2の最下層から出土していることから、古墳時代以前の時期に属するものである。126・127は扁平梢円錐を素材とし、縄掛け部として2極に剥離を持つ。126は風化や後世のガジリで器面が荒れており、剥離痕の境も明瞭でない。打点部はやや潰れており、垂直方向に敲かれてことで、結果的に剥離が形成された可能性もある。127は正面の剥離は顕著だが、裏面にはほとんど認められない。正面面は非常に平坦であり、研磨が加えられた可能性がある。

砥 石 (図版17・58-128~131)

128~131は砥石である。128は砂岩製でII層から、129は凝灰岩製でI層から出土した。形態や出土層位から中世以降の遺物と考える。128は上面の剥離が粗雑であるが、砥面は非常に滑らかで、断面は四角形を呈する。下部は欠損して不明だが、中央部が大きく凹む形状と考えられ、置砥石的な使用が想定される。129は全体形状が三角柱状を呈し、6面すべてに磨痕が認められる。破損後もそのまま利用されたものと思われる。

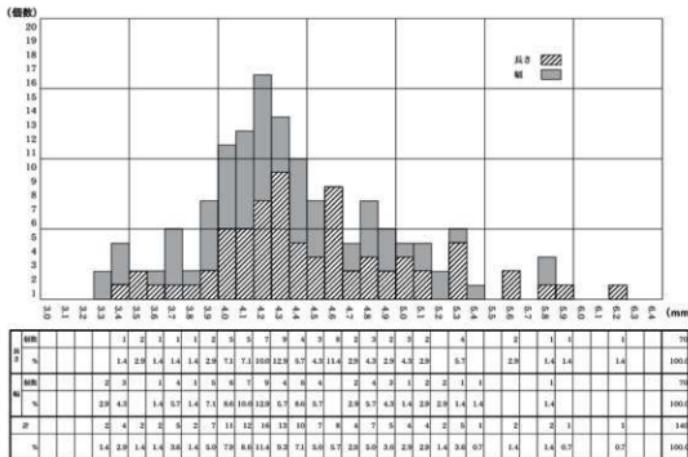
130・131は河川2の下層から出土しており、古墳時代のものと考える。どちらも粗粒の砂岩製である。130は糸魚川市横マクリ遺跡出土の、「内磨砥石」III-4類〔桑原2008〕に該当する。「素材のはば全面に砥面が形成されているもの。両側縁はほぼ平行し、形状は薄い板状を呈している」としており、130も両側縁に見られる面は直線的では無いが、非常に滑らかである。上下に剥離が認められるが、その剥離面にも磨痕が及んでいる。下部の剥離は打点が共通する。131は筋砥石で、左・下部を欠損する。現状の左側縁寄りに2条の溝があり、断面弧状の溝は上幅8mm弱、下幅4mm弱である。130・131は玉作りとの関連が指摘されている砥石で、後述するように本遺跡でも未完成が多く出土している。

玉類・玉作関連資料 (図版17・58-132~147)

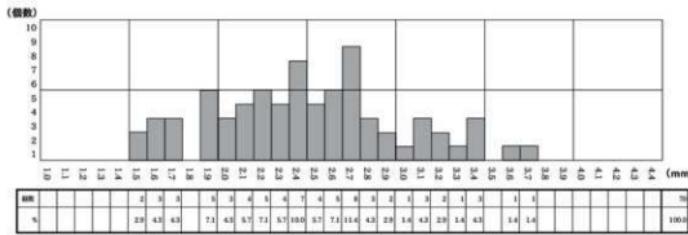
河川2から古墳時代（中期主体）の土器と共に、玉類・玉作関連資料が多く出土した。西側に隣接する六反田南遺跡でも、ヒスイ・滑石・緑色凝灰岩を素材とした玉作関連遺物が出土している〔春日ほか2008〕。

132は緑色凝灰岩の石核である。平面五角形で、それぞれに面を作出し、さらに厚みを減じるため（正面面を平らにするため）の剥離を加えている。管玉製作を目的に、角柱状素材を得るために前段階の資料と考える。

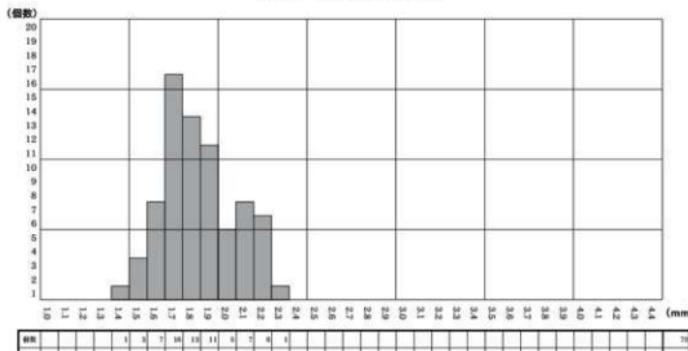
133は黒色を呈する滑石製品で、表面は滑らかだが、磨痕が明瞭に観察できる。上下面を欠損しており、現状は勾玉に似るが、背となる部分（図左面）に断面V字状（深6mm）の切り込みが認められる。製作途上の未完成または成品欠損後の転用品、どちらの可能性もある。切り込み上面の左右頂部はほぼ平らで、磨きによって形成された面も左右同一であることから、切り込みを入れる前の段階で、ある程度平滑にしていたことがうかがえる。-2F21グリッドのII層（中世の遺物包含層）からの出土であるが、河川2の古墳時代の遺物の出土状況や使用石材の面から考えて、133も古墳時代の装飾品の一種と思われる。もう一つの可能性として考えられるのが、縄文時代前期の块状耳飾の未完成である。藤田富士夫氏は、形態や技術的特質から攻玉遺跡を3つの画期に大別し、画期ごとに製作過程を示している〔藤田1983〕。前波南遺跡と似た類例は、第Ⅰ期（前期初頭）C過程の代表とする富山県極楽寺遺跡例と、第Ⅱ期（前期前・中葉）C過程の代表とする長野県女文原遺跡例に認められる。C過程は第Ⅰ・Ⅱ期共通で「形割り（第1工程）→整形（第2工程）→荒磨き（第3工程）→穿孔（第4工程）→横位分断（第5工程）→切目（第6工程）→孔修正（第7工程）→仕上げ研磨（第8工程）」とされる。この「横位分断（第5工程）」を示す例に



第8図 白玉の外形（長さ・幅）別数量表



第9図 白玉の厚さ別数量表



第10図 白玉の孔径別数量表</

該当する。平成19年度調査区で出土した縄文時代前期と思われる土器は1点(10)のみであり、種別・所属時期の検討については類例を待ちたい。

134は滑石製の勾玉で、孔から上半部を欠損する。現存長12.7mmの小型品で、径2mm弱の孔は正面(図左)のみから穿たれる。裏面まで貫通していることから、欠損は完成後に生じたものと思われる。135は長さ26.1mmの滑石製管玉の完成品であるが、横断面は楕円形を呈し、丁寧な作りとは言い難い。上下両面から穿孔され、中央の径がやや狭くなっている。136は今回出土した管玉と白玉の中間的な大きさであるが、製作工程から考えて管玉に分類する。緑色凝灰岩製で、横断面は12～13面の多面体を呈し、磨痕方向はすべて左下がりとなる。上下面共に磨きで平滑だが、上面が長軸に対して水平であるのに対し、下面是斜めになっている。これは管玉の製作途上、おそらく穿孔作業中に折損したが、廃棄せずにそのまま転用した可能性がある。孔径は上面が大きく、下面が小さいのもその可能性を裏付けよう。下面方向からはさらに、角を取るように細かな剝離がいくつか認められる。137は青色を呈する、外径(長さ・幅)4.5～4.7mm、厚さ3.2mm、孔径2.1mmのガラス製の小玉である。ガラス製の小玉は1点出土したのみで、ほかの玉類と一緒に出土していることから古墳時代の所産と考える。138～146は滑石製の白玉である。138～142のような成品が73点(欠損3点)、143～146のようなある程度の形状をもつた未成品が16点(欠損3点)、また素材として利用可能なチップ状のものが9点ある。成品のうち、欠損していない70点の外径(長さ・幅)・厚さ・孔径を比較してみたのが第8～10図である。外径は4.0～4.5mmに集中域が見られるのに対し、厚さにはそのような集中域は見られない。成品の規格として、外径の大きさを重要視していたことがうかがえる。厚みを減じたのであれば、成品となつた後でも欠損することなく研磨は可能であったと考える。孔径は最大2.3mm、最小1.4mmで、その差はわずか1.1mmであった。このことから穿孔工具には、径1.8mm前後のものを使用していたことが分かる。成品と未成品の磨痕を比較してみると、未成品は粗く、成品はきめ細かい。研磨回数よりも、その研磨道具自体の違いと考える。未成品の様々な痕跡を観察すると、石材から分割・剝離で一定の大きさの剝片・チップを得た後、①粗磨き(正裏面をなるべく平行な面となるように研磨)→②周縁剝離(円形及び多角形に打ち欠く)→③穿孔→④側面粗磨き(角を取り、円形に近づくように研磨)→⑤仕上げ磨き(全体を研磨)、などの工程を経たことが想定できる。また、粗磨き工程は、擦切りによる方法も考慮する必要がある。147も滑石製で、磨きで板状を呈する。勾玉または白玉などの素材と考える。

C 木器・木製品(図版18～23・59～62)

木器・木製品は、SD1・河川1・河川2及びその周囲から出土している。特に河川1・河川2からは、建築材と見られる大量の加工木が出土しており、本遺跡の近隣で木材加工が行われていたことが推測される。建築材以外にも、木簡・曲物・形代類・農具類といった製品が少なからず出土しており、巧みな木材利用の一端がうかがわれる。この項では、種別ごとに記載する。

木簡(図版19・59～166)

166は、SD1と河川1の合流部から出土した木簡である。スギを板目取りしたもので、長さ17.2cm、幅2.5cm、厚さ0.3cmをはかる。長方形の材の下端を尖らせていることから、051型式に分類される。片面には「出雲真山」と書かれており、人名の可能性が高い。「出雲」の文字が記された木簡片は前年度調査区からも出土しているが、今年度調査区から出土したものはほぼ完形品である。この木簡に対して放射性炭素年代測定を実施したところ、古墳時代の年代(曆年較正年代AD390～540年)を示した(第Ⅲ章4

箇)が、考古学的見地からいえばこの測定値が木簡の使用時期を示しているとは考えられない。仮に木材そのものの年代は古いとしても、周囲から出土したほかの遺物の年代を勘案すれば、古代(9世紀前半)に位置付けるのが妥当のように思われる。「出雲」の字体は、福井県越前町田中遺跡から出土した9世紀前葉の「出雲」墨書き土器に似ており〔釣谷2006〕、むしろそれに近い年代を考えるべきであろう。

なお、本遺跡が所在する糸魚川地域は、『古事記』や『出雲國風土記』における大国主命(八千矛神)と沼河比売(奴奈川姫)の通婚神話に見るように、古くから出雲地域との関係が伝えられている土地である〔浅香1978、上田1993、上田2003〕。また考古学的にも、弥生時代から玉類を通じた交流があったこと(出雲大社の糸魚川産ヒスイ製勾玉など)が知られている〔寺村1995〕。本遺跡から出土した「出雲」木簡は、そのような両地域の密接な関係を示唆する資料として、極めて重要な意義を持っていると言えよう。

曲物(図版20・23・59・61-168・187・188・194-199・229-235)

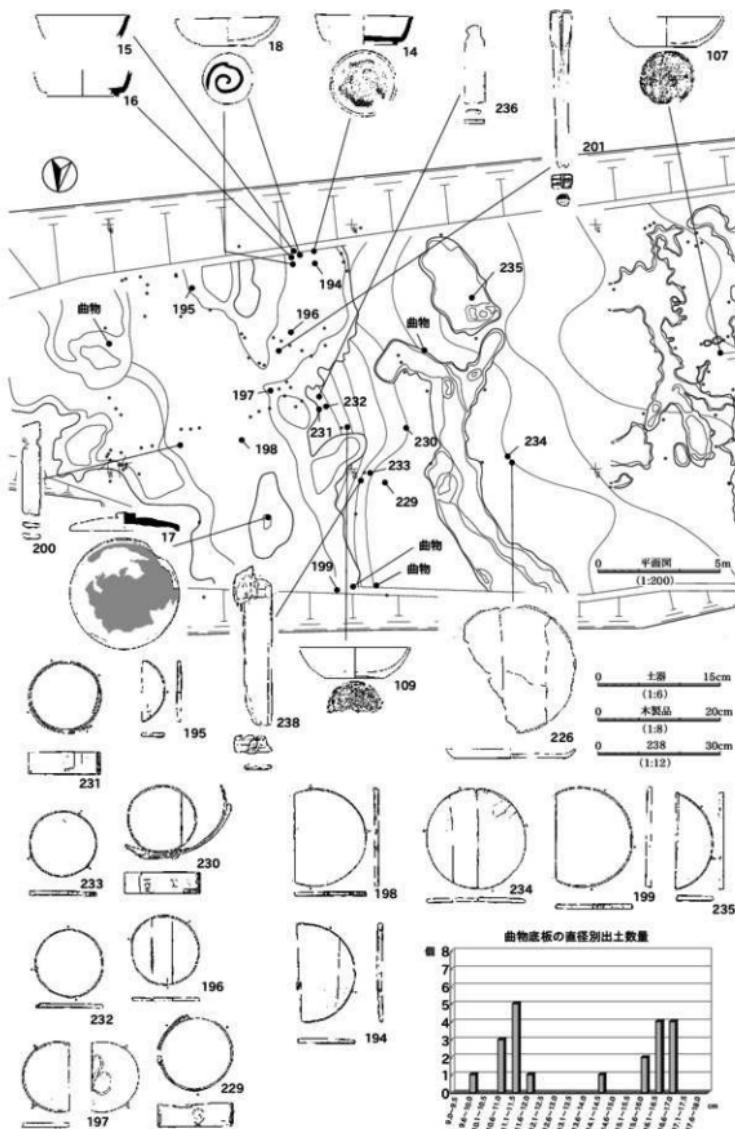
出土層位などから考えて、いずれも古代のものと考えられる。これらのうち229に対して放射性炭素年代測定したところ、弥生時代後期〔春成・今村2004〕～古墳時代前期の年代(暦年較正年代245～335AD)を示したが、後述する渦巻文墨書き土器(18)と曲物(229)の関係や出土状況を総合すれば、古代のものとして捉えた方が妥当である。229・230は側板と底板が揃い、231は側板のみ、ほかは底板のみの出土である。側板・底板の揃った2点について樹種同定をしたところ、いずれもスギであった。底板はすべてクレゾコのもので〔中山1993〕、側面には木釘または木釘孔が認められる。完形の底板を見る限りでは、木釘は3か所に打たれる場合(196・229・232・233)と4か所に打たれる場合(187・188・231・234)の2種類があったようである。側板の3点には、いずれもケビキ線が残され、230は縦方向(中山分類A)、229・231は斜め方向(中山分類B)に条線が走る。また197の外側にあたる面には、破損のため不明だが「8」字に類似した刻印(焼印)が認められる。同様に229の側板には渦巻文(外→内、左巻き)が刻印(焼印)されており特筆される。229の出土地点(-2G1グリッド)から約12m離れた-3F4グリッドでは、渦巻文(外→内、右巻き)が描かれた9世紀前半の墨書き土器(18)が出土しており、その同時期性が推測される。さらに、古代の当地において、渦巻文に何らかの特別な意味があった可能性も想定されよう。ただし、曲物側板と墨書き土器の渦巻文は渦の方向が逆であり、その意味には若干の違いがあるのかもしれない。

形代類(図版18・19・21・23・59-62-165・178・179・182・200・236)

出土層位などから判断して、いずれも古代のものと考えられる。165・200・236は人形と見られ、いずれも抉りによって頭部と体部の境を作出している。ただし165は、ほかの形代と違ってかなり厚みがあり、別の用途を考えるべきかもしれない。周囲からは大足の横木と見られる部材が多数出土しており、それらに関係したものである可能性もある。178・179・182は武器形と見られる。178は剣形または鎌形、179・182は槍形または鎌形であろう。

農具(図版18・19・23・59・60・62-148・150-164・169・175・238・241)

148・175・241は、その形状や大きさから田下駄の類と見られる木製品である。出土層位などから判断して、いずれも古代に位置付けられる。3点ともスギを用いているが、木取り・形態は多種多様で、柾目取りで板状のもの(148・241)、板目取りで立体的なもの(175)がある。5孔を有する241は、横木の圧痕しきものが認められ、田下駄の一種である大足の足板の可能性がある。150-164は大足の横木と見られる部材である。その多くがSD1・SX25から出土しており、古代に位置付けられる。両端部を柄状に加工している形態が想定されるが、156以外は片方を破損しているため全長は不明である。



第11図 河川2周辺の遺物出土分布図

156は上部に抉りを有しており、横木というよりも足板横棒として区別すべきかもしれない。なお、これらの横木類のうち156・159について樹種同定を行ったところ、いずれもスギであった。ほかの横木類もよく似た材を使用しており、スギである可能性が高い。木取りの方向については、〔細井2007〕で指摘されるように規則性がなく、柾目取り・板目取りの両方が認められた。

169・238は、鋤・鎌類の可能性がある木製品である。169は、河川1の古代層から出土した部材である。スギを板目取りした板材に、方形に3孔が並んで穿たれる。中央の孔に柄が、左右の孔に支え木が入るとすると、横歛・柄振の可能性があろう。しかし、完形品ではなく、農具以外の部材の可能性も否定できない。238は鋤身または鎌身に似たもので、出土層位から古代に位置付けられる。スギ材を板目取りしており、細長い刃床状の扁平部が作り出される。ただし遺存状態が悪いため全体形は不明な点が多く、農具以外の可能性もある。

椀・皿類（図版23・62～226～228）

226は白木の盤である。古代の遺物包含層であるII'層から出土したもので、口径20.7cm、器高1.5cm、底径18.4cmを測る。ケヤキを使用しており、木取りは横木地柾目取りである。

227・228は漆器である。227は椀で、内面に赤漆が、外面に黒漆が施される。外面には、さらに赤漆で文様が描かれている。ブナ属を使用しており、木取りは横木地柾目取りである。228は皿で、内外面とも黒漆が施される。ケヤキを使用し、木取りは横木地柾目取りである。漆器はいずれもII層からの出土で、中世以降に位置付けられる。

その他（図版19～23・59～62）

239・240は、下駄である。2点とも歯の低い連歎下駄で、239はスギを柾目取りしている。いずれも2F3・7グリッドのII層から出土し、中世以降に位置付けられる。これらは出土地点・層位が近いだけでなく、質感・形態も酷似していることから、一对のものであった可能性が高い。

237は鉤である。二股に分かれたマツ属複複管束アシ属の枝をそのまま利用しており、上端部には紐掛けが作出されている。II層から出土したもので、中世以降の所産と考える。

167は、箸状・棒状木製品である。河川1の古代層から出土したもので、スギ材を削り出して角棒状に仕上げている。本報告では比較的残りの良い1点のみを図化したが、本遺跡からはこれに近似した箸状・棒状木製品の折損片が多数出土している。ただし、いずれも複数の面取りが見られない断面長方形で、先端を尖らせたものも認められないことから、食事用の箸ではない可能性が高い。近年、糸魚川地域では箸状・棒状木製品が多数出土する遺跡が相次いで発見されており、中にはそれを地面に突き刺したような例も少なくない〔相羽2002、入江2007、相羽・加藤2008〕。本遺跡から出土した箸状・棒状木製品には地面に突き刺した例は見られなかったが、形状はよく似ておらず、一種の祭祀具だったのかもしれない。

170・174・176・177・180～193・201～225は、河川1・2から出土した建築部材または加工木の類である。板状または角材状のもの、板状で孔を有するもの（205～207）、板材状または角材状で抉りを有するもの（172・203・208）、板材の先端を尖らせた矢板状のもの（214～217）、棒・杭状のもの（201・202・218～225）、丸木の両端を加工したもの（184・185）と、形態は多種多様であるが、いずれも具体的な用途は不明である。木取りにはある程度傾向が認められ、棒・杭・丸木以外は板目取りのものが多い。これらのうち、何点かに対して樹種同定を行ったが、184のアスナロ以外はすべてスギであった。建築材・加工木以外の木製品においても、ほとんどがスギを使用しており、本遺跡の特徴といえよう。所属時期については、その多くが古代に属すると見られるが、河川2の下層（3層）から出土した

もの（202・205～210・212・214～216・221・222）に限っては、古墳時代の土器（19～27）や玉類（132・134～147）が伴つており、古墳時代に属する可能性が高い。それを確かめるために、河川2の3層から出土した206に対して放射性炭素年代測定を実施したところ、弥生時代後期〔春成・今村2004〕～古墳時代前期の年代（ 1760 ± 30 年BP、曆年較正年代AD235～330年）を示した。このことからも、河川2の3層から出土したものは基本的に古墳時代の遺物、それ以外のものは古代以降の遺物と理解してよいようである。

D 金属製品（図版24・63～242～272）

金属製品は銭貨以外にも何点か出土しているが、その大半はI～II層の出土であり、明確に古代～中世の所産と判断できるものがなかったため、図示しなかった。

銭貨の出土位置の傾向に偏りは見られず、調査区全域から32点（図示31点）出土した。調査面積の割には、比較的多く出土した印象を受ける。同じ糸魚川市内の姫御前遺跡でも似たような状況が認められ、中世の祭祀的遺物も数多く出土していることから、祭祀行為に伴うものであった可能性が指摘されている〔松永2008〕。II層から出土したものが大半で、中世以前の波来銭が24点（242～265）、江戸時代以降の寛永通寶が7点（266～272）ある。波来銭は初鋤621年の開元通寶から初鋤1368年の洪武通寶まで出土しているが、北宋銭が17点（244～260）と最も多い。寛永通寶の内、266～269が「古寛永」、270～272が1697年以後鋤造された「新寛永」に分類できる。なお腐食などにより肉眼で銭種が判別しにくいものについては、X線透過撮影で判別を行った。

4 自然科学分析

A 樹種同定

バリノ・サーヴェイ株式会社

1) はじめに

新潟県糸魚川市大和川に所在する前波南遺跡は、海岸沿いに発達した砂丘と丘陵間の沖積地に立地している。本遺跡のこれまでの発掘調査成果では、古墳時代中期及び奈良時代を中心とする遺物包含地であることが明らかになっている。今回の発掘調査では、流路や溝状遺構、ビット等が検出されている。このうち、流路跡内からは多くの遺物が確認されており、調査区中央の流路跡からは、伐採や枝打ちの痕跡が認められる自然木や古代の遺物とみられる木簡や田下駄等の木製品、調査区東側の流路跡からは古墳時代の遺物と推定される杭状・棒状・板状を呈する加工材や白玉や管玉、勾玉の成品・未成品が出土している。

本報告では、上記した流路跡から出土した木製品や加工材等を対象に樹種同定を実施し、木材利用について検討する。

2) 試 料

試料は、流路跡や溝状遺構等から出土した木製品や加工材、自然木等50点（分析番号1～50）である。このうち、曲物2点（分析番号19・23）は、それぞれ底板と側板が残存していたことから、各部品を分析対象としている。したがって、分析対象試料は計52点となる。

3) 分析方法

各試料の外観や保存状況、さらに、木取り等の観察を行った後、剃刀を用いて木口（横断面）・極目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取し、サンプル瓶内に水とともに封入する。採取した切片を実体顕微鏡で観察し、各断面に相当する切片を拾い出してガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類を同定する。

同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東〔1982〕、Wheeler他〔1998〕、Richter他〔2006〕を参考にする。また、各樹種の木材組織については、林〔1991〕、伊東〔1995・1996・1997・1998・1999〕や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

4) 結 果

結果を第1表に示す。木製品や加工材、自然木は、針葉樹3種類（マツ属複維管束亞属・スギ・アスナロ）と広葉樹3種類（ブナ属・ケヤキ・トネリコ属）に同定された。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亞属 (*Pinus* subgen. *Diploxylo*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。

分析番号	報告番号	実測番号	出土位置			器種・形状・部位	本取	樹種
			遺構番号	層位	グリッド			
1	200	403	河川 2	I	-3 F 22	人形	板目	スギ
2	201	404	河川 2	I	-3 F 14	不明。(二段)	側出	スギ
3	169	405	河川 1	II'	1 F 4ウ	えぶり	板目	スギ
4	236	414		II'	-3 F 20ウ	人形	縦目	スギ
5	156	415	SD 1	I	3 E 21	大足	縦目	スギ
6	159	416	SD 1	I	3 E 22	大足	縦目	スギ
7	241	418		II	2 F 11	田下駄?。(大足)	縦目	スギ
8	148	419		II'~III	2 F 21	田下駄	縦目	スギ
9	166	420	SD 1	II'	1 F 9	木簡	板目?	スギ
10	178	421	河川 1	II'	1 E 22ウ	船形・鑑形	板目	スギ
11	179	422	河川 1	下削・砂混	1 E 22	船形・鑑形	板目	スギ
12	237	426		II	1 F 3	舟	芯持丸木	マツ属複縫管束樹属
13	165	431	SD 1	I	3 E 18	人形?	縦目	スギ
14	182	434	河川 1	III	1 F 18	船形・鑑形	板目	スギ
15	226	436		II'	-2 F 24ウ (+ア)	盤	楢木地縦目取	ケヤキ
16	238	437		III	-2 G 1	磚	板目	スギ
17	227	438		II	1 F 11	漆器・椀	楢木地縦目取	ブナ属
18	228	442		II	-1 F 8	漆器・瓶	楢木地縦目取	ケヤキ
19	230	446		III	-2 F 22	曲物	側板 底板	縦目 スギ
20	239	450		II	2 F 3	下駄(遺漏)	縦目	スギ
21	190	452	SW 1	II'		帆状	分割角材	スギ
22	149	453	SX 77	-	2 E 22	棒状	側出丸棒	スギ
23	229	454		II'	-2 G 1	曲物	側板 底板	縦目 スギ
24	175	455	SW 2	II'		田下駄	板目	スギ
25	208	456	河川 2	3	-4 F 15~20	帆材	板目	スギ
26	206	457	河川 2	3	-3 F 17	帆材	板目	スギ
27	219	458	河川 2	-	-3 F 19	帆	分割帆状(板目)	スギ
28	218	460	河川 2	-	-3 F 21	帆	分割角材	スギ
29	180	461	河川 1	下削・砂混	1 E 21エ	板	板目	スギ
30	215	464	河川 2	3	-3 F 22	矢板	板目	スギ
31	217	465	河川 2	1~2	-3 G 4	矢板	板目	スギ
32	183	468	河川 1	下削・砂混	1 F 13	板机?	板目	スギ
33	202	470	河川 2	3	-4 F 15	棒状	側出丸棒	スギ
34	224	472	河川 2	1	-3 G 4	帆	板目	スギ
35	211	473	河川 2	1~3	-3 G 4	帆状	板目	スギ
36	222	474	河川 2	3	-3 F 22	帆状	分割角材	スギ
37	171	477	SW 2	II'		板状	板目	スギ
38	203	478	河川 2	1	-3 G 10	帆材	分割帆状(板目)	スギ
39	221	480	河川 2	3	-4 F 15	帆状	分割ミカン帆状	スギ
40	186	481	河川 1	下削・砂混	1 F 24ア	矢板	板目	スギ
41	205	483	河川 2	3	-3 F 21	矢板	板目	スギ
42	223	484	河川 2	1	-4 F 19	板机?	板目	スギ
43	167	486	SD 1	II'	1 F 9イ	管状木製品	側出角棒	スギ
44	172	487	SW 2			棒状	分割角材	スギ
45	184	488	河川 1	下削・砂混	1 F 13~18	帆状	芯持丸木	アスナロ
46	213	489	河川 2	1	-3 G 4~9~10	帆状	板目	スギ
47	207	490	河川 2	2	-4 F 9~10~14~15	帆材	縦目	スギ
48	185	491	河川 1	下削・砂混	1 F 13	帆状	芯持丸木	スギ
49	192	493	SW 1			板状	板目	スギ
50	-	-	河川 2	5		自然木	-	トネリコ属(根株)

第1表 樹種同定結果

放射組織は単列、1~10細胞高。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行はやや急で、晚材部の幅是比较的広い。樹脂細胞はほぼ晚材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2~4個。放射組織は単列、1~10細胞高。

・アスナロ (*Thujopsis dolabrata* Sieb. et Zucc.) ヒノキ科アスナロ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、内壁には茶褐色の樹脂が顕著に認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・ブナ属 (*Fagus*) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2-3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は單穿孔及び階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織はほぼ同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圈部は1-2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帶状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

・トネリコ属 (*Fraxinus*) モクセイ科

環孔性を帯びた散孔材で、道管は単独または2-3個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1-2細胞幅、1-20細胞高で単列の組織が多い。

組織の特徴から、トネリコ属の根材と考えられる。

5) 考 察

今回調査を行った木製品は、人形や田下駄、大足、盤、鋤、漆器椀、漆器皿、曲物、下駄、箸状木製品、杭・棒・板状を呈する加工材からなる。これらの木製品は、鈎にマツ属複雑管束亞属、漆器椀にブナ属、盤及び漆器皿にケヤキ、杭状にアスナロが認められた他はすべてスギであった。このことから、スギ材が様々な器種の木製品に利用されていたことが指摘される。このように、スギ材が多く木製品に利用される傾向は、昨年度に本遺跡で実施した分析結果と調和的であり、隣接する六反田南遺跡〔春日ほか2008〕でも同様の傾向が認められている。

今回確認された木材の材質的特徴では、スギは、木理が通直で割裂性が高く、特に板状の加工に適した材質を有する。アスナロも木理が通直で割裂性が高く、板状の加工に適している点はスギと同様であるが、スギよりも晩材部が狭いために均質で、耐水性も高い。マツ属複雑管束亞属は、針葉樹材としては比較的強度が高く、松脂を多く含むために保存性が高い。ケヤキは重硬で強度・耐朽性が高い材質を有し、加工はやや困難な部類に入る。ブナ属は、ケヤキほどではないが、強度は比較的高く、加工は容易である。

スギ材の利用が認められた木製品は、人形や田下駄、大足など板状を呈する製品や加工材が多く、スギ材の割裂性を利用した加工が推定される。アスナロも板状の加工が容易であるが、本遺跡では芯持丸木の杭状に認められたのみであった。アスナロを含むヒノキ科は、本遺跡では前回の調査では芯持丸棒状の製品に1点認められたのみであり、全体的にヒノキ科の木材の出土数は少ない。これは、本地域におけるヒノキ科の生育状況や入手条件等を反映している可能性があるが、この点については古植生等の調査を行い検討する必要がある。

マツ属複雑管束亞属にはアカマツとクロマツがあり、いずれも現在の本地域に分布している。鈎は、枝が分かれた部分が利用されており、比較的強度を必要とする用途に利用されていたことが推定される。な

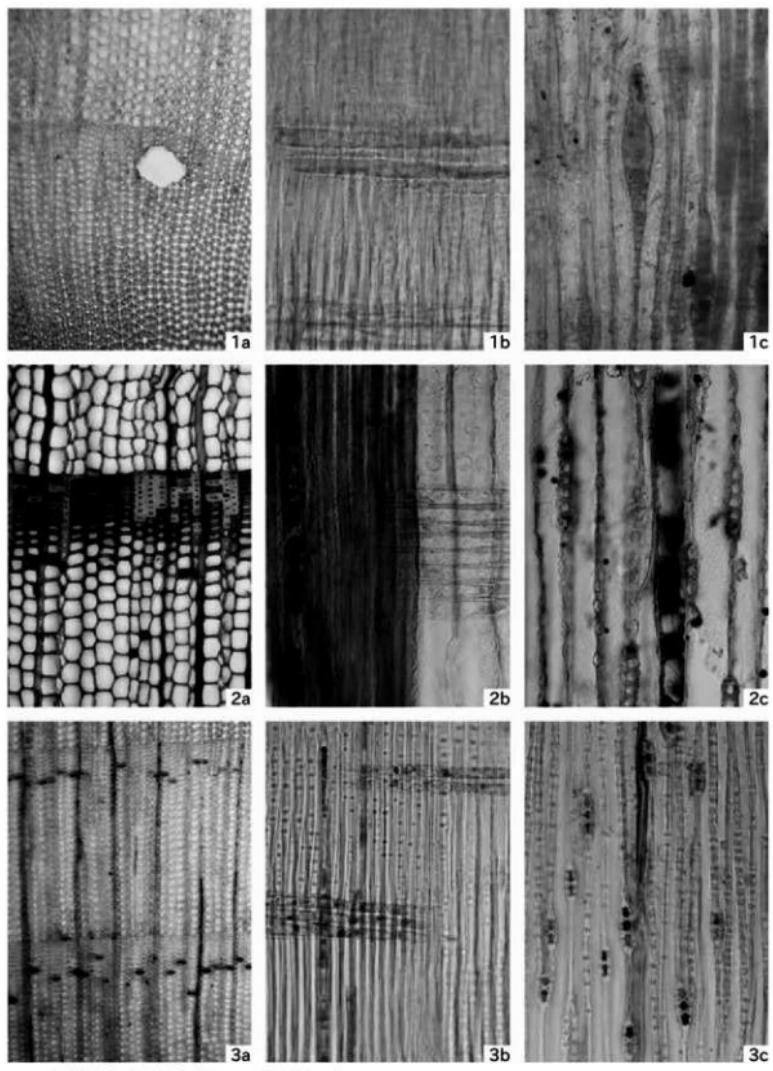
お、マツ属複維管束亞属は、六反田南遺跡において杭や板材に利用された例が確認されている。

漆器椀・皿は、本地域では調査事例はないが、高田平野では多数の調査事例があり、ブナ属やケヤキが比較的多く利用される状況が確認されている〔パリノ・サーヴェイ株式会社1994・2004、株式会社バレオ・ラボ2002、三村・植田2003〕。今回の調査結果から、本遺跡においても同様の木材利用が指摘される。

河川2から出土した自然木は、トネリコ属の根材であった。トネリコ属には、湿地林を構成するヤチダモや渓谷林を構成するシオジが含まれることから、周辺の低地においてヤチダモやシオジが河畔林あるいは湿地林を形成していたことが推定される。

引用文献

- 林 昭三 1991 「日本産木材 顕微鏡写真集」 京都大学木質科学研究所
 伊東隆夫 1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料』31 京都大学木質科学研究所 81-181
 伊東隆夫 1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料』32 京都大学木質科学研究所 66-176
 伊東隆夫 1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料』33 京都大学木質科学研究所 83-201
 伊東隆夫 1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料』34 京都大学木質科学研究所 30-166
 伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料』35 京都大学木質科学研究所 47-216
 株式会社バレオ・ラボ 2002 「木製品の樹種同定」『北陸自動車道上越春日・木田地区発掘調査報告書Ⅷ 八反田・高畑遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第110集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 49-55
 三村昌史・植田弥生 2003 「仲田遺跡出土木製品の樹種」『北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅱ 仲田遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第128集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 35-41
 パリノ・サーヴェイ株式会社 1994 「一之口遺跡東地区から出土した木質遺物の同定」『北陸自動車道 上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅳ 一之口遺跡東地区（本文編）』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 147-167
 パリノ・サーヴェイ株式会社 2004 「木製品の樹種同定」『一般国道253号上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅱ 下割遺跡Ⅱ』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第134集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 39-44
 Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編) 2006 『針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘（日本語版監修） 海青社 70p [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. 2004 IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification]
 烏地 謙・伊東隆夫 1982 『図説木材組織』 地球社 176p
 Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998 『広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』 伊東 隆夫・藤井智之・佐伯 浩（日本語版監修） 海青社 122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. 1989 IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification]



1.マツ属複維管束亞属（報告番号237・実測番号426）

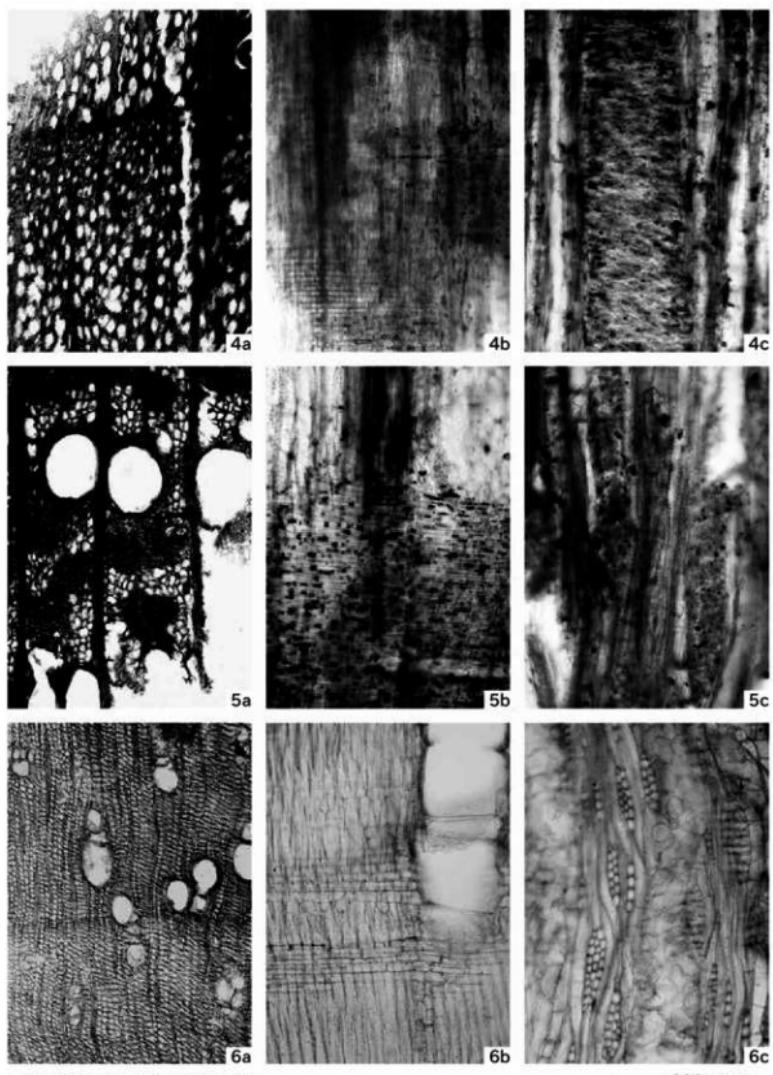
2.スギ（報告番号178・実測番号421）

3.アヌナロ（報告番号184・実測番号488）

a:木口 b:径目 c:板目

200 μ m:a
100 μ m:b,c

第12図 木材顕微鏡写真(1)



4.ブナ属（報告番号227・実測番号438）

5.ケヤキ（報告番号226・実測番号436）

6.トネリコ属（分析番号50）

a:木口 b:経目 c:板目

300 μm:a
200 μm:b,c

第13図 木材顕微鏡写真(2)

B 放射性炭素年代測定 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

1) 測定対象試料

前波南遺跡は、新潟県糸魚川市大和川字前波ほかに所在する。測定対象試料は、SD1 (1F9区) の底面付近から出土した木簡（試料①：IAAA-72552）、-2G1区のII'層から出土した曲物側板（試料②：IAAA-72553）、河川1 (1F13区) の下層から出土した加工材（試料③：IAAA-72554）、杭102 (-3F19区) の杭（試料④：IAAA-72555）、河川2 (-3F17区) の3層から出土した加工材（試料⑤：IAAA-72556）、河川2 (-3G17区) の5層から出土した自然木（試料⑥：IAAA-72557）、合計6点である。試料①に関しては、木簡の形状と表面（墨書き）を保護するために、裏面の亀裂による破損部の周辺から採取した。

2) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～1Nの水酸化ナトリウム水溶液(80°C)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- 3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用して、真空ラインで二酸化炭素(CO₂)を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

3) 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシユウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器で¹³C/¹²Cの測定も同時に行う。

4) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 2) ¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。この値は、δ¹³Cによって補正された値である。
- 3) 付記した誤差は、複数回の測定値についてχ²検定が行われ、測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値、みなせない場合には標準誤差から求めた値が用いられる。
- 4) δ¹³Cの値は、通常は質量分析計を用いて測定されるが、AMS測定の場合に同時に測定されるδ

^{13}C の値を用いることもある。 $\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰; パーミル)で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{As} - ^{14}\text{Ar}) / ^{14}\text{Ar}] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [(^{13}\text{As} - ^{13}\text{APDB}) / ^{13}\text{APDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 ^{14}As ：試料炭素の ^{14}C 濃度： $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_s$ または $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_r$

^{14}Ar ：標準現代炭素の ^{14}C 濃度： $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_r$ または $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_s$

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{As} = ^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、PDB(白亜紀のペレマタイト類の化石)の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器で測定中に同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に(加速器)と注記する。

- 5) $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰)であるとしたときの ^{14}C 濃度(^{14}As)に換算した上で計算した値である。(1)式の ^{14}C 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}\text{As} = ^{14}\text{As} \times 0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)^2 \quad (^{14}\text{As} \text{として } ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= ^{14}\text{As} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad (^{14}\text{As} \text{として } ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{As} - ^{14}\text{Ar}) / ^{14}\text{Ar}] \times 1000 \quad (\%)$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

- 6) pMC (percent Modern Carbon) は、現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合を示す表記であり、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \quad (\%)$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 \quad (\%)$$

国際的な取り決めから、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCで、 ^{14}C 年代が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C} / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC} / 100)$$

- 7) ^{14}C 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

- 8) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の曆年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。历年較正プログラムに入力される値は、下一段階を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線及び較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によつても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal04 データベース(Reimer et al 2004)を用い、OxCalv3.10較正プログラム[Bronk Ransey1995 Bronk Ransey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001]を使用した。

IAA			
IAA Code No.	報告番号	試 料	BP 年代および炭素の同位体比
IAAA-72552 #2124-1	166	試料採取場所 : 新潟県魚川市大和田字前波 前波廻跡	Libby Age (yrBP) : 1,620 ± 30 $\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器) = -26.34 ± 0.81 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -182.7 ± 3.3 pMC (%) = 81.73 ± 0.33
		試料形態 : 木片	$\delta^{14}\text{C}$ (‰) = -185.0 ± 3.0 pMC (%) = 81.50 ± 0.30
		(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Age (yrBP) : 1,640 ± 30
	229	試料採取場所 : 新潟県魚川市大和田字前波 前波廻跡	Libby Age (yrBP) : 1,740 ± 30 $\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器) = -26.09 ± 0.72 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -195.2 ± 3.1 pMC (%) = 80.48 ± 0.31
		試料形態 : 木片	$\delta^{14}\text{C}$ (‰) = -197.0 ± 2.8 pMC (%) = 80.30 ± 0.28
		(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Age (yrBP) : 1,760 ± 30
IAAA-72554 #2124-3	185	試料採取場所 : 新潟県魚川市大和田字前波 前波廻跡	Libby Age (yrBP) : 1,420 ± 30 $\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器) = -24.02 ± 0.67 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -161.6 ± 3.1 pMC (%) = 83.84 ± 0.31
		試料形態 : 木片	$\delta^{14}\text{C}$ (‰) = -159.9 ± 2.9 pMC (%) = 84.01 ± 0.29
		(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Age (yrBP) : 1,490 ± 30
	219	試料採取場所 : 新潟県魚川市大和田字前波 前波廻跡	Libby Age (yrBP) : 1,520 ± 30 $\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器) = -27.14 ± 0.73 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -172.5 ± 3.1 pMC (%) = 82.75 ± 0.31
		試料形態 : 木片	$\delta^{14}\text{C}$ (‰) = -176.2 ± 2.8 pMC (%) = 82.38 ± 0.28
		(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Age (yrBP) : 1,560 ± 30
IAAA-72555 #2124-4	206	試料採取場所 : 新潟県魚川市大和田字前波 前波廻跡	Libby Age (yrBP) : 1,760 ± 30 $\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器) = -24.54 ± 0.66 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -196.4 ± 2.9 pMC (%) = 80.36 ± 0.29
		試料形態 : 木片	$\delta^{14}\text{C}$ (‰) = -195.8 ± 2.7 pMC (%) = 80.42 ± 0.27
		(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Age (yrBP) : 1,750 ± 30
	- #2124-6	試料採取場所 : 新潟県魚川市大和田字前波 前波廻跡	Libby Age (yrBP) : 3,620 ± 30 $\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器) = -29.45 ± 0.72 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -362.5 ± 2.5 pMC (%) = 63.75 ± 0.25
		試料形態 : 木片	$\delta^{14}\text{C}$ (‰) = -368.3 ± 2.3 pMC (%) = 63.17 ± 0.23
		(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Age (yrBP) : 3,690 ± 30

第2表 放射性炭素年代測定の結果

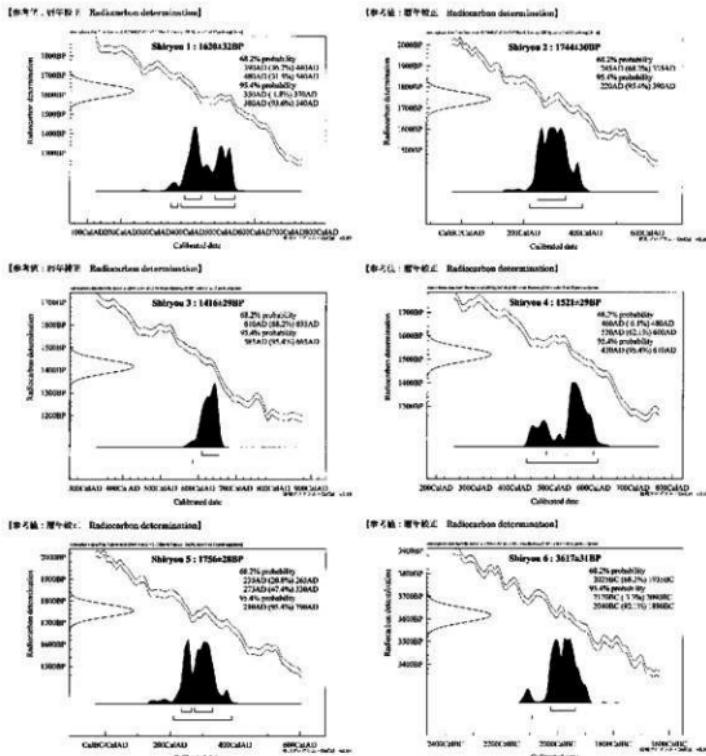
5) 測定結果

^{14}C 年代は、SD1(1F9区)の底面付近から出土した木簡(試料①: IAAA-72552)が1620±30yrBP、-2G1区のII'層から出土した曲物側板(試料②: IAAA-72553)が1740±30yrBP、河川1(1F13区)の下層から出土した加工材(試料③: IAAA-72554)が1420±30yrBP、杭102(-3F19区)の杭(試料④: IAAA-72555)が1520±30yrBP、河川2(-3F17区)の3層から出土した加工材(試料⑤: IAAA-72556)が1760±30yrBP、河川2(-3G17区)の5層から出土した自然木(試料⑥: IAAA-72557)が3620±30yrBPである(付表)。

暦年較正年代($1\sigma = 68.2\%$)は、試料①が390~440AD(36.7%)・480~540AD(31.5%)、試料②が245~335AD、試料③が610~655AD、試料④が460~480AD(6.1%)・530~600AD(62.1%)、試料⑤が235~265AD(20.8%)・275~330AD(47.4%)、試料⑥が2025~1935BCである(第14図)。試料の炭素含有率は60%前後と十分であり、化学処理及び測定内容にも問題が無いことから、妥当な年代と考えられる。

参考文献

- Sluiter M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37 (2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43 (2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43 (2A), 381-389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058



第14図 歴年較正結果

参考資料：歴年較正用年代

JAEA Code No.	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA-72552	試料①	1620 ± 32
IAAA-72553	試料②	1744 ± 30
IAAA-72554	試料③	1416 ± 29
IAAA-72555	試料④	1521 ± 29
IAAA-72556	試料⑤	1756 ± 28
IAAA-72557	試料⑥	3617 ± 31

ここで記載する Libby Age (yrBP) は西暦表示と多少異なる場合有り。

5 まとめ

本遺跡は、平成18（2006）年度と平成19（2007）年度に本発掘調査を実施した。各年度で検出された遺構・遺物を概観し、遺跡の性格についてまとめてみたい。なお、各年度で検出された遺構番号を区別するために、便宜的にこの節では頭に「06」及び「07」を付した。

検出した遺構種別は各年度で大差は無く、ピット160基、土坑8基、溝状遺構15条、性格不明遺構36基、自然流路3条などがある。ピットが集中するのは3L～O・4Nグリッド付近で、検出標高は3.9～4.1mである。調査区内では最も高い標高を示す。このピットの大半は建物を構成するものと考えられるが、残念ながら構造等は明らかにできていない。このピット群は南西～北東側に延伸する様相を示しており、ここが居住城の一角であったものと考える。ただし、この区域にも溝状遺構や性格不明遺構が認められることから、當時水に浸からない程に安定していた場所（高地）とは言い難い。

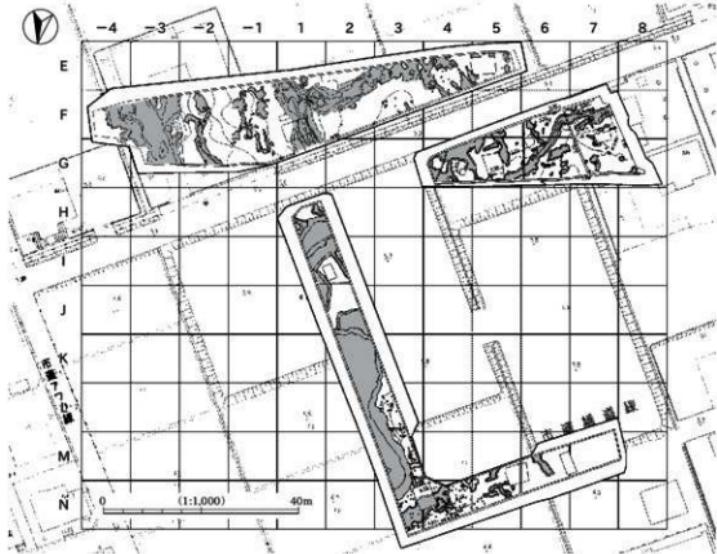
土坑・溝状遺構・性格不明遺構は、4～7・E～Gグリッドで多く検出されている。この区域での検出標高は3.8～3.9mで、前述の居住城よりわずかに標高は低い。溝状遺構や性格不明遺構の大半は、平面形が不整形で、深さ10cm以下と浅い。底面の覆土と地山は互いに巻き込むように混じっており、境は明瞭ではない。踏み荒らされた感じであり、意図的な掘り込みではなく、自然形成の落ち込みの可能性がある。ただし、長軸は北西～南東方向でおおむね一致していることから、水流等で形成された可能性だけでなく、耕作等で形成された可能性も考えておく必要はある。これら遺構群の長軸とほぼ直交する長軸を持つ溝が、06SD2と07SD1である。特に07SD1は、07河川1と合流するまで直線的であり、合流付近で地形的に高所の南側へ折れ曲がっている。最大深度約30cmと決して深くはないが、緩傾斜地の水流を規制するには十分な深さと思われ、用水路的な性格が考えられる。またこの溝の近くで、田下駄の類と想定される部材が多く出土したこと、この区域が耕地であった可能性を否定するものではない。ピット群は古代～中世の所産と考えられるが、この遺構群は検出層位等から大半が古代の遺構と思われる。

調査区の東側（2・3グリッド列以東）では、規模が比較的大きい自然流路（06旧河道、07河川1、07河川2）が検出された。07河川1右岸（標高約4.0m）から07河川2左岸（標高約3.7m）に向かって地形は傾斜しており、調査区内では最も標高が低い区域である。古代に属する曲物は、この区域で最も多く出土している。07河川2の周辺では杭がまとまって検出され、3列の杭列が想定された。いずれも水流方向に対して直交方向に列をなすため、何らかの施設であった可能性が高い。これら3条の自然流路の中～下層から出土した遺物は、縄文時代～古代と時期幅が広く、地點的にも多少傾向は異なるが、おおむね古墳時代中期と奈良・平安時代（8～9世紀前半）にまとまりをもつ。自然流路は各時期の遺物とともに埋まっていき、中世の遺物を含む上層が堆積する頃にはぼ埋まり、湿地帯が形成されたと考えられる。また、自然流路からは木製品・自然木が多く出土した。形状から時期の特定はできないが、土器類の時期傾向と同様に、古墳時代中期と奈良・平安時代のものが大半と考える。木製品の加工材の形状は多種多様で、大きな板材に仕口の加工が施されるもの、矢板状のものなど、建築材も多く含まれている。06旧河道出土遺物は奈良時代、07河川2下層出土のものは古墳時代、中層出土のものが古代としてとらえられる。07河川1では加工材と共に、自然木の両端を削っただけのものも多く認められる。河川の規模から判断して、自然に流れ込んだとは思えない、長さ5mを越えるものもある。自然流路内で規格性がない木製品が集中する状況に対しては、上流からの流れ込み、近接地からの廃棄が容易に想像できるが、木製品製作素材を意図的

に集積した可能性もある。各年度で樹種同定を行った結果、平成18年度は60点のうち57点、平成19年度は50点のうち44点がスギであり、特定の樹種に偏る傾向が認められた。

本遺跡からは、I層（耕作土）出土遺物を除いて、縄文時代から江戸時代初期（17世紀初頭）までの遺物が出土した。基本層序のII層が室町時代～江戸時代初期の遺物包含層、II'層が古代の遺物包含層、III層が古墳時代～古代の遺物包含層である。前述のように、古墳時代中期と奈良・平安時代（8～9世紀前半）にまとまりを持つ。古墳時代中期は、[川村2000]編年によれば、平成18年度が9～11段階、平成19年度はやや古く8・9段階に主体を持つものと考える。07河川2ではこの時期の遺物（前期・後期も少量含む）とともに、横刃形石器、玉類なども出土した。横刃形石器は調査区全域で出土しているが、出土状況・層位を考慮すれば、古墳時代に属するものと思われる。玉類の主体となるのは滑石製の白玉で、緑色凝灰岩製の管玉が少量ある。古代の遺物は、[春日1999]編年によれば平成18年度がIII・IV期、平成19年度はIV・V期に主体をもつが、地點間で大きな時期差は認められない。形代類・曲物・農具類などの木製品は、検出層位から当該期に位置付けられる。また「出雲」と墨書きされた木簡が各年度1点ずつ出土しており、当地域と出雲地方との密接な関係（交流）を示唆する資料として注目される。中世の遺物は細片が多く、青磁・白磁・青花・珠洲焼・中世土師器・瀬戸美濃焼などが出土している。12～13世紀のものは極めて少なく、大半は14～16世紀のものである。銭貨は完形品が比較的多く出土している。当時低湿地化していた場所ではあるが、何らかの祭祀行為に伴う遺物の可能性がある。

今回の調査では、居住域の内容を明確にすることはできなかったが、古代や古墳時代における低地及び河川の利用方法の一端をうかがうことができた。特に自然流路から出土した建築材・加工材・自然木の存在は、本遺跡の近隣で木材加工が行われていた可能性を想定できる。



第15図 前波南遺跡の遺構分布図

第IV章 伝極楽寺跡

1 調査の概要

A グリッドの設定 (図版25)

本発掘調査範囲は、調査前から石垣及び大小複数の方形区画が遺存しており、中世「極楽寺」の推定地とされていた。伝極楽寺の関連施設も、これらの方形区画や石垣に併せ検出されることが想定された。そのため、グリッドは、最も明瞭で最大規模の平坦面を構築している石垣及び方形区画に沿うように設定した。すなわち、方形区画の西面と北面を区画する石垣の上面石列におおむね平行になるようにし、かつ、石垣を保護するためにそれぞれの石列から1m内側をグリッドラインが通るように主軸を設定した。この2本の主軸の交点(8G杭)を基点とし、調査範囲全域を覆うようにグリッドを設定した。そのため、南北方向の主軸は真北から $13^{\circ} 58' 53''$ 西偏している。

グリッドは大小2種あり、大グリッドは10m四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを2m四方に25等分したものである。大グリッドの呼称は、東西方向を算用数字、南北方向をアルファベットとし、両者の組合せで表示した。小グリッドは1~25の算用数字で表し、南東隅を1、南西隅を5、北東隅を21、北西隅を25となるように付した。これらを組み合わせて「10E8」などと呼称した。今回の基点となる杭の座標値は、8G杭でX=116897.867, Y=-52632.657を示す。なお、試掘調査が実施されなかった東部に遺跡が延伸する可能性も考慮し、グリッド番号を付した。

B 基本層序 (第16図)

本遺跡は、南側にそびえる丘陵の裾部に展開する。そのため、標高は基本的に調査区の北方が低く、南方が高い。その中でも、4・5Bグリッド付近と11Cグリッド付近は沢状の落ち込みを呈する。また、本遺跡の東方と西方も標高が高い。遺構は谷部の比較的平坦な場所を選んで構築されている。地山はVII~VIII層である。

遺物包含層及び遺構確認面はそれぞれ2面ある。

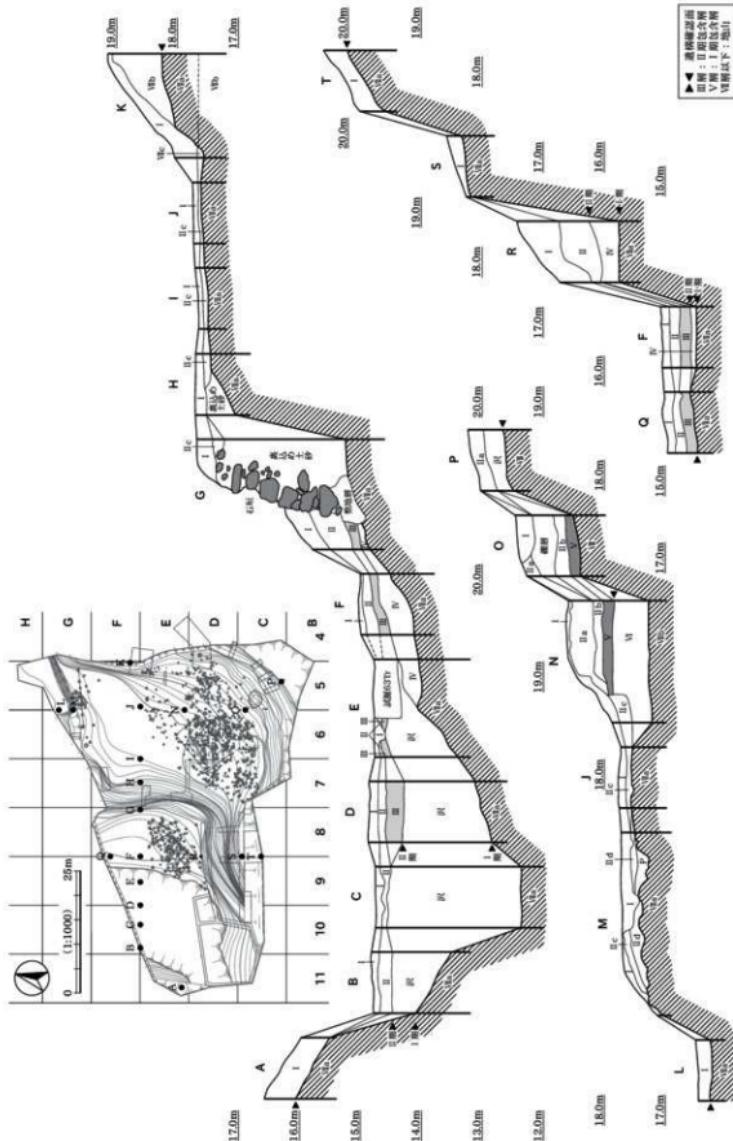
下層はV層を遺物包含層とし、VI~VII層上面で遺構確認を行った。基本的にはVIIa層を遺構確認面としていたが、本遺跡は傾斜地であるため、遺構が構築される層は一定していない。V層は5~7グリッド列の標高17.5~18.0m程の平坦面に分布し、遺構の分布とも一致している。なお、8・9Eグリッド付近に分布する遺構はVII層上面での検出であり、同時期の遺構と考える。調査区西寄りには沢状の落ち込みが見られた。

上層はIII層を遺物包含層とし、IV層上面で遺構確認を行った。III層は8~11グリッド列の標高14.5m付近の比較的低位な平坦面に分布する。III層中及びIV層で検出した遺構からは、14世紀中頃~16世紀の遺物が出土した。

I層 表土 黒褐色土。耕作土。

II層 近世以降の造成土

IIa層 橙色土 近現代の遺物を含む。4~7D以南の小方形区画を構築する。



第16図 伝極楽寺跡本圖子

II b 層	褐灰色粘質シルト	近現代の遺物を含む。4～7D以南の小方形区画を構築する。
II c 層	灰黄褐色	方形区画の基盤層。
II d 層	黒褐色土	方形区画の基盤層。5・6G付近の低地のみ分布する。方形区画造成の際に本層を低地に造成したのち、II c 層を造成したものと考えられる。
III 層	にぶい黄褐色土	遺物包含層（上層）。主に拳大までの円礫を多く含む。14世紀後半から16世紀の遺物を内包する。
IV 層	明黄褐色砂礫層	間層。無遺物層。VII a 層と比較するとやや色調が暗い。上層の遺構確認面である。
V 層	黒褐色土	遺物包含層（下層）。主に12世紀後半から14世紀第1四半紀頃までの遺物を内包する。
VI 層	漸移層	
VII 層	地山	
VII a 層	明黄褐色礫層	
VII b 層	明白色シルト	
VIII 層	礫層	地山

2 遺 構

A 遺構の概要

遺構確認面は3面ある。

8グリッド列から西方の遺構確認面は2面あり、上層はIII層を遺物包含層とし、IV層を遺構確認面とする。遺物包含層中と遺構内から、14世紀後半から16世紀の遺物が出土している。上層は後述する沢が埋没した後に構築される。8・9Eグリッドでは、IV層を除去した後にも遺構群（下層）が検出されている。III層形成前に削平されたものか対応する遺物包含層は検出されなかった。下層から検出された遺構をI期、上層をII期と呼称する。

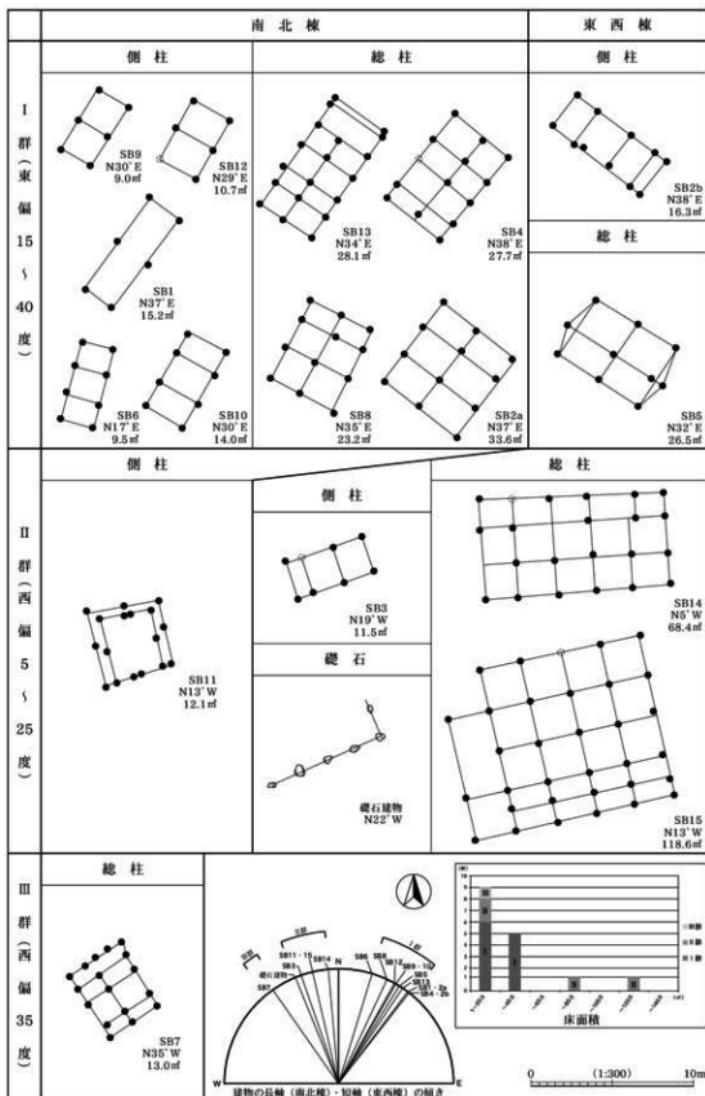
8グリッド列から東方も2面である。8グリッド列以東は方形に区画されており、8グリッド列付近の南北方向に構築された石垣で区画される。この時期の遺構は一部遺存しており、調査前から認識されていた。造成土中から明確な遺構は検出されていないものの、遺構確認面は造成土（II層）ということになろう。この石垣と方形区画は江戸時代後期の造成で、III期と呼称する。これらの石垣と造成土（II層）を除去すると、Eグリッド列以南に遺構群が密集する。これらは、V層を遺物包含層とし、VI層以下を遺構確認面とする。一部、III期の造成で破壊されている。

B I 期

1) 掘立柱建物（図版27～30・32～39・66～68）

ピットは2か所で集中域が認められる。①8・9Eグリッド、②5～7C～Eグリッドである。集中域はどちらも、地形が比較的傾斜の緩い場所に位置する。

ピットの規則性から掘立柱建物と認定した。建物は16棟確認でき、その構造及び規模は様々である。建物は、その柱列の長軸がおよそ南北に長い構造（南北棟）と、東西に長い構造（東西棟）の2種類に大



第17図 建物分類表

別でき、それぞれに建物の建築方法の違いにより、側柱建物・総柱建物・礎石建物に分類される。南北棟と東西棟の建物は、いずれも主たる柱列の長軸方向と短軸方向が直交する構造をなすことから、南北棟の長軸方向と東西棟の短軸方向は同じ方向を示すことになる。南北棟の短軸方向と東西棟の長軸方向も同様である。そこで、認定した建物16棟について、南北棟の長軸方向及び東西棟の短軸方向の真北（世界測地系WGSを使用）に対する傾きを測定したところ、規則性が認められた（第17図）。

I群とした建物は、軸方向が15°～40°東偏するものである。面積は9～34m²と大規模な建物はない。

II群とした建物は、軸方向が5°～25°西偏するものである。面積が11～13m²と68～119m²と極端に二分される。大型の総柱建物と三面廻の建物など、特殊な建物が見られる。

III群とした建物は、軸方向が35°西偏するものである。1棟しか認識できなかった。面積が13m²とI群の建物に似る。

掘立柱建物の柱穴内からは、12～14世紀第1四半期の珠洲焼、土師器皿などが多いながらも出土していることから、これらの建物は中世前期に位置付けられる。

2) 硙 石 建 物 (図版28・30)

礎石建物は1棟のみの検出である。検出した礎は上面が比較的平坦で、大きさがほぼ同様であり、等間隔に並んでいることから建物の礎石と考えた。礎石は5つのみ、8・9Eグリッドで検出した。その内4つは等間隔に、軸方向が、東西に対し22°北偏して一列に並ぶ。その石列の東端から更に等間隔東に離れた地点は、地山が皿状に落ち込んでおり、もう一つ礎石が存在していた可能性が高い。また、石列からこの落ち込みの中心を結んだラインから直角に北側へ折れ曲がった場所には、更に同様な礎が認められ、これらを含めて礎石建物とした。これらの周辺を慎重に精査したが、礎石の可能性のある礎及びその痕跡を認めるることはできなかった。したがって、厳密には建物と確定できないものの、ここでは可能性を提示しておきたい。なお、礎石を取り除き後、その下を確認したが、掘り込みや遺物の出土などは見られなかつた。

この礎石建物は東西軸が東に対し22°北偏し、南北軸が北に対し22°西偏することから、掘立柱建物II群に相当する可能性が高い。

なお、礎石はI期の遺構確認面であるVIIa層に設置されており、IV層上面では検出できず、掘り込みなども確認できなかった。したがって、II期まで下がるものではない。

3) 檻 (図版40・66)

5G・6Gグリッドでピット8基が等間隔に一列に並んで検出されたことから、檻と認定した。この檻を構成するP35とP36からは、珠洲焼の甕底部片が出土している。ピットの覆土はI期の建物を構成する柱穴の覆土と共に通することから、本遺構をI期に含めることとした。軸方向は東西方向に対し19°北偏し、掘立柱建物II群に相当する。本遺構から以北の地山面の落ち込みは昨今の掘削により失われたものであり、本遺構が掘立柱建物の一部である可能性も否定できないが、ここでは、檻として報告しておく。本遺構が檻であった場合は、本遺跡の北辺を区切る境界檻である可能性があろう。

本遺構の位置する5G・6Gグリッドは、本来的に地山面が低く落ち込んでいる場所で、近世に造成された際にも破壊を免れた可能性が高い。

4) 溝状・不明遺構 (図版32・36・38・39・66)

SD110は溝状の遺構で、遺物は出土していない。長軸方向は掘立柱建物Ⅰ群に近似し、関連があるのかもしれない。本遺構の上位には焼土が認められた。

SX510は平面円形状の遺構であるが、南方から延びてくる沢と覆土が同一であることから、沢の北端と考えられる。珠洲焼が出土した。本遺跡からは井戸などの集水施設が検出されていないことから、沢の水を引き込んで、利用していたものと考えられる。

SX516は不定形の落ち込みである。珠洲焼が出土し、掘立柱建物を構成するピットに切られる。

5) 沢状落ち込み (図版27・31・68)

調査区西端を南西方向から西にカーブしながら北に落ち込んでいく。幅は18m、深さ2.2mを測る。沢の東側カーブ付近では平坦面が構築され、掘立柱建物群が認められる。沢の西側と南側は、急激に標高が高くなる。沢は17層からなる。沢肩部の11層中からは白磁・青磁・珠洲焼などが出土しているものの、中央の深い部分からは出土していない。沢の中は平行かややレンズ状に砂礫層が幾重にもわたり堆積し、度重なる土石流で埋没したものと考える。埋没後の平坦面には、Ⅱ期の遺構が構築されている。

C II 期

1) 溝状遺構 (図版41・42・69)

SD5は南北に長い。11D21 グリッド付近では上面に拳大の礫が多量に検出された。覆土内からは珠洲焼片口鉢と瓦器が出土している。SD7は長軸をやや東寄りにカーブさせる。SD6は東西に長いプランで、途中二股に分岐するものの、暫く平行したのち、3mほど離れた地点で再び合流する。

SD5・6・7は共に、掘り込みが浅く、平面プランも一定していない。よって、人工的な溝とは考え難く、自然地形の可能性がある。

2) 土 坑 (図版41・42・69)

SK4は南北2.2m、東西1.0mの不定形の遺構である。深さは0.58mである。覆土内からSD5出土品とは別個体の瓦器が出土している。SK8は平面円形の遺構であるが、上面には拳大ほどの円礫が集積していた。それらを取り除いて完掘してみたが、掘り込みは12cmと浅く、遺物も出土しなかった。

3) ピット (図版41・42・69・70)

ピットは21基検出しているが、覆土は暗い褐色系の色調を呈すなど共通性が認められるものの、それぞれの配置・規模・平面形などに規則性は認められない。ただし、P23・24・33は直径が80cm程度の梢円形を呈し、人頭大ほどの平坦な礫が積み重なって出土している点が共通し、特筆される。

D III 期

Ⅲ期の遺構は石垣 (図版43・65・71・72) のみである。石垣は幅26.4m、高さ2.2mを測る。石垣の下半は比較的大きな石を丁寧に積み上げているものの、上半は大きさも揃わず、隙間も空く。また、上面観も一列に並ばず、概して丁寧な造りとはいえない。

石垣の裏込め土は大きく3層に分層でき、その検討から石垣の構築方法と年代が判明した。

地山はⅦa層で本遺跡の基盤層である。下層はオリーブ色を基調とする細砂などの縋まりの弱い層で、地山の傾斜に沿って堆積していることから、石垣構築前の自然堆積層と考えられる。本来は、自然堆積層で、人為的な堆積ではないので、裏込め土とはいえないが、石垣の構築方法を知る上で重要と判断し、下層として分類し、記載することにした。本層の最下層で地山直上から、18世紀前半の肥前系磁器が出土しており、石垣の上限年代が与えられる。中層は粗砂を基調とする層で、やや縋まりが強い。自然堆積層の上位を覆い、一旦整地したものと考えられる。この段階では、石垣に向かい標高が下がるように傾斜をつけている。裏込めと合わせて石垣を積んでいったものと考えられるが、中層から下位には大型の石積みを行っている。上層は黒褐色と黄褐色系の土を交互に、石垣から遠いところから埋め立てている。埋土は硬く縋まっている。あわせて石積みも行っているが、大きさは中層以下より小さくなり、揃っていない。形状も凹凸の顕著なものがある。また、隙間も目立つ。このようにして石垣を積んだのち、方形区画の基盤層であるⅡc層を造成したものと考えられる。なお、石垣の下位には下層に近似した土質を有するものの、非常に固く縋まつた層が検出された。石垣の重量で引き縋まつた可能性もあるが、土層断面が分断されていることから、石垣を積み上げる予定地にあらかじめ叩き縋めを行ったか、あるいは土を入れ替えたものと判断される。

なお、純粹な石垣裏込め上である中層・上層からは、近世後期の遺物とともに中世前半の遺物も出土している。上層の埋土のなかには中世前期の遺物包含層であるV層（黒褐色土）に近似した層もあり、近世後期の段階において、V層を含む土砂を運搬して裏込め土に利用したものと考えられる。

石垣は方形区画の西面と北面西半を区画しており、方形区画と石垣は有機的な関係にあると考えられる。また、方形区画の基盤層であるⅡc層中からも、数は少ないものの近世後期の遺物群が出土しており、矛盾はない。

3 遺 物

中世以降の土器・陶磁器類がほとんどで、古代・繩文時代の遺物が少量出土した。中世以降の各遺物の分類・編年及び年代観については、青磁は〔上田1982〕、白磁は〔森田1982〕及び15世紀の青磁・白磁については〔水澤2004〕、青花は〔小野1982〕、瀬戸・美濃焼は〔藤澤1993・1995〕、珠洲焼は〔吉岡1994〕、越前焼は〔田中・木村2005〕、越中瀬戸焼は〔宮田1997〕、肥前系陶器は〔大橋1993〕、中世土師器は〔水澤2005〕の各論考を参考にした。また、人名の後に付すべき「編年」・「分類」などの語は省略して記述する場合がある。

A I 期（図版44・45・73-1~50）

1~22は遺構内及び沢内からの出土である。遺物が出土した遺構は、掘立柱建物の柱穴及びピットと不明遺構であるが、その量は少ない。1~4は土師器皿である。1がロクロ成形で、2~4は手づくね成形である。1はSB6を構成するP211から、2はP501から、3はSB9を構成するP233から、4はP521からの出土である。4は器壁が厚く大型の法量であり、13世紀末~14世紀初頭に比定できる。完形品ではないものの、遺存率が高く、伏せた状態で出土した。5~10は珠洲焼である。5はP511からの出土で、吉岡I期の片口鉢である。6~8はタタキ成形された甕の胴部片で、6がP503、7がP512、8がP278

から出土した。9はP524から出土した珠洲焼で、吉岡Ⅰ期の壺である。後述する10と46とは接合関係にないものの、類似した胎土と器形である。10はP501からの出土であり、2と共に伴関係にある。11はP506から出土したものであるが、粘土紐巻き上げ痕を調整せず、器壁が被熱してもろいことから、製塙土器と考えられる。新潟県では、中世段階での土器を用いての製塙は確認されておらず、古代の所産である可能性が高い。製塙土器片はほかに5D・6Dグリッド付近で11片出土している。それぞれ接合しないが、同一個体の可能性がある。12はP504から出土したもので、小泊窯産須恵器の杯の口縁部である。春日編年V～VI期〔春日1999〕、9世紀頃の所産か。13と14はSX510からの出土である。共に珠洲焼の壺である。図化していないが、SX510からはほかに珠洲焼タタキ甕が1片出土している。15と16はSX516からの出土である。15は輪台技法の土師器壺の底部で、調整方法などから古墳時代前期である可能性がある。本遺跡からはほかに古墳時代に属する遺物は出土していないことから紛れ込みと考える。16は珠洲焼のタタキ成形による甕の底部である。SX516からはほかに13片の珠洲焼タタキ甕が出土している。17～22は調査区西端に位置する沢の脇部（11層）から出土したもので、17・18は口縁玉緑の白磁椀である。19は内面に櫛描文を施す青磁椀である。20～22は珠洲焼で、20はタタキ成形の甕、21と22は片口鉢である。21は吉岡Ⅲ期～IV期とやや新相である。22は片口鉢の底部である。

よって、Ⅰ期の遺構内からの出土遺物は、古代に属する11・12及び混入品である15を除き、12世紀～14世紀初頭頃に収まる。

23～50は遺構外からの出土である。基本的には上記遺構の直上のV層中からの出土であるが、必要に応じ、V層から上位の層の出土品も加えて詳述する。

23～33は船載陶磁である。23～29は白磁で、23～27が椀、28が皿、29が袋物である。いずれも〔山本1995〕編年のC期に属し、11世紀後半～12世紀前半の所産である。30～33は龍泉窯系青磁の椀である。30は内面に劃文花を描く。31は外面に蓮弁文を片刃彫りする。30と31は12世紀～13世紀に属するが、32は無文で玉緑口縁となる椀、33は厚手の椀底部であり、共に14世紀とやや新相になる。

34は瀬戸美濃焼の椀若しくは皿の底部であるが、外面に灰釉を掛け、内面は無釉である。年代不明。古瀬戸様式か。なお本遺跡からは、瀬戸美濃焼はほとんど出土していない。

35～39は土師器皿である。35は大型の椀の可能性がある。35～37はロクロ成形、38・39は手づくね成形である。38の脇部下半には指頭圧痕が認められる。35～37は12世紀、38・39は13～14世紀初頭に位置付けられる。

40～50は珠洲焼である。40～45は片口鉢である。卸目がないタイプや、波状の卸目、印花を有するタイプなどが見られ、吉岡Ⅰ～Ⅱ期に位置付けられる。46～49は壺で、46は吉岡Ⅰ期、47～49は波状文を有し、47には耳が貼り付けられており、吉岡Ⅱ～Ⅲ期に比定される。50はタタキ成形の甕である。遺構外出土遺物と遺構内出土遺物に年代的な差違はない。

B II 期 (図版45・46・73～51～71)

51～54は遺構内からの出土である。Ⅱ期の遺構はⅠ期の沢が埋没した後に構築されたもので、検出された範囲はグリッド8～12列に限定される。51～53はSD5からの出土である。51は瓦器の浅鉢である。外面の脇部上半に二条の突帯を巡らせ、その中をスタンプによる雷文を連続的に施す。また、脇部と底部境に一条の突帯を巡らす。内面は布状の工具でナデて調整している。水澤分類の浅鉢III類に比定され、14世紀末～16世紀の所産である。52は珠洲焼の片口鉢脇部である。53は玉韮製の不定形石器で、火打

石の可能性がある。54はSK4から出土したもので、瓦器の風軸である。遺存部は球状の胴部をなし、肩部に円形若しくは雲形の窓を開ける。最大径のやや上方には二条の突帯を巡らせ、その中に円錐状の突起及び菱形文と菊花のスタンプ文を配する。内面は51と同様に布状の工具でナデて調整していると判断されるものの、51ほど明瞭ではない。また、遺存部の上端は丸まり、鋭い破断面ではない。15～16世紀の所産である。

55～71は遺構外からの出土である。基本的には上記遺構の直上のⅢ層中からの出土である。Ⅲ層はⅡ期の遺構が構築されたグリッド8～12列にのみ存在する層で、Ⅰ期の包含層であるV層とは間層（IV層）を挟み堆積する。ここでは必要に応じ、Ⅱb層（近世造成土）あるいはⅠ層（表土）からの出土品も加えて詳述する。

55は瀬戸美濃焼の平碗である。古瀬戸中期様式Ⅳ期に比定され、14世紀中頃の所産である。

56は青花皿で、小野B1群に分類される。57は青磁の稜花皿である。共に15世紀後半～16世紀前半の所産である。

58～61は土師器皿である。58は手づくね成形、59～61はロクロ成形である。58の胴部下半には指頭圧痕が、内面はナデ痕が見られる。59の内外面にはススピタルが付着し、灯明皿としての使用が想定される。14世紀後半～15世紀に比定されようか。

62～69は珠洲焼である。62～68は片口鉢で、底部片である65と66を除いて、口縁部片である。小片のため、年代の特定が困難であるが、吉岡Ⅱ～Ⅳ期に比定されようか。69はタタキ成形される甕で吉岡Ⅲ期に比定される。

70と71は越前焼の擂鉢である。口縁部内面の下位に太い沈線が巡り、16世紀前半に比定される。

遺構外から出土した遺物は、14世紀後半から16世紀前半頃を中心とし、遺構内から出土した遺物群とも矛盾はない。また、遺構内外から出土したⅡ期の遺物群は、Ⅰ期とは重複しない。ただし、15世紀後半～16世紀代の手づくね土師器皿が不在で、珠洲焼に当該期の製品が無く、やや古手のタイプで構成されている点が特筆される。

C III 期 (図版46・47・73・74—72～102)

本遺跡は、江戸時代後期に方形区画が造成されたのち、大きな土地改変を経ずして、現在に至るのであるが、ここでは、方形区画に伴って築造された石垣の裏込め土及び基盤層（Ⅱc層）から出土した遺物と、石垣と南側丘陵の斜面の接合部（8D16・21グリッド）付近から出土した遺物群を報告する。

72～86は石垣の裏込め土及び基盤層からの出土である。上・中層は石垣の築造に伴う裏込め土である。下層は石垣を築造する以前から存在しており、本層を基盤として石垣及び裏込め土（上・中層）を積んでいく。つまり、下層の出土遺物の年代が石垣の構築年代の上限となる。

72～82は石垣裏込め土の上層からの出土である。72～74は肥前系陶器である。72は灰軸の椀、73は見込みに砂目が認められる灰軸の皿で、大橋Ⅱ期に位置付けられる。74は口縁部に鉄軸を施す擂鉢で、17世紀代の所産である。75・76は玉縁口縁となる白磁椀、77と78は龍泉窯系蓮弁文椀である。79と80は土師器の皿である。79はロクロ成形、80は手づくね成形である。79は口縁部の遺存率が低く、図化した口縁部が真に口唇部であるかどうか判断しかね、本来はもう少し器高が高い可能性もある。81は珠洲焼の片口鉢である。82は繩文時代の磨製石斧であるが、表面には、製作時の擦痕とは別の、金属で擦ったような深く鋭い凹みが認められる。また、一部煤けているなど、本来の磨製石斧の用途では発生し

ない使用痕が随所に認められることから、本品は中世以降の段階において転用されたものと判断される。

75～81は中世前期に比定されるものである。このことは、これらの遺物を供給する堆積土が石垣から上段のⅠ期の遺物包含層（V層）を含んでいる可能性を示唆している。

83と84は石垣裏込め土の中層からの出土である。83はロクロ成形の土師器皿、84は珠洲焼のタキ成形の甕である。共に中世に属するが、遺存率が悪いため、詳細な年代は不明である。中層は細片が多く、上層に比べると出土量が少ないので、2点のみしか図化できなかった。出土品の中には近世後期の陶磁器もあり、上層と状況は変わらない。

85と86は石垣裏込め下層からの出土である。85は肥前系磁器の染付椀で、内面に一重網目文、外面に二重網目文を配する。大橋Ⅳ期前半に比定され、18世紀前半の所産である。86は京・信楽系陶器の灰釉平椀である。高台内には判読不明の墨痕が認められる。〔畠中2007〕編年4期に比定され、18世紀後半から19世紀前半の所産である。特に古段階（18世紀第3四半期）である勅旨53-1号窯の製品に似る。したがって、石垣の築造は18世紀後半以降と判断される。

87～102は8D16グリッド付近で集中して出土した遺物群である。比較的遺存率の良いまとまりで、石垣と南接する丘陵斜面に設置された敷石の上部から出土したものである。石垣が構築された時代の生活道具であった可能性があるので報告する。87～98は肥前系磁器である。87は腰折れの青磁染付椀である。88は波佐見窯の製品でくらわんか手の椀である。89は外面に丸文を配する猪口、90・92・93は小丸椀、91は広東椀、94は端反椀である。95は白磁の小椀で口縁端部は無釉である。96は端反椀の蓋、97は七寸皿であるが、蛇ノ目型門高台で高台裏には窓道具の接着が見られる。98は外面にハ八卦文を配する小杯であるが、白色の緻密な胎土を有し、京焼である可能性もある。99～102は陶器である。100が萩焼であるほかは產地不明である。新潟県内では19世紀に入ると產地不明の陶器類が増加する。99は徳利である。外面には黃白色を呈した白釉を施すが、わずかに盛り上がるか所がところどころに見られ、色絵が施されていた可能性もある。100はビラ掛けの椀である。鉄軸と白濁釉を交互に斜位に掛ける。101と102は行平鍋である。どちらも蓋が対になる。101の把手の上位には「壽」字を意匠化した文様が陽刻される。102の把手の上位にも文様が掘り込まれているが、意匠不明である。102の露胎部にはスヌが付着している。

いずれも、18世紀後半～19世紀中頃の製品であり、石垣の基盤層（裏込め土の下層）から出土した遺物群と顕著は生じていない。

D その他の遺物（図版47・74～103～113）

遺構外から出土し、I・II・III期のいずれにも属しない、若しくは所属年代の不明な遺物を一括した。

103～106はI層（表土）から出土したもので、16世紀末～17世紀前半の遺物群である。103・104は肥前系陶器で見込みに胎土目の痕跡を残す皿である。大橋Ⅰ期に比定される。105は越中瀬戸の皿である。鉄軸が施される。106は瀬戸美濃焼の絵志野皿である。これらは、III期まで伝世して使用された可能性も否定できないが、17世紀中頃～後半の遺物がほとんど見られないことを勘案すると、該地ないしは近隣でこの時期に小規模の活動がなされた結果と理解したい。

107は方形区画の造成土（IIc層）から出土した須恵器の有台杯である。生産窯は不明である。古代の遺物はP504とP506から製塙土器と須恵器の杯口縁部が出土しているものの、中世段階でのピットへの混入の可能性が高く、明確な古代に属する遺構や包含層は確認できていない。よって、本品も原位置を留

めているものではなく、混入と判断される。しかし、本調査区の近隣に古代の遺跡が存在している可能性を否定するものではないので、掲載することにした。

108と109は、管状土錘である。本遺跡からは、図化した2点以外には出土していない。前波南遺跡出土（図版13・56-12）と同様に、法量から「太型」に分類される。器表には、手づくね成形された際の指押さえの痕が明瞭に残る。108が両端部に明瞭に面を作出するのに対し、109は明確ではない。とともに、硬質な焼き上がりである。ただし、胎土には相連点が多く、同じ窯の製品とは考えられない。なお、2点とも、I層（表土）からの出土であり、所属年代は不明といわざるを得ない。

110～113は年代不明の石製品である。110～112は砥石で、すべて凝灰岩製である。110と112はきめの細かい石材で、111はやや粗い。110と111の図の上端面と112の正面には擦痕とは異なる粗い凹凸が認められ、砥石を切り出す際の鋸痕と考えられる。113は、五輪塔の火輪である。表土直下のIIb層（近世造成土中）からの出土で、周辺にはかに組み合う製品もないことから、原位置を留めていないものと考えられる。角閃石安山岩製で、上面には空風輪を組み合わせるための方形の枘穴が穿たれている。

4 まとめ

A 出土した土器・陶磁器からみた遺跡の消長

本遺跡でもっとも古い遺物は縄文時代の磨製石斧であるが、器表に金属によると考えられる鋭い擦痕が認められ、調査区内からは縄文土器などの縄文時代の遺物は出土していない。したがって後世における転用品と考えられる。統いて、古代の須恵器（9世紀）と製塙土器が数点出土しており、一部は遺構内（ビット）からの出土であるが、その数量は少ない。該期の遺構も確認できることから、これらも混入品と判断される。

遺物がまとまって出土するようになるのは12世紀からで、白磁やロクロ成形の土師器壺・皿、珠洲焼片口鉢などが見られる。それらは、V層（I期の遺物包含層）及びV層以下の遺構内からの出土で、14世紀第1四半期頃までの遺物が認められる。その構成は、供膳具に青磁と白磁、瀬戸美濃焼、土師器を使用し、調理具（擂鉢類）と貯蔵具に珠洲焼を使用している。新潟県内の該期の遺跡では、極めて一般的な組み合わせである。I期は本遺跡の最盛期であり、遺構の数も多い。なお、V層中からは肥前系磁器が2点出土しているが、混入ないしはサンプリングエラーの可能性がある。

I期が14世紀第1四半期で終焉を迎えた後、埋没した沢の上面にII期の遺構が構築される。II期の遺構内及びその遺物包含層（III層）中からは、14世紀後半～16世紀の遺物が出土している。ただし、その数は多くはない。供膳具には前代に見られた青磁・白磁、瀬戸美濃焼、土師器のほかに青花がその組成に加わる。瀬戸美濃焼では新たに天目模が登場する。調理具（擂鉢類）と貯蔵具にはやはり前代に引き続き珠洲焼を使用している。また、瓦器が少量ながら搬入されている。新潟県においては、越前焼は15世紀後半～17世紀初頭にかけて珠洲焼に取って代わるように大量に流通し始める。本遺跡からは、表土中から擂鉢が出土している。また、III層中からは肥前系陶器の甕が1点出土しているが、近世に属する遺物がほかに出土していないことから混入と考えるべきであろう。

その後、近世造成土や表土中から16世紀末～17世紀前半にかけての遺物が若干量出土しているものの、まとまりを欠く。後述するIII期における伝世品である可能性もあるが、本遺跡では17世紀後半から18世紀初頭の遺物がほとんど出土していないことを勘案すると、調査区内からは遺構が検出されてはい

ないものの、該期に調査区内ないしは近隣で何らかの小規模な活動がなされていたと考えておきたい。

次に、遺物のまとまりが認められるのは、18世紀中頃に至ってからで、石垣及び方形区画から出土している。石垣裏込め土や方形区画基盤層（II c層）からは、中世の遺物と混じって該期の遺物が出土する。II d層はグリッド5G・6G付近のII c層の下位に分布する層であるが、色調は黒褐色を呈し、V層に近似する。出土遺物も近世後半の遺物に混じって、中世前半の遺物が出土している。このことは、V層を基層に用いて近世段階において造成を行ったことを示している。V層の混入が少ないII c層より、大半をV層で構成されるII d層に中世の遺物の比率が多いことは、矛盾のない結果といえる。また、石垣の南端付近の敷石内から、18世紀後半から19世紀前半の比較的の遺存率の高い陶磁器がまとめて出土した。遺構内出土ではないものの、該期の生活様相を示す一資料となる。そのほかは、石垣内出土の一部の遺物を除き、細片ではあるが一定量の出土を見ていることから、何らかの生活が営まれていたと判断されるものの、調査区内を居住スペースとして使用したとは考え難い。

その後は、現代に至るまで畠地として使用されていたようで、表土は耕作土に覆われていた。現代の畠の傍らには19世紀代の肥前系陶器の甕が正位に埋設されており、水甕として使用されていたものと考え

区分	時期	供耕具					野焼き					その他					合計
		玉	木	鐵	鉢	鋤	瓦	土	石	瓦	木	石	骨	不明			
中世	初期	青花														0	14
		青磁	11	2												1	
		白磁	6	9												15	
		鐵														2	
		窯	1	1												2	
	中期	青花														51	117
		青磁														14	
		白磁														8	
		鐵														29	
		窯														51	
近世	初期	青花														0	2
		青磁														0	
		白磁														0	
		鐵														0	
		窯														0	
	中期	青花														0	33
		青磁														0	
		白磁														0	
		鐵														0	
		窯														0	
近世	後期	青花														0	46
		青磁														0	
		白磁														0	
		鐵														0	
		窯														0	
	終期	青花														0	46
		青磁														0	
		白磁														0	
		鐵														0	
		窯														0	

【V層】

区分	時期	供耕具					野焼き					その他					合計
		玉	木	鐵	鉢	鋤	瓦	土	石	瓦	木	石	骨	不明			
中世	初期	青花														1	27
		青磁	1													1	
		白磁		1												1	
		鐵	2	1												3	
		窯														6	
	中期	青花														0	27
		青磁														0	
		白磁														0	
		鐵														0	
		窯														0	
近世	初期	青花														2	28
		青磁														0	
		白磁														0	
		鐵														0	
		窯														0	
	中期	青花														1	28
		青磁														1	
		白磁														0	
		鐵														0	
		窯														0	
近世	後期	青花														0	46
		青磁														0	
		白磁														0	
		鐵														0	
		窯														0	
	終期	青花														0	46
		青磁														0	
		白磁														0	
		鐵														0	
		窯														0	

【E層】

第3表 伝極楽寺跡出土遺物一覧

られる。

なお、全時期を通して新潟県内の一般的な陶磁器組成と同じであり、「極楽寺」の伝承を裏付けるような、宗教的な遺物や高級品の類は出土しなかった。

B 伝極楽寺跡における土地利用の変遷

I 期（12世紀～14世紀初頭）

本遺跡で最も多くの遺構が認められる時期である。丘陵の比較的緩やかな面を利用して掘立柱建物が建てられる。遺構が構築される面は、標高14.5～15.0mと17.5m付近の2面がある。両面の間は自然の崖で分断される。建物は掘立柱建物が16棟、礎石建物の可能性があるものが1棟あり、軸方向の傾きから3群に分類される。同群内でもプランが重複するものがあることから、同群といえどもすべて同時に存在していたわけではない。礎石建物については、一般的な集落というよりも、寺院などに採用される建築技法である。該地が「極楽寺」の伝承地であることも考え合わせると、小規模な寺院であった可能性も残される。しかし礎石と考えられる遺存している平扁礎が少なく、建物の規模及び構造が特定できないこと、そして、出土遺物の様相からは、積極的に寺院などの宗教施設が存在していたとは断定できないことから、ここでは、その可能性を提示するに留めておきたい。居住域内には井戸などの集水施設は検出されなかつたが、調査区南東隅の沢からの湧水を利用していたものと考えられる。調査区の西端には幅18mの沢が開口しており、居住域の西端を区画していたものと考えられる。出土遺物の量及び質は新潟県内の該期の遺跡に共通しており、一般的な集落と判断される。

II 期（14世紀後半～16世紀）

建物が検出されず、自然に形成された溝状遺構及び小規模の土坑、規則性のないピットが散見される。遺構を検出したエリアは、調査範囲の西半の平坦部に限定される。遺物は定量出土しており、年代的まとまりをもつものの、居住区域とは考え難い。遺跡の縁辺地に当たるのかもしれない。出土遺物の様相はI期と同様に県内の該期の遺跡と共に通するが、瓦器が複数出土しており注目される。

III 期（18世紀後半以降）

I期・II期の地形を大幅に改変し、石垣を作り大小複数の方形区画を造成した时期である。方形区画を構成する石垣は、本来の地形を利用して最小限の労力で造作できる位置に設置している。石垣の裏込め土にはI期の包含層も使用されており、造成の際にI期の包含層及び遺構の一部が破壊されたものと考えられる。

方形区画内から遺構は検出されず、用途は不明である。しかし、程なくして耕地として利用されたものと考えられ、方形区画の基盤層も耕作のため一部削平されている。

要 約

前波南遺跡

- 1 前波南遺跡は、新潟県糸魚川市大和川字前波ほかに所在する。
- 2 一般国道8号糸魚川東バイパス建設に伴い、平成19年度に発掘調査を実施した。調査面積は1,300m²である。
- 3 遺跡は、現在の前川右岸の海岸砂丘と丘陵間の沖積低地に立地する。遺構検出面の標高は約3.7～4.0mである。
- 4 調査によって、古墳時代～古代を中心とする遺構と、縄文時代～近世の遺物を検出した。
- 5 遺構は、自然流路2条・溝状遺構4条・ビット21基・土坑2基・杭状遺構22か所・性格不明遺構25基が検出された。自然流路の一部が古墳時代に遡る可能性が高いが、それ以外は基本的に古代の遺構と考える。
- 6 不整形の遺構や小規模な遺構が大半を占め、その配置も疎らなことから、本調査区は居住域とは考え難い。しかし自然流路からは多量の木器・木製品が出土しており、特筆される。この木器・木製品・自然木は意図的に集積されたものか、洪水による流れ込みなどかは今後検討する必要がある。また、自然流路の内外で杭が数列検出され、流路に伴う施設であった可能性が指摘できる。
- 7 縄文時代～近世の遺物が出土したが、土器類は古墳時代中期（5世紀頃）、平安時代（9世紀前半）、室町時代（15世紀）、江戸時代（17世紀初頭）にまとまりがある。石器・石製品では、貝殻状の剥片を素材とした古墳時代の横刃石器が多く、また滑石製の白玉を主体とした玉類の成品・未成品が多く出土した。木製品では古墳時代及び古代の加工材のほかに、古代の木簡1点や曲物、農具（田下駄など）がある。木簡には「出雲真山」と墨書きされており、現段階では人名ではないかと推測される。
- 8 居住の痕跡は検出できなかったが、古代や古墳時代における低地や河川の利用方法の一端がうかがえる。また、木簡に見られる「出雲」という文字が、当時の出雲（島根県）や都（京都府）以外の地で出土することは稀で、糸魚川と出雲の密接な関係（交流）を示唆する資料として注目される。

伝極楽寺跡

- 1 伝極楽寺跡は、新潟県糸魚川市大字田伏字高畑1175-1番地ほかに所在する。
- 2 一般国道8号糸魚川東バイパス建設に伴い、平成19年度に発掘調査を実施した。調査面積は2,585m²である。
- 3 遺跡は、早川の左岸に展開する金山に連なる丘陵の裾部に立地する。高さ2mの石垣を中心にして上段（標高17.5m）と下段（標高14.5m）の二つの平坦地からなる。
- 4 調査によって、鎌倉～室町時代及び江戸時代の遺構・遺物を検出した。
- 5 遺跡の時期は大きく3期（I～III期）に区分される。I期は12世紀～14世紀初頭頃、II期が14世紀後半～16世紀頃、III期は18世紀後半以降が主体である。
- 6 『西脇城郡誌』に見られる「極楽寺」に伴うものと思われた石垣を、断ち割り調査したところ、裏込め土砂及び基底面以下の層から江戸時代後期の陶磁器類が出土した。したがって、石垣及びその上段の平坦地は江戸時代後期以降（III期）に造成されたことが分かった。
- 7 I期（鎌倉時代）では、上段は南寄りの山際に、下段は石垣と沢との間にそれぞれ遺構が集中している。建物は何處か立て替えられた形跡が認められ、繰り返し同じ場所で生活していた可能性が高い。
- 8 遺物については、珠洲焼・瀬戸美濃焼・青磁・白磁・青花・土師器・瓦器・砥石などが出土した。
- 9 建物などの多数の柱穴を検出したが、規模や配置から寺院跡とは考え難く、今回の調査範囲内に「極楽寺」が存在した可能性は低い。しかし、平安末～鎌倉時代（12～13世紀）の山際に立地する小規模集落の様相の一端をうかがうことができた。

引用・参考文献

- 相羽重徳 2002 「第IV章遺構 2D 自然流路」『寺地道路』新潟県埋蔵文化財調査報告書第113集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 相羽重徳・加藤 学 2008 「第IV章遺構 2C 著状木製品等の出土状況』『姫御前遺跡Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第184集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 相羽重徳 2008 「第V章遺物 1中世～近世の遺物 B土器・陶磁器』『北陸新幹線関係発掘調査報告書VII 姫御前遺跡Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第184集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 浅香年木 1978 『古代地域史の研究』法政大学出版局
- 荒川隆史^{ほか} 2004 『青田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 安藤文一^{ほか} 1978 『笛吹田遺跡』新潟県糸魚川市教育委員会
- 飯坂盛泰^{ほか} 2005 『余川中道遺跡Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第139集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 糸魚川市役所 1986 『糸魚川市史 資料集1 考古編』新潟県糸魚川市役所
- 入江清次 2007 「山岸道路Ⅱ」『新潟県埋蔵文化財調査年報 平成18年度』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 上田正昭^{ほか} 2003 『古代を考える 出雲』吉川弘文館
- 大橋康二 1993 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニューサイエンス社
- 小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 春日真実 1998 『西頭城地方における古代の土器様相』『研究紀要Ⅱ』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1999 『第4章古代 第2節土器編年と地域性』『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 春日真実^{ほか} 2008 『六反田南遺跡・前波南遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第202集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学^{ほか} 2006 『大角地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第173集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金子拓男 1975 「新潟県青海町天神山経塚出土の陶製筒と珠洲焼の成立について」『信濃』27-1 信濃史学会
- 金子正典・滝沢規朗・丸山一昭 1999 「第3章弥生時代・古墳時代 第2節土器 第3項弥生後期」『新潟県の考古学』高志書院
- 川村浩司 2000 「上越市の古墳時代の土器様相—関川右岸を中心に—」『上越市史研究』第5号 新潟県上越市
- 木島 勉^{ほか} 1986 『後生田遺跡』糸魚川市埋蔵文化財調査報告第13 新潟県糸魚川市教育委員会
- 木島 勉 1988 『三ツ又遺跡範囲確認調査報告書』糸魚川市埋蔵文化財調査報告第15 新潟県糸魚川市教育委員会
- 木島 勉 1989a 「糸魚川市三ツ又の古墳時代の集落」『新潟県考古学会第1回大会研究発表会発表要旨』新潟県考古学会
- 木島 勉 1989b 『立ノ内遺跡・山崎三十三塚遺跡』糸魚川市埋蔵文化財調査報告19 新潟県糸魚川市教育委員会
- 木島 勉 2007 「山崎A・B遺跡」『第14回 遺跡発掘調査報告会』新潟県教育委員会・糸魚川市教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 釤谷 紀 2006 「『出雲』墨書き土器について」『越前町文化財調査報告書Ⅰ』越前町文化財調査報告書第2集 越前町教育委員会

- 桑原 健 2008 「第V章遺物 2B石器 2内磨砥石の分類」『横マクリ遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第188集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小池義人 1986 「第III章遺跡各説 C.岩野E遺跡 6.まとめ b.石器について」『中原遺跡・岩野A遺跡・岩野E遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第45集 新潟県教育委員会
- 小林敬雄 2000 「I地形分類図 2.地質概説」『新潟県地質図説明書(2000年度版)』新潟県商工労働部商工振興課
- 小林謙一 2004 『縄紋社会研究の新視点－炭素14年代測定の利用－』六一書房
- 佐藤敦史・相羽重徳(はるか) 2002 「寺地道路」新潟県埋蔵文化財調査報告書第113集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 柏山林雄 1972 「神坂峠」「神道考古学講座5 祭祀遺跡特説」雄山閣
- 鈴木郁夫 1982 「I地形分類図 1地形概説」『新潟県上越地域土地分類基本調査 糸魚川』新潟県農地部総合整備課
- 鈴木俊成(はなぶら) 1988 「小出越遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第51集 新潟県教育委員会
- 閑 雅之 1972 「田伏玉作遺跡」新潟県糸魚川市教育委員会
- 閑 雅之 1990 「古代細型管状土錐考」『北越考古学』第3号 北越考古学研究会
- 高橋 保(ほか) 1986 「中原遺跡・岩野A遺跡・岩野E遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第45集 新潟県教育委員会
- 高橋 保 1988 「立ノ内遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第49集 新潟県教育委員会
- 高橋 保 1990 「県内の弥生中期の土器」『新潟考古学講話会会報』第6号
- 高橋保雄・藤澤孝司(ほか) 1987 「岩野下遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第46集 新潟県教育委員会
- 滝沢規朗 2005 「土器の分類と変遷－いわゆる北陸系を中心に－」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』同シンポジウム実行委員会・新潟県考古学会
- 田中照久・木村宏一郎 2005 「越前」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』資料集 同実行委員会
- 田中 靖・丸山一昭 1999 「第3章弥生時代・古墳時代 第2節土器 第2項弥生中期後半」『新潟県の考古学』高志書院
- 辻 篤朗 2006 「須沢角地遺跡」『財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成16年度』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 土田孝雄 1978 「第2章調査の経過 1発掘調査に至るまで」『笛吹田遺跡』新潟県糸魚川市教育委員会
- 土田孝雄(ほか) 1988 「須沢角地A遺跡発掘調査報告書」新潟県青海町教育委員会
- 土田孝雄 2003 「奴奈川姫とヒスイ文化」奴奈川姫の郷をつくる会
- 寺崎裕助 1988 「第1章遺跡の立地と周辺の遺跡 1位置と地形」『原山遺跡 大塚遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第50集 新潟県教育委員会
- 寺崎裕助・田中靖(ほか) 1988 「原山遺跡 大塚遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第50集 新潟県教育委員会
- 寺村光晴 1966 『古代玉作の研究』吉川弘文館
- 寺村光晴・安藤文一(ほか) 1979 「大角地遺跡-飾玉とヒスイの工房址-」新潟県青海町教育委員会
- 寺村光晴(ほか) 1978 「笛吹田遺跡」新潟県糸魚川市教育委員会
- 寺村光晴 1995 『日本の翡翠』吉川弘文館
- 中山正典 1993 「曲物の製作技法と形態」『食生活と民具』雄山閣出版
- 永井久美男 1994 「中世の出土銭一出土銭の調査と分類-」兵庫県埋蔵文化財調査会
- 中野雄二 2000 「波佐見」「九州陶磁の編年」九州近世陶磁学会
- 新潟県教育委員会・糸魚川市教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2007 『第14回 遺跡発掘調査報告会』
- 西頸城郡教育会都誌出版部 1930 『西頸城郡誌』
- 日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993 『日本考古学協会1993年新潟大会シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』

- 畠中英二 2007 『続・信楽焼の考古学的研究』 サンライズ出版
- 畠野義昭 2008 『第Ⅲ章 六反田南遺跡 3D 石器』『六反田南遺跡 前波南遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第202集 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春成秀爾・今村峯謙編 2004 『弥生時代の実年代—炭素14年代をめぐって—』学生社
- 平野団三・渡辺秀雄 1986 『西頸城郡』『日本歴史地名大系15 新潟県の地名』 平凡社
- 藤澤良祐 1993 『瀬戸市史 陶磁史篇四』 愛知県瀬戸市
- 藤澤良祐 1995 『中世陶器（古瀬戸）』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- 藤田富士夫 1983 『珠状耳飾』『縄文文化の研究』第7巻 雄山閣出版
- 細井佳浩 2007 『木製農具「大足」について』『新潟考古学談話会報』第32号 新潟考古学談話会
- 松永篤知 2008 『第V章 遺物 1G 銭貨』『姫御前遺跡 I』新潟県埋蔵文化財調査報告書第184集 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 水澤幸一 2004 『15世紀前葉から中葉の貿易陶磁器様相』『貿易陶磁研究』24 日本貿易陶磁研究会
- 水澤幸一 2005 『越後の中世土器』『新潟考古』16 新潟県考古学会
- 宮田進一 1997 『越中瀬戸の変遷と分布』『中世北陸－考古学が語る社会史－』 北陸中世土器研究会編 桂書房
- 森田 勉 1982 『14～16世紀の白磁の分類と編年』『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 矢部英生 2008 『第IV章 3D 石器』『六反田南遺跡 前波南遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第202集 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山岸洋一 2001a 『下大野遺跡群』系魚川市埋蔵文化財調査報告第37 新潟県系魚川市教育委員会
- 山岸洋一 2001b 『糸魚川市遺跡地図（市内詳細分布調査報告書）』糸魚川市埋蔵文化財調査報告第39 新潟県糸魚川市教育委員会
- 山岸洋一・田村公一 2004 『水穂寺跡発掘調査報告書』糸魚川市埋蔵文化財調査報告書47 新潟県糸魚川市教育委員会
- 山岸洋一 2006 『平成17年度笛吹田遺跡発掘調査概要報告書』糸魚川市文化財調査報告書53 新潟県糸魚川市教育委員会
- 山岸洋一 2007 『笛吹田遺跡一玉類・石製品の大規模な製作工房一』『第14回 遺跡発掘調査報告会』 新潟県教育委員会・糸魚川市教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山本直人 2001 『縄文後・晚期土器型式群の較正歴年代と年代比較』『名古屋大学文学部研究論集140 史学47』名古屋大学文学部
- 山本信夫 1995 『中世前期の貿易陶磁』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- 山本 葦はか 2003 『岩倉遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第114集 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 吉岡康暢 1994a 『日本海域の土器・陶磁器 [中世編]』 六興出版
- 吉岡康暢 1994b 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
- 渡邊裕之ほか 2008 『横マクリ遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第188集 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

前波南遺跡 遺構觀察表 自然流路（河川）

報告番号	平面図	断面図	写真	グリッド	長さ (m)	幅 (m)	深さ (cm)	平面形	断面形	覆土	長軸方向	時期	出土遺物	切り合い箇所
1	4 - 5	6	49 - 52 - 53	1E~G1 - 1E' - F'	13.8	7.1	146	蛇行	弧状	レンズ状	N 29° W	古代	有	SD1=
2	7 -	9	49 - 52 - 53	3F - G - 4F'	16.2	11.4	74	蛇行	弧状	レンズ状	N 32° W	古代	有	SX76=

前波南遺跡 遺構觀察表 溝（SD）

報告番号	平面図	断面図	写真	グリッド	長さ (m)	幅 (m)	深さ (cm)	平面形	断面形	覆土	長軸方向	時期	出土遺物	切り合い箇所
1	2 - 4	5	50 - 55	1E - F - 2E - F'	19.7	446	28	直線	弧状	単層	N 56° E	古代	有	SX11 - SX25=
33	2	-	-	3F13	0.9	32	5	直線	弧状	単層	N 62° W	古代		
69	4	5	53	-1G10	1.1	22	14	直線	半円状	レンズ状	N 7° W	古代		
75	7	8	53	-2F - G	13.0	240	26	蛇行	弧状	レンズ状	N 6° ~ 38° W	古代		

前波南遺跡 遺構觀察表 ピット（P）

報告番号	平面図	断面図	写真	グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	覆土	長軸方向	時期	出土遺物	切り合い箇所
4	2	3	51	5E13	40	32	26	楕円	扁状	単層	-	古代		
6	2	3	-	5E17 - 18	40	30	5	円	弧状	単層	-	古代		
7	2	-	-	5E17	28	24	9	椭円	弧状	単層	-	古代		
8	2	3	-	5E16	24	24	10	円	弧状	レンズ状	-	古代		
14	2	3	-	4E14	46	32	9	椭円	弧状	単層	-	古代		
15	2	3	53	4E23, 4F3	48	28	7	椭円	弧状	単層	-	古代		
16	2	-	-	4E18	24	20	13	椭円	扁平状	単層	-	古代		
17	2	-	-	4E22	26	25	5	円	弧状	単層	-	古代		
18	2	3	-	4E17	40	32	8	椭円	弧状	単層	-	古代		
19	2	-	-	4E13	36	24	8	椭円	弧状	単層	-	古代		
20	2	-	-	4E12 - 17	36	24	4	椭円	弧状	単層	-	古代		
22	2	3	5	4F1	30	28	10	円	弧状	レンズ状	-	古代		
26	2	-	-	3F9	46	32	6	椭円	扁状	(单層)	-	古代		
28	2	-	-	3F3	33	24	7	椭円	弧状	単層	-	古代		
29	2	-	-	3F6	36	24	9	椭円	弧状	単層	-	古代		
31	2	3	-	3F1 - 2 - 6 - 7	80	24	7	椭円	弧状	単層	-	古代		
34	4	-	-	2F17	24	22	9	円	弧状	単層	-	古代		
36	2	-	-	2E15 - 20, 4E21 - 16	48	32	12	椭円	凸形状	単層	-	古代	SX21>	
61	4	5	-	-1F13	40	30	4	椭円	弧状	単層	-	古代		
62	4	5	-	-1F13	32	24	5	椭円	弧状	単層	-	古代		
70	4	-	-	-1224	28	20	7	椭円	弧状	単層	-	古代	SX68>	

前波南遺跡 遺構觀察表 土坑（SK）

報告番号	平面図	断面図	写真	グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	覆土	長軸方向	時期	出土遺物	切り合い箇所
30	2	3	-	3F6 - 7	76	50	8	椭円	弧状	単層	N 1° E	古代		
32	2	3	-	2F6	67	30	4	椭円	弧状	単層	N 28° W	古代		

前波南遺跡 遺構觀察表 性格不明遺構（SX）

報告番号	平面図	断面図	写真	グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	覆土	長軸方向	時期	出土遺物	切り合い箇所
2	2	3	-	DE14 - 19	168	108	13	不整形	弧状	レンズ状	N 10° W	古代		
3	2	3	51	5E8 - 9 - 14	208	132	20	不整形	弧状	レンズ状	N 10° W	古代		
5	2	3	-	5E7	124	120	18	不整形	弧状	レンズ状	N 28° W	古代		
9	2	3	-	5E6 - 7	68	40	4	不整形	弧状	単層	-	古代		

観察表

発掘番号	平面図	断面図	写真	グリッド	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	平面形	断面形	覆土	長軸方向	時期	出土遺物	切り合い箇所
10	2	3	-	4E10, 5E6	216	104	9	不整形	弧状	草席	-	古代		
11	2	3	-	4E15・2D・25, 5E16・21	436	172	9	不整形	弧状	草席	N-36°-W	古代		
12	2	3	-	4F19・2D・24, 25	356	276	15	不整形	弧状	草席	N-28°-W	古代		
13	2	3	51	4E23・24	276	164	9	不整形	弧状	草席	N-57°-W	古代		
21	2	3	51	3E, 4E・F	924	752	19	不整形	弧状	草席	N-57°-W	古代	P26-C	
25	2	3	50	3E	400	376	14	不整形	弧状	草席	N-7°-W	古代	SD1=	
27	2	3	-	3F8・9	168	67	3	不整形	弧状	草席	N-38°-W	古代		
35	4	5	53	2F21・22	186	68	13	不整形	弧状	レンズ状	-	古代	有	
53	4	5	53	-1F-G	376	68	21	不整形	円錐状	レンズ状	N-16°-W	古代		
54	4	5	-	-1F-G	480	72	7	不整形	弧状	草席	N-23°-W	古代		
55	4	5	-	-1G4・9	100	88	6	方形	弧状	草席	-	古代		
56	4・7	5	53	-1F	704	220	20	梯形	弧状	レンズ状	N-26°-W	古代	SK58・59=	
57	4	5	-	-1F22	98	52	5	不整形	弧状	草席	N-18°-W	古代		
58	4	-	-	-1F18	300	76	9	不整形	弧状	草席	N-78°-W	古代	SK56=	
59	4・7	5	-	-1F17・22	220	50	22	不整形	円錐状	レンズ状	N-18°-E	古代	SK56=	
60	4	-	-	-1F13・18	96	30	6	不整形	弧状	草席	N-14°-E	古代		
66	4・7	-	-	-1F21・22	200	160	4	不整形	弧状	草席	-	古代		
67	4・7	-	-	-1F22	84	47	7	不整形	弧状	草席	-	古代		
68	4	5	-	-1E・1F	1004	104	10	不整形	弧状	草席	N-22°-W	古代	P70-C	
74	7	8	53	-2F	430	236	16	不整形	弧状	草席	N-30°-W	古代		
76	7	8	53	-2F21・2G12 3G25・3G26	218	136	19	不整形	弧状	草席	-	古代	同上E=	

前波南遺跡 古代～近世 土器・陶磁器觀察表

編号	空 器 種別	通稱	グリッド 番号	断面 大、小	断面 mm	断面 mm	断面 mm	色調			新旧 7件：既存	製作年跡	使用 目録	備考		
								外面	内面	底土						
3	直筒形	長圓瓶	河原	1	1	F	4	U"	-	116	-	-	灰灰	灰灰	石 白	
4	直筒形	壺 (小口型)	河原	1	1	E	22	B"	-	-	-	灰 N5/0	灰 N5/0	灰 N7/0	石 白 磨	
5	上部形	壺	河原	1	1	F	3	B"	556	-	-	灰灰灰 10YR6/3	灰灰灰 10YR6/3	灰灰灰 10YR6/3	石 白 長	
6	上部形	壺	河原	1	1	F	9	B"	128	24	72	灰灰灰 10YR6/2	灰灰灰 10YR6/2	灰灰灰 10YR7/2	石 磨	
7	上部形	壺合	SW	2	1	F	4	ウ	ヌチ ヌカ	-	-	灰 N5/0	灰 N5/0	灰 N7/0	石 長 磨	
8	焼成	片口罐	河原	2	-4	F	24	U	310	-	-	灰 SY5/1	灰 SY5/1	灰 N5/0	石 長 磨	
14	直筒形	有台形	川	-3	F	5	ウ	2	120	36	82	灰 SY5/1	灰 SY6/0	灰 N6/0	(底) 刻輪系竪引+ 縦付白高台	
15	直筒形	有台形	川	2	-3	F	4	Tr	116	-	-	灰 N6/0	灰 N7/0	白 N6/0	舟立V期 (9C後～中)	
16	直筒形	有台形	川	2	-3	F	4	コヨ	-	-	88	灰 N6/0	灰 N7/0	7.5YR6/1	舟立V期 (9C後～中)	
17	直筒形	持蓋	河原	2	-3	G	9	ア	2b	-	23	135	灰灰 2.5YR6/1	灰 2.5YR6/1	灰 N6/0	白 磨
18	上部形	無台形	河原	2	-3	F	4	エ	3カ	126	34	62	7.5YR6/6	SY6/7	10YR8/3	(底) 刻輪系竪引+ 縦付白高台
32	直筒形	天日陶		-3	F	16	I	1	126	-	-	灰灰 3.5YR4/3	灰灰 3.5YR4/3	灰 2.5YR6/2	石 灰 (内側) 跡跡	
33	直筒形	志野纹		2	F	15	I	114	-	-	-	9.0Y 2.5YR6/2	9.0Y 2.5YR6/2	9.0Y 2.5YR6/1	白 長粗 (内側) 長石粗	
34	上部形	壺		4	E	24	I	94	23	44	10YR6/2	10YR7/4	10YR8/3	石 手づくね成形 (内側) 大ス		
35	唐津	壺		-1	F	5	I	120	35	34	灰白 10YR6/2	灰白 10YR6/2	灰白 10YR8/3	(口・内) 素燒 (足端) 第二丁サ 大堀1-2期 (10世紀～16世纪)		
36	越中 直筒	天日陶		3	E	21	I	114	-	-	7.5YR4/4	7.5YR6/4	SY5/1	白 (内側) 跡跡		
37	越中 直筒	壺		2	E	12	I	112	-	-	灰灰 10YR4/2	灰灰 10YR5/2	2.5YR6/1	白 (内側) 跡跡		
39	青磁	露井 文瓶		-3	G	5	II	136	-	-	灰灰 SY5/3	灰灰 SY5/3	2.5YR7/1	(内) 对照蓮瓣文		
40	青磁	持蓋		-3	G	10	II	134	-	-	オリーブ 10YR7/2	オリーブ 10YR6/2	NB/0	ナシ (上) 席玉瓶		
41	青磁	盤文瓶		-1	F	19	II	144	-	-	灰灰 10GY7/1	灰灰 10GY7/1	NB/0 小中組	(西) 洗練玉圭 15C中～後		
42	青磁	持蓋		1	G	13	II	170	-	-	オリーブ 10YR7/2	オリーブ 10YR6/2	NB/0 空瓶	厚唇圓腹瓶 (14世紀～15世紀)		
43	青磁	持蓋		2	F	2	II	130	-	-	灰灰 5GY7/1	灰灰 5GY7/1	7.5YR6/1	白 灰 (内) 瓶底反対 (14世紀～15世紀)		
44	青磁	直縫紋 文瓶		-1	G	3	II	136	-	-	灰灰 5GY7/1	灰灰 5GY7/1	NB/1 空瓶	(内) 直縫紋文 1440年～		
45	青花	持蓋	(C款)	-3	F	5	II	-	-	-	灰白 NS8/0	灰白 NS8/0	灰白 NS8/0	(内底) 京花文 (内) 瓶底 15C末～16C初		
46	青花	持蓋	(D款)	2	F	6	II	120	-	-	灰灰 10GY8/1	灰灰 5G7/1	NS8/0 空瓶	小野寺群 (15C後～16C前)		
47	白磁	持蓋	(E款)	-3	G	4	II	-	44	SY7/2	灰白 5YR7/2	7.5YR7/1	白 灰 (内) 瓶底 ナシ 空瓶	山口C期 (11C後～12C)		
48	白磁	持蓋	(F款)	-1	E	21	II	-	46	2.5YR1/1	5YR1/1	5YR1/1	白 灰 (内) 花文 (内) 花文	山口D期後半 (12C後)		
49	白磁	直縫紋 持蓋瓶		-3	G	13	II	90	-	-	灰白 10YR6/1	灰白 10YR8/1	10YR8/2 空瓶	(内) 直縫紋 1460年代～15C末		
50	直筒 直筒	平底		-2	F	4	II	158	-	-	灰白 2.5YR7/2	灰白 2.5YR7/2	10YR8/1 空瓶	古瀬津印刷模底型 (14世紀～15世紀)		
51	直筒 直筒	天日陶		-3	F	10	II	115	-	-	黑 10YR2/1	黑 7.5YR5/4	10YR8/2 空瓶	(内) 黑 古瀬津中期底型～B 色帶物 (14世紀～15世紀)		
52	直筒 直筒	天日陶		3	F	6	II	128	-	-	灰白 10YR1.7/1	灰白 10YR1.7/1	10YR8/1 空瓶	(内) 直筒 2ヶ 1460年代～15C末		
53	直筒 直筒	天日陶		3	F	3	II	110	-	-	灰白 10YR1.7/1	灰白 10YR1.7/1	10YR7/1 空瓶	(内) 直筒 1460年代～15C後		
54	直筒 直筒	天日陶		-3	F	8	II	110	-	-	暗青灰 10BG4/1	暗青灰 10BG5/1	5YR7/1 石 灰 (内) 瓶底 ナシ 空瓶	直筒 (14世紀～15世紀)		
55	直筒 直筒	小口		-2	F	2	II	114	18	60	灰灰 10YR8/2	灰灰 10YR8/2	石 磨 (底) 刻輪系竪引 ナシ 空瓶	古瀬津印刷模底型～B 色帶物 (14世紀～15世紀)		
56	直筒 直筒	圓底		3	F	3	II	136	-	-	灰灰 10YR6/1	灰灰 10YR6/1	2.5YR6/1 空瓶	(内) 直筒 (14世紀～15世紀)		
57	直筒 直筒	圓底		-2	F	6	II	-	-	-	灰灰 2.5YR6/1	灰灰 2.5YR6/1	2.5YR6/1 空瓶	古瀬津印刷模底型 (14世紀～15世紀)		
58	上部形	壺		-2	F	3	II	126	-	-	灰灰灰 10YR6/3	灰灰灰 10YR6/3	石 灰 (内) 瓶底 ナシ 空瓶	(15C 大ス)		
59	上部形	壺		4	E	12	II	130	-	-	灰灰 10YR6/2	灰灰 7.5YR6/4	7.5YR6/4 空瓶	ロクロ成形 (15C 大ス)		
60	上部形	壺		-2	F	16	II	112	24	70	灰灰 2.5YR6/3	灰灰 2.5YR6/3	7.5YR6/4 空瓶	ロクロ成形 (底) 刻輪系竪引 (1460年代～80年)		
61	上部形	壺		4	E	20	II	166	-	-	灰灰 10YR8/3	灰灰 7.5YR8/4	7.5YR8/4 空瓶	ロクロ成形 15C		

観察表

報告番号	空気量	通横	グリッド	幅	高さ	厚さ	口径	頭高	底座	色調			前回(1月)後回(2月)	製作部隊	使用機種	参考		
										外面	内面	底面						
62	上部部	直	4 F 2 II	-	-	-	64	暗	白	暗	白	白	ロクロ成形		15C			
63	上部部	直	1 G 3 II	-	-	-	80	灰白	7.5YR7/4	2.5YR7/6	石	ロクロ成形 (外)回転スリット	(内)スリット	15C				
64	上部部	直	1 G 6 II	104	-	-	10YR7/2	10YR8/2	10YR3/2	石	白	手づくね		(15) スリット				
65	上部部	直	3 F 8 II	114	-	-	灰黄	2.5YV6/2	2.5YV6/2	石	チャコ	手づくね成形						
66	上部部	直	3 F 6 II	128	-	-	灰黄	2.5YV6/2	2.5YV6/2	石	白	手づくね成形 側面(直)	(内)スリット					
67	上部部	直	1 F 25 II	140	-	-	灰黄	2.5YV6/2	2.5YV6/2	石	白	手づくね成形 側面(直)	(内)スリット					
68	旗調	片口開	1 F 1 II	288	-	-	灰白	7.5YR7/1	10YR6/1	10YR7/1	石	白	母(柱)各部一単位 組立	片口開 I期 (14C1/4)				
69	旗調	片口開	4 E 12 II	334	-	-	灰	N5/0	N6/0	10YR1/1	石	青	漆					
70	旗調	片口開	3 E 20 II	300	-	-	灰	N5/0	N4/0	2.5YV6/3	石	青	漆					
71	旗調	片口開	-2 F 12 II	346	-	-	灰	N6/0	N6/0	石	青	漆	(前回)5条一単位 以上(片口)波状文	片口開 V期 (14C4/4~15C4)				
72	旗調	片口開	-2 F 16 II	372	-	-	灰黄	2.5YV7/2	2.5YV7/1	石	白	石	長	母(柱)各部一単位 組立	(内)スリット			
73	旗調	片口開	-1 E 25 II	338	-	-	灰白	10YR6/1	10YR5/1	10YR7/1	石	白	石	(片口)波状文 (柱)7条一単位				
74	旗調	片口開	2 F 4 II	346	-	-	灰黄	2.5YV5/1	N6/0	2.5YV6/1	石	青	漆	(片口)波状文				
75	旗調	片口開	3 F 5 II	290	-	-	暗	2.5YV7/6	2.5YV7/1	石	白	石	青	(片口)波状文				
76	旗調	片口開	-2 F 18 II	284	-	-	灰	SY5/1	SY6/1	7.5YV6/1	石	白	石	(前回)8条一単位				
77	旗調	表記	1 E 19 II	-	-	-	灰	N5/0	N2/0	10YR8/1	石	青	漆	(前)波状文?	(内)スリット			
78	旗調	表記	2 F 9 II	-	-	-	灰	N5/0	N6/0	10YR1/1	石	青	漆	(外)波状文	15C-B			
79	旗調	直	-3 F 12 II	474	-	-	灰	N6/0	N6/0	石	白	石	青	漆	片口開 V期 (14C4/4~15C4)			
80	越前	直	-2 F 19 II	304	-	-	灰	SYR4/2	7.5YV5/2	2.5YV6/1	灰白	石	長	漆	(片口)自然筋			
81	唐津	直	-2 G 7 II	110	30	40	灰	SYR4/4	SYR4/2	5/4YV2/1	10YR7/3	石	白	長	人體1-2期 (15B~16B年代)			
82	唐津	直	1 F 23 II	102	35	40	暗灰	SYR5/0	SYR5/1	2.5YV6/1	10YR1/1	石	青	漆	人體1-2期 (15B~16B年代)			
83	唐津	横跡	2 F 12 II	260	-	-	暗赤	10YR3/1	7.5YR5/2	10YR4/1	石	白	長	漆	人體II期 (16B~20年代)			
84	越中	丸模	1 F 7 II	98	-	-	灰黃	10YR4/2	10YR3/2	2.5YV6/3	灰白	白	台	(内)模胎	17C			
85	越中	丸模	-2 F 2 II	114	21	66	灰	2.5YV1/2	2.5YV1/1	2.5YR7/4	波状模	白	石	長	(内)模胎	17C		
86	越中	丸模	1 F 9 II	110	27	46	暗灰	2.5YV1/2	2.5YV1/3	2.5YV6/1	石	青	長	(内)模胎	17C			
87	越中	丸模	-1 F 22 II	112	23	60	赤	2.5YR4/1	7.5R2/2	2.5YR6/6	模	青	長	(内)模胎	17C			
88	越中	向付	1 F 15 II	100	26	48	灰黃	2.5YV3/2	2.5YV3/1	2.5YR6/1	石	白	石	(内)模胎	器物類(前)海色 (SYR6/2)			
89	越中	横跡	1 F 2 II	310	-	-	灰	SYR2/1	10R6/1	10YR8/2	石	長	漆	(内)模胎	17C第2中期			
90	丸	平丸	-2 G 11 II	112	44	45	赤	SYR2/1	SYR3/0	2.5YV4/1	石	白	長		有口V期 (9C前~中)			
91	須恵器	有台脚	1 F 8 II	124	31	72	2.5YV1/1	SYR1/1	SYR1/0	石	白	石	青	有口V期 (9C前~中)				
92	須恵器	有台脚 (小口付)	2 F 14 II	-	-	-	24	SYR1/0	SYR1/1	SYR7/1	石	白	石	青	有口V期~中期 (9C前~10C前)			
93	須恵器	有台脚 (小口付)	2 F 5 II	-	-	-	10R1/1	10YR7/1	SYR7/1	石	白	石	青	(前)回転ヘタ切り (裏)ヘタ	有口V期~中期 (9C前~10C前)			
94	須恵器	柄蓋	3 F 1 II	-	-	-	10YR7/1	SYR6/1	2.5YR6/3	石	白	石	青	有口V期 (9C前~中)				
95	須恵器	柄蓋	3 F 6 II	-	-	-	10R1/1	10R7/0	10R7/0	石	白	石	青	有口V期 (9C前~中)				
96	須恵器	柄蓋	2 F 21 II	-	-	-	10R1/1	SYR6/1	2.5YV7/1	石	白	石	青	有口V期~中期 (9C前~10C前)				
97	上部部	小頭	2 F 17 II	132	-	-	暗	SYR6/6	SYR6/6	SYR6/6	石	白	石	青	有口V期~中期 (9C前~10C前)			
103	須恵器	有台脚	2 F 1 B'	120	37	82	灰	N6/0	N6/0	10YR7/1	白	白	石	青	(底)回転ヘタ切り (裏)ヘタ	有口V期~中期 (9C前~9C中)		
104	須恵器	有台脚 (小口付)	1 F 1 B'	114	36	70	灰	10YR6/1	7.5YR7/1	2.5YV7/1	石	白	石	青	(底)回転ヘタ切り (裏)ヘタ	有口V期 (9C前~中)		
105	須恵器	有台脚 (小口付)	1 F 1 B'	114	-	-	灰	SYR7/1	SYR7/1	2.5YV7/1	石	白	石	青	有口V期~中期 (9C前~10C前)			
106	須恵器	柄蓋	1 F 8 B'	-	-	-	灰	10R5/1	10R6/1	10R6/1	石	白	石	青	有口V期 (9C前~中)			
107	上部部	無台脚	-1 F 13 B'	138	37	70	灰	2.5YV1/2	2.5YV1/3	2.5YV7/6	暗	白	石	青	(底)回転ヘタ切り	有口V期 (9C前~中)		
109	上部部	無台脚	-3 F 25 III	136	36	72	灰	10YR8/2	10YR8/2	10YR7/6	明	白	石	青	(下半)ケヌリ	有口V期 (9C中~下)		

観察表

前波南遺跡 繩文～古墳時代 土器観察表

(単位:石=石器、白=白色陶子、赤=赤色陶子、黒=黒色陶子、長=長石、圓=円錐、チャ=チャート、角=角閃石、青=青緑色斜長石、緑=緑色)

報告番号	種類	通称	グリッド番号	層位	目標	高さ mm	底径 mm	色調	壁上		溝相		変化物	備考
									内面	外面	内面	外面		
1 高杯	SD	I 2 F 6 工	1	-	-	-	-	浅黄褐	10Y30R/3	G 灰 横	-	-	当生土層 粘性土	
2 带(直部)	SD	I 2 E K 20	1	-	-	-	-	N5/0	N5/0	灰黄褐	10Y30E/2	G 灰 横		PB-TAT-37115 直部
8 豆	河川	I 1 F 14	下層 砂基	-	-	-	-	灰白・暗	7.5YR7/4	灰黄褐	5YR5/0	G 灰 横	ヘラナデ	直部 古墳時代
9 豆	河川	I 1 F 14	下層 砂基	1.08	-	-	-	灰白・暗	10Y30M/2	灰黄褐	10Y30E/2	G 灰 横	ヘラナデ	直部 作生土層
10 (網文)	河川	I 1 F 14 ウ	スナ	-	-	-	-	灰白・暗	7.5YR7/2	灰白・灰 横	2.5Y7/2	G 灰 横	結晶状網文	繩文初期
11 深鉢(網文)	河川	I 1 F 4	ナニ 工	-	-	104	-	灰白・暗	10Y30T/3	灰白・暗	2.5Y7/2	右斜 灰 横	(直部) 鋼代瓦	繩文後中期か
19 高杯	河川	I -3 F 22	17 23	3	160	134	120	灰黄褐	7.5YR6/3	灰白	2.5Y6/3	G 灰 横	(空部) ハタケ (直部) ハタケアリ (斜部) ハサワリ	
20 帯白	河川	I -3 F 15	11	3	-	-	96	灰白・暗	7.5YR7/4	灰白	2.5Y7/3	G 灰 横	手形印	不明瞭
21 箕	河川	I -3 F 22	5	100	38	52	52	灰白・暗	10Y30T/3	灰白	2.5Y7/3	G 灰 横	ハタケ	ハタナデ
22 箕	河川	I 3 G 9.7	3	108	98	20	灰白	7.5YR6/3	灰白	10Y30R/1	G 灰 横	ヘラケアリ	ヘラケアリ (内部) (外部)	
23 帯	河川	I 2 F 16	地表 土表	90	77	61	-	灰白・直彌	10Y30T/2	灰白・直彌	10Y30T/2	G 灰 横	(直部) ハタケアリ (斜部) ハタケアリ	
24 豆	河川	I 2 F 16.5	3	136	-	-	-	灰	5YR7/8	灰	5YR7/8	G 灰 横	ハテ	(直部) ハテ (斜部) ハテナデ
25 豆	河川	I 3 G 9.7	3	100	-	-	-	灰白・直彌	10Y30T/3	灰白・直彌	10Y30T/3	G 灰 横	(直部) ハタケ (斜部) ハタケ	
26 豆	河川	I -3 F 22 G 2.7	3	194	270	66	-	灰白・直彌	10Y30T/2	灰白・直彌	10Y30T/2	G 灰 横	ハタケ	直彌有り
27 帯	河川	I -2 F 14	21	3	152	-	56	灰白・暗	7.5YR7/4	灰白	7.5Y5/1	G 灰 横	(直部) ハタケアリ (斜部) ハタケアリ	I-2とGで接合
28 豆	河川	I -4 F 13	3	-	-	-	-	灰白	10Y30R/1	灰白	10Y30R/1	G 灰 横	沈殿文	前期組合 斜彌有り式か
29 瓢	河川	I -4 F 13	3	-	-	-	-	灰白	10Y30R/1	灰白	10Y30R/1	G 灰 横	沈殿文	前期組合 斜彌有り式か
30 豆	河川	I -4 F 13	3	-	-	-	-	灰白	10Y30R/1	灰白	10Y30R/1	G 灰 横	沈殿文	前期組合 斜彌有り式か
31 豆	河川	I -4 F 13	3	-	-	-	-	灰白	10Y30R/1	灰白	10Y30R/1	G 灰 横	沈殿文	前期組合 斜彌有り式か
38 有柄巻(赤系)	-1 F 1	1	134	-	-	-	-	赤橙	10Y30E/3	赤	10Y30E/3	赤 横	赤鉛シボリ-直彌 (生末?)	
96 瓢	河川	-1 G 2	II	84	-	-	-	赤	10Y30E/3	赤	10Y30E/3	赤 横	赤鉛シボリ-直彌 (生末?)	
99 合成鉢 or 瓢	-1 F 12	II	-	47	108G/2	108G/2	108G/2	灰白・直彌	10Y30S/3	灰白・直彌	10Y30S/3	灰白・直彌	コピナデ ヒビナサエ	
100 帯	I F 24	II	-	60	7.5NH4/2	7.5NH4/2	7.5NH4/2	明赤	7.5Y5/0	7.5Y5/0	7.5Y5/0	G 灰 横	ハテ+赤鉛	ハテ+赤鉛
101 圓筒缶 or 直筒	I F 3	II	-	-	-	-	-	灰白・直彌	10Y30T/2	灰白・直彌	10Y30T/2	G 灰 横	当生土層 粘性土	
102 豆	-1 G 10	II	204	-	-	-	-	灰白・直彌	10Y30T/2	灰白・直彌	10Y30T/2	G 灰 横	作生土層 粘性土	
105 内面 黑色跡	4 E 19	II	140	-	-	-	-	浅黄	5YR6/3	灰	7.5Y4/1	G 灰 横	-	墨色処理 占領後期か
110 有孔鉢	I F 21	III	-	26	10Y30E/2	10Y30E/2	10Y30E/2	赤白	10Y30R/1	赤白	10Y30R/1	G 灰 横	ハタケ	

前波南遺跡 管状土鍾観察表

報告番号	分類	通称	出土位置	長さ mm	最大径 mm	孔径 mm	厚さ mm	重量 (g)	属性 (単位: mm/g)				備考
									通様	通弓	グリッド番号	層位	
12 大鉢	河川	I II	I E 22	61	32	10	18	40.3					(I) 内は推定

(I) 内は推定

前波南遺跡 石器・石製品観察表

報告番号	種類	石材	層位	出土位置			属性 (単位: mm/g)				備考
				通様	通弓	グリッド番号	馬 S	輪	厚さ	重さ	
111 横刃形G器	砂岩 (黑色)	SD1	I 3 E 11	-	-	-	55	95	23	123.2	
112 横刃形石器	砂岩 (黑色細粒)	II 5 E 17	-	-	-	-	62	96	13	96.8	
113 横刃形石器	砂岩 (黑色細粒)	河川2 3 -3 F 21	-	-	-	-	73	131	13	171.9	
114 横刃形石器	砂岩 (颗粒)	河川1 スナ	I 1 F 14 ウ	-	-	-	89	125	15	220.8	他用鉄あり
115 横刃形石器	砂岩 (颗粒)	河川2 3 -4 F 9	-	-	-	-	108	169	25	551.5	
116 横刃形石器	砂岩 (颗粒)	II 4 E 21	-	-	-	-	145	112	24	355.3	他用鉄あり
117 石耕	安山岩	I 1 -1 F 3	-	-	-	-	124	111	45	822.9	
118 石耕	砂岩 (颗粒)	河川2 3 -4 F 10	-	-	-	-	152	107	35	728.5	
119 横刃形G器	砂岩 (黑色細粒)	II 3 E 20	-	-	-	-	71	70	12	49.4	

観察表

報告書号	種別	石種	出土位置			属性(単位:mm/g)				備考	
			通称名	層位	グリッド	高さ	幅	厚さ	孔径		
120	樹形石	安山岩	II	I F S		86	73	33	164.8	複数あり	
121	樹石類	安山岩	II	I F 11		93	78	30	196.7	四辺52~55mm	
122	樹石類	安山岩	II	2 F 10		144	95	39	810.7		
123	樹石類	砂岩(板状)	II	2 F 16		130	63	59	674.6		
124	樹石類	安山岩	河図1	Sナ	I F 12	イ	102	72	60	656.3	
125	石跡	安山岩	河図2	3 -3 F 11		93	69	61	474.9	複数	
126	石跡	安山岩	II	5 E 7		58	73	19	109.3	打穴	
127	石跡	安山岩	II	2 F 14		49	61	12	45.0	打穴	
128	樹石	砂岩	II	2 F 6		119	61	54	320.4		
129	樹石	凝灰岩	I	4 E 17		49	40	28	63.5		
130	樹石	内燃灰岩	砂岩(板状)	II	4 F 15	フ	128	47	13	100.5	
131	樹石	粘板岩	砂岩(板状)	II	3 F 16	エ	148	87	23	461.7	
132	石核	緑色凝灰岩	河図2	3 -3 F 22	フ	41	55	22	40.2		
133	玉飾?	滑石	II	-2 F 21	フ	41	17	13	16.6		
134	碧玉	滑石	河図2	3 -4 F 15	イ	12.7	5.9	3.7	0.37	尖端	
135	碧玉	滑石	河図2	3 -3 F 21	ガ	7.5	5.7	26.1	1.99	3.1	
136	碧玉	未成岩	緑色凝灰岩	II	3 -3 F 11	ガ	6.7	6.5	8.1	0.59	2.3
137	ガラス小玉	—	河図2	3 -3 F 16	エ	4.7	4.5	3.2	0.10	2.1	
138	白玉	滑石	河図2	3 -3 F 21	フ	5.9	5.8	3.7	0.20	2.3	
139	白玉	滑石	河図2	3 -3 F 21	フ	5.6	5.4	2.4	0.12	2.2	
140	白玉	滑石	河図2	3 -3 F 22	フ	4.5	4.4	2.7	0.09	1.6	
141	白玉	滑石	河図2	3 -3 F 22	ガ	4.3	4.2	2.2	0.07	1.7	
142	白玉	滑石	河図2	3 -3 F 21	フ	3.5	3.4	1.6	0.03	1.7	
143	白玉	未成岩	滑石	II	3 -3 F 21	フ	7.9	6.3	2.2	0.23	1.6
144	白玉	未成岩	滑石	II	3 -3 F 21	フ	7.6	6.5	2.9	0.24	1.5
145	白玉	未成岩	滑石	II	3 -4 F 25	エ	7.2	5.9	3.0	0.21	1.6
146	白玉	未成岩	滑石	II	3 -3 F 22	ガ	7.7	6.6	2.7	0.24	
147	玉飾	素材	河図2	3 -3 F 22	ガ	30.0	21.0	5.7	4.7		
整理番号											
1002	白玉	滑石	河図2	3 -3 F 16	イ	5.6	4.8	2.0	0.08	2.1	
1003	白玉	滑石	河図2	3 -3 F 16	イ	4.1	4.0	2.4	0.06	1.7	
1005	白玉	滑石	河図2	3 -3 F 16	エ	4.6	4.3	3.4	0.11	1.6	
1006	白玉	滑石	河図2	3 -3 F 16	エ	4.1	4.0	1.6	0.04	2.2	
1007	白玉	滑石	河図2	3 -3 F 16	エ	6.2	5.8	2.2	0.14	1.8	
1008	白玉	未成岩	滑石	II	3 -3 F 16	エ	7.4	6.6	3.1	0.22	1.7
1009	玉飾	素材	河図2	3 -3 F 16	エ	8.8	5.4	3.9	0.20		
1010	玉飾	素材	河図2	3 -3 F 16	エ	8.4	5.7	2.4	0.10		
1011	白玉	未成岩	滑石	II	3 -3 F 16	エ	6.9	4.5	2.3	0.11	尖端
1012	玉飾	素材	河図2	3 -3 F 16	エ	7.1	4.5	2.5	0.11		
1013	白玉	滑石	河図2	3 -3 F 16	エ	4.5	4.4	2.7	0.08	1.8	
1014	白玉	滑石	河図2	3 -3 F 16	エ	4.4	4.3	2.4	0.05	2.2	
1015	白玉	滑石	河図2	3 -3 F 16	エ	4.2	4.1	2.8	0.07	2.1	
1016	白玉	滑石	河図2	3 -3 F 16	エ	3.7	3.6	1.9	0.04	1.8	
1017	白玉	未成岩	滑石	II	3 -3 F 16	エ	7.9	5.8	3.1	0.19	1.6
1018	白玉	滑石	河図2	3 -3 F 16	エ	4.4	4.2	2.9	0.06	1.9	
1019	白玉	滑石	河図2	3 -3 F 21	フ	4.6	4.4	2.7	0.08	1.9	
1020	白玉	滑石	河図2	3 -3 F 21	フ	5.0	4.9	2.6	0.11	2.0	
1021	白玉	滑石	河図2	3 -3 F 21	フ	5.1	5.0	2.2	0.09	2.0	
1022	白玉	滑石	河図2	3 -3 F 21	フ	4.6	4.5	2.4	0.08	1.5	
1023	白玉	滑石	河図2	3 -3 F 21	フ	4.0	4.4	2.5	0.08	1.6	
1024	白玉	滑石	河図2	3 -3 F 21	フ	4.4	4.3	3.3	0.12	1.7	
1025	白玉	滑石	河図2	3 -3 F 21	フ	5.1	4.8	1.9	0.07	2.2	
1026	白玉	滑石	河図2	3 -3 F 21	フ	4.7	4.4	3.4	0.10	1.7	
1027	白玉	滑石	河図2	3 -3 F 21	フ	4.4	3.7	2.9	0.05	1.8	
1028	白玉	滑石	河図2	3 -3 F 21	フ	4.0	3.9	2.5	0.06	1.9	
1029	白玉	滑石	河図2	3 -3 F 21	フ	3.9	3.7	3.2	0.06	1.6	
1030	白玉	滑石	河図2	3 -3 F 21	フ	3.5	3.4	1.7	0.04	1.8	
1031	白玉	滑石	河図2	3 -3 F 21	フ	4.0	4.2	2.3	0.06	1.8	
1033	白玉	滑石	河図2	3 -3 F 21	フ	4.5	4.1	1.9	0.04	尖端	

報告 番号	種別	石種	出土位置			属性(単位:mm/g)					備考	
			連続孔	断位	グリット	長さ	幅	厚さ	重量	孔径		
t034	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 21	7'	5.8	2.3	1.9	0.06		
t037	白玉	未成品	滑石	河田2	3 -3	F 21	7'	6.6	6.0	3.0	0.19	1.5
t038	白玉	未成品	滑石	河田2	3 -3	F 21	7'	6.8	5.7	2.2	0.12	1.6
t039	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 21	7'	5.3	5.1	2.6	0.11	2.1	
t041	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 21	7'	4.9	4.8	2.7	0.12	1.9	
t042	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 21	7'	4.9	4.8	2.2	0.09	1.9	
t043	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 21	7'	4.6	4.5	2.3	0.08	1.6	
t044	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 21	7'	4.2	4.1	2.0	0.05	1.8	
t045	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 21	7'	3.4	3.3	2.6	0.04	1.8	
t046	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 21	7'	3.8	3.4	1.5	0.03	1.6	
t047	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 21	7'	5.3	5.1	2.7	0.12	2.1	
t048	玉蟹	木材	滑石	河田2	3 -3	F 21	7'	8.4	5.7	2.7	0.14	
t050	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 21	7'	5.3	5.2	2.4	0.11	1.9	
t051	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 21	7'	4.8	4.2	1.9	0.06	1.9	
t052	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 21	7'	5.0	4.9	2.1	0.08	1.9	
t053	白玉	未成品	滑石	河田2	3 -3	F 21	7'	7.4	6.7	2.9	0.20	1.7
t054	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 21	7'	4.1	4.0	2.3	0.06	1.7	
t055	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 21	7'	4.7	4.3	3.2	0.10	1.4	
t056	玉蟹	木材	滑石	河田2	3 -3	F 21	7'	6.9	5.1	2.5	0.12	
t058	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 21	7'	4.6	4.4	3.6	0.10	1.9	
t059	白玉	未成品	滑石	河田2	3 -3	F 21	7'	8.1	3.3	2.8	0.11	
t060	白玉	未成品	滑石	河田2	3 -3	F 21	7'	7.4	3.3	2.3	0.08	
t061	玉蟹	木材	滑石	河田2	3 -3	F 21	7'	11.3	4.6	2.8	0.16	
t062	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 21	7'	4.3	4.1	1.5	0.03	2.0	
t063	玉蟹	木材	滑石	河田2	3 -3	F 22	7'	10.2	10.5	8.2	1.46	
t064	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 22	7'	4.8	4.7	2.2	0.08	2.2	
t066	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 22	7'	4.6	4.5	2.3	0.07	1.8	
t067	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 22	7'	4.3	4.2	3.1	0.08	1.8	
t068	玉蟹	木材	滑石	河田2	3 -3	F 22	7'	13.1	7.0	2.2	0.26	
t069	玉蟹	木材	滑石	河田2	3 -3	F 22	7'	8.5	5.6	3.3	0.22	
t070	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 22	7'	5.3	5.2	2.5	0.12	2.1	
t071	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 22	7'	4.8	4.7	2.4	0.07	2.2	
t072	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 22	7'	4.3	4.2	2.8	0.09	1.7	
t073	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 22	7'	4.3	4.0	3.0	0.10	1.7	
t074	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 22	7'	4.3	4.2	2.4	0.09	1.7	
t075	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 22	7'	4.6	4.5	3.1	0.12	1.8	
t076	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 22	7'	4.2	4.1	3.1	0.10	1.7	
t077	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 22	7'	5.8	5.3	2.5	0.12	2.1	
t078	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 22	7'	4.3	4.2	1.7	0.04	1.9	
t079	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 22	7'	4.2	4.0	2.7	0.07	1.8	
t080	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 22	7'	4.2	4.1	2.6	0.08	1.7	
t082	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 22	7'	4.3	4.2	2.7	0.09	1.6	
t083	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 22	7'	4.0	3.9	2.8	0.07	1.8	
t084	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 22	7'	3.9	3.7	2.6	0.06	1.9	
t085	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 22	7'	4.2	4.1	2.0	0.06	1.7	
t086	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 22	7'	4.0	3.9	1.9	0.05	1.7	
t087	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 22	7'	4.3	4.1	1.7	0.05	1.5	
t088	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 22	7'	4.2	3.9	2.1	0.06	2.0	
t089	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 22	7'	4.1	3.8	2.7	0.06	2.1	
t090	白玉	滑石	河田2	3 -3	F 22	7'	4.3	2.5	2.1	0.04		
t091	白玉	未成品	滑石	河田2	3 -3	F 22	7'	7.1	6.7	3.0	0.20	1.5
t093	白玉	未成品	滑石	河田2	3 -3	F 22	7'	7.6	6.1	2.7	0.23	
t094	白玉	滑石	河田2	3 -4	F 22	7'	4.0	3.7	1.6	0.04	1.7	
t096	白玉	滑石	河田2	3 -4	F 25	7'	4.1	4.0	2.1	0.05	2.0	
t097	白玉	滑石	河田2	3 -4	F 25	7'	4.0	3.9	2.1	0.04	1.7	
t098	白玉	未成品	滑石	河田2	3 -4	F 25	7'	8.1	7.2	2.8	0.25	1.4
t099	白玉	未成品	滑石	河田2	3 -4	F 25	7'	6.0	5.0	1.9	0.09	1.5
t100	白玉	滑石	河田2	3 -4	F 25	7'	5.0	4.9	3.4	0.15	1.7	
t101	白玉	滑石	河田2	3 -4	F 25	7'	3.6	3.3	1.9	0.03	1.5	

観察表

前波南遺跡 木製品観察表

編目番号	相間番号	台形番号	沿標・形状	柄種	木取り	出土位置			長さ mm	幅 mm	厚さ mm	備考
						通標番号	層位	グリッド				
148 419 8	田下駄	スギ	桟目	SX	35	-	2	F	21	300	358	27
149 453 22	棒状	スギ	削出丸棒	机	77	-	2	E	22	335	26	刺さっている 取No.W5
150 423	大足	-	桟目	SX	25	1	3	E	19	90	35	16 取No.W2
151 424	大足	-	桟目	SX	25	1	3	E	19	177	32	15 取No.W7
152 419	大足	-	桟目	SX	25	1	3	E	19	228	40	16 取No.W10
153 427	大足	-	桟目	SX	25	1	3	E	19	200	47	17 取No.W6
154 428	大足	-	桟目	SX	25	1	3	E	19	227	38	19 取No.W1
155 429	大足	-	桟目	SX	25	1	3	E	19	235	39	19 取No.W2
156 415 5	大足	スギ	桟目	SD	1	1	3	E	21	497	54	17 取No.W22
157 407	大足	-	桟目	SD	1	1	2	E	25	210	31	17 取No.W26
158 411	大足	-	桟目	SD	1	1	3	E	21	201	32	16 取No.W46
159 416 6	大足	スギ	桟目	SD	1	1	3	E	22	301	33	19 取No.W21
160 402	大足	-	桟目	II'	3	E	18	266	31	15		
161 409	大足	-	桟目	II'	3	E	20	262	32	19		
162 406	大足	-	桟目	山根上	3	E	22	213	30	15 取No.W20		
163 408	大足	-	桟目	山根上	3	F	1	231	32	17 取No.W23		
164 430	大足	-	桟目	II'	3	F	3	143	33	18		
165 451 13	人形?	スギ	桟目	SD	1	1	3	E	18	251	41	16 取No.W14
166 420 9	木盤	スギ	板判?	SD	1	II'	1	F	9	172	25	3 「出雲高山」
167 486 43	實物木製品	スギ	削出丸棒	SD	1	II'	1	F	9.7	194	10	9
168 440 45	曲物 板状	-	桟目	河川	1	船上	1	E	24.3	162	62	10 開面に木打2ヶ 接(170mm)
169 405 3	丸手リ	スギ	桟目	河川	1	II'	1	F	4.9	245	71	26
170 447	板状	-	桟目	SW	2	II'				365	85	16 取No.9
171 477 37	板状	スギ	桟目	SW	2	II'				728	162	18 取No.26 円孔有り
172 487 44	棒状	スギ	分岐角材	SW	2					666	37	25 取No.11
173 485	丸板	-	桟目	SW	2	II'				1,076	125	61 取No.3
174 492	板状	-	桟目	SW	2	II'				2,521	125	31 取No.6
175 455 24	田下駄	スギ	桟目	SW	2	II'				469	231	141 取No.7
176 463	板状	-	桟目	河川	1	II'	1	F	4.9	1,214	115	43
177 462	手標	-	桟目	河川	1	下標 研磨仕上り	1	F	2	134	40	11 円孔有り
178 421 10	樹脂 樹脂	スギ	桟目	河川	1	II'	1	E	22.9	116	27	4
179 422 11	樹脂 樹脂	スギ	桟目	河川	1	下標 研磨仕上り	1	E	22	209	30	4
180 461 29	板状	スギ	桟目	河川	1	砂	1	E	21.3	892	41	12
181 459	杭状	-	桟目	河川	1	II'	1	F	14	853	40	27
182 434 14	樹脂 樹脂	スギ	桟目	河川	1	樹脂 (下標)	1	F	18	125	37	5
183 468 32	角材	スギ	桟目	河川	1	下標	1	F	13	203	163	75
184 488 45	加工木	アヌラ	芯持丸木	河川	1	砂	1	F	13 + 18	1,538	67	56
185 491 48	杭状	スギ	芯持丸木	河川	1	砂	1	F	13	977	262	178
186 481 40	丸板	スギ	桟目	河川	1	砂	1	F	24.7	504	128	53
187 444	曲物 板状	-	桟目	河川	1	船上	1	G	2	140	143	8 開面に木打4ヶ 接(142mm)

観察表

報告書号	整理番号	分析番号	器種・形状	岩相	木取り	出土位置			長さ mm	幅 mm	厚さ mm	備考			
						遺構番号	層位	グリッド							
188 443			曲物 板状	-	板目	河川	I	粘土	I	G	2	116	114	8 側面に木打4ヶ 段115mm	
189 448			軋状	-	板目	SW	I	下部 砂礫	I	G	4.7'	352	50	24	
190 452 21			軋状	スギ	分離角材	SW	I	II'				428	28	18 取No.27	
191 451			板状	-	板目	SW	I	II'				522	85	14 取No.34	
192 495 49			板状	スギ	板目	SW	I					1,693	39	5 取No.8	
193 494			板状	-	板目	SW	I					1,692	46	5 取No.11	
194 441			曲物 板状	-	板目	河川	2	泥點土 直上	-3	F	5.9	161	92	8 側面に木打2ヶ 段(161mm)	
195 435			曲物 板状	-	板目	河川	2	1	-3	F	7	100	37	7 取No.147 側面に木打1ヶ 段(100mm)	
196 439			曲物 板状	-	板目	河川	2	2	-3	F	14	115	110	6 取No.397 側面に木打1ヶ 段(115mm)	
197 412			曲物 板状	-	板目	河川	2	2	-3	F	19	115	76	8 取No.511 側面に木打2ヶ 段(115mm)	
198 417			曲物 板状	-	板目	河川	2	1	-3	F	23	159	117	7 取No.379 側面に木打3ヶ 段(159mm)	
199 433			曲物 板状	-	板目	河川	2	1	-3	G	15	164	125	9 取No.226 側面に木打3ヶ 段(164mm)	
200 403 1			人形	入手	板目	河川	2	1	-3	F	22	154	31	8	
201 404 2			不明 (二段)	入手	漆出棒	河川	2	1	-3	F	14	257	34	22	
202 470 33			棒状	入手	加須丸棒	河川	2	下層	-4	F	15	798	38	35 取No.797	
203 478 38			漆村	入手	分離板状 (板目)	河川	2	上層	-3	G	10	642	79	35 取No.324 方形抜け刃身	
204 466			不明	-	板目	河川	2	中層	-3	F	22	210	52	16 取No.435 方形抜け刃身	
205 483 41			板状	入手	板目	河川	2	下層	-3	F	21	802	102	23 取No.488	
206 457 26			漆村	入手	板目	河川	2	下層	-3	F	17	1,134	142	30	
207 490 47			漆村	入手	板目	河川	2	下層 直上	-4	F	9~10 14~15	1,372	310	50	
208 456 25			漆村	入手	板目	河川	2	下層	-4	F	15 20	1,349	174	30	
209 469			板状	-	板目	河川	2	下層	-3	F	23	297	105	8 取No.382	
210 479			板状	-	板目	河川	2	下層	-4	F	15	250	83	14 取No.808	
211 473 35			板状	入手	板目	河川	2	上層～ 下層	-3	G	4	604	80	30 取No.303 立っている	
212 467			板状	-	板目	河川	2	下層	-3	F	22	617	144	23 半埋べたト内	
213 469 46			板状	入手	板目	河川	2	上層	-3	G	4~9 10	1,999	112	16 取No.225	
214 476			漆板	-	板目	河川	2	下層	-3	F	22 G	2	1,359	137	42 取No.526 (半埋べたト)
215 464 30			漆板	入手	板目	河川	2	下層	-3	F	22	1,208	283	34 取No.521	
216 471			漆板	-	板目	河川	2	下層	-3	F	17	596	196	18 取No.480	
217 465 31			漆板	入手	板目	河川	2	上層～ 中層	-3	G	4	655	93	23 取No.271 立っている	
218 460 28			板	入手	分離角材	河川	2	-	-3	F	21	721	157	98 板1118	
219 458 27			板	入手	分離板状 (板目)	河川	2	-	-3	F	19	899	75	32 板102	
220 475			板状	-	板目	河川	2	上層	-3	G	4	641	42	32 取No.307	
221 480 39			板状	スギ	分離 (木打 二段)	河川	2	下層	-4	F	15	660	53	42 取No.786	
222 474 36			板状	スギ	分離角材	河川	2	下層	-3	F	22	530	45	33 取No.454	
223 484 42			板状	スギ	板目	河川	2	II' ~ 上層	-4	F	19	725	86	24	
224 472 34			板	スギ	板目	河川	2	上層	-3	G	4	688	63	26 取No.259	
225 482			板状	-	板目	河川	2	上層～ 下層	-3	F	24	732	69	25 取No.359 新めに立っている	
226 436 15			漆	ケヤキ	漆本地 足打取		II'	-2	F	24.9 (+ア)		207	184	15	
227 438 17			漆塗 板	ブナ	漆本地 足打取		II	1	F	11	-	-	-	川縁辺 (内) 黒漆+赤漆 (外) 漆塗+赤漆+朱漆	
228 442 18			漆塗 板	ケヤキ	漆本地 足打取		II	-1	F	8	-	-	-	(内) 黒漆	

観察表

報告番号	標識番号	分析番号	器種・形状	断面	木取り	出土位置			長さ	幅	厚さ	高さ	備考	
						遺跡番号	層位	グリッド						
229	454	23	曲物 側板	スギ	横板: 板目 底板: 板目		H'	-2	G	1	119	123	38	和田No.120 側面に木打3ヶ 横板径: 116mm
230	446	19	曲物 側板	スギ	横板: 板目 底板: 板目		III	-2	F	23	129	124	34	和田No.117 側面に木打4ヶ 横板径: 111mm
231	445		曲物 側板	-	板目		III	-3	F	20	-	119	37	和田No.138 側面に木打4ヶ 横板径: 107mm
232	410		曲物 側板	-	板目		H'	-3	F	20.9	111	111	6	和田No.136 側面に木打3ヶ 横板径: 111mm
233	413		曲物 側板	-	板目		III	-2	G	1	107	108	7	和田No.116 側面に木打3ヶ 横板径: 108mm
234	402		曲物 側板	-	板目		H'	-2	F	24.9	163	161	8	側面に木打2ヶ 横(166mm)
235	401		曲物 側板	-	板目		H'	-2	F	8	158	60	8	側面に木打2ヶ 横(162mm)
236	414	4	人形	スギ	板目		H'	-3	F	29.9	128	34	6	和田No.135
237	426	12	狗	マツ属	芯持丸木	H	I	F	3	93	95	13		
238	437	16	雞	スギ	板目	III	-2	G	1	389	93	45	和田No.119	
239	450	20	下駄	スギ	板目	H	2	F	3	269	78	21	240と一对か	
240	449		下駄	-	板目	H	2	F	7	162	64	20	239と一对か	
241	418	T	羽子板?	スギ	板目	H	2	F	11	406	95	15		
-	50		自然木	トネリコ属 (根板)	-	円周	2	5		-	-	-		

前波南遺跡 銀貨觀察表

報告番号	標識番号	銭貨名	直径	厚さ	銘文年 (西暦)	断面	出土位置			外径幅	内径幅	内径幅	純重	備考	
							層位	グリッド	mm	mm	mm	mm	g		
242	325	開元通寶	-	唐	621	H	2	F	7	25.25	25.00	6.35	6.60	1.20	2.9
243	301	開元通寶	-	唐	621	H	-3	F	20	24.25	24.25	6.75	6.75	0.90	2.5 「齊天下」
244	323	太平通寶	-	北宋	976	H	-2	F	22	24.30	24.30	5.90	5.65	1.00	2.6
245	327	咸平元宝	-	北宋	998	I	1	G	2	22.99	21.80	5.35	5.50	0.70	1.7
246	310	天聖元宝	鑄薄	北宋	1023	H	1	F	21	24.70	24.90	7.50	7.55	0.95	2.5
247	304	天聖元宝	鑄薄	北宋	1023	H	1	F	9	23.95	23.90	7.95	7.40	0.95	2.1
248	322	景祐元宝	-	北宋	1034	H	-2	F	4	21.90	22.40	6.00	5.90	0.90	1.7
249	315	景祐元宝	-	北宋	1034	開葉	-3	G	23.50	23.55	7.20	6.80	0.80	2.1	
250	328	嘉祐通寶	鑄薄	北宋	1050	H	2	F	16	24.00	23.65	7.35	7.05	1.05	2.9
251	324	治平元宝	鑄薄	北宋	1064	H	4	F	2	22.30	22.60	6.40	6.10	1.00	1.6
252	306	熙寧元宝	鑄薄	北宋	1068	H	1	F	21	23.30	23.30	6.65	6.85	0.90	2.1
253	309	元祐通寶	行酒	北宋	1078	H	1	G	4	24.00	24.30	6.50	6.60	0.90	2.3 「至和元年」
254	303	元祐通寶	行酒	北宋	1086	H	-2	G	14	22.45	22.45	6.10	5.65	0.90	2.6
255	321	紹聖元宝	鑄薄	北宋	1094	H	3	F	16	23.40	23.40	5.90	6.25	1.00	2.4
256	331	紹聖元宝	鑄薄	北宋	1094	H	-3	F	10	24.40	24.40	6.30	6.35	1.25	4.1
257	316	聖宋元宝	鑄薄	北宋	1101	H	3	F	16	22.60	22.60	6.00	5.80	1.20	2.5
258	312	聖宋元宝	行酒	北宋	1101	H	2	F	9	22.30	23.35	6.70	6.70	1.30	2.6
259	326	大观通寶	-	北宋	1107	H	2	F	23	23.25	23.60	6.35	6.40	0.75	(1.2)
260	311	政和通寶	鑄薄	北宋	1111	H	4	F	22	24.45	24.40	6.25	6.25	1.00	2.6
261	330	崇寧通寶	-	南宋	1208	H	-3	F	10	23.70	23.70	6.20	6.20	1.20	3.1 「齊十二」
262	308	洪武通寶	-	明	1368	H	1	F	21	23.30	23.20	5.80	5.70	0.95	2.4 「洪武通寶」
263	302	洪武通寶	-	明	1368	H	-2	G	10	23.55	23.60	5.35	5.20	1.60	2.9 「惠惠」
264	314	不明	-	-	-	H	4	F	25	(22.65)	(11.25)	-	-	1.15	(1.0) 「道存半5/12 「口口元寶」」
265	312	平地	-	-	-	H	2	F	12	(8.60)	(11.40)	-	-	1.05	(0.4) 「道存半5/12 「口和口」」
266	329	寛永通寶	古吉本	江戸	1636	H	3	E	11	24.70	24.85	5.75	5.70	1.00	2.6
267	317	寛永通寶	古吉本	江戸	1636	I	1	F	21	24.80	24.65	5.39	5.50	1.10	3.5
268	307	寛永通寶	古吉本	江戸	1636	H	-1	F	9	24.50	24.40	6.00	6.00	0.90	2.6
269	318	寛永通寶	古吉本	江戸	1636	H	-2	F	7	24.05	24.10	5.35	5.40	1.10	3.2
270	319	寛永通寶	新吉本	江戸	1697	I	1	F	19	22.90	22.85	6.80	6.80	0.70	1.6
271	305	寛永通寶	新吉本	江戸	1697	H	-1	F	24	24.50	24.40	5.60	5.60	1.05	3.0
272	320	寛永通寶	新吉本	江戸	1697	H	3	G	10	23.20	23.20	6.45	6.45	0.90	2.0

伝極楽寺跡 遺構觀察表 挿立柱建物・礎石建物

SB1

開版番号	39・67	グリッド	6D・6E	軒行(m)	6.9	梁行(m)	2.2	床面積	15.2	時期	I期	構造	側柱	長轍指向	南北
柱穴番号	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	標高(m)	底面高(m)	深さ(m)	柱穴開削	距離(m)	傾き	N37°E(上斜)				
115	楕円	断段状	92	64	18.0	17.4	0.56	115-116	3.22	柱穴開削					
116	円	台形状	36	32	18.0	17.7	0.32	116-117	3.62	117-118	3.56				1.94
117	楕円	断段状	52	40	17.9	17.3	0.54	118-119	3.44						
118	楕円	断斗状	36	34	17.8	17.3	0.50	119-120	3.44						
119	楕円	U字状	34	32	17.7	17.4	0.35	115-120	2.02			出土遺物			
120	楕円	断斗状	92	76	17.9	17.5	0.42	116-119	2.38						-

SB2a

開版番号	33・67	グリッド	6D・6E	軒行(m)	6.0	梁行(m)	5.6	床面積	33.6	時期	I期	構造	側柱	長轍指向	南北
柱穴番号	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	標高(m)	底面高(m)	深さ(m)	柱穴開削	距離(m)	傾き	N37°E(上斜)				
103	円	台形状	30	28	17.4	17.2	0.24	103-104	2.20	柱穴開削					
104	円	台形状	36	32	17.5	17.1	0.30	104-105	1.96	127-122	2.76				
105	円	U字状	40	38	17.4	17.0	0.38	105-113	2.08	105-620	2.68				
113	楕円	台形状	34	30	17.4	17.3	0.07	126-127	1.50	620-621	2.86				
126	楕円	U字状	34	24	17.4	17.3	0.13	127-620	2.34	113-129	2.60				
127	円	U字状	24	22	17.4	16.9	0.50	620-129	2.02	129-124	3.12				
620	楕円	断斗状	20	18	17.4	17.2	0.10	121-122	1.56						
129	楕円	断斗状	26	20	17.3	17.2	0.12	122-621	2.22						
121	楕円	断段状	52	40	17.7	17.5	0.27	621-124	2.24						
122	楕円	台形状	60	48	17.6	17.4	0.19	103-126	2.62						
621	楕円	断斗状	40	36	17.5	17.1	0.35	126-121	2.82			出土遺物			
124	円	断斗状	32	30	17.6	17.2	0.36	104-127	2.78						-

SB2b

開版番号	33・67	グリッド	6D・7D	軒行(m)	6.8	梁行(m)	2.4	床面積	16.3	時期	I期	構造	側柱	長轍指向	東西
柱穴番号	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	標高(m)	底面高(m)	深さ(m)	柱穴開削	距離(m)	傾き	N38°E(上斜)				
274	-	台形状	-	22	17.4	17.3	0.14	274-623	1.58	柱穴開削					
622	楕円	U字状	28	24	17.3	17.0	0.30	622-623	2.54	623-626	2.36				
623	円	U字状	22	20	17.5	17.1	0.45	623-271	1.74	271-276	2.50				
271	楕円	U字状	40	32	17.6	17.1	0.52	271-624	0.98	624-625	2.54				
624	円	U字状	24	22	17.7	17.5	0.23	114-627	1.80						
114	円	U字状	24	24	17.5	17.1	0.37	627-125	0.58						
627	楕円	U字状	34	26	17.4	17.1	0.33	125-626	1.98						
125	楕円	弧状	38	34	17.4	17.2	0.16	626-276	1.84						
626	楕円	台形状	44	36	17.5	17.3	0.11	676-625	0.68						
276	円	断斗状	32	30	17.6	17.3	0.29	274-114	2.38			出土遺物			
625	円	台形状	24	24	17.6	17.5	0.10	622-627	2.38						-

SB3

開版番号	34・68	グリッド	6D・7D	軒行(m)	5.0	梁行(m)	2.3	床面積	11.5	時期	I期	構造	側柱	長轍指向	東西
柱穴番号	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	標高(m)	底面高(m)	底面高(m)	柱穴開削	距離(m)	傾き	N19°W(下斜)				
134	楕円	台形状	46	40	17.4	17.1	0.22	134-136	2.96	柱穴開削					
136	楕円	断斗状	40	34	17.4	17.0	0.38	136-137	1.86	137-696	2.20				
137	円	U字状	34	32	17.5	17.3	0.21	696-131	2.04						
696	楕円	U字状	32	28	17.7	17.4	0.26	131-132	2.02						
131	円	U字状	50	48	17.6	17.3	0.32	132-133	1.02						
132	円	U字状	28	26	17.5	17.1	0.37	134-133	2.46			出土遺物			
133	円	弧状	28	26	17.5	17.3	0.17	136-131	2.24						-

SB4

開版番号	34・68	グリッド	6D	軒行(m)	6.6	梁行(m)	4.2	床面積	27.7	時期	I期	構造	側柱	長轍指向	南北
柱穴番号	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	標高(m)	底面高(m)	底面高(m)	柱穴開削	距離(m)	傾き	N38°E(上斜)				
633	楕円	台形状	40	26	17.4	17.3	0.16	633-111	2.12	柱穴開削					
111	円	断斗状	36	32	17.4	17.2	0.27	111-638	3.42	1423-634	1.98				
638	楕円	台形状	40	28	17.4	17.2	0.27	638-133	1.04	124-635	1.70				
133	円	U字状	28	26	17.5	17.3	0.18	141-142	1.82	638-636	4.24				
141	楕円	台形状	40	40	17.6	17.4	0.25	142-124	1.64	133-504	2.16				
142	楕円	U字状	-	26	17.7	17.5	0.20	124-504	2.66	504-637	2.10				
124	円	断段状	34	32	17.6	17.2	0.36	138-634	2.08						
504	楕円	台形状	36	32	17.6	17.4	0.23	634-635	1.56						
138	楕円	弧状	40	36	17.8	17.3	0.46	635-636	1.70						
634	楕円	U字状	40	34	17.7	17.3	0.39	636-637	1.28						
635	円	U字状	20	20	17.7	17.3	0.37	633-141	2.38						
636	楕円	U字状	46	42	17.8	17.3	0.55	141-138	1.92			出土遺物			
637	楕円	U字状	34	30	17.7	17.4	0.29	111-142	2.04			F504 (12)			

観察表

SB5

開版番号	36	グリッド	6D - 7D	航行 (m)	6.8	航行 (m)	4.2	床面積	26.5	時期	I 期	構造	柱柱	長幅方向	東西
柱穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	離高 (m)	底面高 (m)	深さ (m)	柱穴開幅	距離 (m)	頃き	N32° E (1群)				
146	楕円	弧状	44	40	17.4	17.2	0.17	146-144	2.96	柱穴開幅		距離 (m)			
144	円	弧状	34	32	17.5	17.3	0.17	144-631	2.76	144-109					232
631	楕円	断段状	42	36	17.8	17.3	0.41	628-109	3.38	109-108					184
628	楕円	台形状	34	32	17.4	17.2	0.24	109-630	3.12	631-630					240
109	楕円	台形状	38	20	17.4	17.2	0.25	630-632	0.74	630-629					192
630	楕円	U字状	48	24	17.6	17.2	0.34	145-108	2.96	631-632					240
632	楕円	台形状	44	40	17.6	17.3	0.27	108-629	2.94	632-629					198
145	楕円	弧状	40	36	17.4	17.3	0.07	146-628	2.36						
108	楕円	U字状	-	-	17.5	17.3	0.22	628-145	1.86						出土遺物
629	円	U字状	20	20	17.7	17.2	0.50	146-145	4.06						-

SB6

開版番号	29	グリッド	8E	航行 (m)	5.0	航行 (m)	1.9	床面積	9.5	時期	I 期	構造	側柱	長幅方向	南北
柱穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	離高 (m)	底面高 (m)	深さ (m)	柱穴開幅	距離 (m)	頃き	N17° E (1群)				
218	楕円	半円状	40	38	14.7	14.5	0.18	218-217	1.52	柱穴開幅		距離 (m)			
217	楕円	弧状	44	40	14.7	14.6	0.09	217-216	1.70	216-213					212
216	楕円	U字状	34	30	14.7	14.5	0.16	216-215	1.66	215-214					216
215	楕円	台形状	46	38	14.8	14.7	0.15	211-212	1.74						
211	楕円	弧状	58	40	14.7	14.6	0.09	212-213	2.00						
212	楕円	台形状	68	44	14.8	14.4	0.29	213-214	1.34						
213	楕円	断段状	60	50	14.8	14.4	0.43	218-211	1.74						出土遺物
214	円	弧状	36	34	14.7	14.6	0.13	217-212	2.02						P211 (1)

SB7

開版番号	29	グリッド	8E	航行 (m)	3.6	航行 (m)	3.6	床面積	13.0	時期	I 期	構造	側柱	長幅方向	南北
柱穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	離高 (m)	底面高 (m)	深さ (m)	柱穴開幅	距離 (m)	頃き	N35° W (3群)				
230	楕円	U字状	36	32	14.7	14.4	0.31	230-617	1.18	柱穴開幅		距離 (m)			
617	楕円	U字状	40	32	14.8	14.5	0.31	617-618	1.68	230-613					0.94
618	円	弧状	32	32	14.8	14.6	0.12	618-619	0.72	613-614					1.20
619	円	弧状	32	32	14.8	14.7	0.08	216-221	0.94	614-615					0.78
216	楕円	台形状	34	30	14.7	14.5	0.16	221-214	1.80	615-217					0.86
221	円	台形状	32	32	14.8	14.6	0.10	214-220	0.76	217-616					1.02
214	円	台形状	36	34	14.8	14.6	0.13	222-223	1.02						
220	円	弧状	44	44	14.8	14.7	0.10	223-224	1.80						
222	楕円	漏斗状	44	40	14.8	14.6	0.24	224-219	0.88						
223	楕円	漏斗状	44	40	14.8	14.6	0.23	230-216	1.46						
224	円	台形状	50	48	14.8	14.5	0.29	216-222	2.12						
219	楕円	U字状	54	48	14.7	14.5	0.21	617-221	1.54						
613	円	台形状	30	28	14.6	14.5	0.07	221-223	2.12						
614	円	台形状	30	22	14.7	14.6	0.14	618-214	1.42						
615	楕円	台形状	28	22	14.7	14.6	0.08	214-224	1.86						
217	楕円	台形状	44	40	14.7	14.6	0.09	619-220	1.68						出土遺物
616	円	台形状	38	38	14.7	14.6	0.13	220-219	1.78						-

SB8

開版番号	29	グリッド	8E	航行 (m)	5.4	航行 (m)	4.3	床面積	23.2	時期	I 期	構造	側柱	長幅方向	南北
柱穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	離高 (m)	底面高 (m)	深さ (m)	柱穴開幅	距離 (m)	頃き	N25° E (1群)				
610	円	台形状	32	30	14.6	14.4	0.17	610-206	1.24	柱穴開幅		距離 (m)			
206	楕円	弧状	48	44	14.5	14.3	0.19	206-204	1.96	229-226					1.86
204	円	弧状	28	28	14.5	14.3	0.13	204-205	2.10	204-228					2.00
205	円	台形状	32	32	14.4	14.2	0.28	611-229	1.42	228-227					2.26
611	楕円	台形状	34	30	14.6	14.5	0.08	229-228	1.98	205-252					1.98
229	楕円	半円状	34	28	14.6	14.5	0.14	228-252	2.12	252-612					2.46
228	楕円	台形状	56	28	14.5	14.4	0.11	261-226	1.30						
252	円	U字状	34	32	14.5	14.3	0.25	226-227	1.98						
261	楕円	台形状	48	40	14.8	14.6	0.17	227-612	2.32						
226	円	半円状	36	34	14.7	14.6	0.15	610-611	2.06						
227	円	漏斗状	48	46	14.6	14.2	0.36	611-261	1.90						出土遺物
612	楕円	台形状	52	40	14.7	14.6	0.16	206-229	2.28						-

概観表

SB9

閑版番号	29	グリッド	SE	断行(m)	4.3	渠行(m)	2.1	床面積	9.0	時期	I期	構造	柱柱	長轍方向	南北
柱穴番号	半円形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	渠高(cm)	渠底高(cm)	深さ(cm)	柱穴開闢	距離(m)	傾き	N30° E (1群)				
608	円	U字状	40	38	14.7	14.5	0.14	608-234	2.26	柱穴開闢		距離(m)			
234	円	扇形状	28	26	14.7	14.4	0.27	234-233	2.06	233-232					2.04
233	椭円	台形状	72	42	14.6	14.4	0.28	609-231	2.22						
609	椭円	扇形状	56	44	14.8	14.5	0.29	231-232	2.08						
231	椭円	台形状	40	32	14.8	14.5	0.25	608-609	2.12						出土物
232	椭円	U字状	40	36	14.7	14.2	0.52	234-231	2.12						P233 (3)

SB10

閑版番号	30	グリッド	SE - 9E	断行(m)	5.2	渠行(m)	2.7	床面積	14.0	時期	I期	構造	柱柱	長轍方向	南北
柱穴番号	半円形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	渠高(cm)	渠底高(cm)	深さ(cm)	柱穴開闢	距離(m)	傾き	N30° E (1群)				
262	円	半円状	56	54	14.6	14.4	0.19	262-263	1.32	柱穴開闢		距離(m)			
263	椭円	台形状	24	22	14.6	14.5	0.13	263-264	2.12	264-260					2.72
264	椭円	扇形状	28	26	14.5	14.3	0.22	264-606	1.58	606-607					2.66
606	椭円	台形状	64	48	14.5	14.3	0.17	261-265	1.56						
261	椭円	台形状	46	42	14.8	14.6	0.17	265-260	2.04						
265	円	扇形状	38	36	14.7	14.5	0.26	260-607	1.68						
260	円	扇形状	42	40	14.6	14.3	0.30	262-261	2.54						出土物
607	円	台形状	32	32	14.7	14.6	0.10	263-265	2.72						-

SB11

閑版番号	30	グリッド	SE - 9E	断行(m)	3.9	渠行(m)	3.3	床面積	12.1	時期	I期	構造	柱柱	長轍方向	南北
柱穴番号	半円形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	渠高(cm)	渠底高(cm)	深さ(cm)	柱穴開闢	距離(m)	傾き	N13° W (0群)				
250	円	弧状	46	44	14.5	14.3	0.18	250-253	2.66	柱穴開闢		距離(m)			
253	椭円	弧状	56	48	14.5	14.3	0.13	253-202	2.32	260-227					0.50
202	椭円	弧状	48	40	14.5	14.1	0.38	202-206	2.28						
206	円	弧状	46	44	14.5	14.3	0.19	206-209	2.12						
209	円	弧状	22	20	14.6	14.5	0.13	209-257	1.72						
257	円	弧状	38	36	14.6	14.5	0.13	257-227	2.26						
227	円	U字状	48	46	14.6	14.3	0.39	251-266	1.76						
203	円	半円状	28	26	14.5	14.3	0.15	266-203	2.42						
266	椭円	弧状	62	28	14.4	14.3	0.15	203-208	1.54						
251	円	半円状	44	44	14.5	14.2	0.27	208-207	0.36						
208	椭円	U字状	34	30	14.5	14.2	0.26	207-259	1.28						
207	椭円	弧状	46	36	14.5	14.3	0.24	259-258	1.72						
259	円	扇形状	34	32	14.6	14.4	0.19	258-260	1.76						
258	椭円	台形状	60	40	14.6	14.2	0.40	250-251	0.76						
260	円	U字状	42	40	14.6	14.3	0.30	251-254	1.12						
254	椭円	台形状	62	40	14.5	14.3	0.25	254-255	0.46						出土物
255	椭円	半円状	50	44	14.5	14.4	0.16	255-260	1.38						-

SB12

閑版番号	30	グリッド	SE - 9E	断行(m)	4.1	渠行(m)	2.6	床面積	10.7	時期	I期	構造	柱柱	長轍方向	南北
柱穴番号	半円形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	渠高(cm)	渠底高(cm)	深さ(cm)	柱穴開闢	距離(m)	傾き	N29° E (1群)				
601	椭円	台形状	36	32	14.6	14.5	0.17	601-603	1.94						
603	椭円	U字状	36	34	14.6	14.4	0.22	602-604	1.96						
602	円	台形状	44	36	14.8	14.7	0.15	604-605	2.12						
604	円	台形状	38	36	14.7	14.5	0.15	601-602	2.46						出土物
605	椭円	弧状	32	24	14.6	14.5	0.09	603-604	2.74						-

SB13

閑版番号	35	グリッド	6D	断行(m)	7.6	渠行(m)	3.7	床面積	28.1	時期	I期	構造	柱柱	長轍方向	南北
柱穴番号	半円形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	渠高(cm)	渠底高(cm)	深さ(cm)	柱穴開闢	距離(m)	傾き	N34° E (1群)				
639	椭円	台形状	60	36	17.7	17.5	0.24	639-641	0.48	柱穴開闢		距離(m)			
641	椭円	U字状	48	36	17.7	17.2	0.42	641-643	1.50	643-631					1.40
643	円	U字状	18	16	17.6	17.2	0.38	643-646	1.64	631-645					2.08
646	円	U字状	34	32	17.5	17.2	0.30	646-649	1.68	646-647					1.72
649	円	U字状	30	28	17.6	17.1	0.54	649-652	1.12	647-648					2.06
652	椭円	U字状	32	28	17.5	17.2	0.33	652-655	1.64	649-650					1.90
655	椭円	U字状	24	20	17.6	17.4	0.16	631-647	1.36	650-651					2.08
631	椭円	U字状	42	36	17.8	17.4	0.41	647-650	1.82	652-629					1.76
647	椭円	U字状	30	28	17.5	17.3	0.22	650-629	1.20	629-654					2.06
650	円	U字状	22	20	17.8	17.6	0.32	629-656	1.68	655-656					1.64
629	円	U字状	20	18	17.7	17.2	0.50	640-642	0.36	656-657					2.16
656	椭円	U字状	36	30	17.7	17.3	0.32	642-645	1.52						
640	円	U字状	32	30	17.9	17.4	0.48	645-648	1.60						

観察表

642	円	U字状	24	22	17.9	17.4	0.48	648-651	1.72						
645	円	U字状	28	26	17.8	17.5	0.24	651-654	1.26						
648	楕円	U字状	30	20	17.8	17.5	0.27	654-657	1.54						
651	円	U字状	30	26	17.8	17.6	0.25	639-640	3.68						
654	楕円	U字状	40	20	17.7	17.6	0.11	641-642	3.78	出土遺物					
657	楕円	U字状	22	18	17.5	17.4	0.16			-					

SB14

断面番号	36	グリッド	北-南-西	断面 (m)	11.4	稟行 (m)	6.0	床面積	68.4	時期	I期	構造	柱社	長廻り方向	東西
柱穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	壁延長 (m)	底面高 (m)	底面長 (m)	深さ (m)	柱穴開拓	距離 (m)	傾き	N5° W (Ⅲ群)			
696	楕円	U字状	32	24	17.5	17.3	0.22	696-681	1.90	柱穴開拓	距離 (m)				
681	円	弧状	36	32	17.5	17.5	0.04	681-691	4.26	684-685					1.84
691	楕円	U字状	72	52	17.6	17.2	0.29	682-686	2.16	686-687					2.26
682	円	台形状	32	32	17.4	17.3	0.14	686-692	2.20	687-637					2.44
686	円	U字状	32	32	17.5	17.2	0.35	638-687	3.76	637-689					2.34
692	楕円	階段状	60	56	17.5	17.1	0.44	687-693	2.18	689-690					2.28
638	楕円	台形状	40	24	17.4	17.2	0.28	131-271	1.48	691-692					2.06
687	楕円	U字状	30	24	17.6	17.2	0.90	271-637	2.20	692-693					2.42
693	楕円	U字状	84	56	17.6	17.1	0.50	637-694	2.22	693-694					2.38
131	円	U字状	28	28	17.6	17.3	0.33	679-684	1.42	694-672					2.26
271	楕円	階段状	42	28	17.6	17.1	0.52	689-672	2.18	672-511					2.26
637	楕円	U字状	34	28	17.7	17.4	0.29	680-685	1.50						
694	楕円	U字状	40	36	17.7	17.3	0.41	685-690	2.30						
679	楕円	U字状	22	18	17.6	17.4	0.17	690-511	1.86						
684	円	U字状	26	26	17.7	17.5	0.20	696-638	4.22						
689	楕円	弧状	36	34	17.6	17.4	0.14	638-131	2.34						
672	楕円	階段状	68	46	17.8	17.3	0.57	131-679	2.96						
680	円	U字状	24	22	17.8	17.5	0.36	679-680	1.78						
685	楕円	台形状	34	24	17.9	17.7	0.17	681-682	2.02						
690	円	U字状	22	20	17.9	17.6	0.32	682-271	4.62	出土遺物					
511	円	U字状	34	34	17.9	17.4	0.47	271-684	2.88	P511 (5)					

SB15

断面番号	37	グリッド	北-南-西	断面 (m)	12.4	稟行 (m)	10.1	床面積	118.6	時期	I期	構造	柱社	長廻り方向	東西
柱穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	壁延長 (m)	底面高 (m)	底面長 (m)	深さ (m)	柱穴開拓	距離 (m)	傾き	N13° W (Ⅲ群)			
659	楕円	階段状	34	28	17.5	17.4	0.16	659-667	4.96	柱穴開拓	距離 (m)				
667	楕円	台形状	48	36	17.6	17.4	0.17	667-673	2.60	662-130					2.48
673	楕円	台形状	68	54	17.6	17.3	0.29	658-660	2.58	130-663					2.48
658	楕円	U字状	64	40	17.5	17.1	0.35	660-664	2.42	664-665					2.48
660	円	U字状	30	30	17.4	17.2	0.29	664-668	2.60	665-666					2.52
664	円	U字状	32	30	17.6	17.4	0.15	668-670	1.10	666-403					2.48
668	楕円	U字状	48	42	17.5	17.3	0.21	670-674	1.40	403-521					2.10
670	楕円	階段状	58	40	17.5	17.2	0.28	145-661	2.50	667-668					2.56
674	円	台形状	42	42	17.6	17.3	0.21	661-665	2.56	668-669					2.48
145	楕円	弧状	40	36	17.4	17.3	0.07	665-669	2.40	669-513					2.70
661	楕円	U字状	44	36	17.4	17.1	0.36	669-671	1.28	513-519					2.24
665	楕円	U字状	48	42	17.5	17.2	0.34	671-675	1.38	519-512					2.40
669	円	U字状	26	26	17.6	17.2	0.46	662-666	2.54	670-671					2.52
671	楕円	階段状	60	56	17.6	17.2	0.47	666-513	2.56	671-514					2.60
675	円	U字状	40	36	17.7	17.3	0.38	513-514	1.20	514-672					2.46
662	円	U字状	40	36	17.6	17.1	0.53	514-676	1.32	672-511					2.28
666	円	台形状	64	62	17.6	17.2	0.39	137-130	2.48	673-674					2.50
513	楕円	U字状	42	32	17.7	17.3	0.40	130-403	2.52	674-675					2.66
514	楕円	U字状	34	30	17.7	17.3	0.39	403-519	2.44	675-676					2.38
676	楕円	U字状	94	32	17.7	17.3	0.37	519-672	1.50	676-677					2.46
137	円	U字状	36	32	17.5	17.3	0.22	672-677	1.16	677-509					2.42
130	円	U字状	40	40	17.6	17.1	0.48	122-663	2.60						
403	楕円	U字状	72	60	17.8	17.3	0.49	663-521	2.12						
519	楕円	U字状	40	36	17.6	17.2	0.44	521-512	2.42						
672	楕円	階段状	68	48	17.8	17.3	0.57	512-511	1.60						
677	楕円	偏斗状	60	52	17.9	17.4	0.53	511-509	1.06						
122	円	台形状	44	40	17.6	17.4	0.18	658-145	2.46	出土遺物					
663	円	U字状	48	46	17.6	17.2	0.40	145-137	5.02						
521	楕円	U字状	64	28	17.8	17.3	0.48	137-122	2.52						
512	楕円	U字状	64	44	17.9	17.2	0.70	659-660	2.54	P509 (珠環)・P512 (土師器)					
511	円	U字状	34	34	17.9	17.4	0.47	660-661	2.54	P514 (土師器)・P519 (珠環)					
509	楕円	U字状	38	32	17.9	17.3	0.58	661-662	2.50						

礎石建物

国版番号 礎石番号	30 平面形	グリッド 断面形	SE・9E 長径(cm)	軒行(m) 幅員(cm)	天端高(m) 底面高(m)	梁行(m) 厚さ(m)	床面積 礎石面積	時期 距離(m)	I期 傾き	II期 N22°W(Ⅱ群)	長軸方向 -
1	-	-	-	58	32	14.6	14.4	0.28	1-2	1.92	-
2	-	-	-	84	52	14.7	14.4	0.28	2-3	1.90	-
3	-	-	-	48	42	14.8	14.5	0.22	3-4	1.74	-
4	-	-	-	62	36	14.8	14.7	0.18	4-5	1.90	-
(5)	-	-	-	-	-	-	-	-	5-6	1.78	出土遺物
6	-	-	-	50	30	14.8	14.6	0.20	-	-	-

観察表

伝授業 寺跡 遺物觀察表 (胎生石=石英、白=白色粒子、黒=黒色粒子、長=長石、青=青母、青=海綿骨針、謎=謎)

番号	分類	種別	大きさ	幅員	口径	高さ	底径	色調		形状(法)・形態	製作年期	使用	備考	
								外面	内面					
1	土壤器	器	SB (P) 211	6 E	17	-	76 mm	24 mm	44 mm	底盤 1.5VH7/6 5VH8/3	船型 10YH4/3	石 謎	ロクロ成形	
2	土壤器	器	P 501	6 D	2	-	88 mm	-	-	に点状 底盤 1.5VH7/2 10YH7/2	底白 10YH8/1	石 長 チヤ	手づくね成形	
3	土壤器	器	SB (P) 233	8 E	10	-	116 mm	-	-	に点状 底盤 1.5VH7/3 10YH8/1	底白 10YH4/3	石 長 チヤ	手づくね成形	
4	土壤器	器	SB (P) 521	0 D	7	-	112 mm	29 mm	62 mm	底盤 1.5VH7/2 10YH8/2	底盤 10YH8/3	石 長 チヤ	手づくね成形	13C末~14C初
5	陶器	片口瓶	SB (P) 511	6 C	22	-	240 mm	-	-	底白 NS/0	底白 9V/0	石 背 謎		古國Ⅱ期 (12C後)
6	陶器	器	P (陶)	503	6 D	3	-	-	-	底盤 1.5VH7/1 10YH8/1	底盤 10YH8/1	石 背 謎		
7	陶器	器	SB (P) 512	15 G	C	22	-	-	-	底白 NS/0	底白 9V/0	石 背 謎		
8	陶器	器	P (陶)	278	6 D	3	-	-	-	底白 10YH6/1	底白 10YH8/1	石 背 謎		
9	陶器	器	P (陶)	524	6 C	22	-	244 mm	-	底白 NS/0	底白 9V/0	石 長 背		古國Ⅰ期 (12C後)
10	陶器	器	P (陶)	501	6 D	2	-	224 mm	-	底白 NS/0	底白 9V/0	石 長 背		古國Ⅰ期 (12C後)
11	土壤器	器	P (古代)	506	6 D	18	-	-	-	底 SVH6/6	底盤 1.5VH6/1	石 長 背	無熱	難定(口幅15.3cm)
12	須恵器	井	SN (P) 504	6 D	10	-	130 mm	-	-	底白 7.5VH7/1 2.5VH6/1	底白 2.5VH5/1	石 謎		春日V~VI期 (9C前~10C前)
13	陶器	底	SX 510	5 G	14-22	3	-	-	140 mm	底白 NS/0	底白 N/0	石 長 背		
14	陶器	器	SX (陶)	510	5 G	20	1	-	-	底白 NS/0	底白 9V/0	石 長 背		
15	土壤器	器	SX (古代)	516	6 C	17	1	-	68 mm	底 SVH6/6	底盤 2.5VH4/1	石 チヤ 謎	梅台口法 (内身)ヘラナ子	
16	陶器	器	SX (陶)	516	6 C	12	1	-	132 mm	底白 2.5V7/1	底白 NS/0	石 長 背		
17	白磁	器	(P)	1	E	1	11	148 mm	-	底オーバー 7.5VH3/1	底オーバー 5VH6/2	白 白 白		
18	白磁	器	(P)	9	E	4	11	-	-	底 2.5VH2/2	底 2.5VH2/2	白 白 白	口 豎 豎	山本C期 (11C後~12C前)
19	青磁	器	(P)	9	E	18	11	164 mm	-	底オーバー 7.5VH2/2	底オーバー 7.5VH2/2	白 白 白	口 豎 豎	
20	陶器	井	(P)	9	E	24	11	-	-	底白 2.5VH7/1	底白 2.5VH7/1	石 白 謎		
21	陶器	片口瓶	(P)	9	E	17	11	358 mm	-	底 7.5VH6/1	底 7.5VH6/1	石 長 背		古國III~VI1期
22	陶器	片口瓶	浜	1	G	25	11	-	136 mm	底白 2.5V7/1	底白 2.5V8/1	石 白 白 白	石 長 背	
23	白磁	瓶		6	D	3	V	168 mm	-	底白 7.5VH8/1	底白 7.5VH8/1	白 白 白	口 豎 豎	
24	白磁	瓶	(P)	8	E	11	I	160 mm	-	底白 5V7/2	底白 5V7/2	白 白 白	口 豎 豎	山本C期 (11C後~12C前)
25	白磁	瓶	(P)	6	G	3	Bd	132 mm	-	底白 2.5GV8/1	底白 2.5GV8/1	白 白 白	口 豎 豎	山本C期 (11C後~12C前)
26	白磁	瓶		6	E	8	I	-	-	底白 5V7/1	底白 5V7/1	白 白 白	口 豎 豎	
27	白磁	瓶		6	G	1	Bd	-	60 mm	底白 2.5VH2/2	底白 10YH7/1	白 白 白	口 豎 豎	ナシ (内)新文支
28	白磁	瓶		5	D	23	V	84 mm	-	底白 5V7/2	底白 5V7/2	白 白 白	口 豎 豎	
29	白磁	不明		6	D	9	V	-	-	底白 5V8/2	底白 5V8/2	白 白 白	口 豎 豎	
30	青磁	瓶		7	D	22	I	140 mm	-	底オーバー 7.5VH3/3	底オーバー 7.5VH3/3	白 白 白	口 豎 豎	(内)新文支
31	青磁	器	器	6	G	1	IIc	162 mm	-	底オーバー 2.5GV7/1	底オーバー 2.5GV7/2	白 白 白	口 豎 豎	
32	青磁	器	無文	5	D	22	V	160 mm	-	底オーバー 2.5GV7/1	底オーバー 2.5GV7/1	白 白 白	口 豎 豎	
33	青磁	瓶		6	D	13	V	-	48 mm	底オーバー 7.5VH2/2	底白 7.5VH2/2	白 白 白	口 豎 豎	
34	圓筒形 壺	壺	無文	6	D	8	V	-	68 mm	オーバー 7.5VH6/3	底白 7.5VH7/3	石 白 白	口 豎 豎	(男)灰胎
35	土壤器	壺	壺	7	D	22	V	-	62 mm	壺 SVH6/6	壺 7.5VH6/6	石 長 背	ロクロ成形 (底)回転曲面	12C
36	土壤器	壺		8	F	1	I	78 mm	40 mm	底白 2.5V7/2	底白 2.5V6/2	石 チヤ	ロクロ成形 (底)回転曲面	12C
37	土壤器	壺		6	G	1	Bd	78 mm	44 mm	底白 1.5VH7/1	底白 1.5VH7/1	石 長 背	ロクロ成形 (底)回転曲面	12C
38	土壤器	壺		6	D	20	V	94 mm	61 mm	底白 7.5VH7/4	底白 7.5VH7/4	石 長 チヤ	手づくね成形 ナデ+微削り直	13C
39	土壤器	壺		5	G	9	Bd	146 mm	98 mm	底白 7.5VH7/6	底白 7.5VH7/6	石 長 チヤ	手づくね成形	14CⅣ~V半期 (1170~80年間)
40	陶器	片口瓶		6	D	24	I	236 mm	-	底 NS/5/1	底 NS/5/1	石 長 背		古國Ⅱ期 (1170~80年間)

番号	企画	種別	種類	基準	通規		グリップ	幅 mm	厚さ mm	口幅 mm	底深 mm	色調			車(1脚) 重量 7kg(空車)	製作年期	使用 年期	備考			
					大	小						外面	内面	底上							
41	珠鋼鏡	片口跡			6	D 4	V	276	-	-	-	黒底	黒底	石	共	骨	古國Ⅲ~中期 (19C末)				
42	珠鋼鏡	片口跡			6	D 9	Bb 1	330	-	-	-	黒底	2.5Y3/1	2.5Y3/1	石	共	骨	古國Ⅲ期 (13世紀前半)			
43	珠鋼鏡	片口跡			5	D 10	V	276	-	-	-	黒底	N4/0	N4/0	10YR7/1	石	共	骨	古國Ⅲ期 (13世紀前半)		
44	珠鋼鏡	片口跡			6	D 10	V	276	-	-	-	黒底	N3/1	7.5Y5/1	5Y6/1	石	共	骨	古國Ⅲ期 (13世紀前半)		
45	珠鋼鏡	片口跡			5	E 11	Bb 1	184	-	-	-	黒底	2.5Y3/1	2.5Y3/1	2.5Y6/2	石	共	骨	古國Ⅲ~中期		
46	珠鋼鏡	鏡			6	C 17	V	252	-	-	-	黒底	N6/0	N7/0	10YR7/1	石	共	骨	古國Ⅲ期		
47	珠鋼鏡	耳付鏡			5	C 15	V	-	-	-	-	黒底	N6/0	N8/0	2.5Y6/1	石	共	骨	古國Ⅲ~中期		
48	珠鋼鏡	鏡			8	D 1	I	-	-	-	-	黒底	2.5Y3/1	2.5Y7/1	2.5Y7/2	G	共	骨	(PA) 大ス	古國Ⅲ~中期	
49	珠鋼鏡	鏡			8	D 14	I	-	-	94	-	黒底	5Y6/1	10YR7/1	10YR8/1	G	共	骨	(PA) 波状文	古國Ⅲ~中期	
50	珠鋼鏡	(複数)			5	F 16	I	-	-	-	-	黒底	2.5Y3/1	2.5Y7/1	10YR7/1	G	共	骨	タタキ成形	古國Ⅲ~中期	
51	灰鏡	圓鏡(直縫)	SD	S	1	E 1	I	474	125	426	10YR8/4	黒底	5Y6/1	5Y6/1	10YR7/1	石	共	骨	(PA) 安那3系・前文	14C末~16C	
52	珠鋼鏡	片口跡	SD	S	1	E 2	I	-	-	-	-	黒底	5Y7/1	5Y8/1	5Y8/1	石	共	骨	(銘印) 9条~単位		
53	石器	刮削器	SD	S	-	-	-	-	-	-	-	白	白	白	白	白	白	白	白		
54	瓦器	瓶	SK	4	1	E 3	5	282	-	-	-	黒底	SY5/1	2.5Y3/1	2.5Y3/1	石	白	白	(銘) 実業2系		
55	酒口蓋	平鏡			9	E 6	III	160	71	56	オリーブ黄 SY6/4	オリーブ黄 SY6/4	10YR7/1	石	白	G	共	(銘) 回転柄切り +銘印付高台	古國Ⅲ~中期(後期) (14世紀中葉)~後期		
56	首花	盤			5	G 16	I	144	-	-	-	明暦白	10G7/1	10G7/1	2.5Y6/1	ナシ	白	白	小鉢B3系(直彌) 15世紀~16世紀		
57	首輪	桔花盤			9	E 24	III	162	-	-	-	オリーブ黄 10V6/2	オリーブ黄 10V6/2	10V6/2	石	白	白	+中組	1470年代~16C 後		
58	土器器	盤			1	D 21	III	166	-	-	-	白	白	白	白	白	白	白	手づく成形	(PA) 大ス	
59	土器器	盤			9	E 2	III	94	20	65	10YR5/1	10YR5/1	10YR5/1	石	白	白	白	ロクサ成形	(PA) 大ス		
60	土器器	盤			8	E 12	III	98	17	76	10YR7/4	10YR7/4	10YR7/4	石	白	白	白	ロクサ成形	(PA) 大ス		
61	土器器	盤			8	E 17	III	96	19	72	10YR7/6	10YR7/6	10YR7/6	石	白	白	白	ロクサ成形	(PA) 大ス		
62	珠鋼鏡	片口跡			5	E 8	I	308	-	-	-	黒底	7.5Y6/1	10YR5/1	2.5Y7/2	石	共	骨	(銘印) 7条~単位以上	古國Ⅲ期 (14世紀)	
63	珠鋼鏡	片口跡			1	F 3	III	246	-	-	-	黒底	SY5/1	SY5/1	7.5Y6/1	石	共	骨	(銘印) 7条~単位以上	古國Ⅲ期 (14世紀)	
64	珠鋼鏡	片口跡			1	D 21	III	334	-	-	-	黒底	2.5Y6/1	2.5Y7/1	5Y6/1	G	共	骨	(銘印) 7条~単位以上		
65	珠鋼鏡	片口跡			10	E 25	III	-	-	104	黒底	10YR7/6	10YR7/6	2.5Y6/1	石	共	骨	(銘印) 8条~単位以上 (銘) 静止~手切り	(内) 大ス		
66	珠鋼鏡	片口跡			1	E 12	III	-	-	188	黒底	2.5Y7/1	10YR7/4	10YR7/4	石	共	骨	(銘印) 9条~単位			
67	珠鋼鏡	片口跡			1	E 16	III	-	-	-	-	黒底	SY6/1	SY6/1	SY6/1	G	共	骨	(銘印) 8条~単位以上		
68	珠鋼鏡	片口跡			1	E 16	III	-	-	-	-	黒底	SY5/1	SY5/1	SY5/1	石	共	骨	(銘印) 8条~単位以上		
69	珠鋼鏡	(複数)			6	E 12	III	506	-	-	-	黒底	2.5Y5/1	2.5Y5/1	2.5Y5/1	石	共	骨	タタキ成形	六朝至隋 (1250~1300年)	
70	越前鏡	鏡			6	C 20	Bb 3	356	-	-	-	にぶく黒	10YR7/1	2.5Y7/2	SY6/1	石	共	骨	(銘印) 4条~単位以上		
71	越前鏡	鏡			8	D 23	I	274	-	-	-	にぶく黒	7.5Y7/1	10YR7/2	10YR7/2	石	共	骨	(銘印) 8条~単位以上		
72	肥前奈良鏡	丸鏡	GL	HT	8	E 21	上巻	108	-	-	-	白	白	10YR8/2	10YR8/2	10YR8/2	白	共	骨	(内) 骨馴	大通三期 (1610~50年代)
73	肥前奈良鏡	鏡	GL	ATr	8	F 16	上巻	-	-	40	白	10YR7/2	10YR7/2	10YR7/2	白	共	骨	12.5世紀~16世紀			
74	肥前奈良鏡	鏡	GL	ATr	8	F 11	上巻	252	-	-	-	にぶく黒	10YR8/3	2.5Y7/1	2.5Y7/1	白	共	骨	(内) 骨馴	No.12	
75	白磁	(内)	CTr	B	E 16	上巻	160	-	-	-	-	白	7.5Y7/1	7.5Y7/1	SY6/1	白	共	骨	(内) 骨馴	No.53	
76	白磁	瓶	ATr	T	F 14	上巻	118	-	-	-	-	白	2.5Y7/2	2.5Y7/2	2.5Y6/2	白	共	骨	12.5世紀~16世紀		
77	青磁	瓶	GL	ATr	B	F 16	上巻	168	-	-	-	青	オリーブ 7.5Y5/2	7.5Y5/2	2.5Y7/2	白	共	骨	(内) 骨馴	No.53	
78	青磁	瓶	GL	CTr	B	E 16	上巻	161	-	-	-	青	オリーブ SY6/3	SY6/3	2.5Y7/1	白	共	骨	(内) 骨馴	No.38	
79	土器器	盆	GL	CTr	B	E 11	上巻	68	15	38	浅脚盤	10YR8/6	7.5Y6/6	7.5Y6/6	石	共	骨	(内) 8条~単位			
80	土器器	盆	GL	CTr	T	E 15	上巻	96	-	-	7.5Y7/2	7.5Y7/2	2.5Y8/6	2.5Y8/6	石	共	骨	(内) 骨馴へ少切り			
81	珠鋼鏡	片口跡	GL	CTr	T	E 15	上巻	-	-	128	10YR7/1	7.5Y7/1	5Y6/1	白	共	骨	(内) 8条~単位				

観察表

報告番号	空気室	種別	通横	グリッド番号	部位	口径mm	高さmm	底径mm	色調			形状(1)丸(2)角 7.5YR6/4	製作伝承	使用範囲	参考	
									外面	内面	底上					
B2	石器	磨製石斧	GRI	CTY	S E	11	中幅	90	-	褐色	褐色	褐色	なし	手作業		
B3	土器	陶器	GRI	CTY	S E	11	中幅	90	-	褐色	褐色	褐色	なし	手作業		
B4	陶器	燒成(焼成)	GRI	CTY	S E	11	中幅	-	-	N5/0	N5/0	N5/0	2.5YR7/4	石器	ロクロ成形	
B5	陶器	陶器	GRI	RTY	S E	21	下幅	-	-	褐色	褐色	褐色	なし	手作業		
B6	近縁系	陶器	GRI	RTY	S E	21	上幅	-	-	40	褐色	褐色	2.5YR7/2	白	(外)一側脚文 (内)一側脚文	
B7	近縁系	陶器	GRI	RTY	S D	21	I	124	69	46	オーバープラス	褐色	褐色	2.5YR6/1	白	(外)一側脚文 (内)五筋目文
B8	近縁系	丸瓶	GRI	RTY	S D	11	I	96	51	40	褐色	褐色	2.5YR6/1	白	(外)梅瓣文	
B9	近縁系	瓶口	GRI	RTY	S D	21	I	94	61	45	褐色	褐色	2.5YR6/1	白	(外)丸文 (内)五筋目文	
B10	近縁系	小丸瓶	GRI	RTY	S D	21	I	84	54	33	褐色	褐色	2.5YR6/1	白	中野V-2期 (1750~70年代)	
B11	近縊系	広口瓶	GRI	RTY	S D	21	I	120	70	74	褐色	褐色	2.5YR6/1	白	大堀V期 (1830~40年代)	
B12	近縊系	小丸瓶	GRI	RTY	S D	21	I	86	55	33	褐色	褐色	2.5YR6/1	白		
B13	近縊系	丸瓶	GRI	RTY	S D	21	I	84	-	褐色	褐色	褐色	2.5YR6/1	白	大堀V期 (1830~40年代)	
B14	近縊系	瓶反腹	GRI	RTY	S D	21	I	110	58	46	褐色	褐色	2.5YR6/1	白		
B15	近縊系	白磁器	GRI	RTY	S D	21	I	82	44	34	褐色	褐色	2.5YR6/1	白		
B16	近縊系	蓋	GRI	RTY	S D	21	I	94	29	29	褐色	褐色	2.5YR6/1	白	大堀V期 (1830~40年代)	
B17	近縊系	丸形容器	GRI	RTY	S D	21	I	139	36	85	褐色	褐色	2.5YR6/1	ナシ	(外)丸形容器 (内)直筒	
B18	近縊系	小柄	GRI	RTY	S D	21	I	66	38	29	褐色	褐色	2.5YR6/1	白	京窓跡跡	
B19	近縊系	圓錐形	GRI	RTY	S D	21	I	26	-	38	褐色	褐色	2.5YR6/1	白	(外)白胎	
B20	萩陶器	陶	GRI	RTY	S D	2	I	80	55	38	褐色	褐色	2.5YR6/1	白	(外)ビラ跡	190中
B21	有輪車	行平綱	GRI	RTY	S D	11	I	204	-	29	オーバープラス	オーバープラス	2.5YR6/1	長		
B22	有輪車	行平綱	GRI	RTY	S D	21	I	136	32	26	褐色	褐色	2.5YR6/1	白		
B23	有輪車	行平綱	GRI	RTY	S D	11~16	I	140	87	66	褐色	褐色	2.5YR6/1	白		
B24	近縊系	盤	GRI	RTY	S C	19	I	-	-	40	赤褐色	赤褐色	2.5YR6/1	白	大堀I-2期 (1804~1610年代)	
B25	近縊系	盤	GRI	RTY	S E	9	I	-	-	40	褐色	褐色	2.5YR6/1	白	大堀I-2期 (1804~1610年代)	
B26	縦縫割	盤	GRI	RTY	S F	9	I	-	-	50	褐色	褐色	2.5YR6/3	白	(外)灰胎	
B27	縦縫割	盤	GRI	RTY	S F	25	I	-	-	86	褐色	褐色	2.5YR6/1	白	大堀I-4期後半 (17C前)	
B28	組合系	有台脚	GRI	RTY	S E	6	IIc	-	-	66	褐色	褐色	2.5YR6/0	白	牛糞地不明 9C	
B29	上踏		GRI	RTY	S F	13	I	-	-	107	褐色	褐色	2.5YR6/4	白		
B30	上踏		GRI	RTY	S F	13	I	-	-	109	褐色	褐色	2.5YR7/4	白		
B31	石製品	石器			-	-	-	-	-	111	褐色	褐色	2.5YR7/4	白		
B32	石製品	石器			-	-	-	-	-	112	褐色	褐色	2.5YR7/4	白		
B33	石製品	石器			-	-	-	-	-	113	褐色	褐色	2.5YR7/4	白		

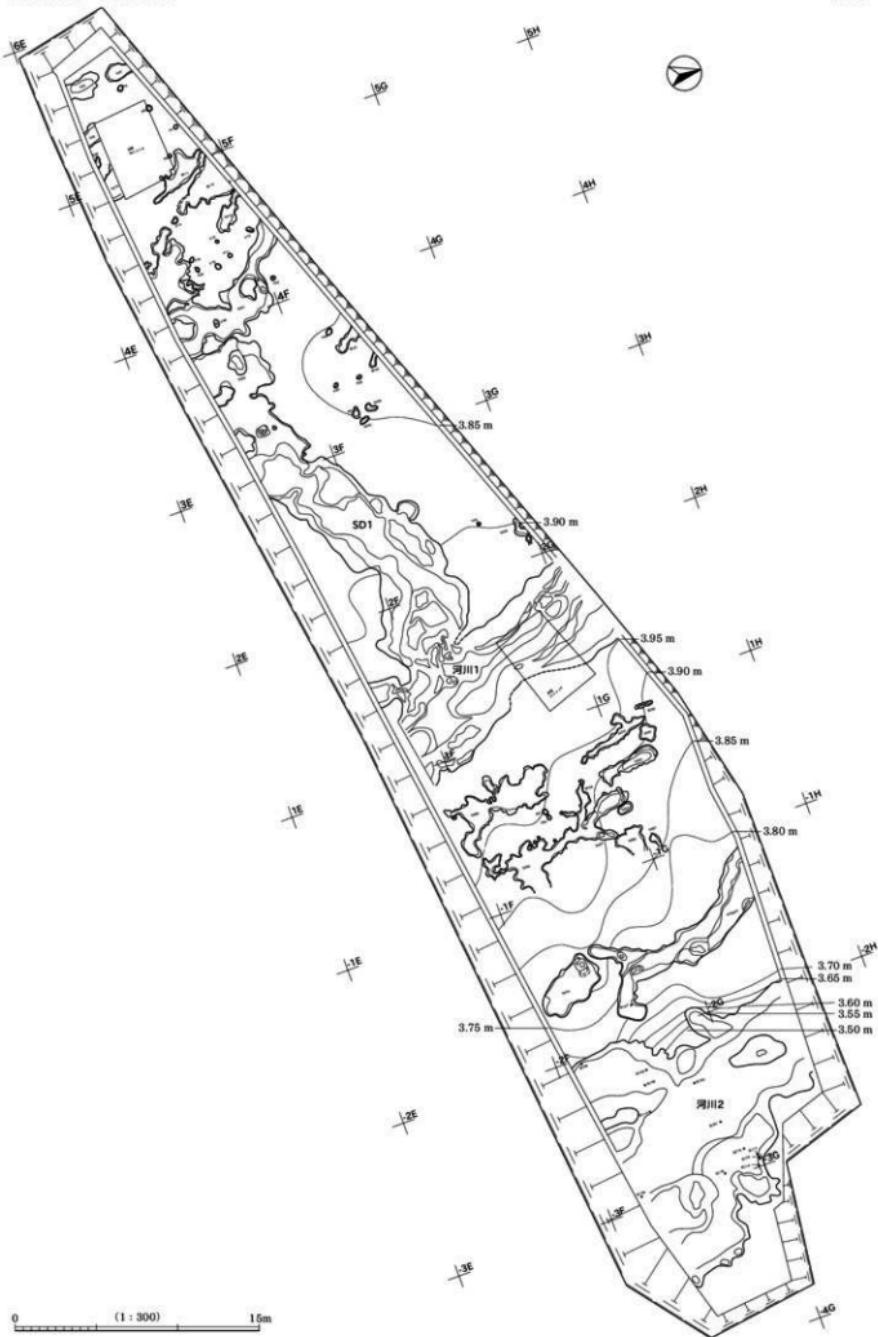
伝極楽寺跡 石器・石製品観察表

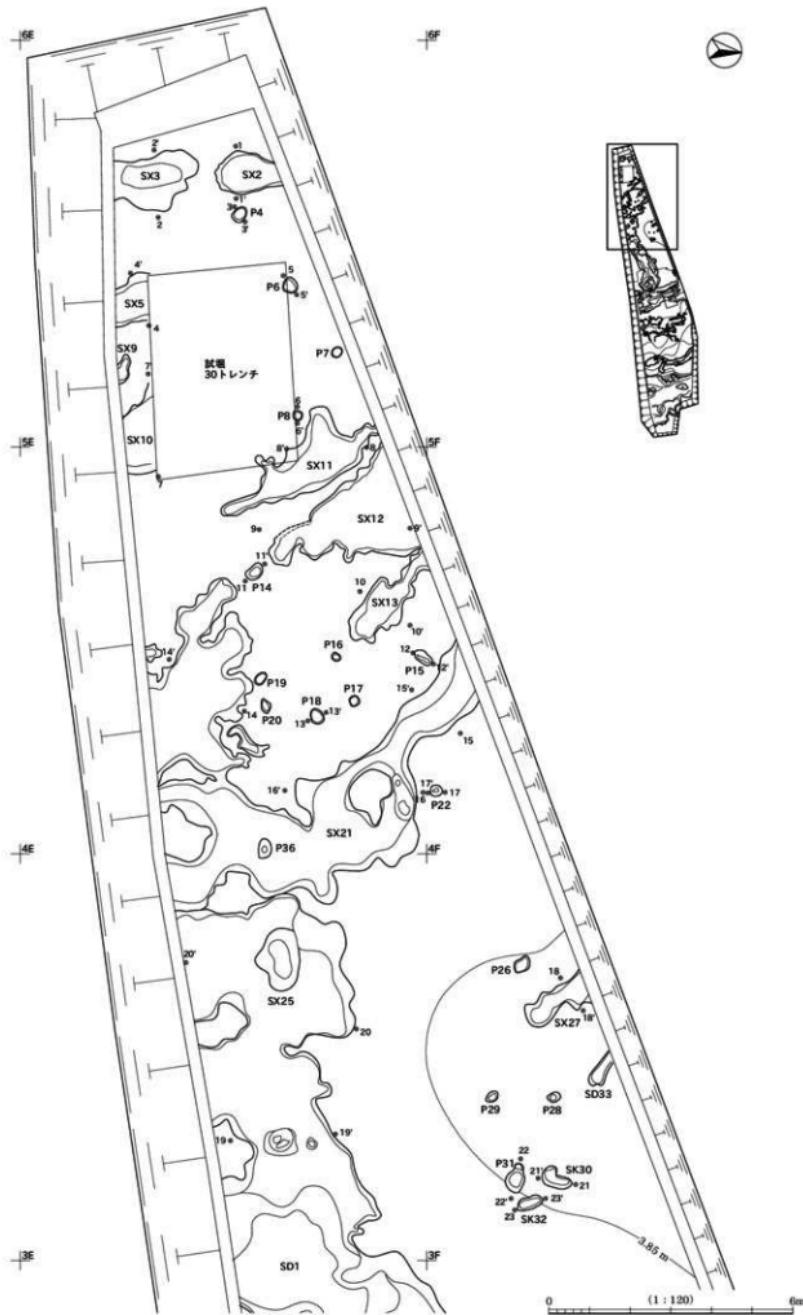
報告番号	種別	分類	石材	通横	部位	出土位置			長さmm	幅mm	厚さmm	重さ(グラム)	備考
						部位	グリッド	高さmm					
53	石器	火打石?	玉髓	SIDS	I	11	E	I	35	20	12	6.3	
82	石器	磨製石斧	板岩	GRIATY	I	7	F	15	(97)	70	38	968.5	スズ
110	石製品	砥石	板岩	I	8	F	13	(70)	32	16	58.9		
111	石製品	砥石	板岩	I	6	E	4	91	45	22	113.8	切削面有り 表面無し	
112	石製品	砥石	板岩	II	8	D	22	230	40	26	302.0	切削面有り	
113	石製品	玉髓	板岩	IIb	6	G	24	255	261	125	95.90		

伝極楽寺跡 管状土錠観察表

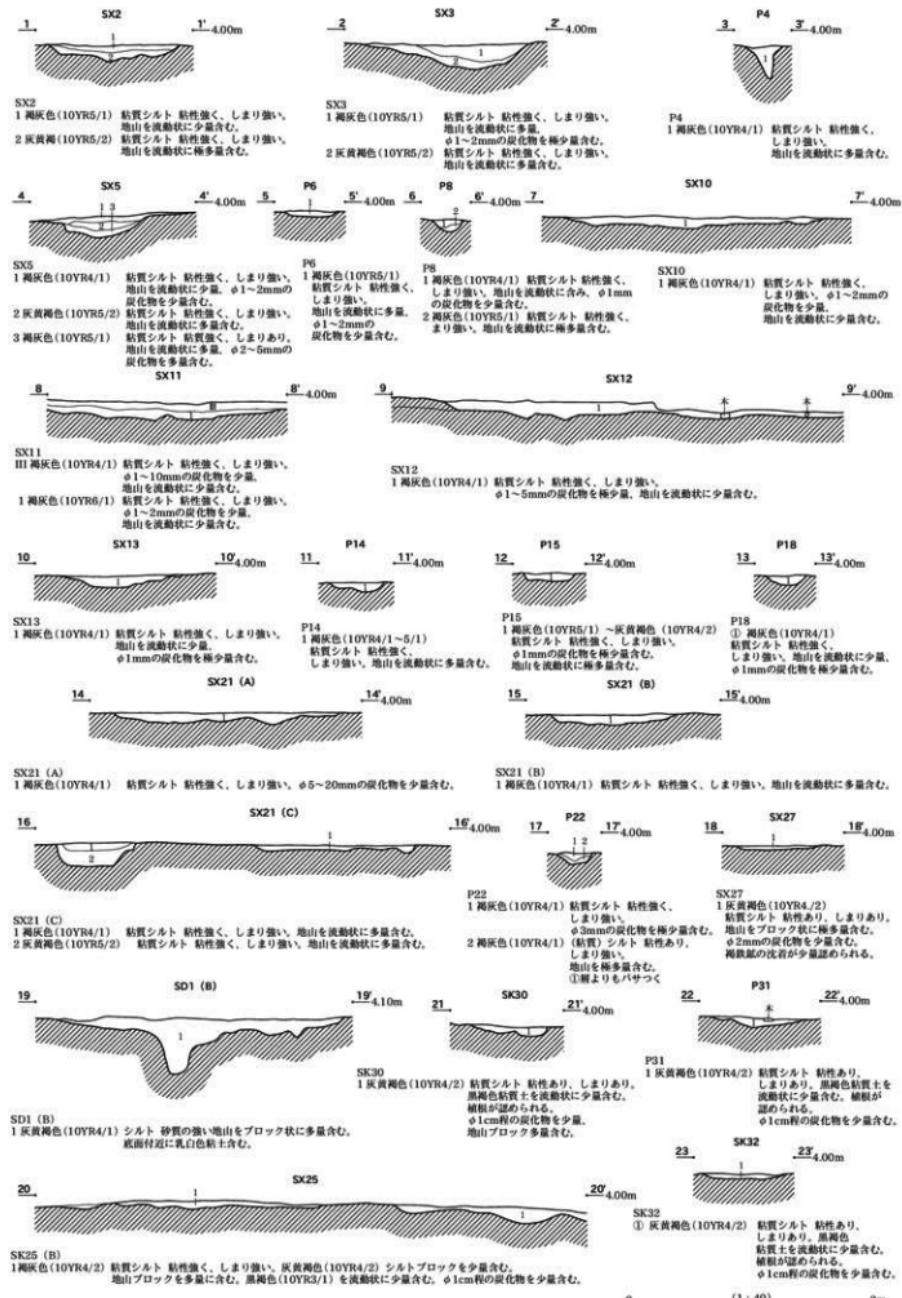
報告番号	種別	分類	石材	通横	部位	出土位置			長さmm	幅mm	厚さmm	重さ(グラム)	備考
						部位	グリッド	高さmm					
108	太型	I	-	-	-	54	39	13	13	63.6			
109	太型	I	8	E	22	71	(36)	(10)	15	39.2			

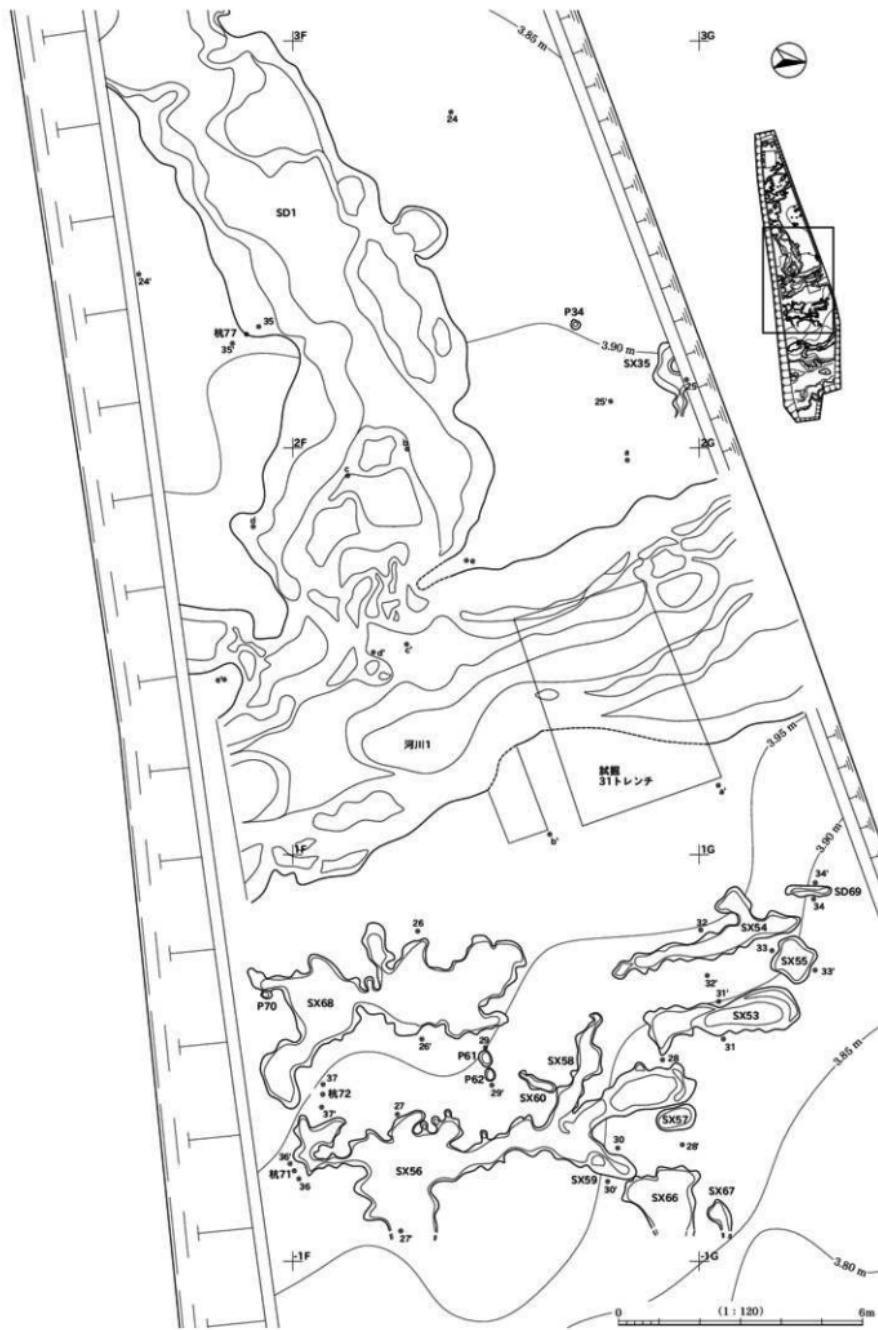
図 版

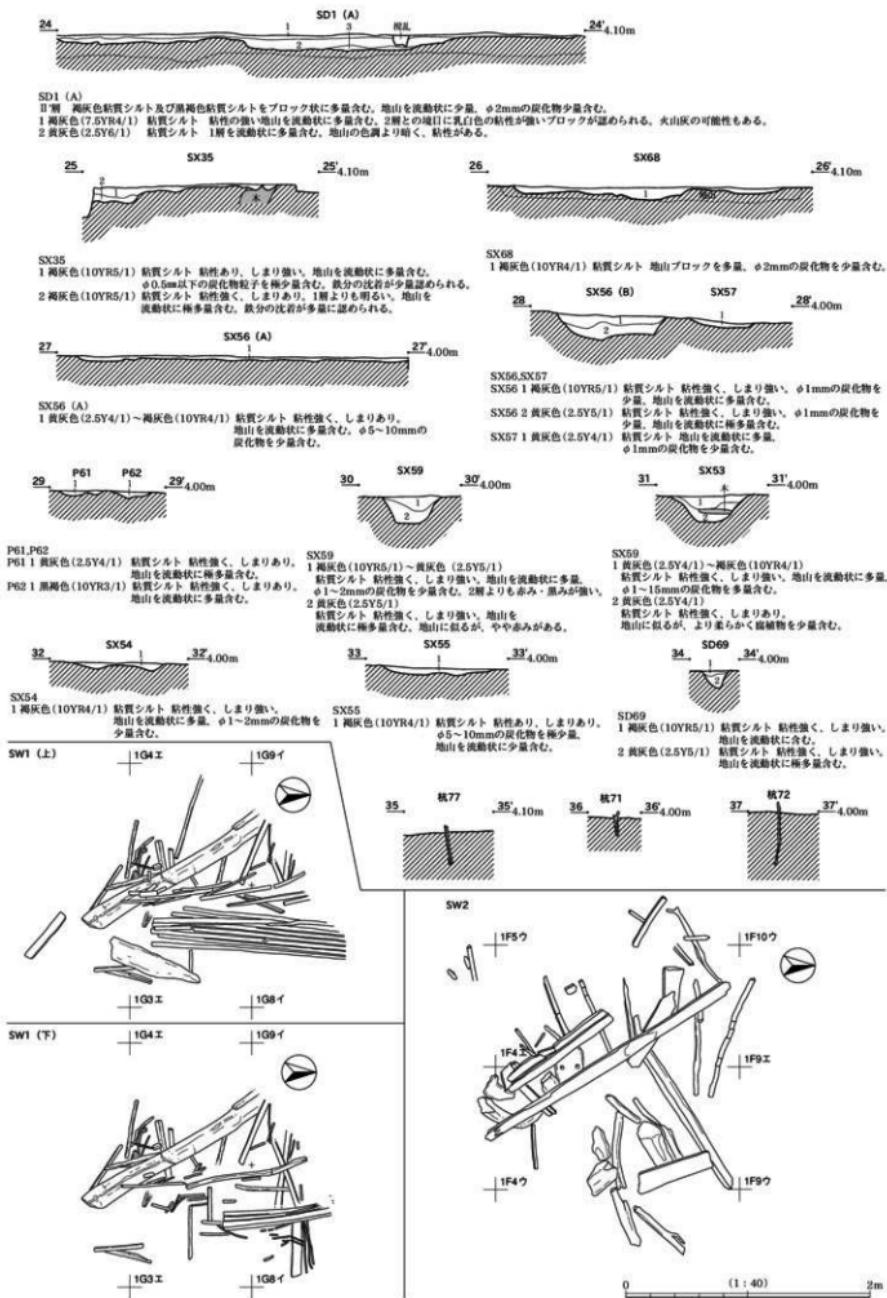


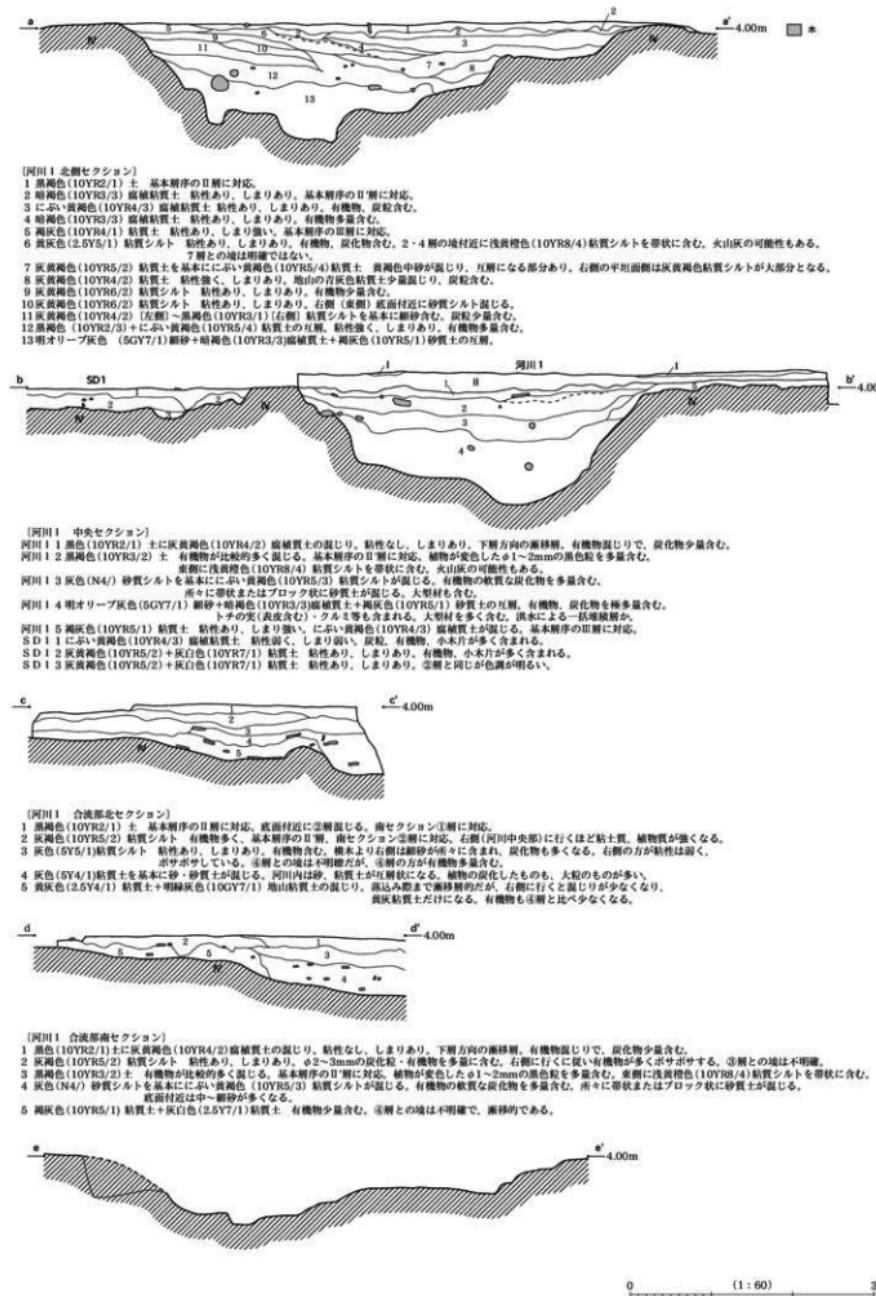


前波南遺跡 遺構個別図 (1)



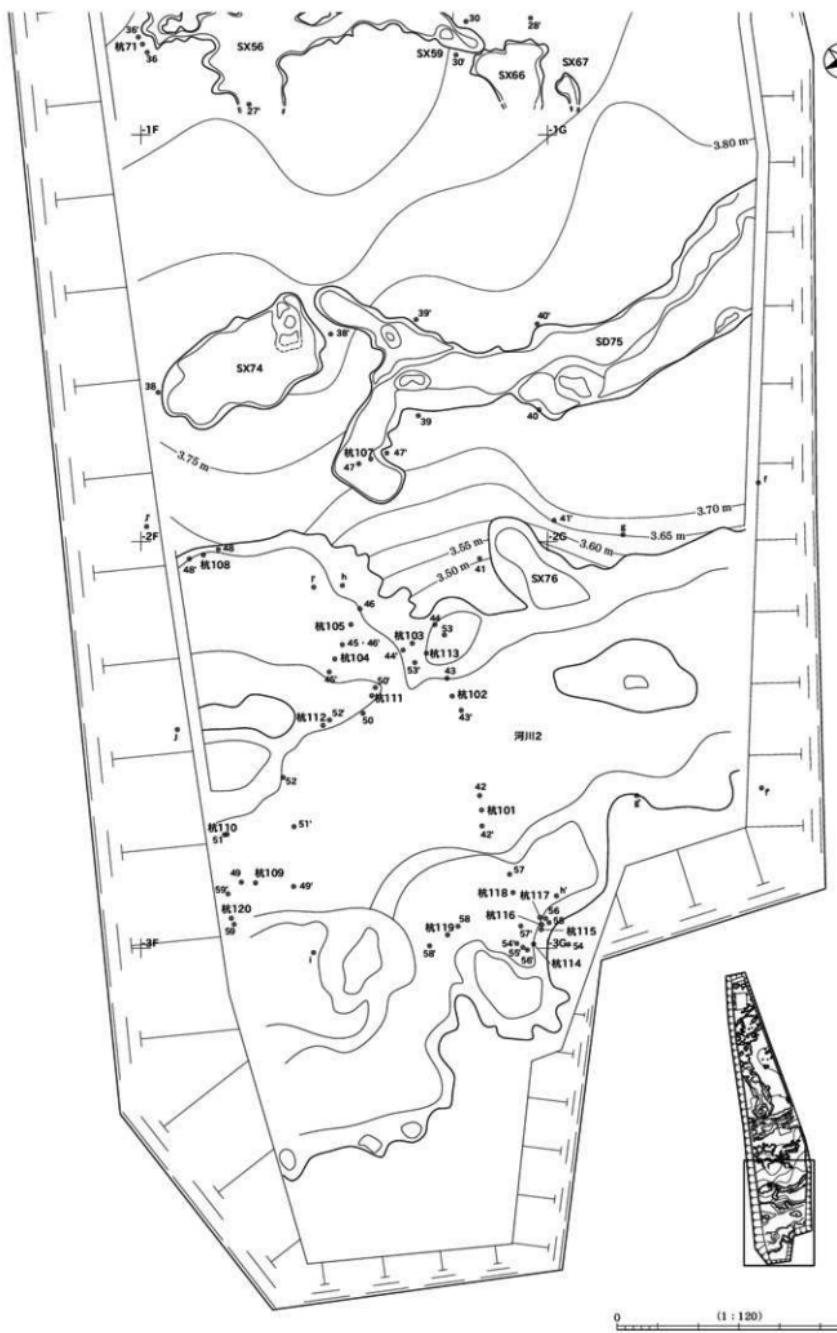


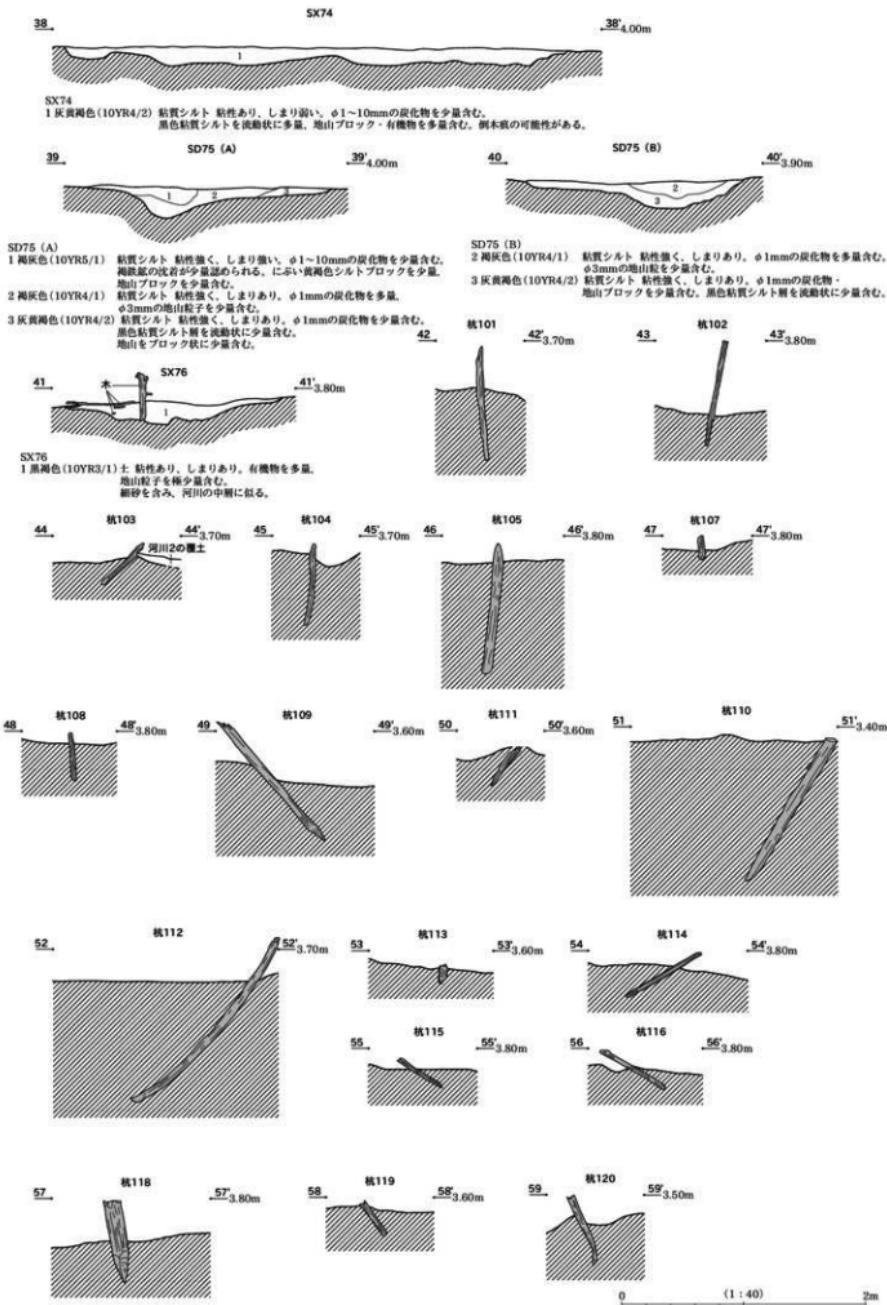


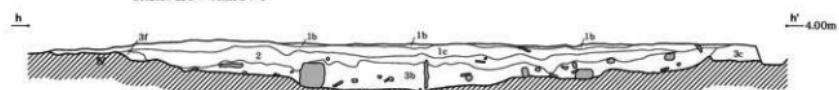
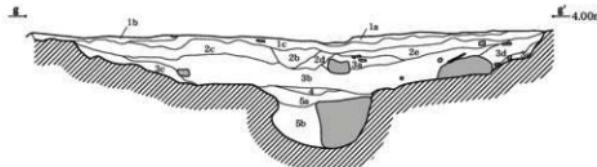
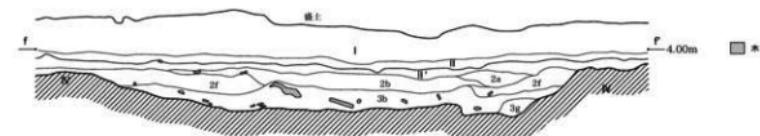


前波南遺跡 遺構分割図 (3)

圖版 7

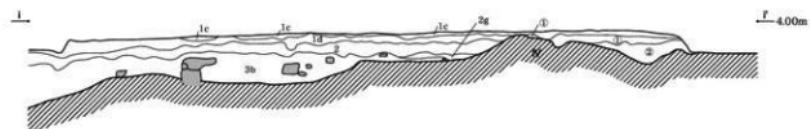






3c 黑褐色(10YR4/1) 粘質シルト 粘性強く、しまり強い。地山を流動状に少量。 $\phi 1\sim 10mm$ の炭化物を極少量。細砂を含む。

3f 黑褐色(5Y5/1) 粘質シルト 粘性強く、しまり強い。地山に近い。黒褐色(10YR5/1) 粘質シルトを流動状に少量含み。地山よりもやや暗く見える。

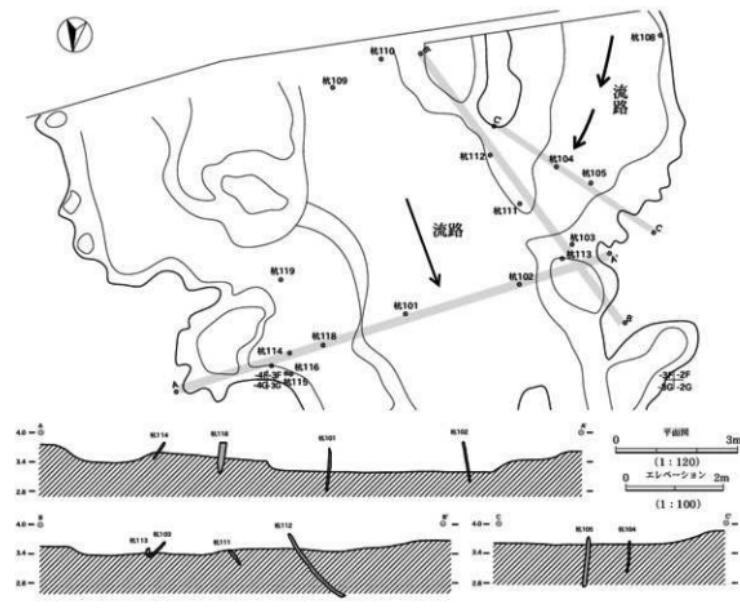




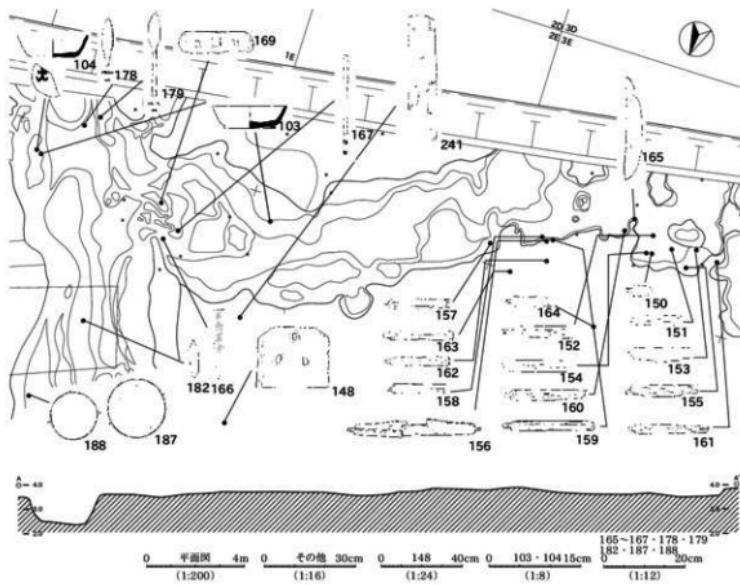
前波南遺跡 遺構個別図(7)

圖版 11





河川2と杭列

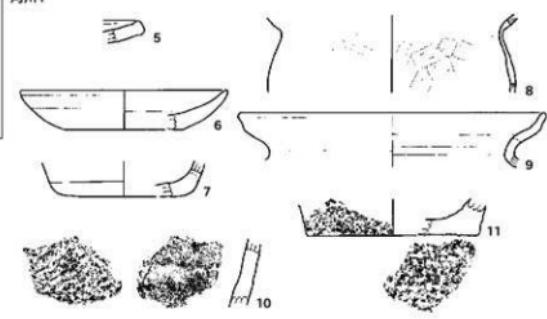


SD1・SX25 出土遺物分布図

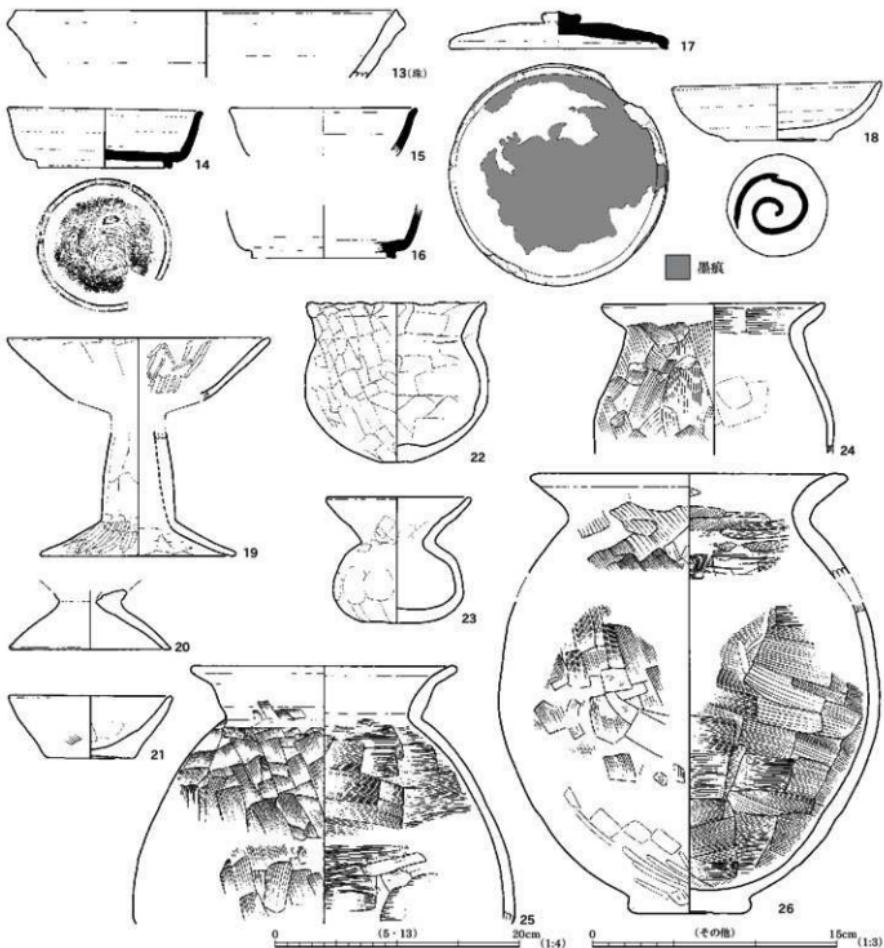
SD1



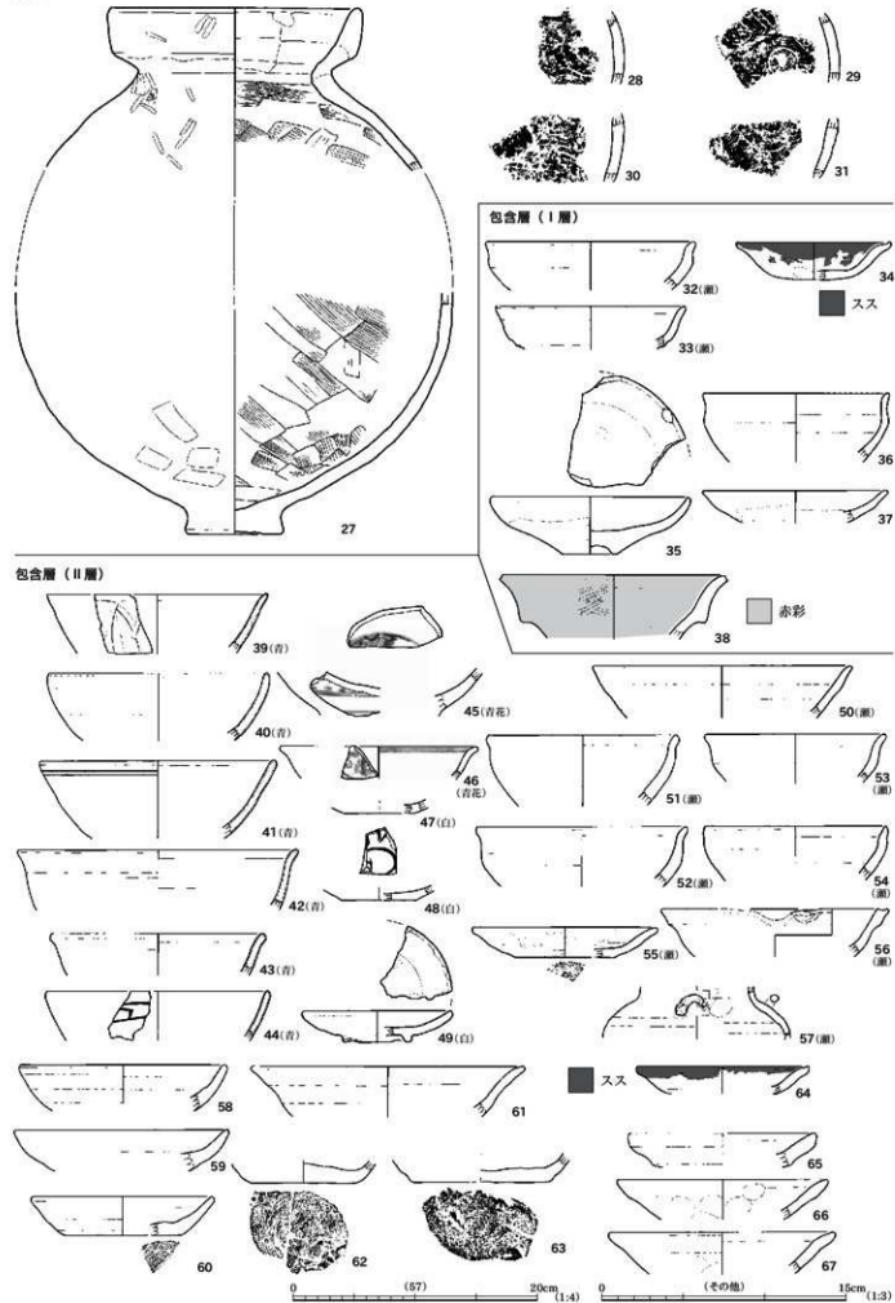
河川1



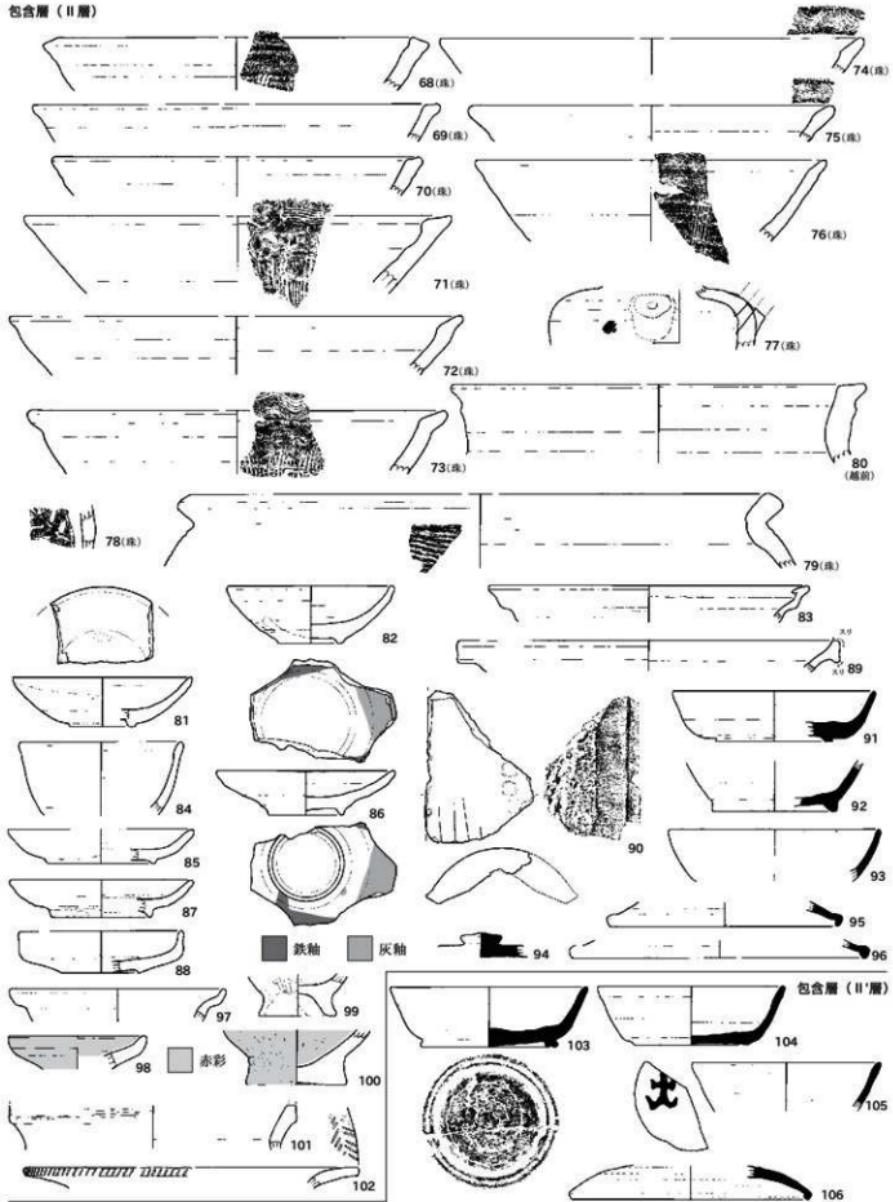
河川2



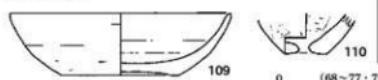
河川2



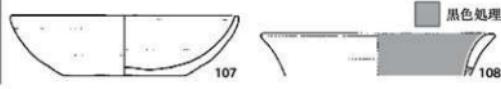
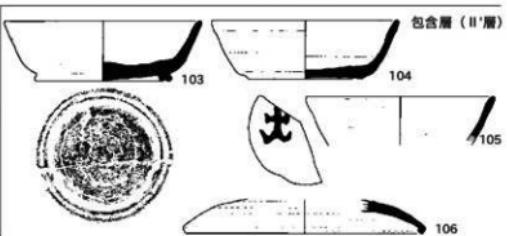
包含層(II層)

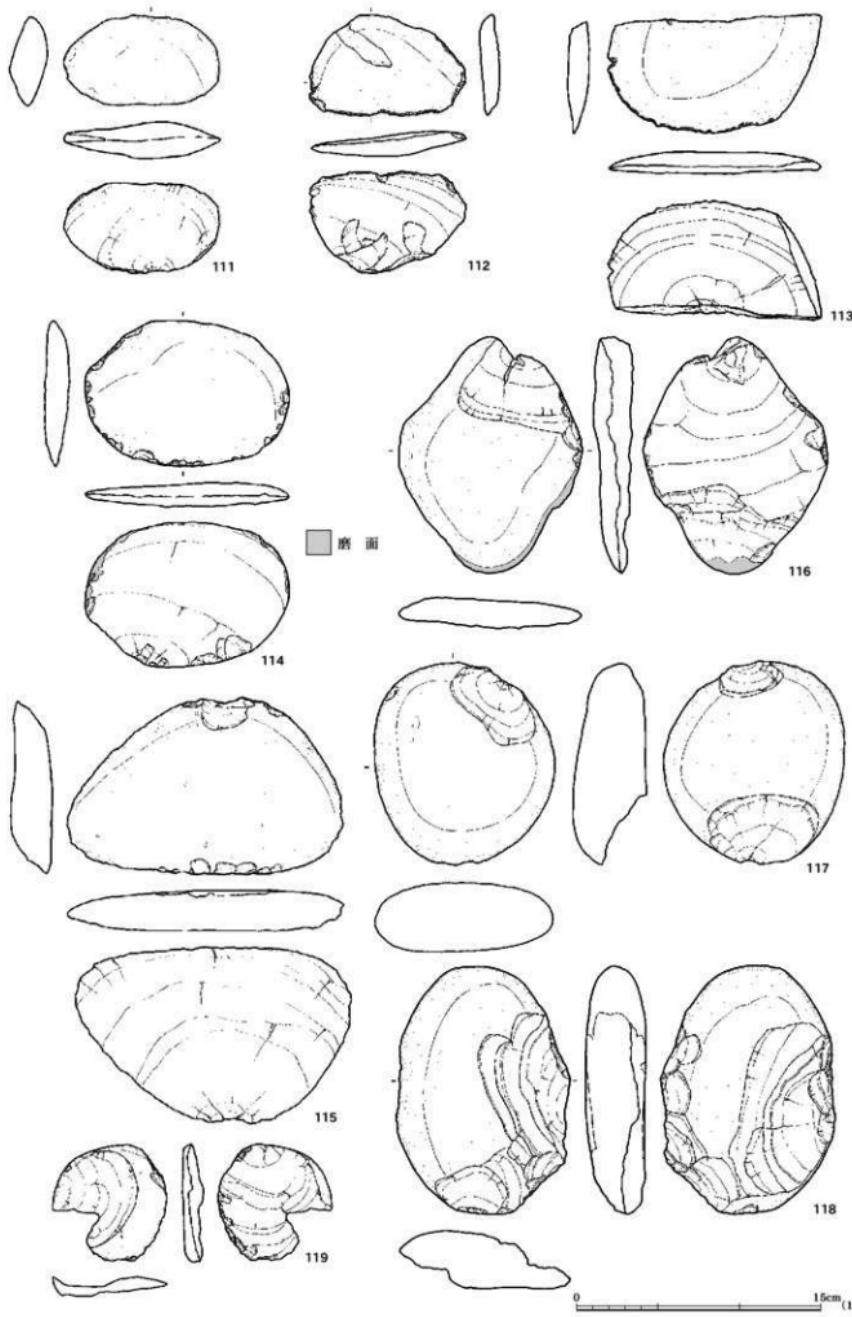


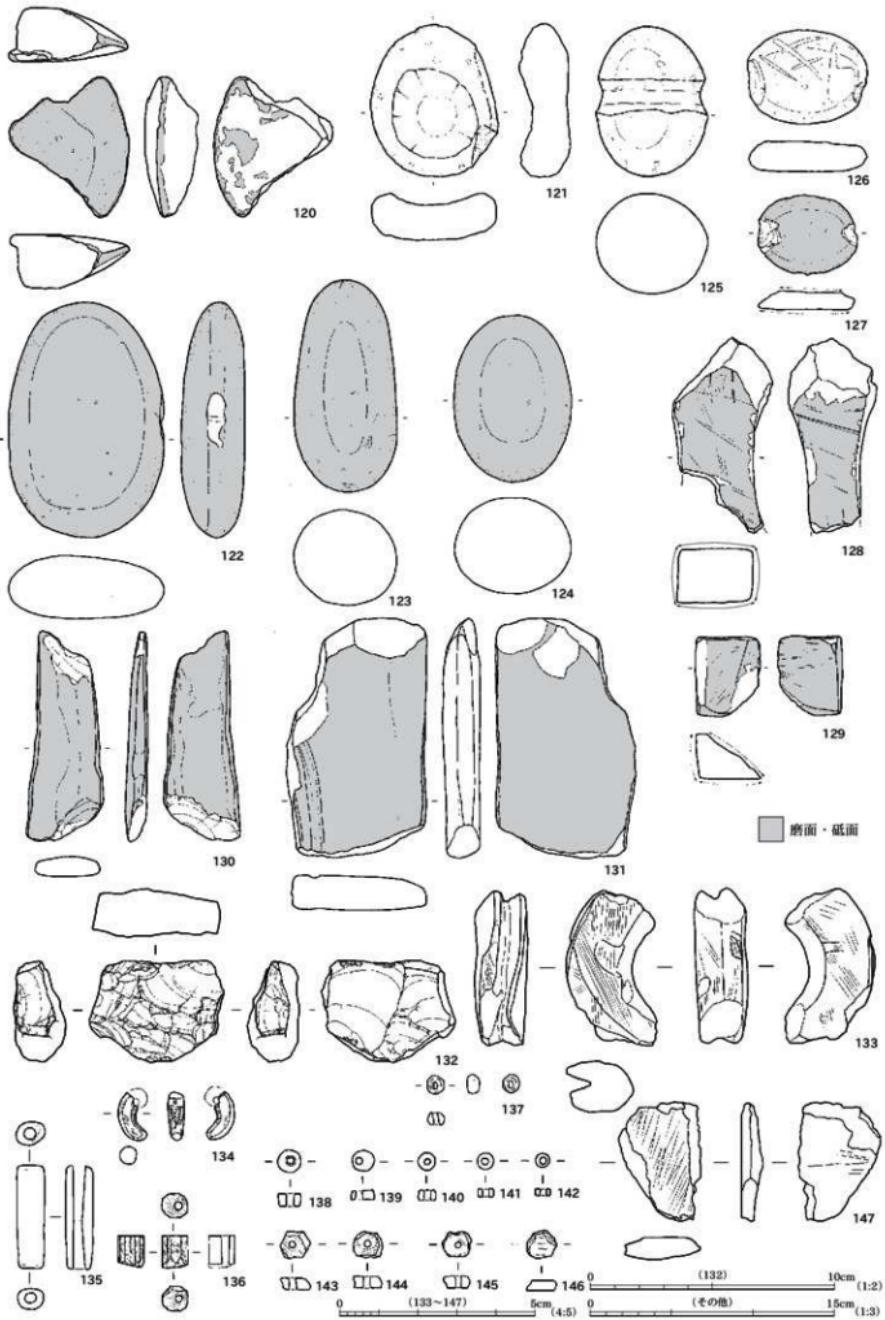
包含層(III層)



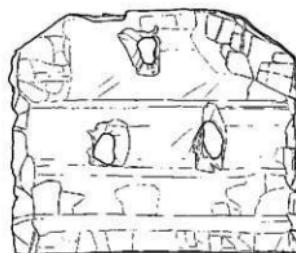
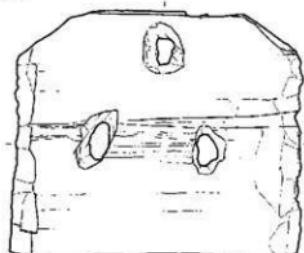
0 (68~77・79~80・83~89・90) 20cm (1:4) 0 (その他) 15cm (1:3)







SX35



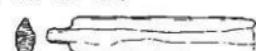
148

杭77



149

SX25 (150~155) · SD1 (156~159 · 165~167)



150

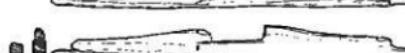
151

152



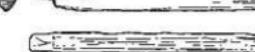
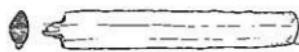
153

154



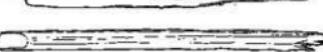
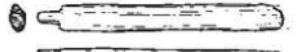
155

156



157

158



159

160



161

162



163

164



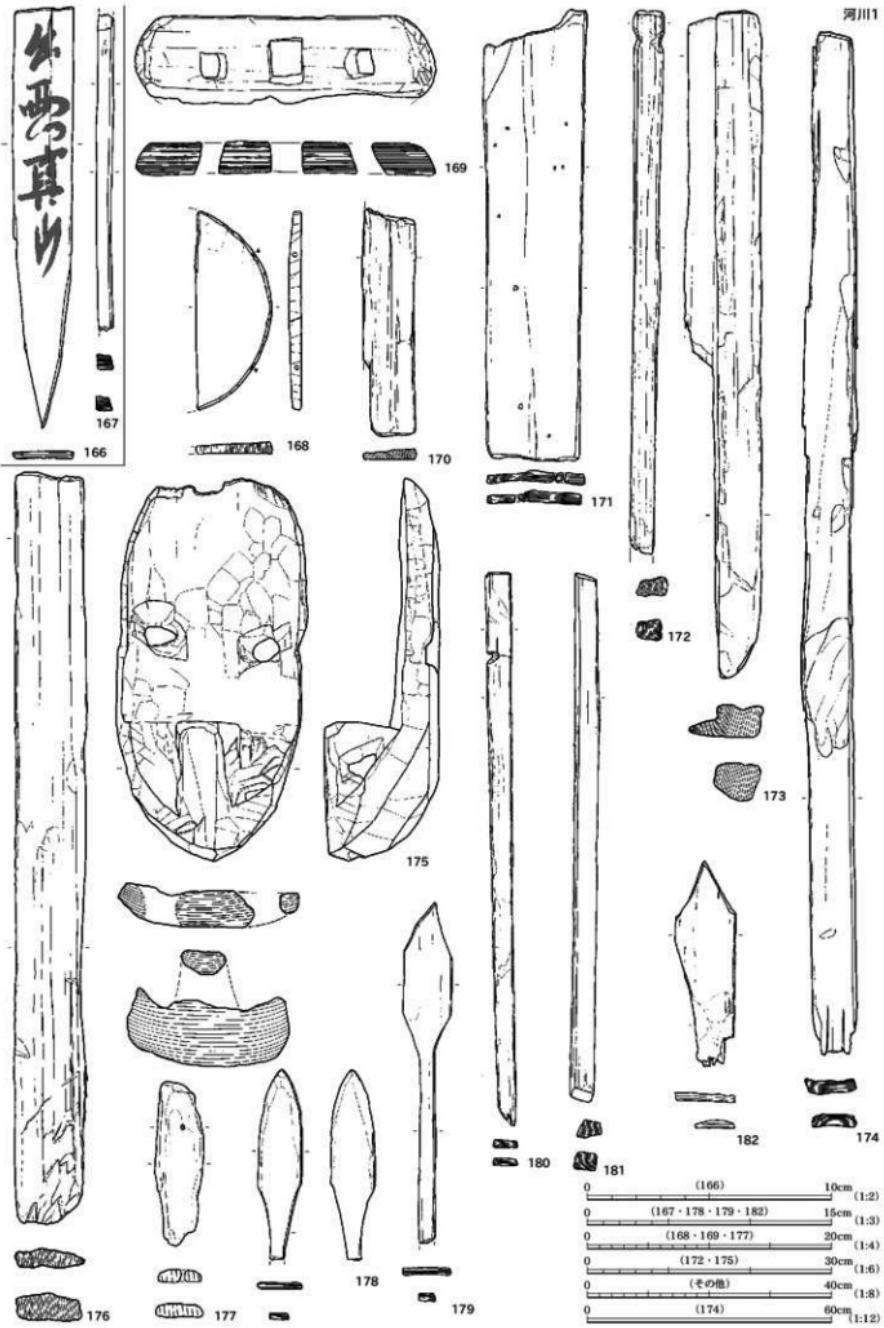
165

0 (431)

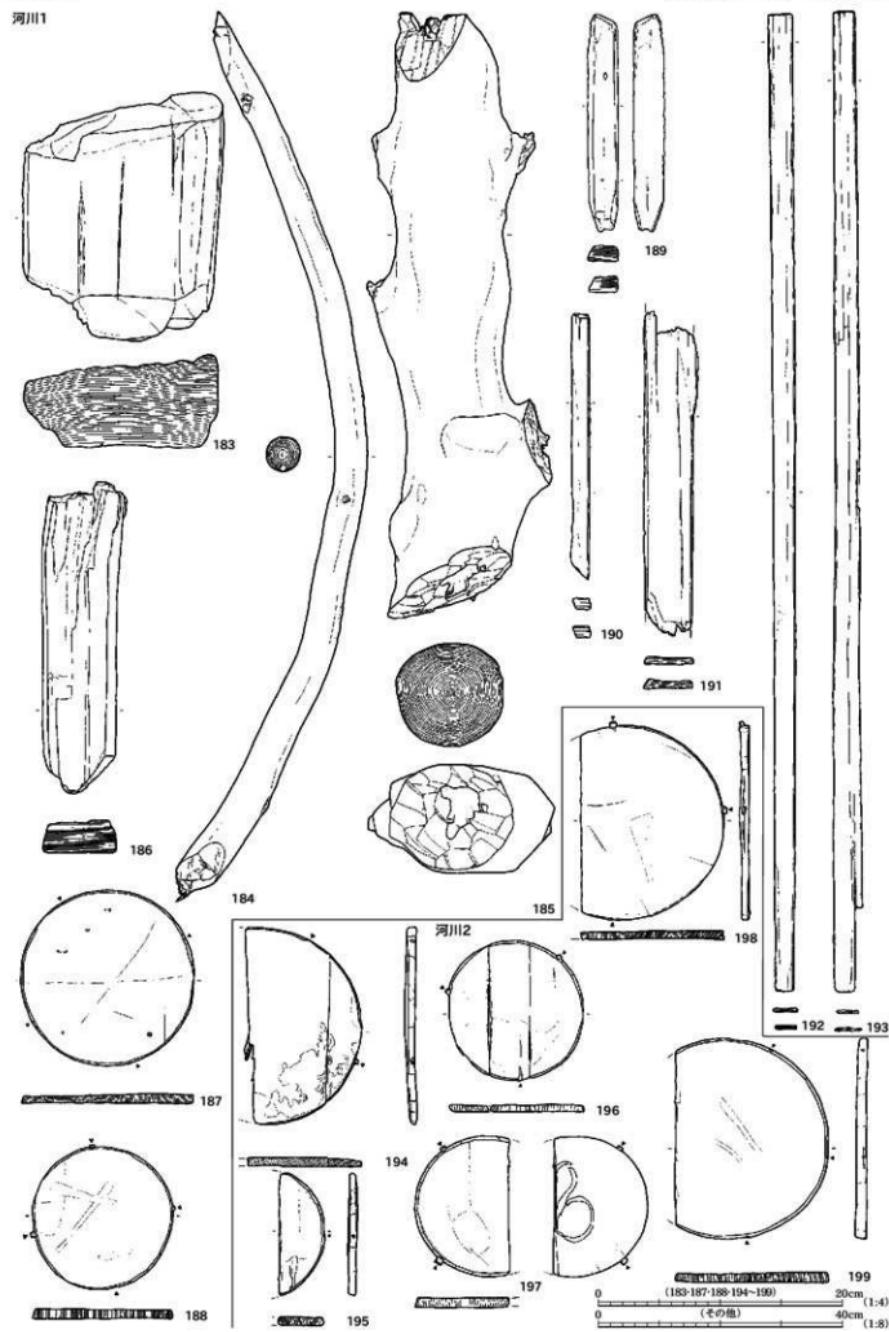
15cm (1:3)

0 (その他)

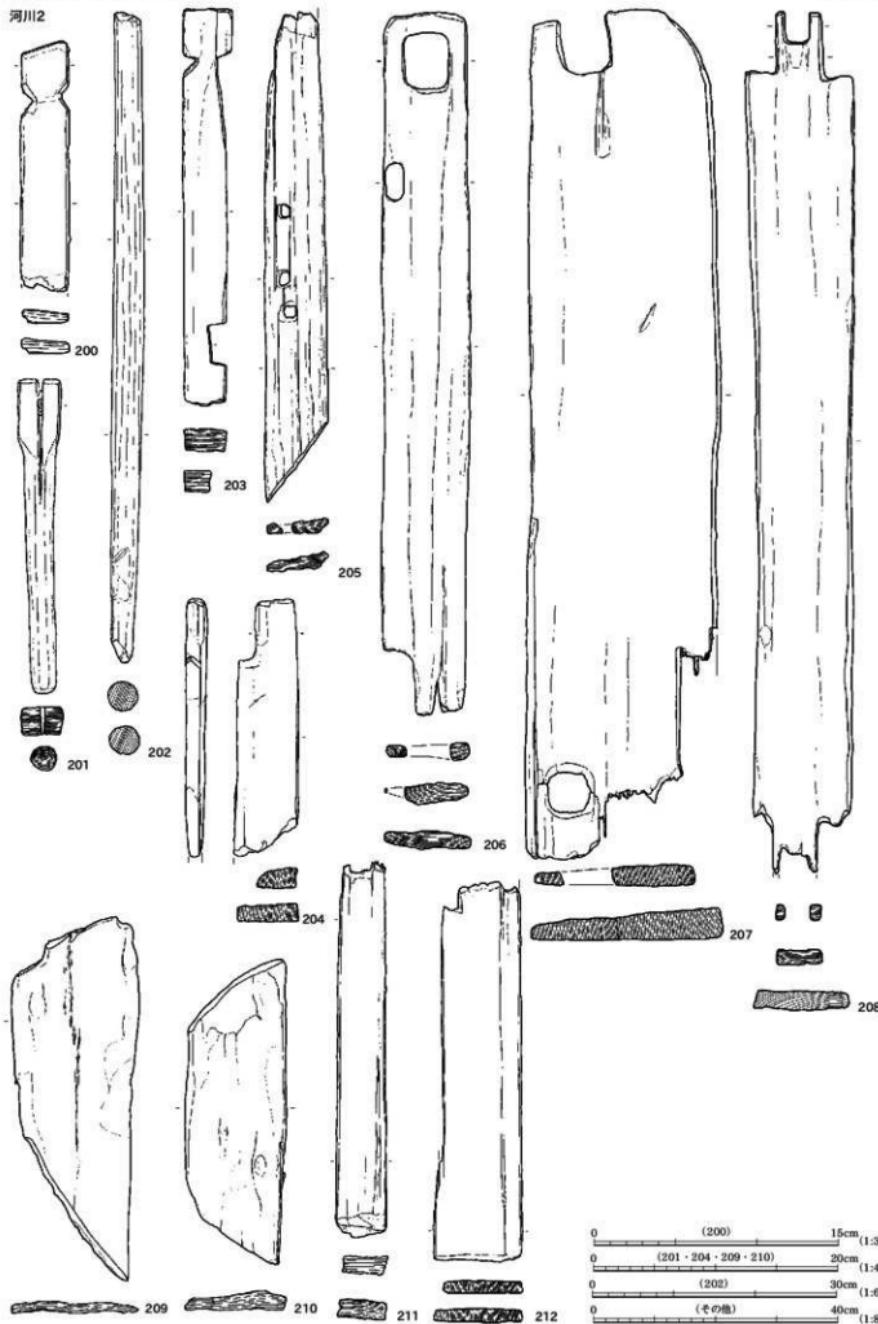
30cm (1:6)



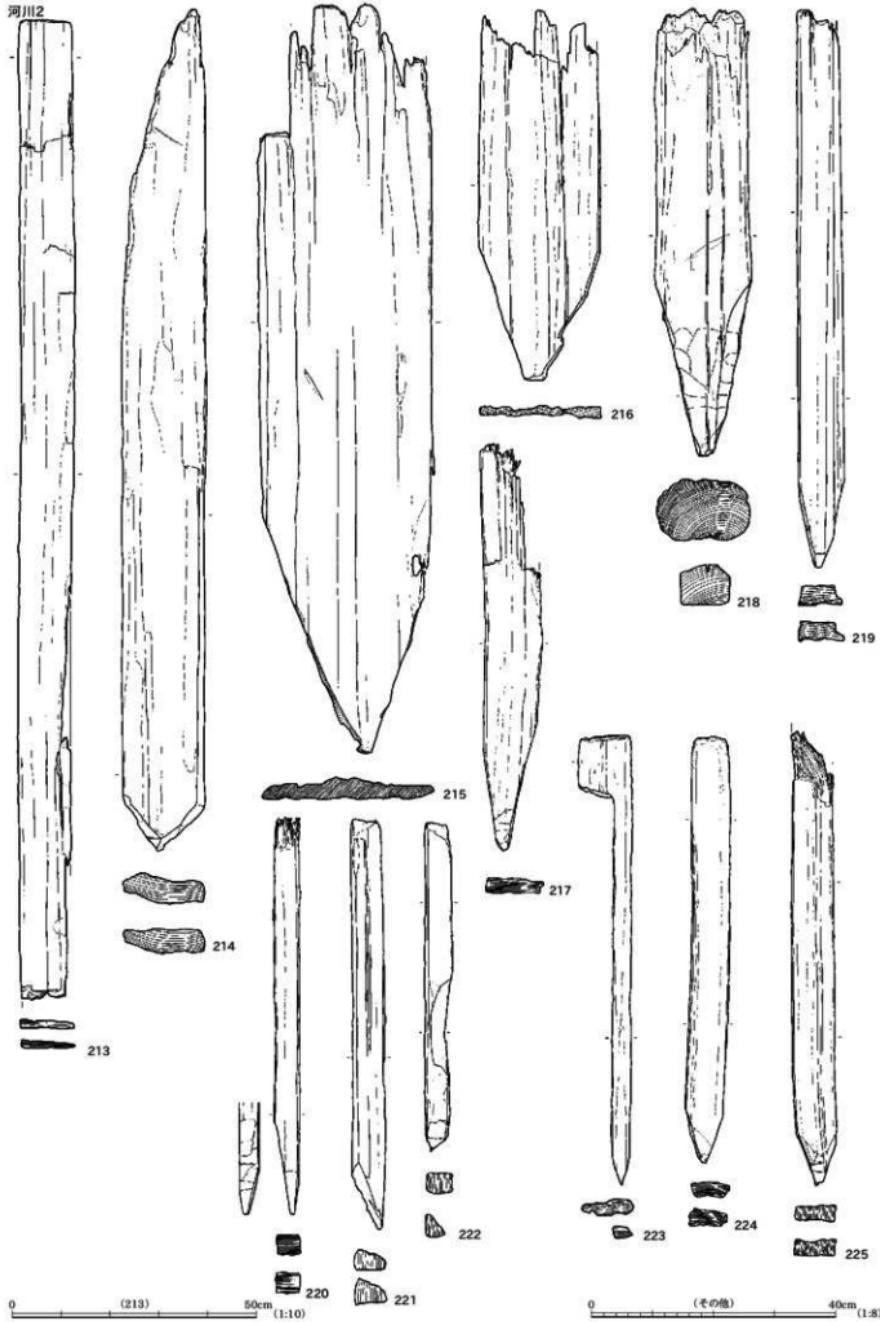
河川1



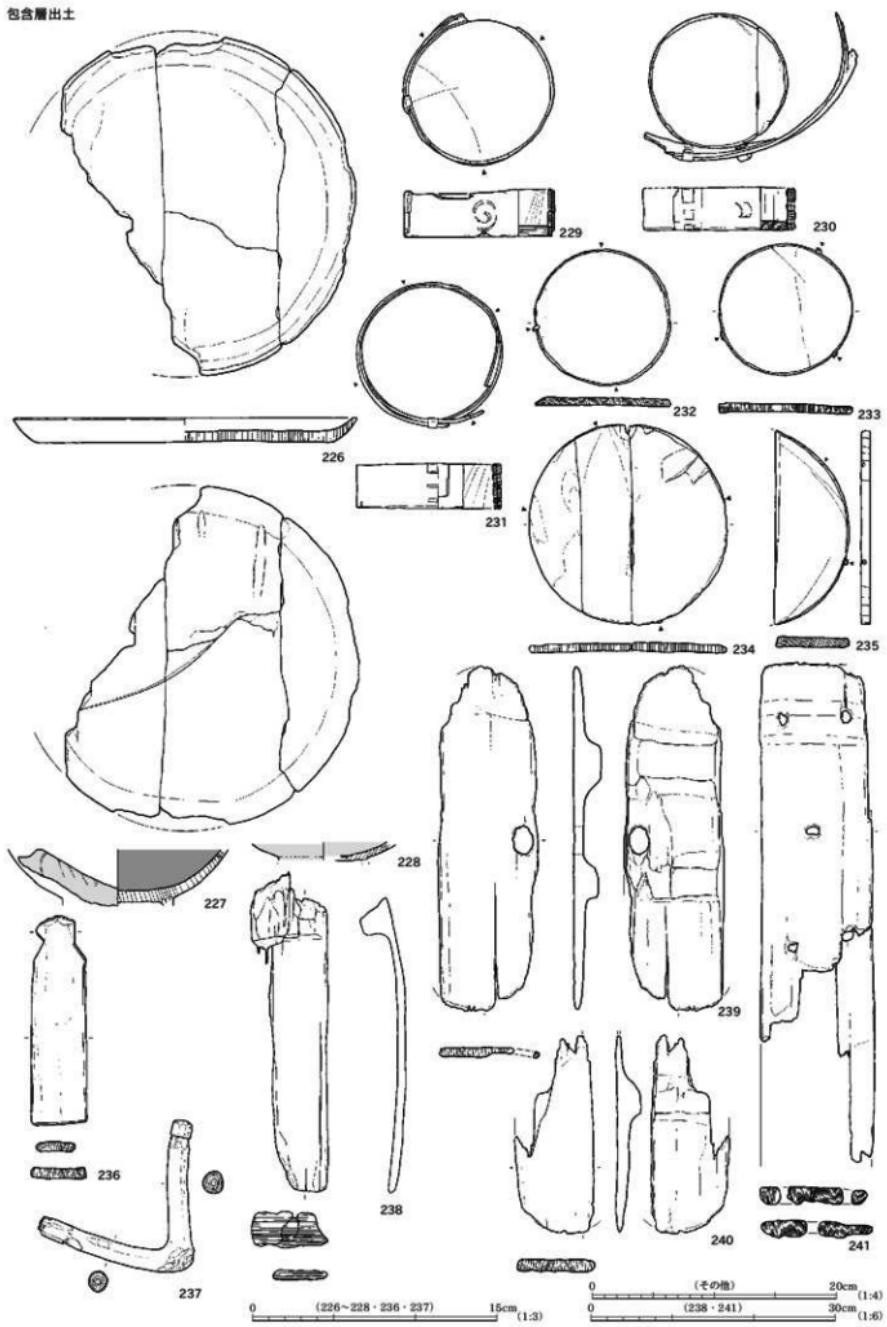
河川2

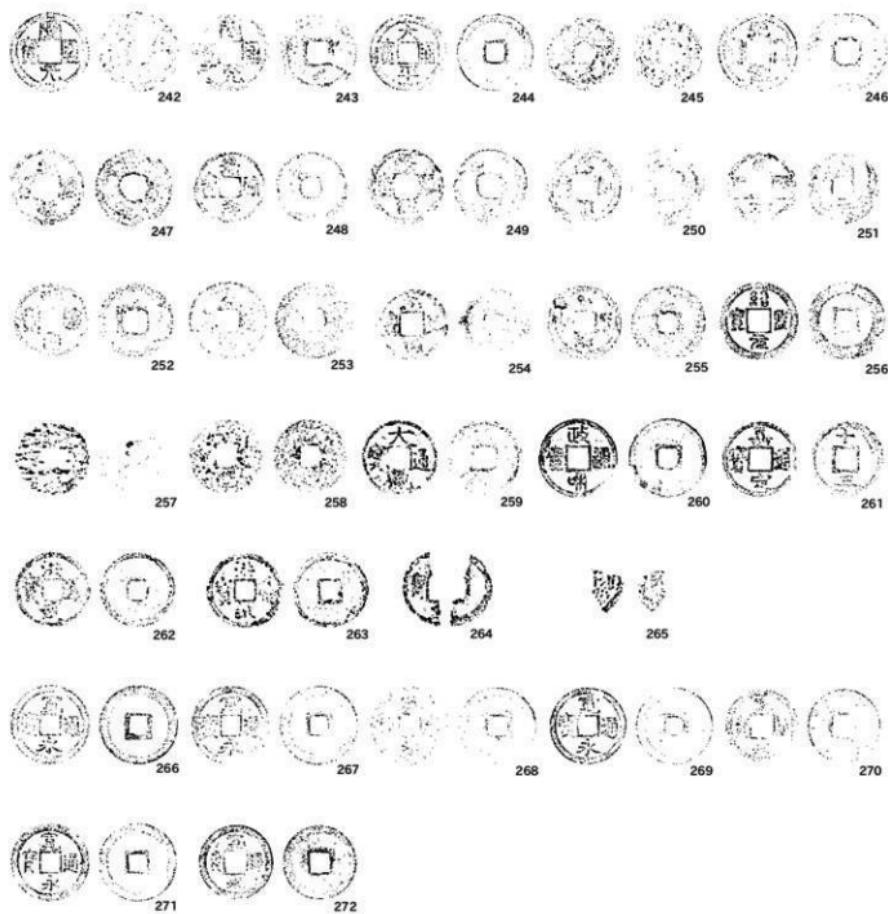


河川2

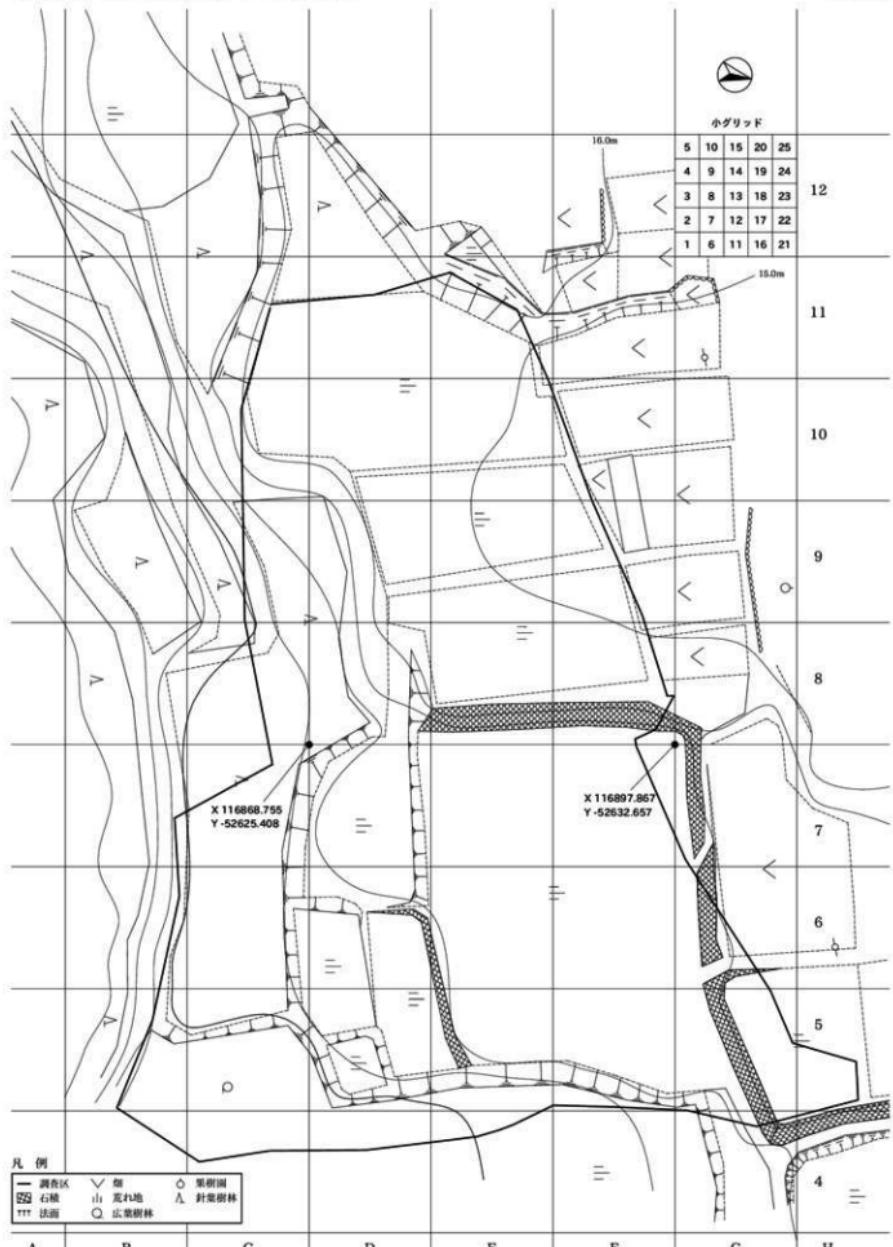


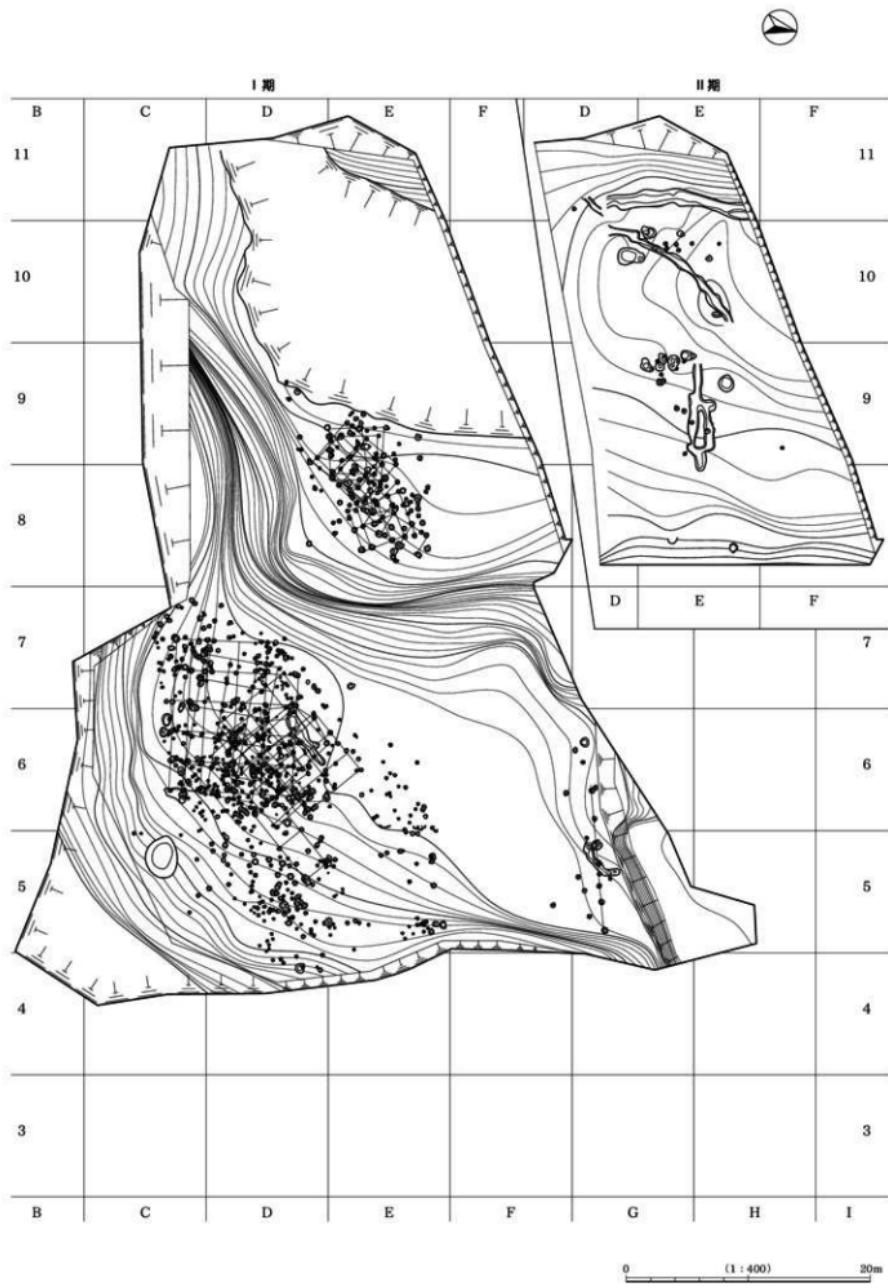
包含層出土

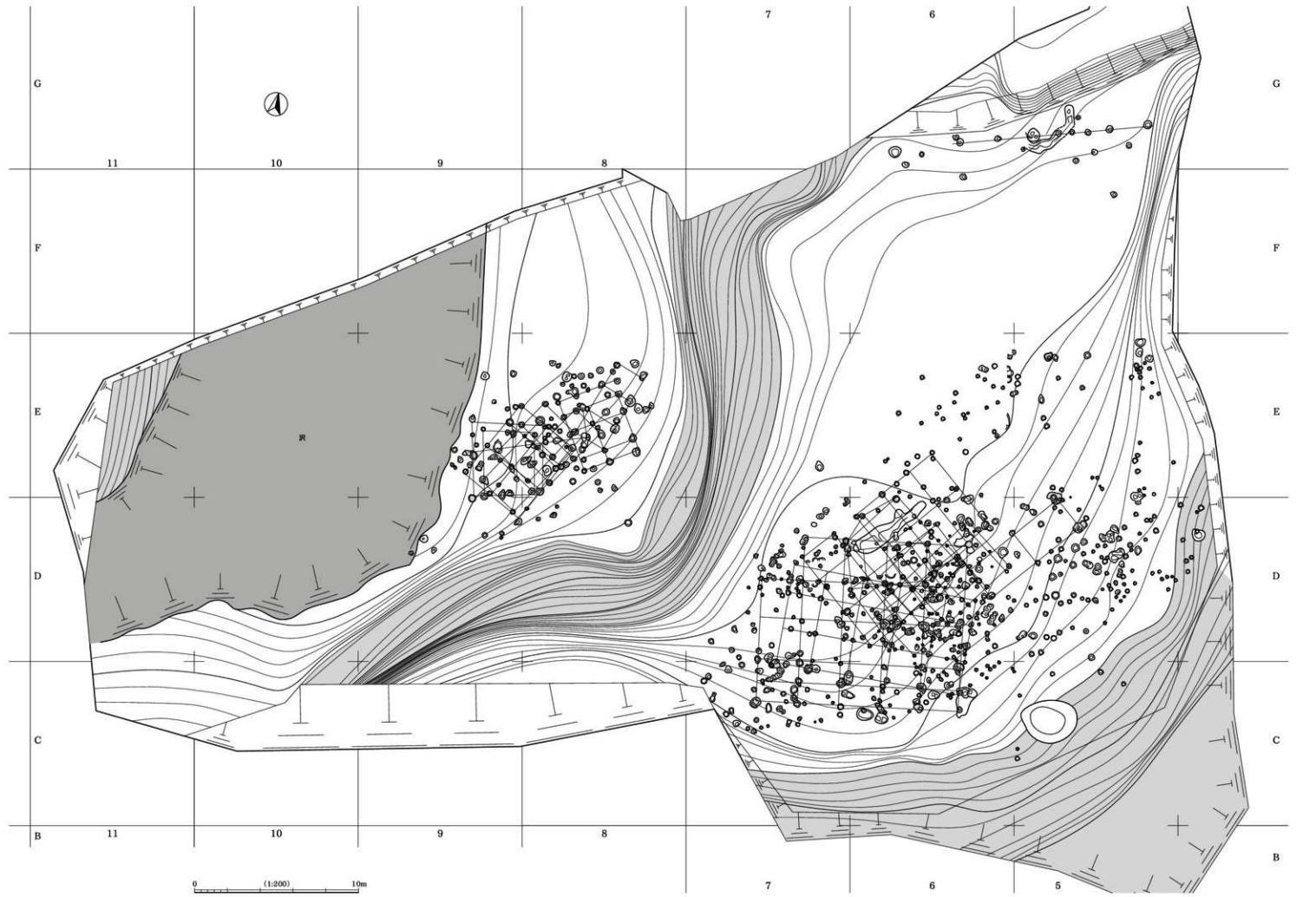


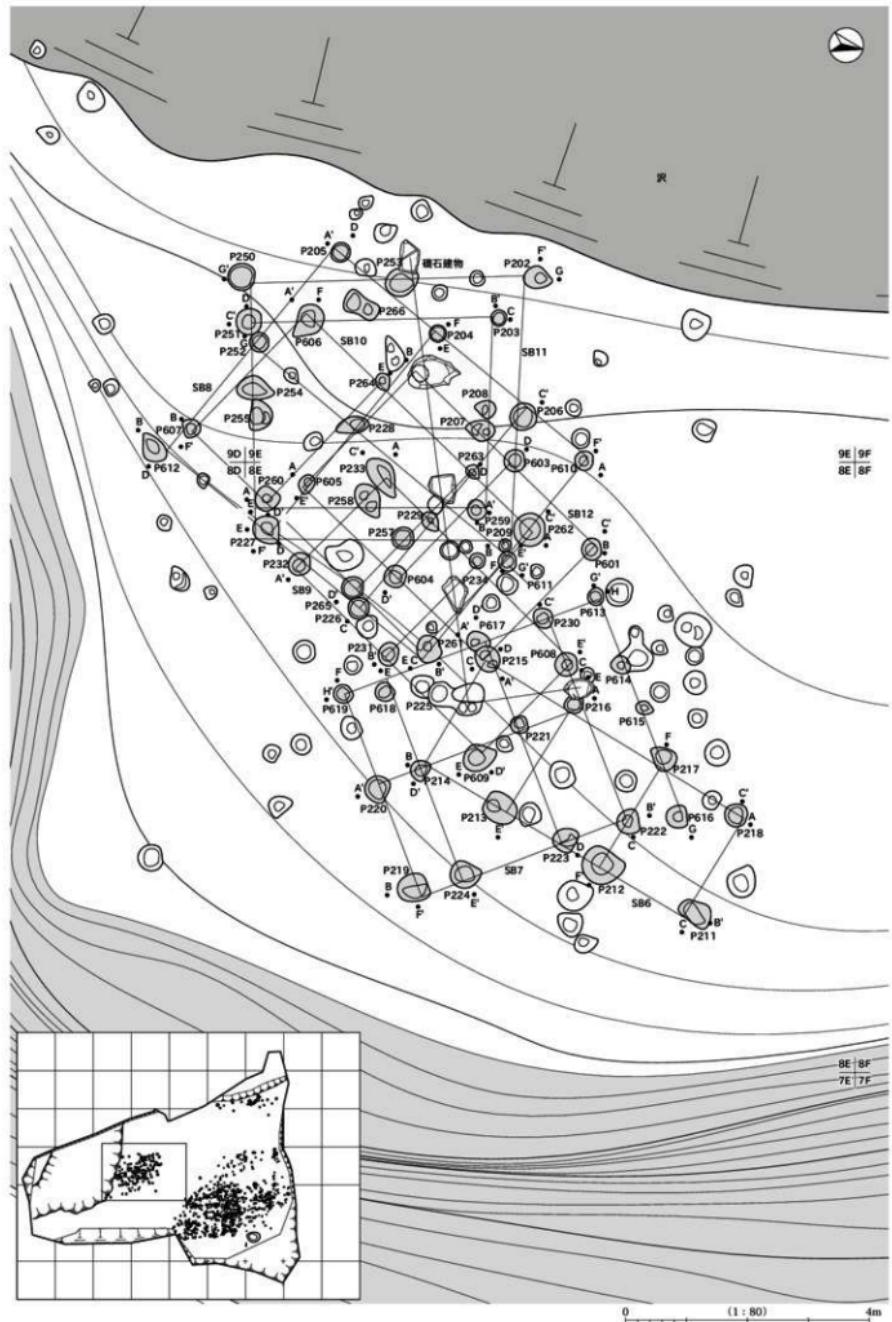


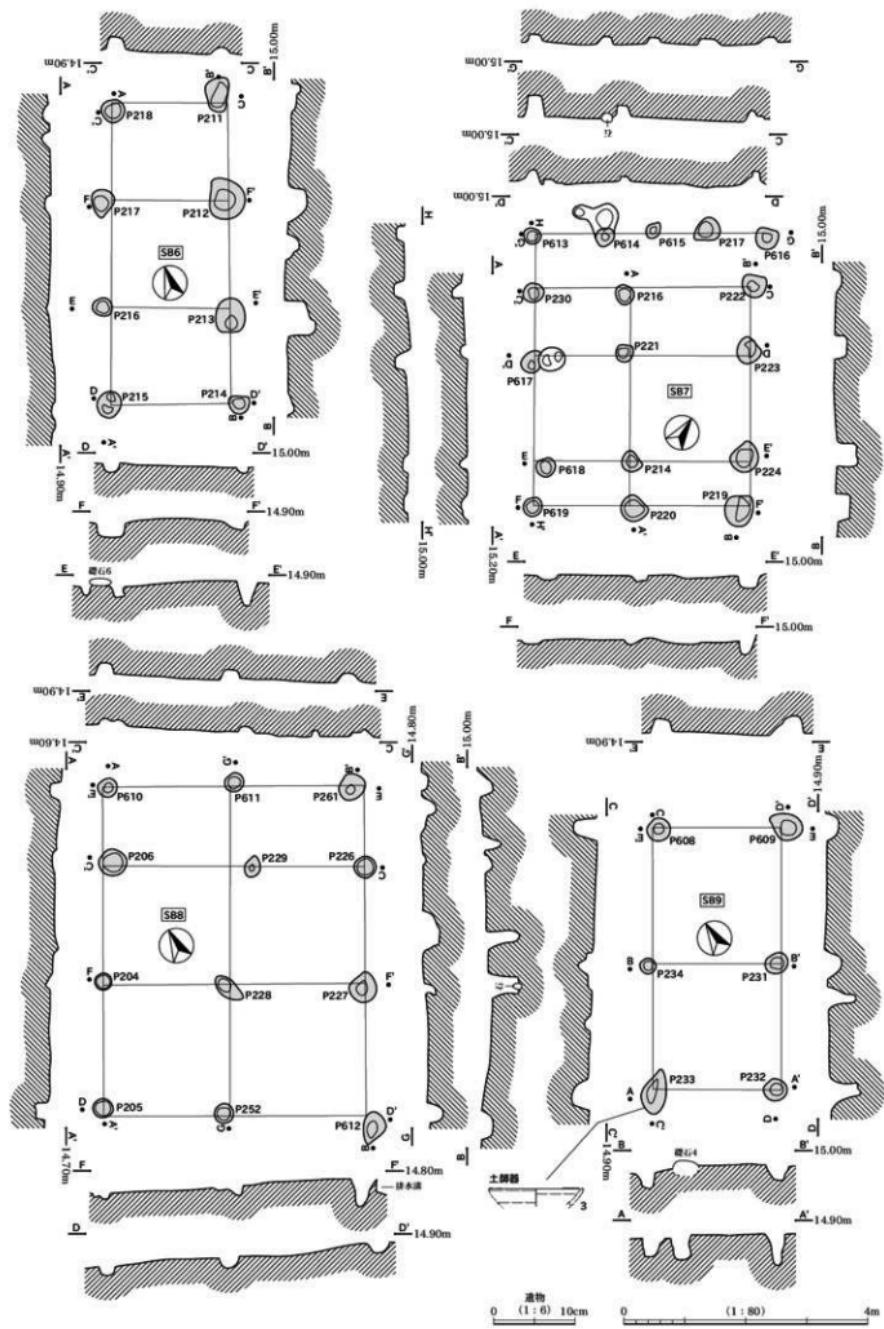
0 6cm (2.3)

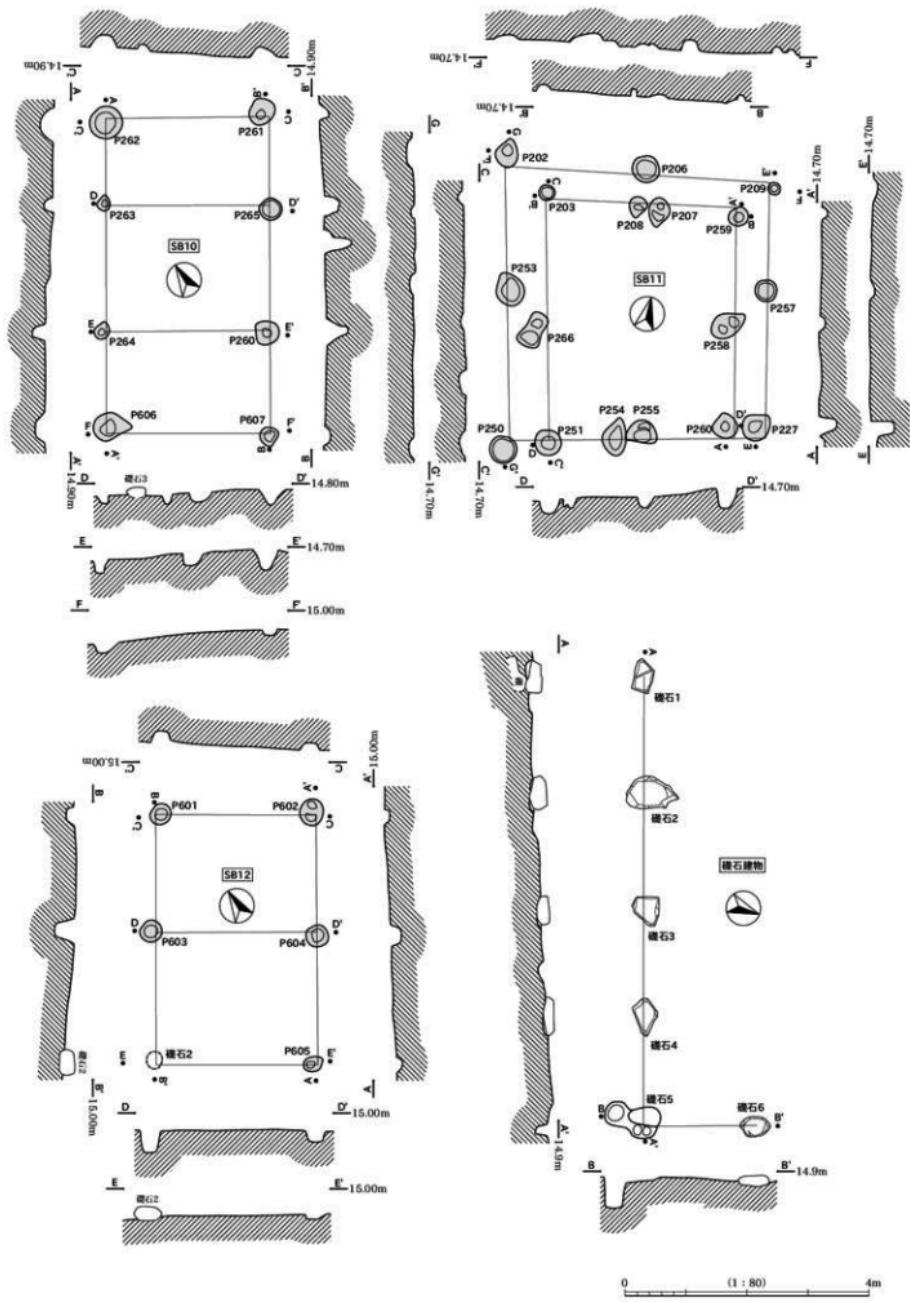


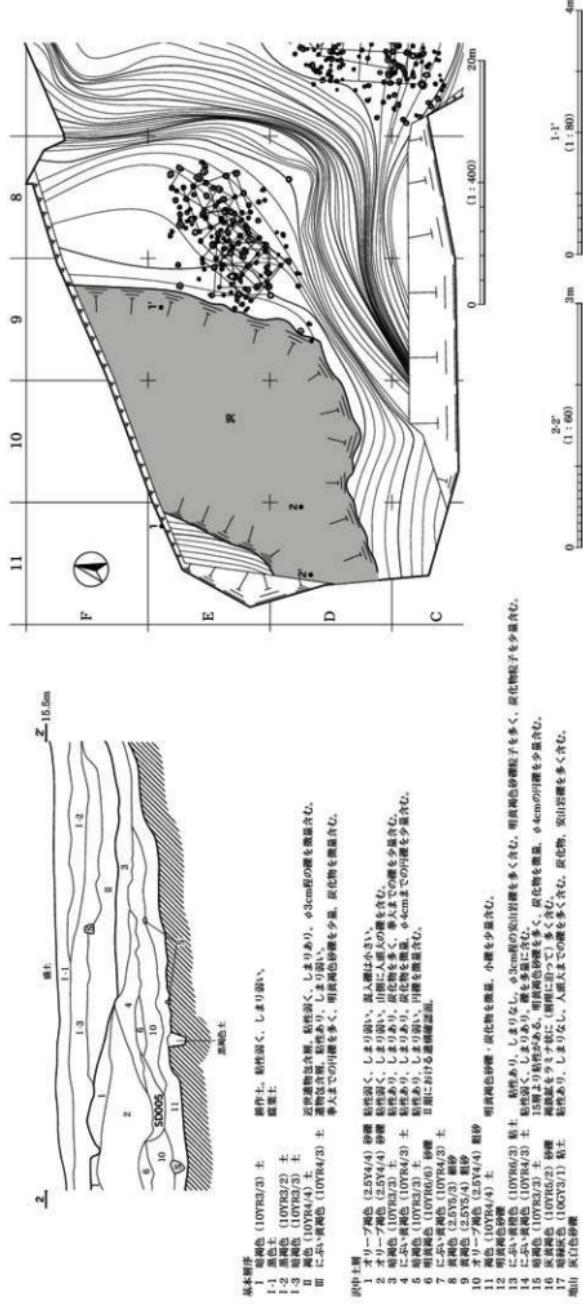
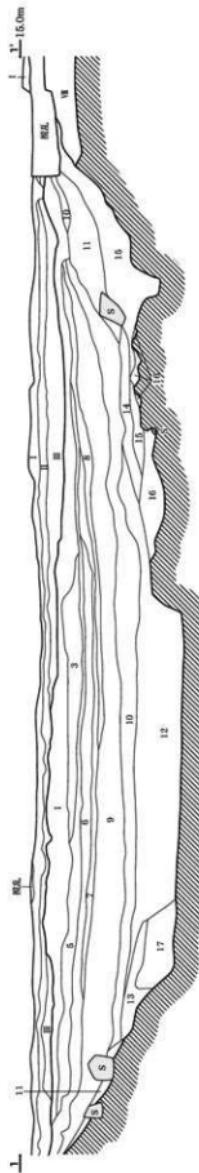






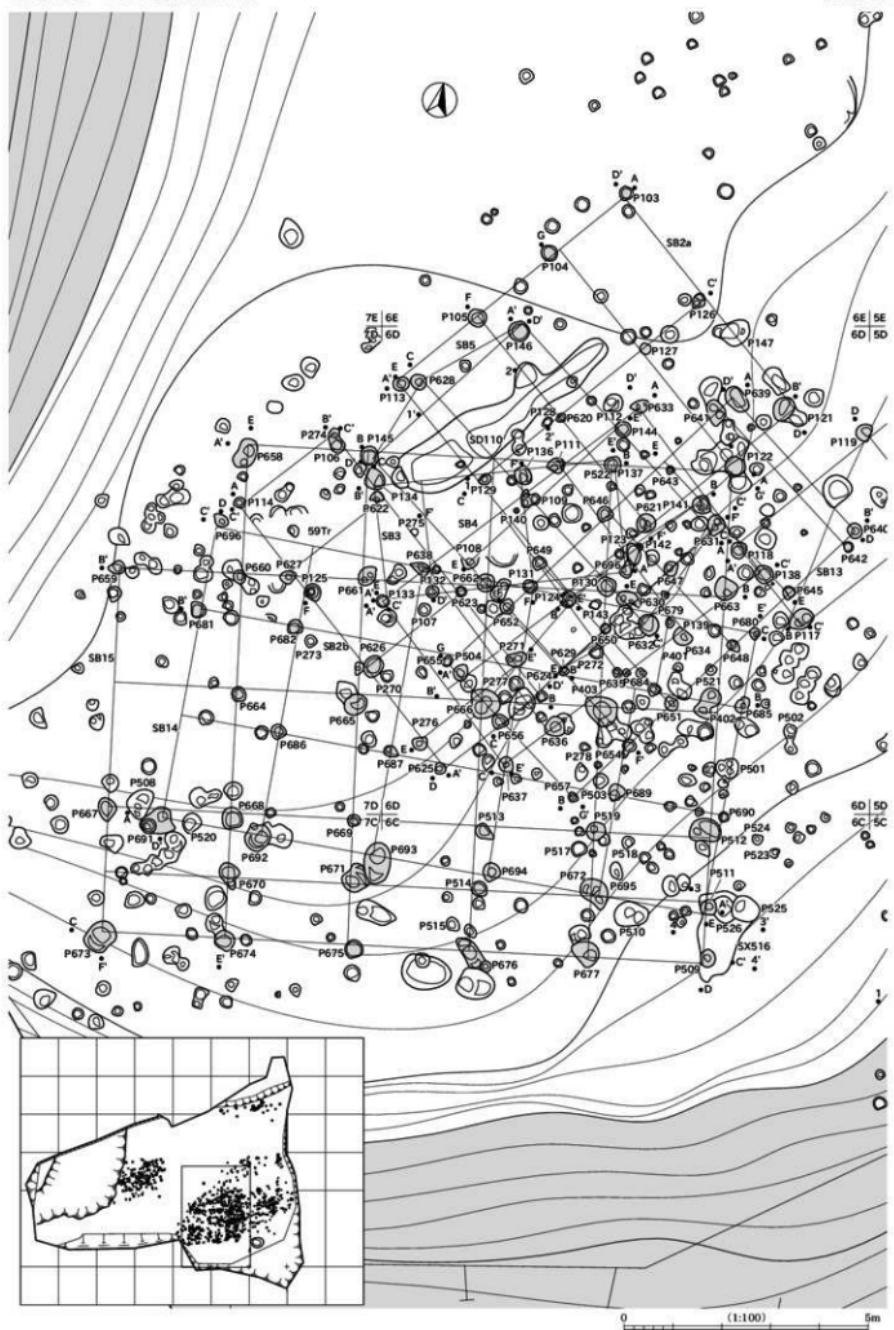




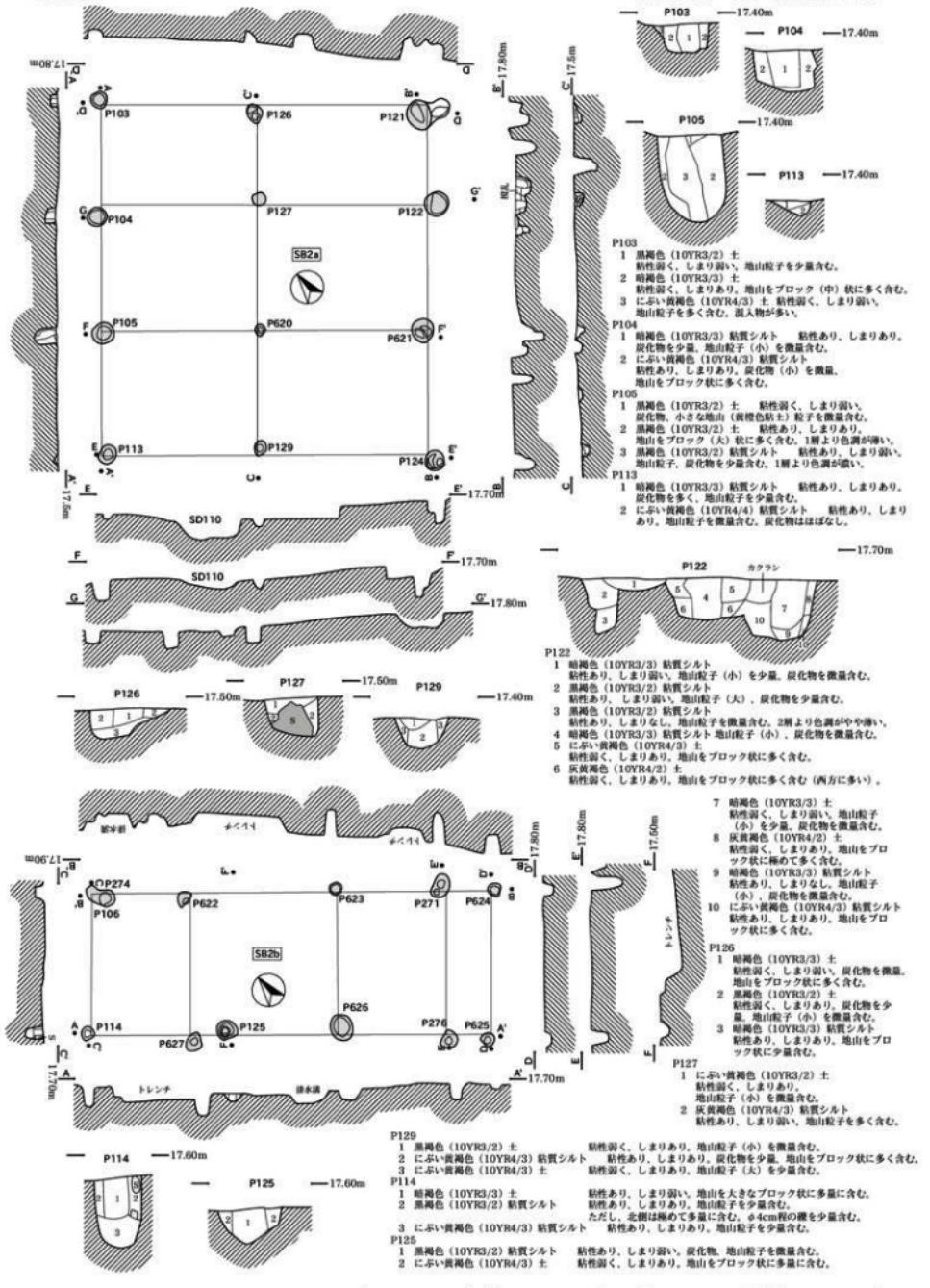


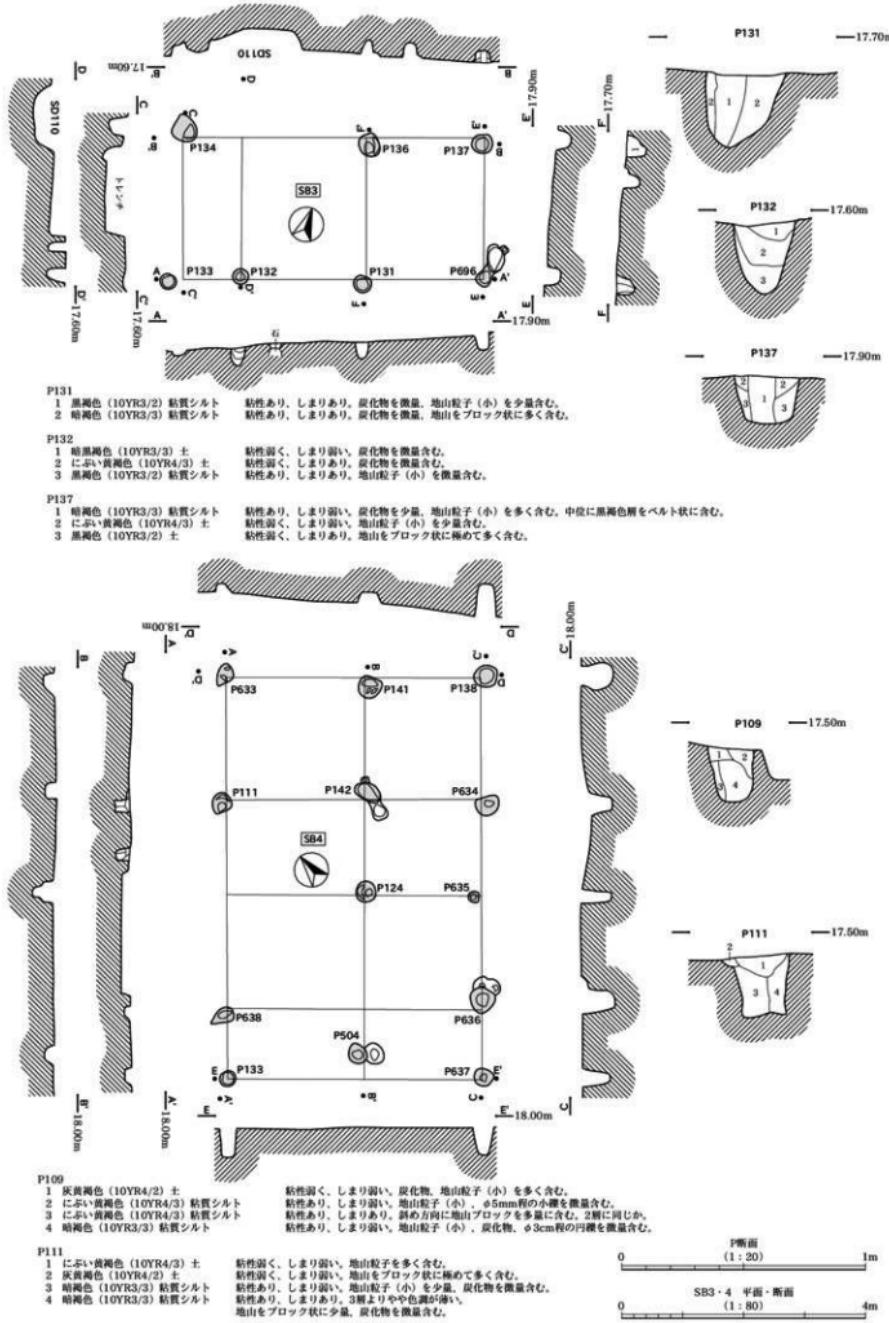
伝極楽寺跡 I期 遺構分割図(2)

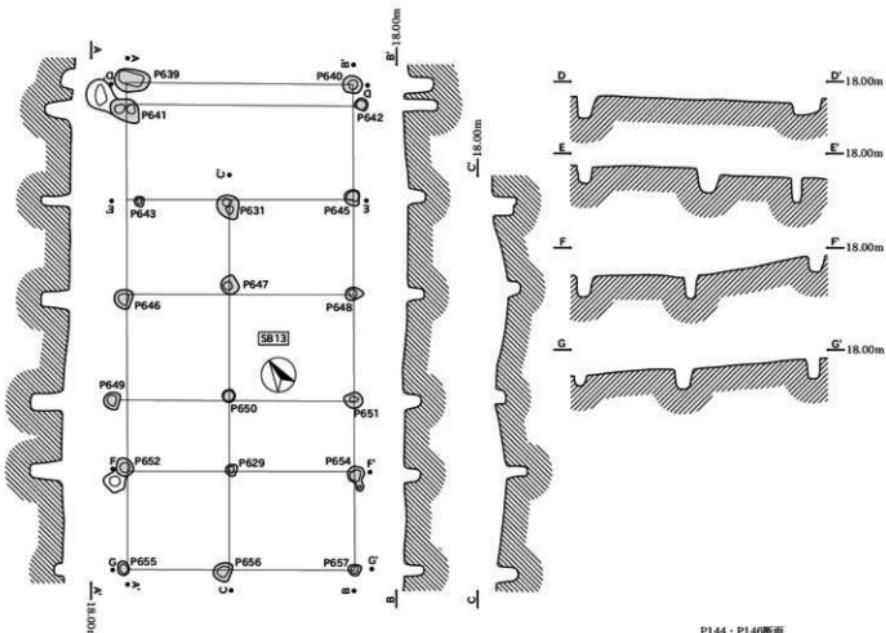
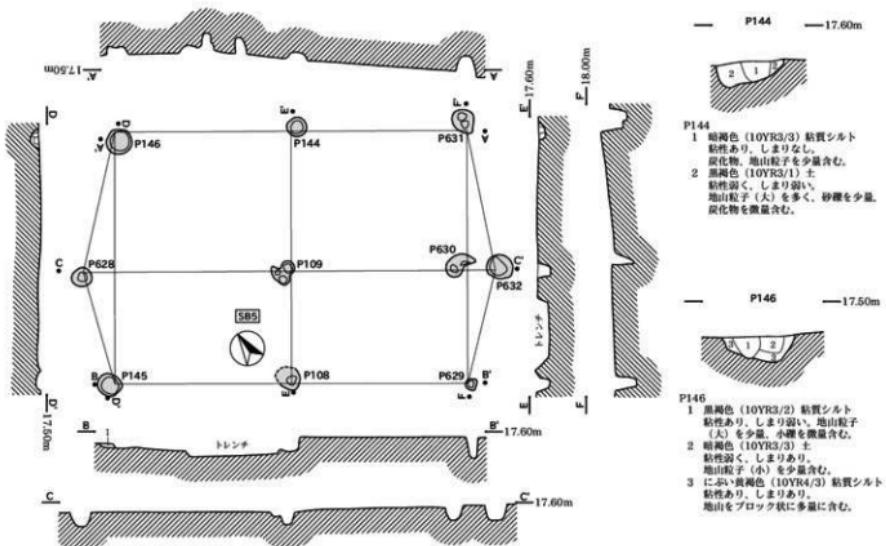
圖版 32



図版 33

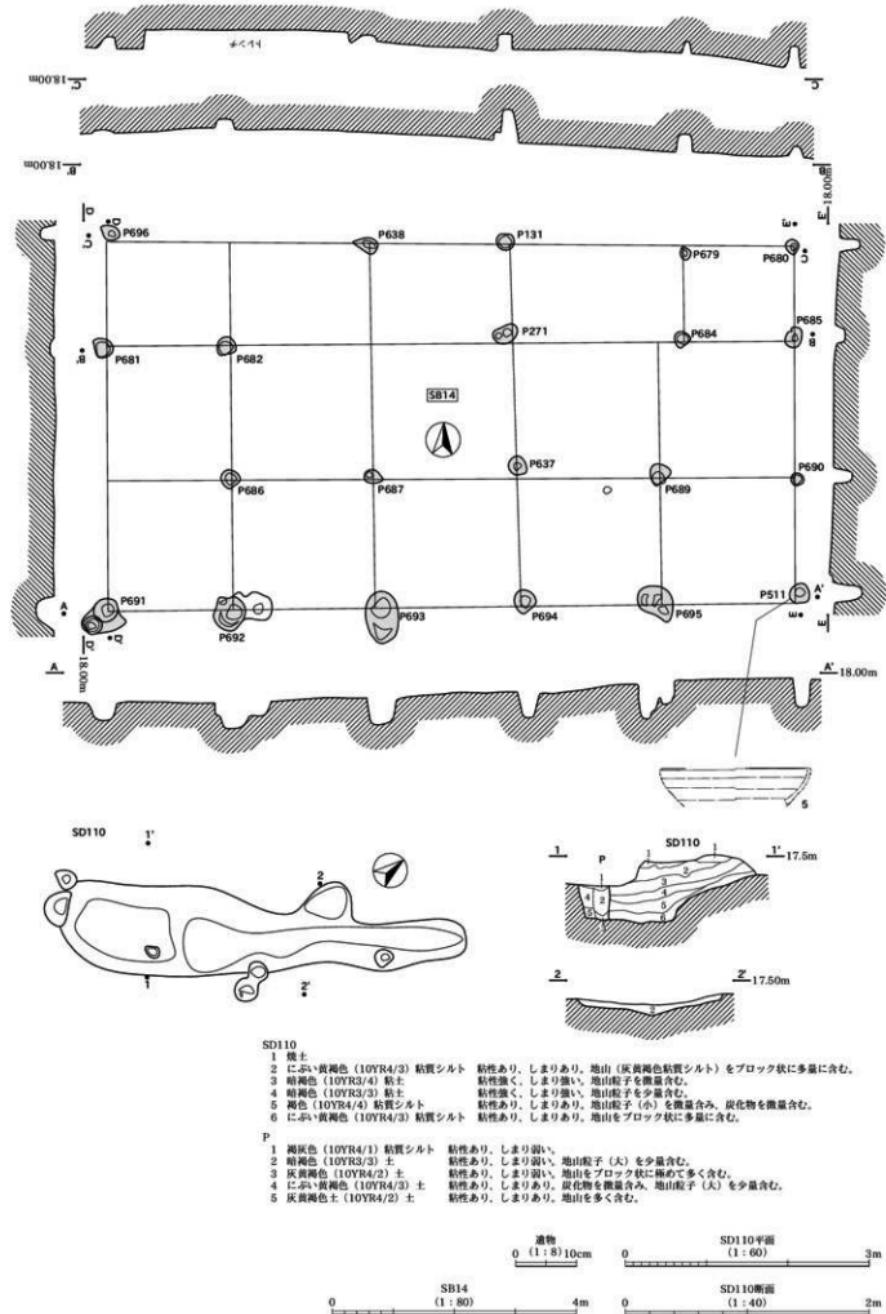


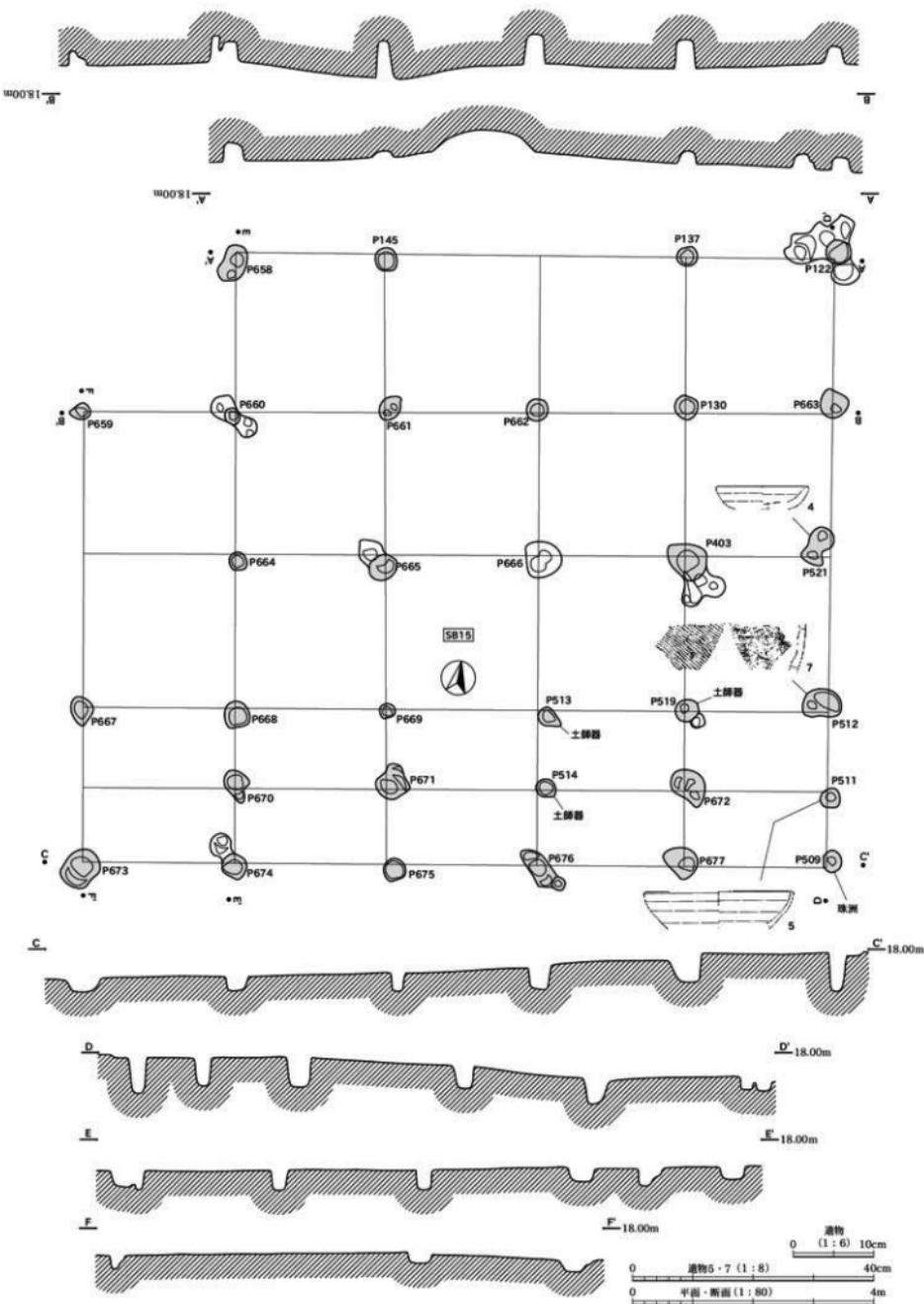




P144 - P146断面
(1:20) 1m

SB5・13 平面・断面
(1:80) 4m





伝極楽寺跡 1期 遺構分割図 (3)

圖版 38

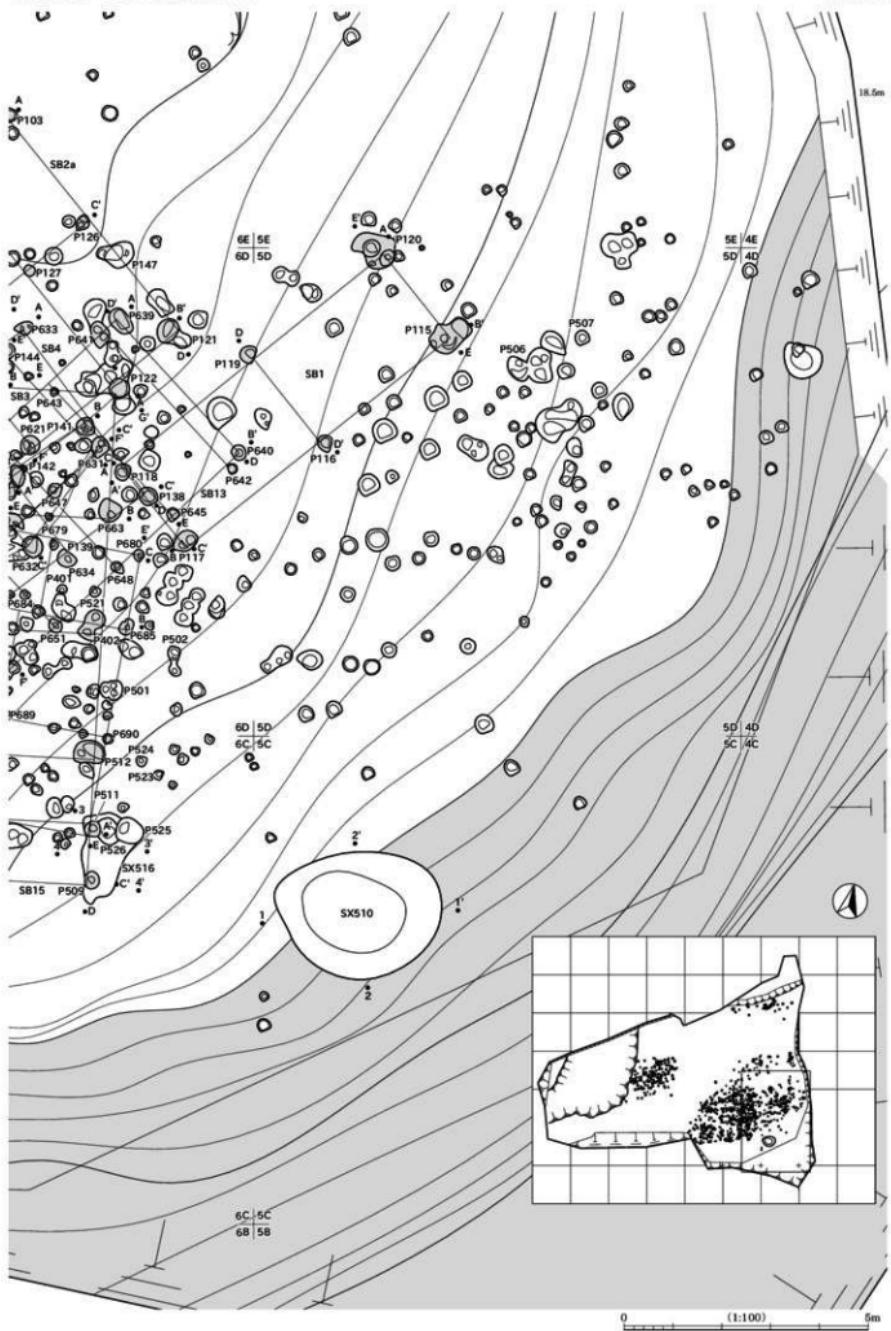
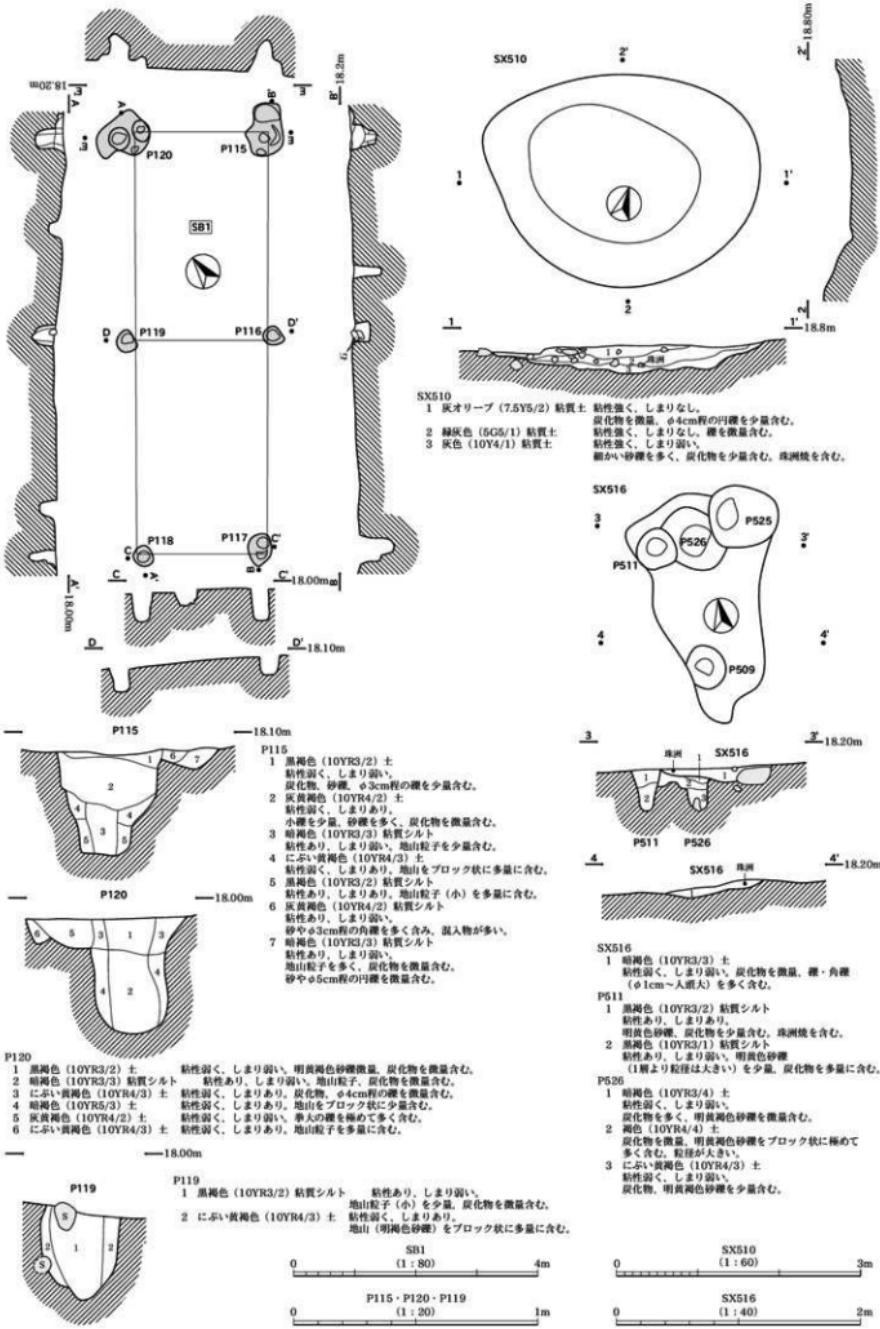
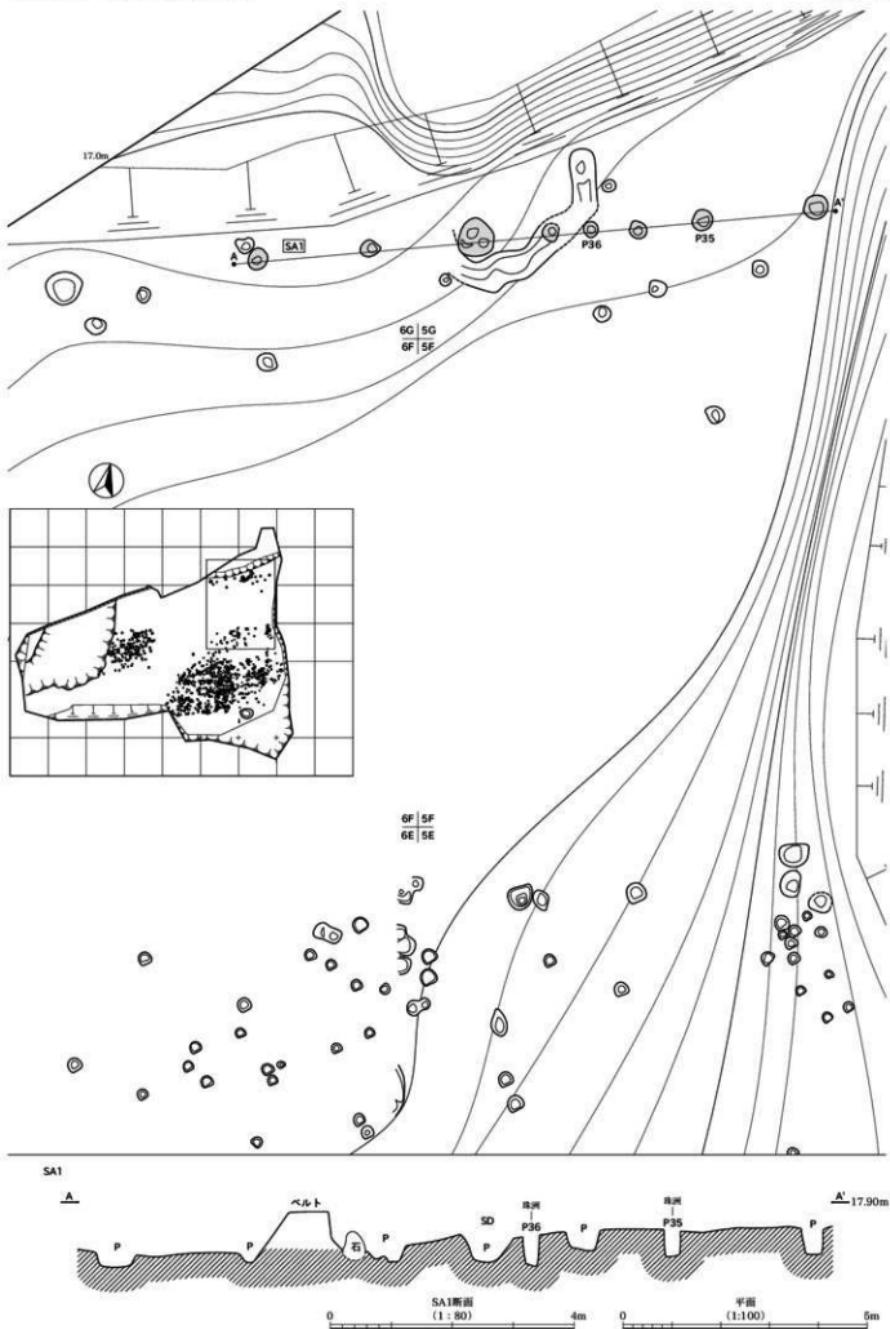
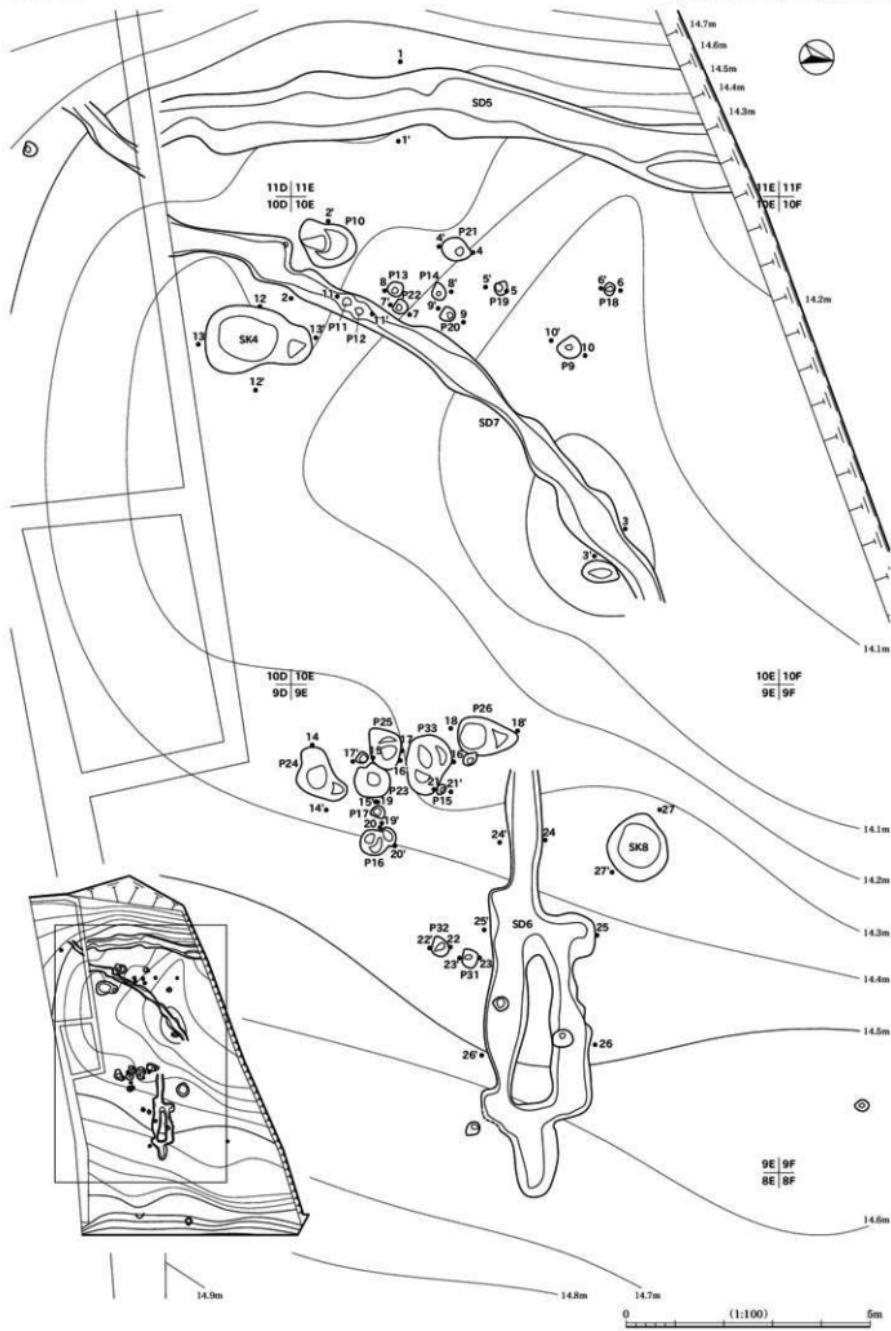


圖 版 39

伝極楽寺跡 Ⅰ期 遺構個別図 (8)

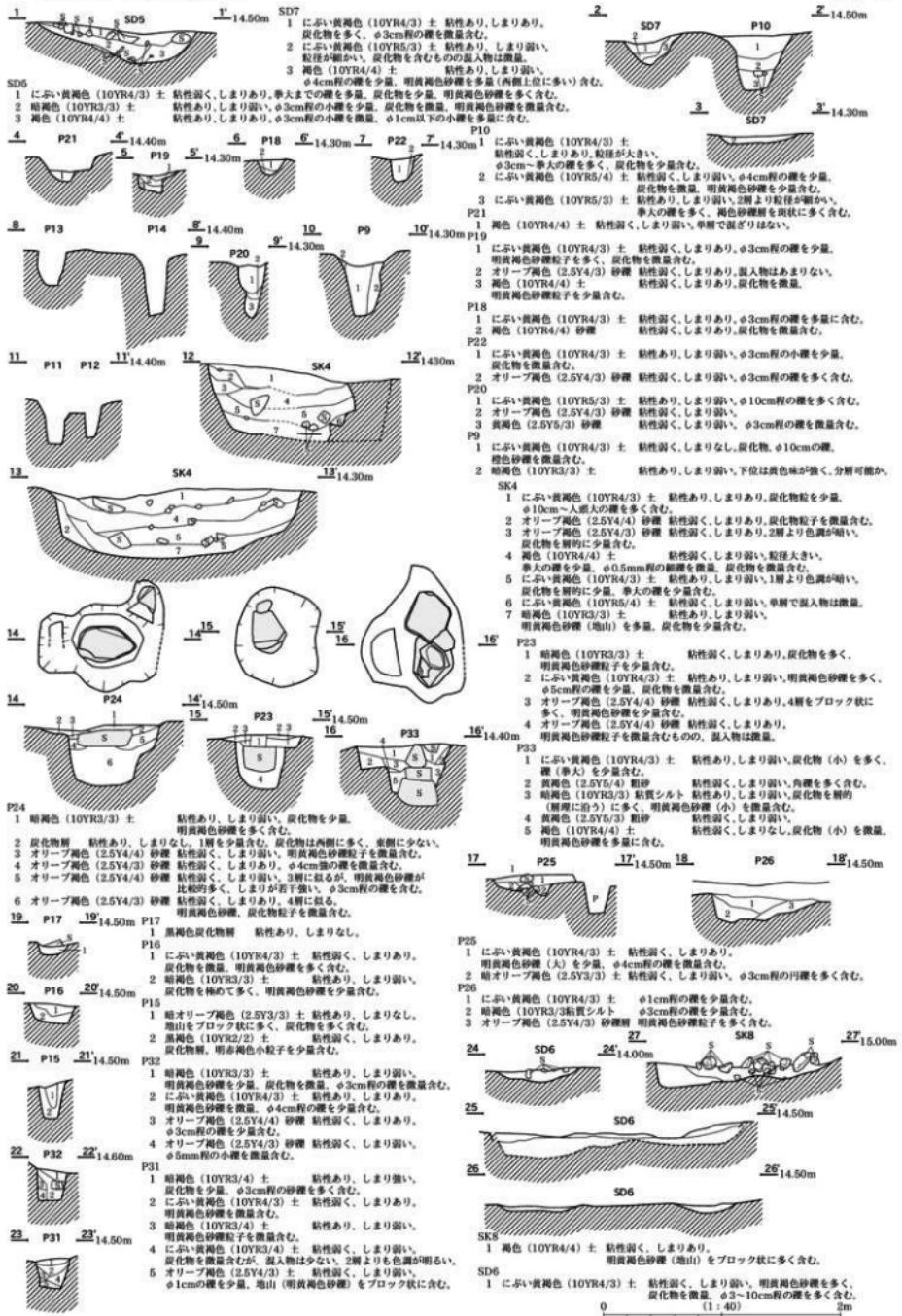




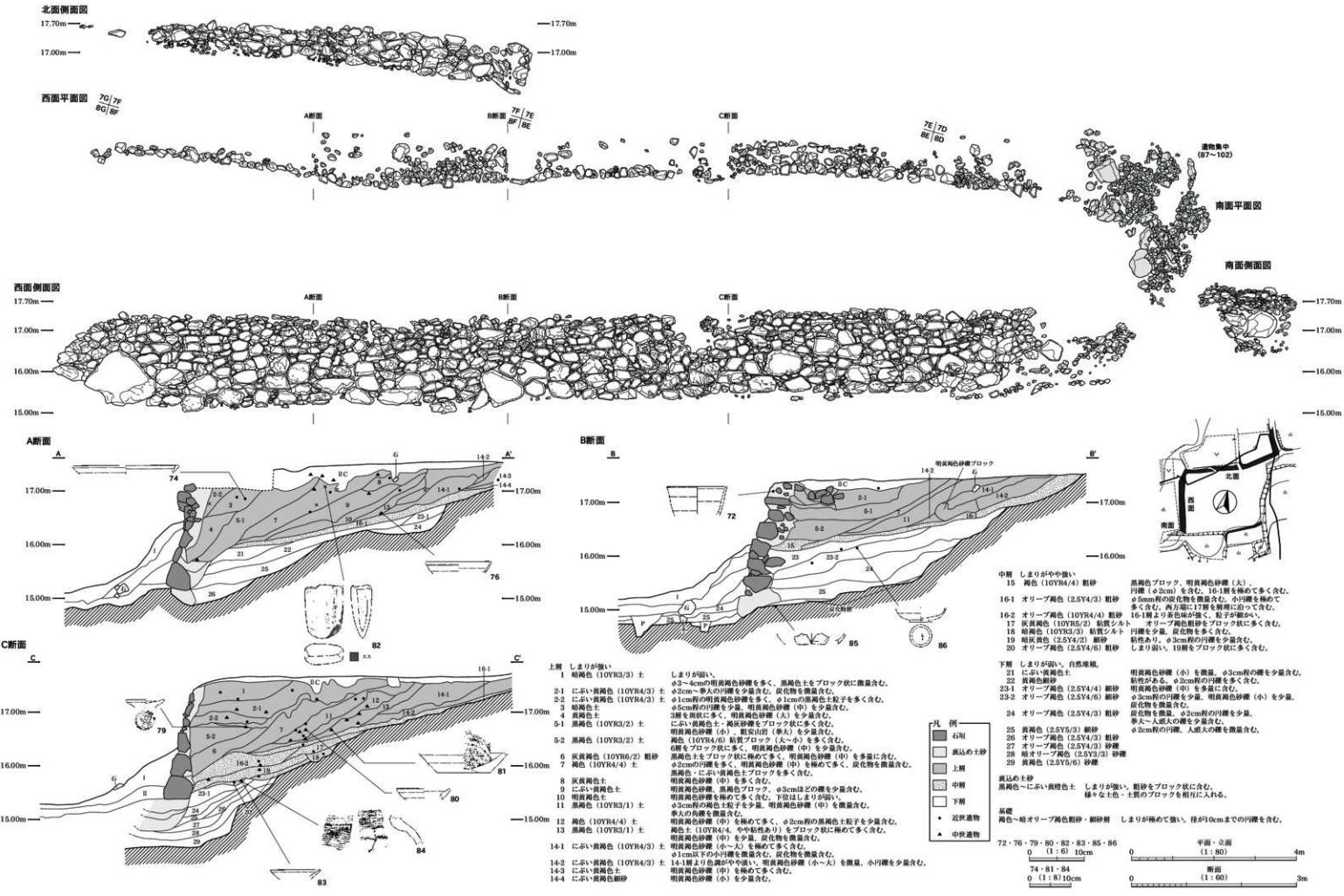


伝承來寺跡 II期 遺構個別図

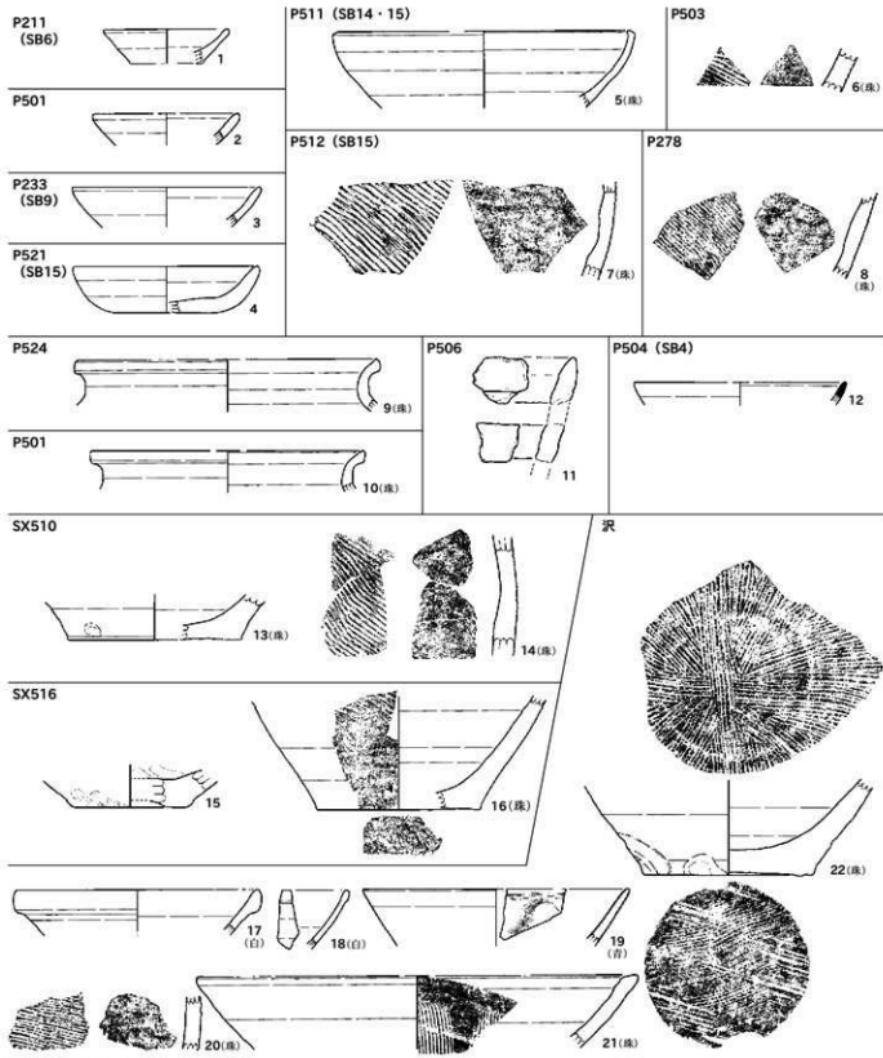
图版 42



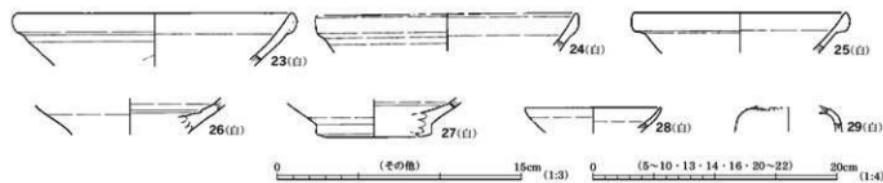
伝承寺跡 Ⅲ期 石垣 平・側・断面図



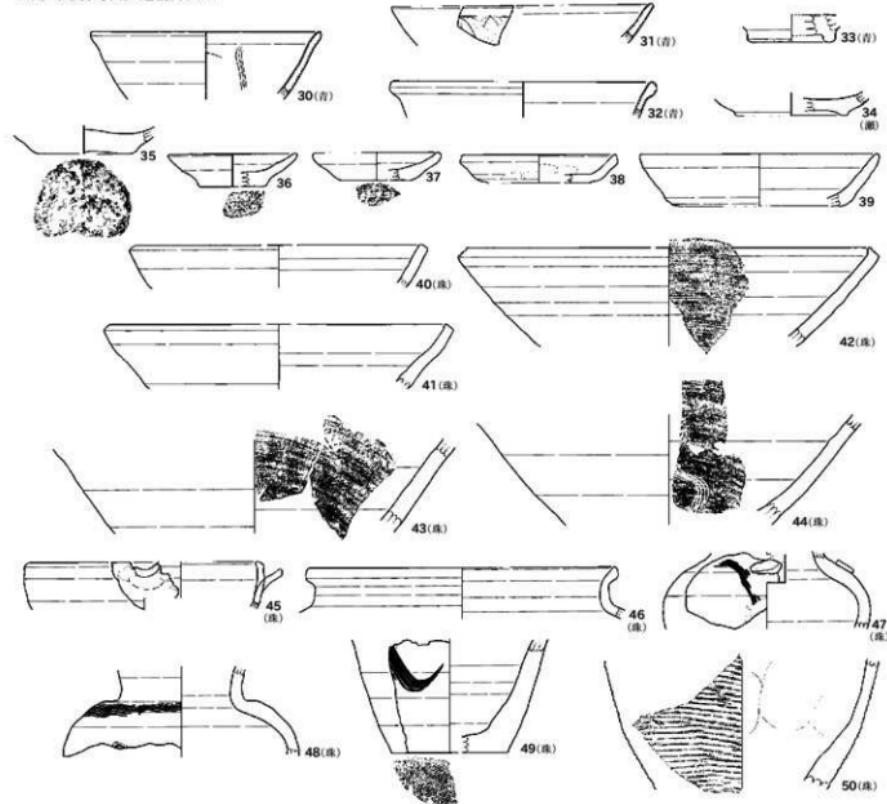
I期（鎌倉時代）遺構内出土



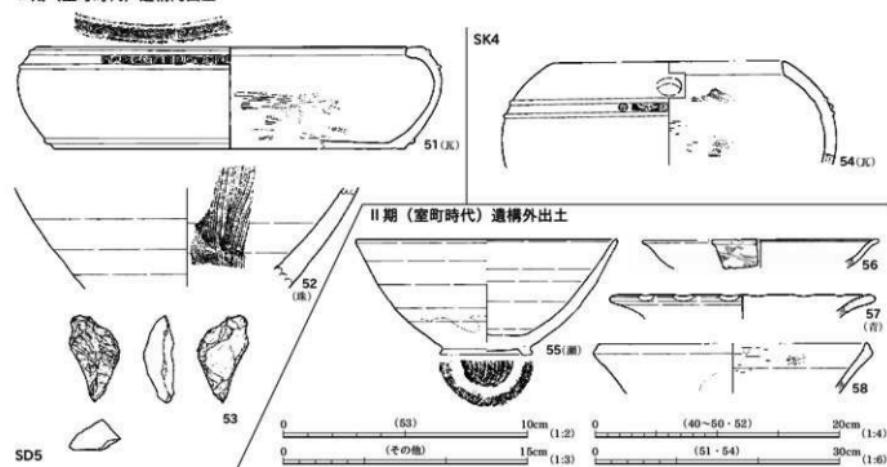
I期（鎌倉時代）遺構外出土

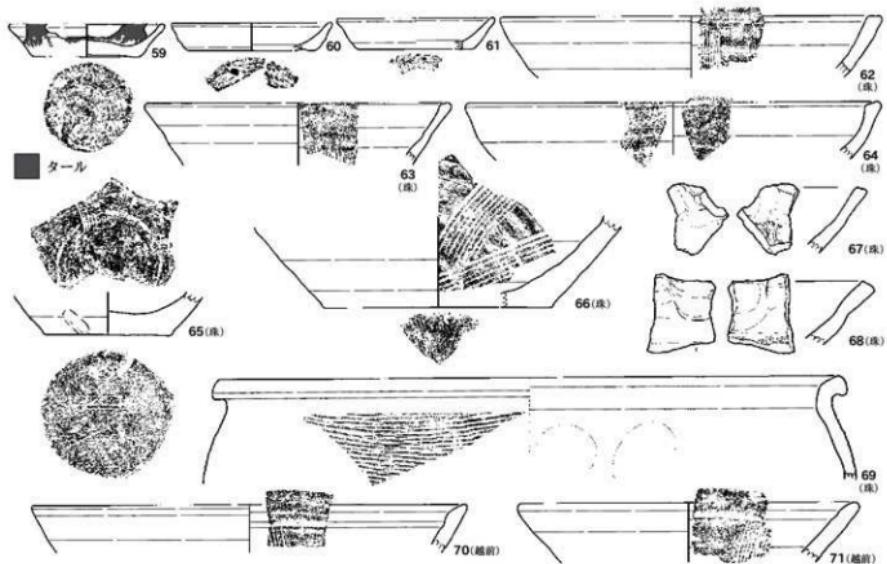


I期(鎌倉時代) 遺構外出土



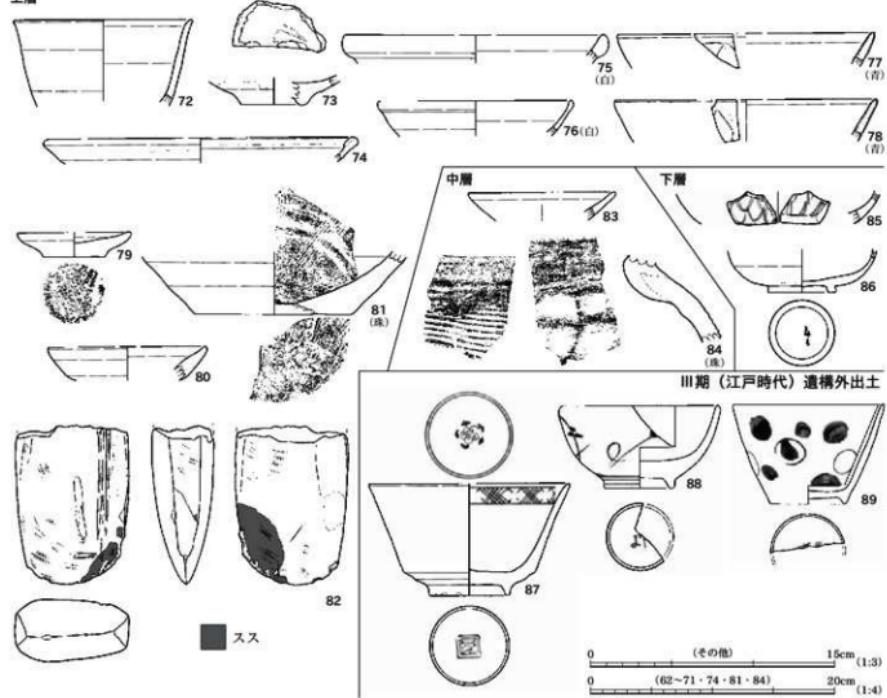
II期(室町時代) 遺構内出土



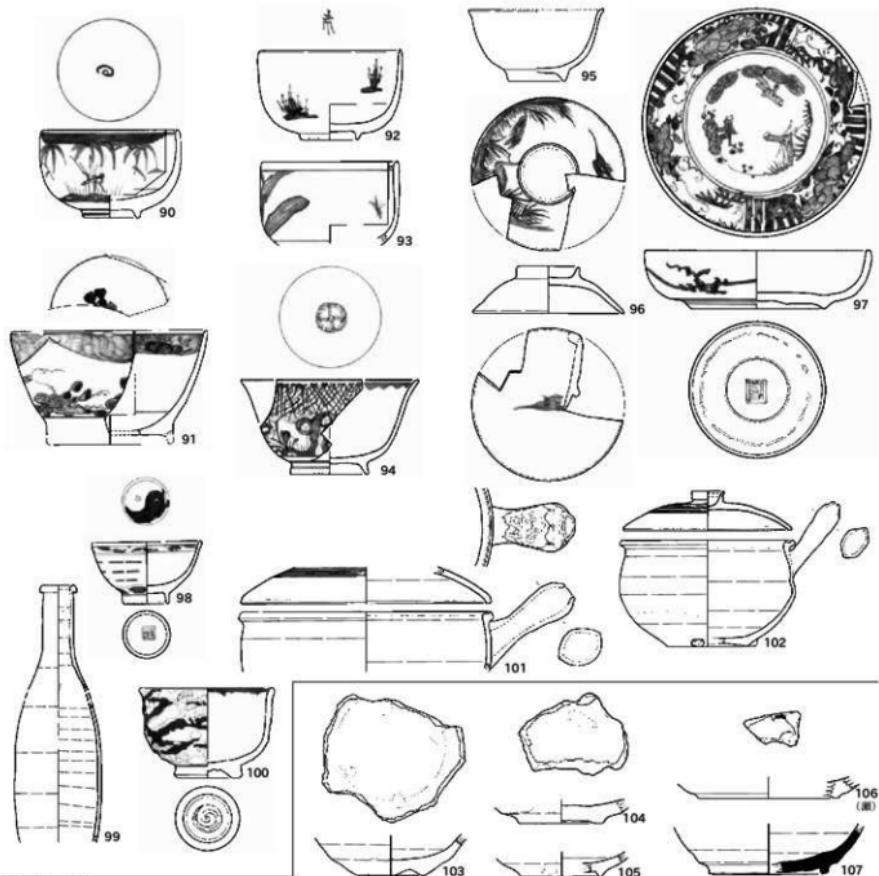


III期（江戸時代）石垣裏込め内出土

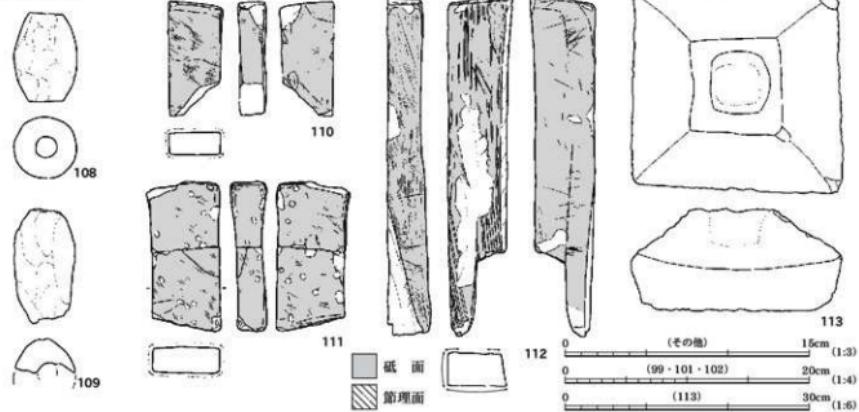
上層



0 (その他) 15cm (1:3)
0 (62~71・74・81・84) 20cm (1:4)



その他の遺物





遺跡近景 北から



遺跡近景 上空北から



河川1 b セクション（南から）



河川2 木製品出土状況（南から）



調査区完掘状況（西から）



4F1 基本層序（西から）



2F1・2 基本層序、SD1 セクション（西から）



1G1 基本層序（西から）



SD1 木製品出土状況（東から）



SD1 完掘状況（北から）



4E・F 完掘状況（南東から）



SX25 完掘（北東から）



SX3 セクション (北西から)



P4 セクション (南から)



SX13 セクション (南東から)



P15 セクション (南東から)



SX21A セクション (西から)



SX21C セクション (西から)



P22 セクション (西から)



SX35 田下駄出土状況 (西から)



河川1 a セクション（南から）



河川1 木製品等出土状況（南から）



河川1 完掘状況（南から）



河川1 SW1 検出状況（南西から）



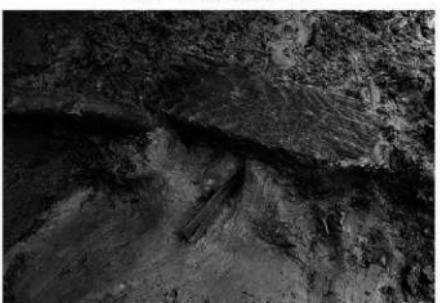
河川1 c セクション（南から）



河川1 SW2 検出状況（南から）



河川1 SD1合流部 棒状木製品出土状況（南から）



河川1 SD1合流部 木筒出土状況（東から）



河川1 合流部出土状況（東から）



河川1（前）・SD1（奥） 湿水状況（東から）



SX53 セクション（北から）



SX56 セクション（南から）



SD69 セクション（北から）



SX74 セクション（東から）



SD75A セクション（北から）



SX76 セクション（東から）



河川2 木製品出土状況（北西から）



河川2 gセクション（南から）



河川2 hセクション（南から）



河川2 iセクション（北から）



河川2 木製品出土状況（北西から）



河川2 拡張区出土状況（南から）



河川2 完掘状況（南から）



河川2 拡張区完掘状況（南から）



河川2 土器出土状況（東から）



河川2 土器出土状況（南から）



杭102断面（南から）



杭105断面（南から）



杭110断面（西から）



杭114断面（西から）

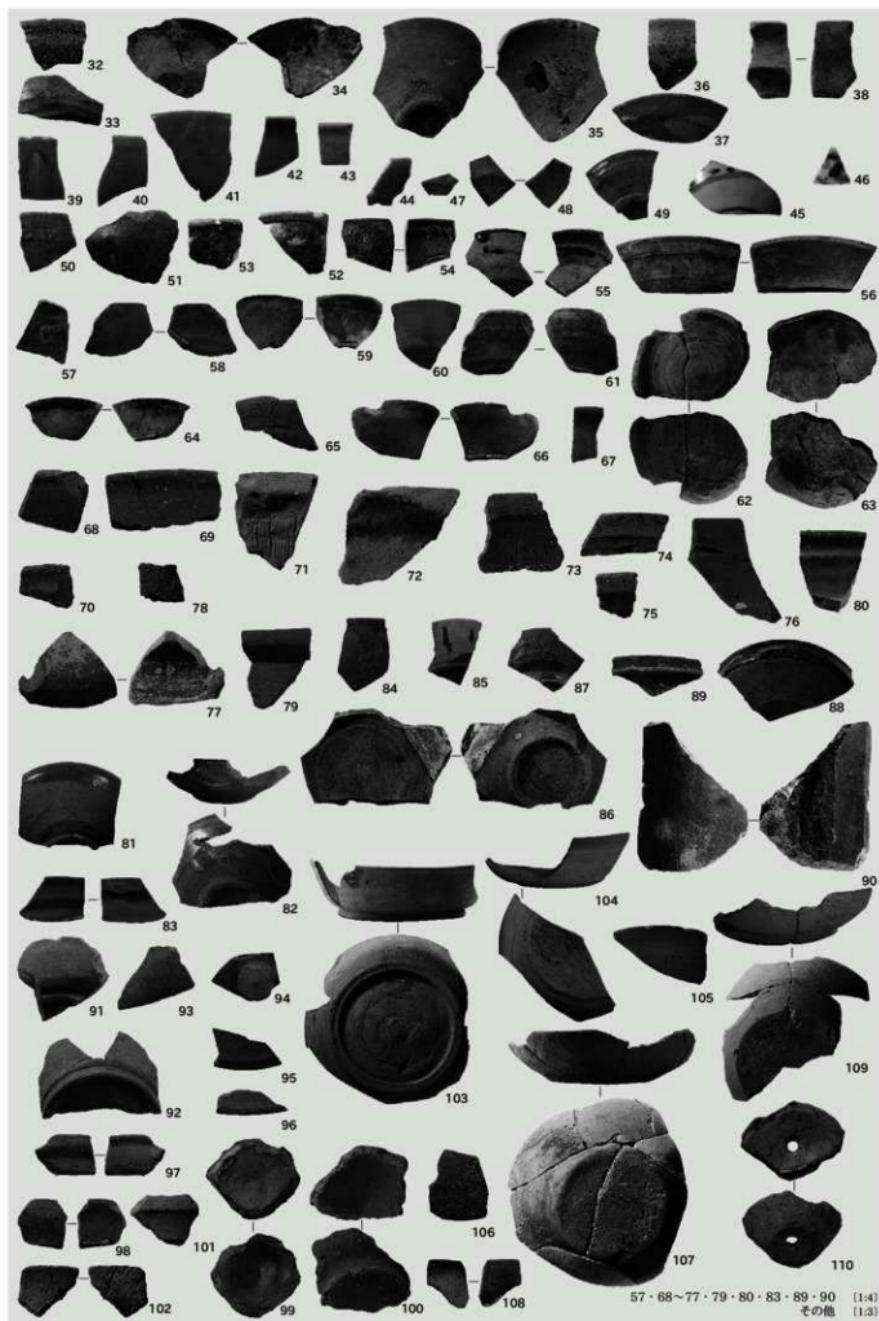


杭118断面（南から）

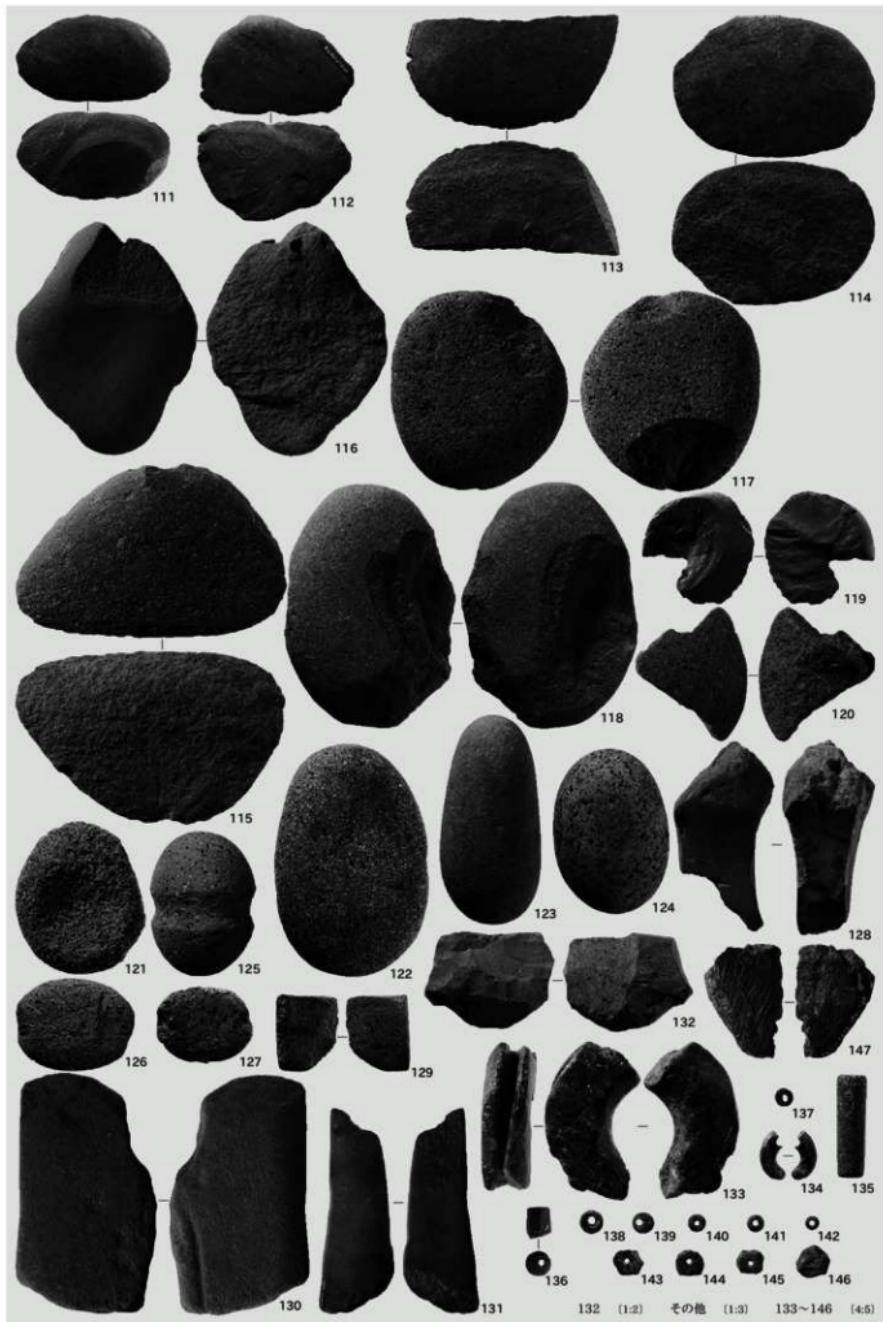


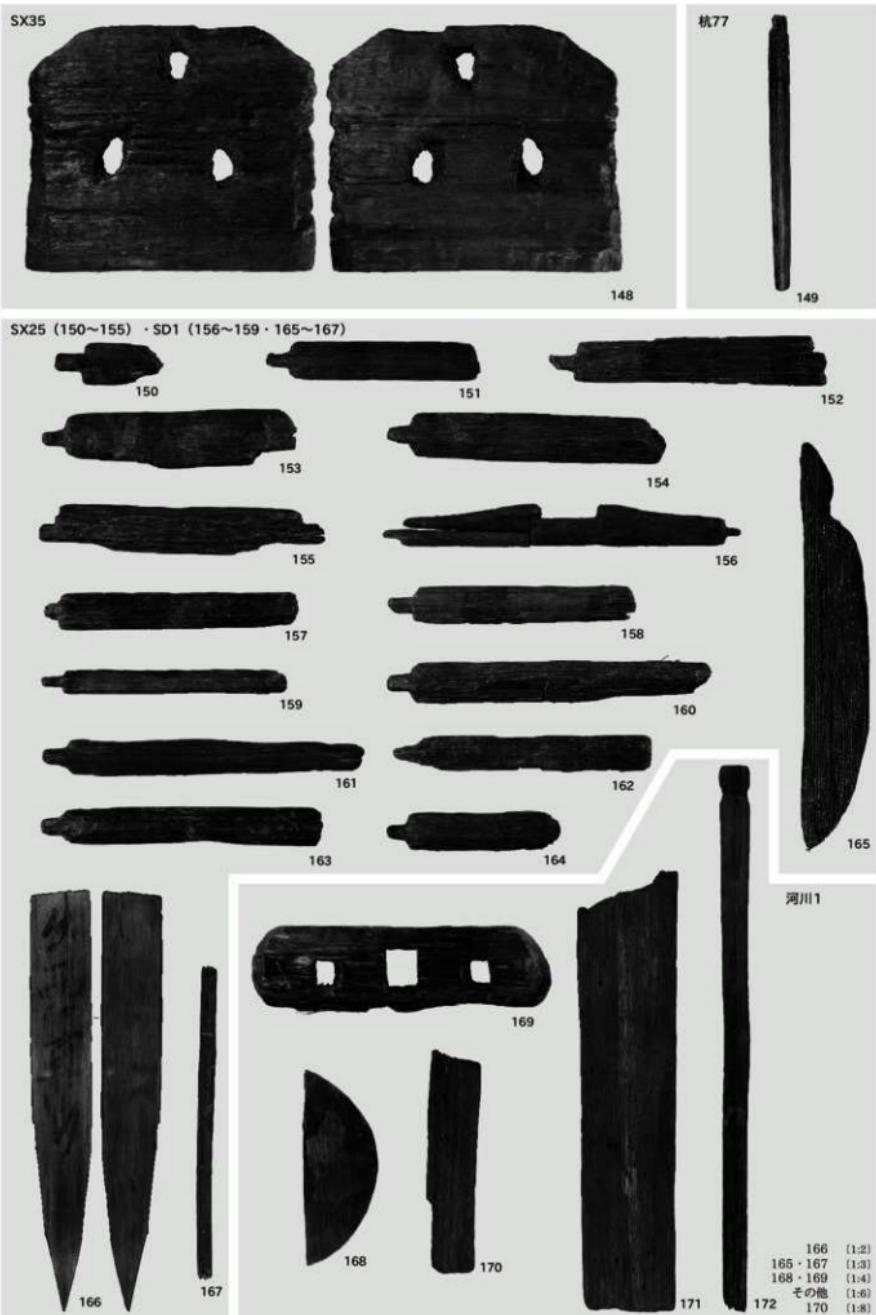
-2F24 木製品出土状況（西から）





57・68~77・79・80・83・89・90 [1:4]
その他 [1:3]



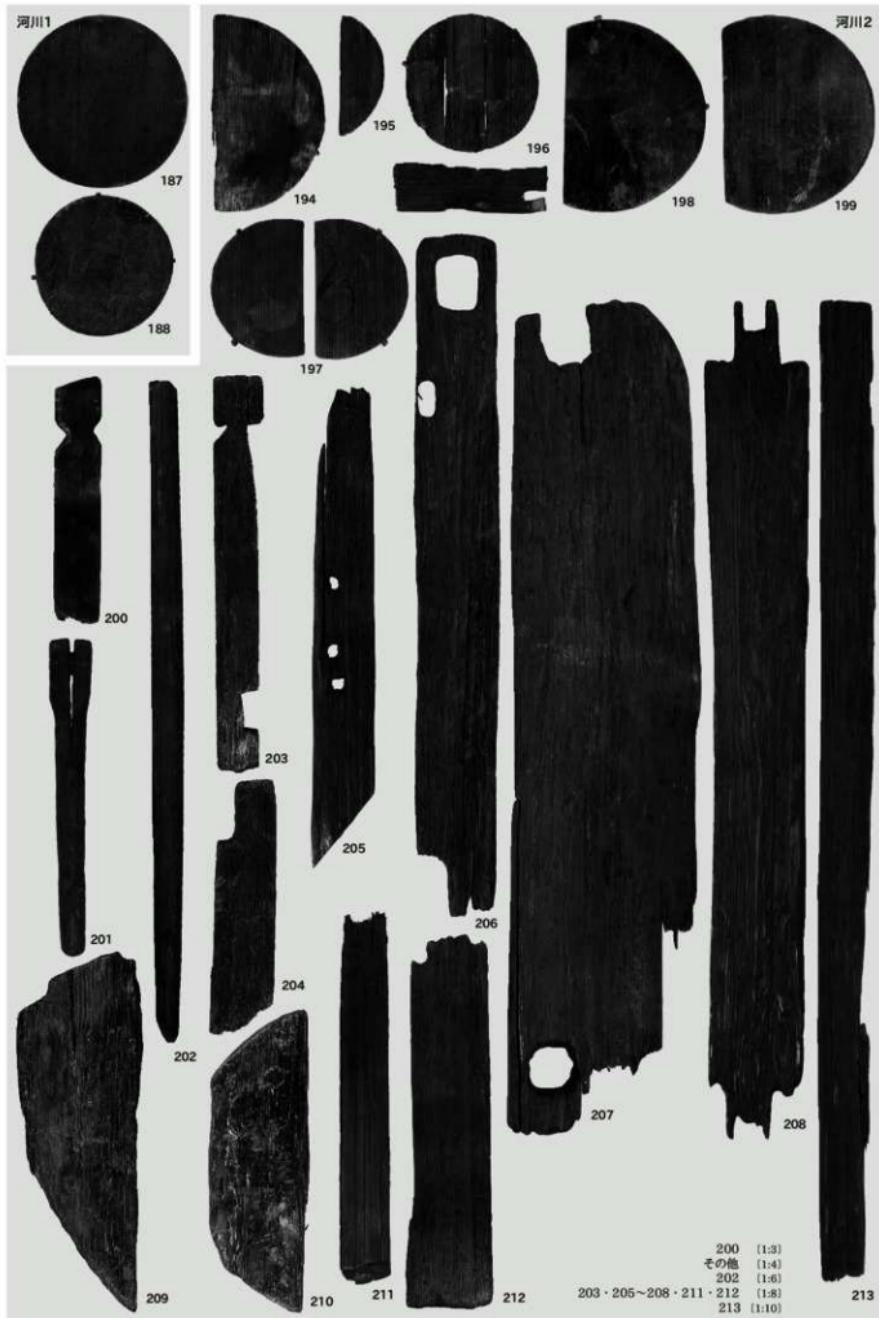


河川1

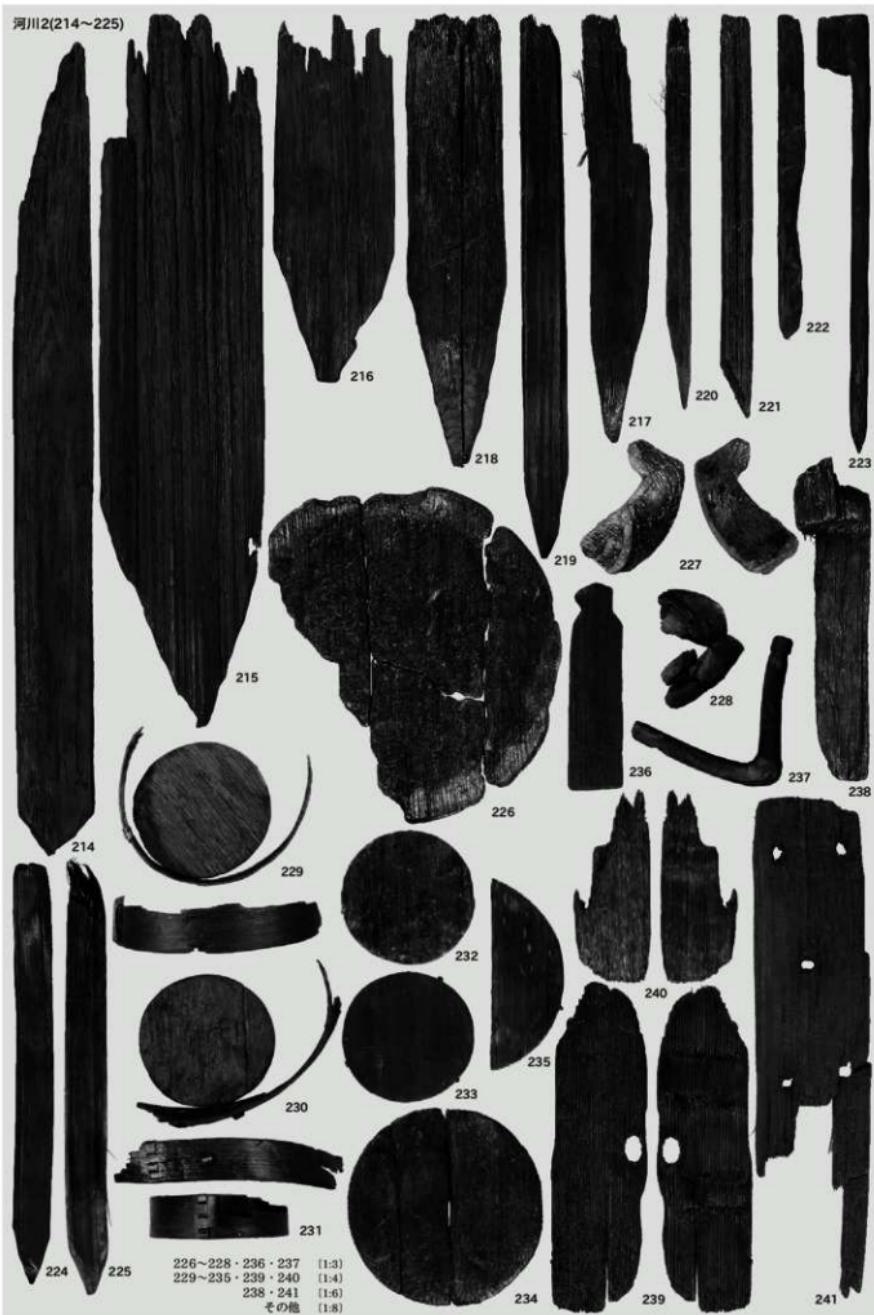


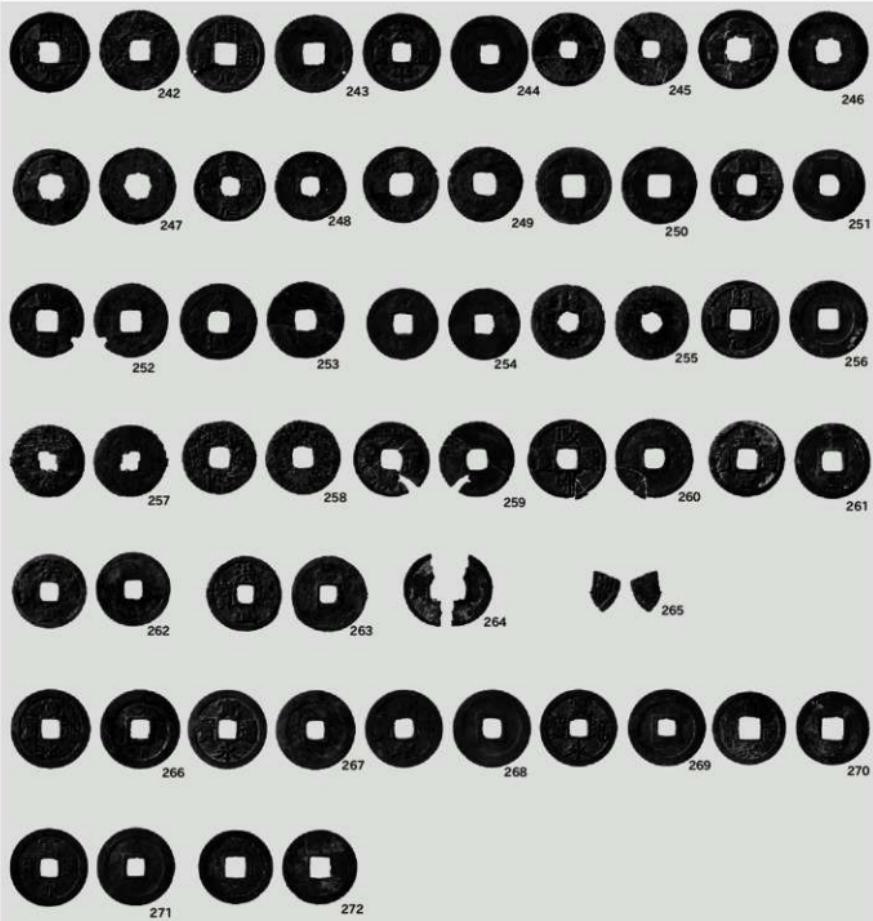
178・179・182 [1:3]
 177・183 [1:4]
 175 [1:6]
 その他 [1:8]
 174 [1:12]

192 193



河川2(214~225)







遺跡周辺の地形 南東から



遺跡近景 上空南から



調査前現況（西から）



遺跡近景（上空北から）



遺跡近景（北西から）



石垣検出状況（南西から）



上段下層 遺構検出状況（南西から）



下段下層 遺構検出状況（南から）



西面石垣 Bセクション（南東から）



西面石垣 Cセクション（南東から）



上段下層 完掘（北西から）



上段下層 完掘（南西から）



上段下層 横列完掘（東から）



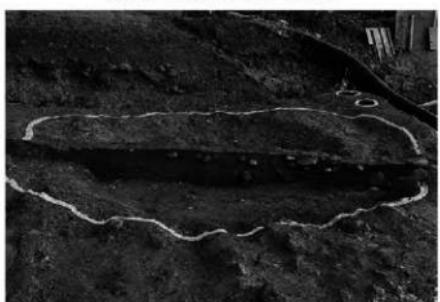
下段下層 完掘（北西から）



上段下層 SD110セクション（東から）



上段下層 SX516完掘（北から）



上段下層 SX510完掘（北から）



上段下層 SX510完掘（北西から）



SB1-P120 セクション（北から）



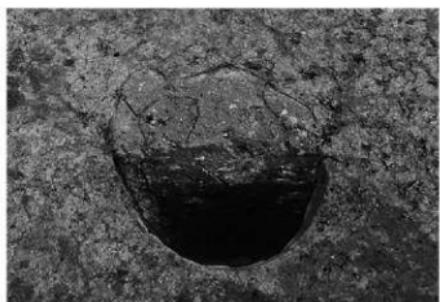
SB1-P115 セクション（南から）



SB2a-P103 セクション（北西から）



SB2a-P104 セクション（北西から）



SB2a-P105 セクション（北西から）



SB2a-P122 セクション（南東から）



SB2a-P127 セクション（南東から）



SB2b-P125 セクション（南西から）



SB3-P131 セクション（南から）



SB3-P137 セクション（北から）



SB4-P111 セクション（北西から）



SB5-P109 セクション（北西から）



SB5-P144 セクション（東から）



SB5-P146 セクション（北西から）



下段下層 沢 挿出状況（西から）



下段下層 沢 セクション（南西から）



下段上層 SK4 セクション（南から）



下段上層 SK4 セクション（東から）



下段上層 SK8 掘出状況（南から）



下段上層 SD6 完掘（西から）



下段上層 SD5 掘出状況（南から）



下段上層 SD5 セクション（南から）



下段上層 SD7 セクション（北から）



下段上層 P10 セクション（北から）



下段上層 P9 セクション（西から）



下段上層 P18 セクション（西から）



下段上層 P19 セクション（西から）



下段上層 P23 セクション（南から）



下段上層 P24 セクション（南から）



下段上層 P31 セクション（西から）



下段上層 P32 セクション（西から）



下段上層 P33 セクション（西から）



石垣 調査前清掃後の状況 (南西から)



石垣 表土除去後の状況 (西から)



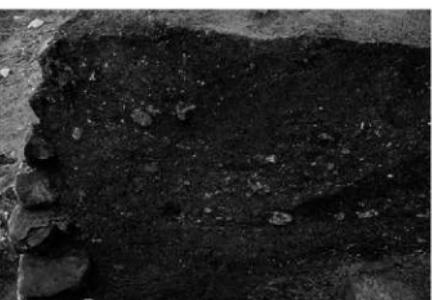
石垣 Bセクション (南西から)



石垣 Bセクション西側 (南から)



石垣 Cセクション (南西から)



石垣 Cセクション (南から)



石垣 南隅検出状況 (北西から)



石垣 検出状況 (南西から)



上段上層・石垣 完掘状況（北西から）



上層 完掘状況（西から）



上段南東区画 検出状況（北西から）



上段南東区画石垣 セクション（東から）



上段南東側 セクション（南西から）



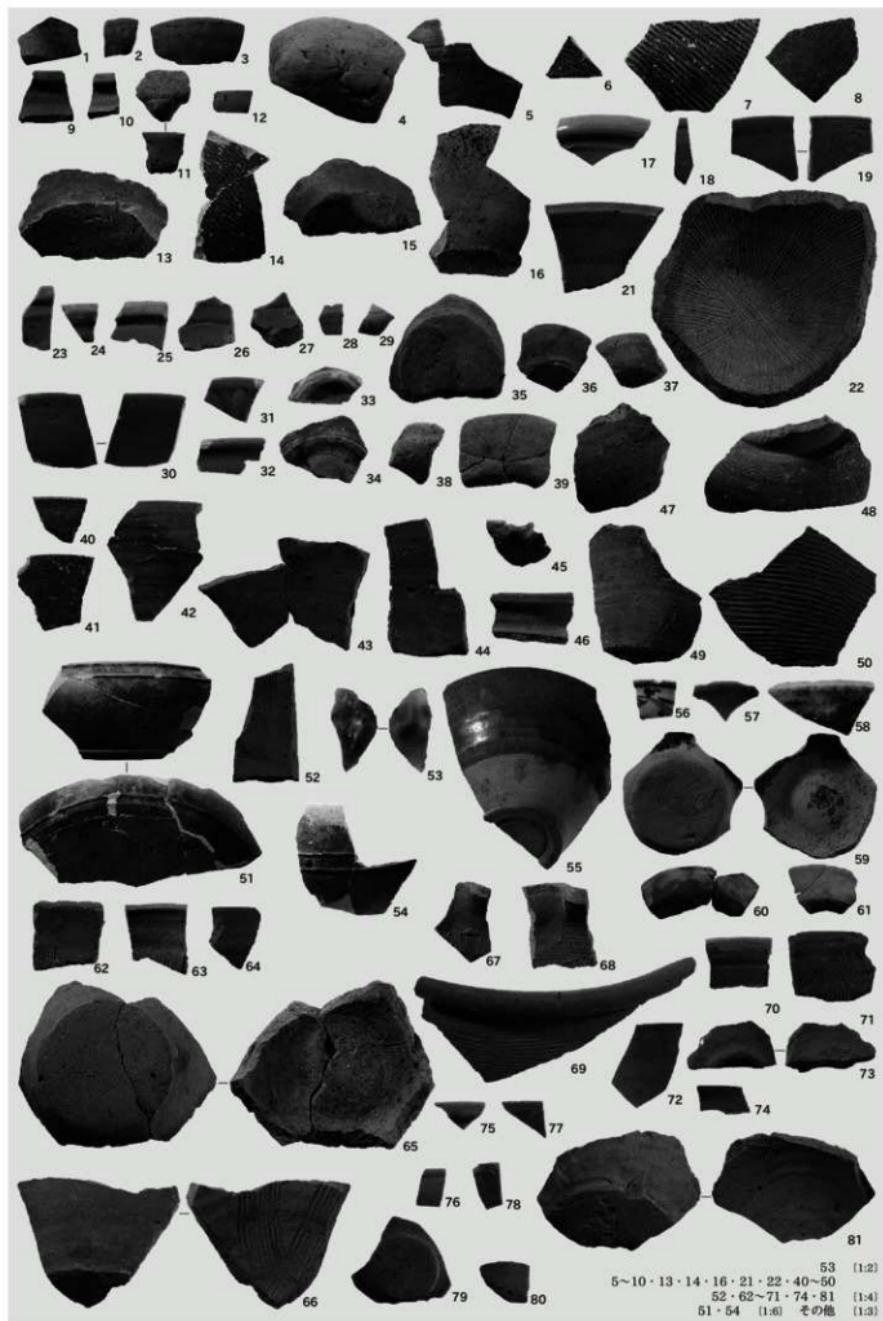
南西斜面部 トレンチ調査状況（南東から）



調査区南東側 完掘状況（北西から）

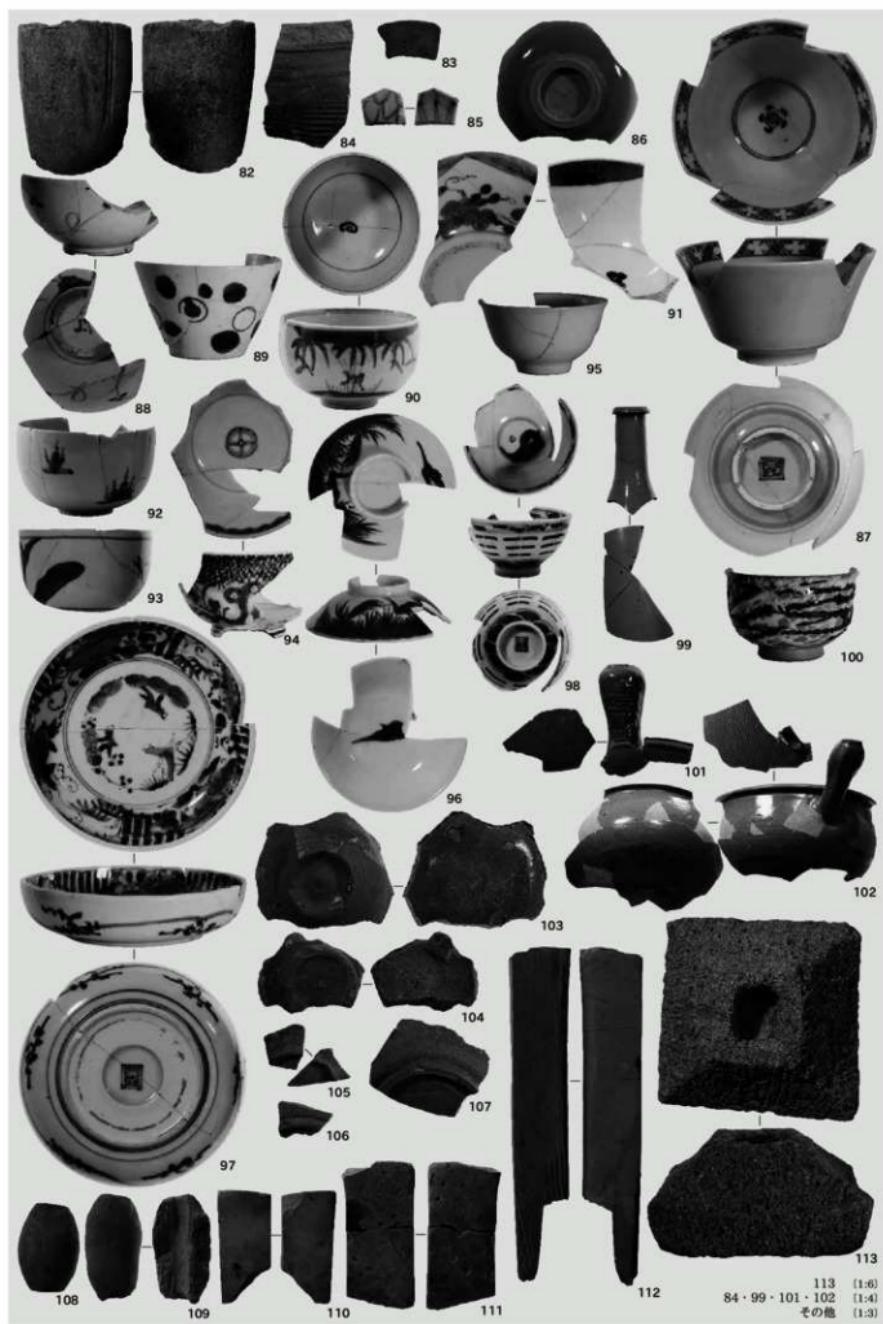


調査区東側 完掘状況（北から）



5~10・13・14・16・21・22・40~50
52・62~71・74・81 [1:4]
51・54 [1:6] その他 [1:3]

53 [1:2]



報告書抄録

ふりがな	せんなんみみなみいせき日・でんごくらくじあと							
書名	前波南遺跡Ⅱ・伝極楽寺跡							
副書名	一般国道8号系魚川東バイパス関係発掘調査報告書							
卷次	V							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第209集							
編著者名	石川智智・樋口重正・春日真実・加藤学・小川真一(以上、新潟県埋蔵文化財調査事業団)、相羽重徳・松水勝知(以上、株式会社古田組)、高橋義(パリノ・サーヴェイ株式会社)、鹿又喜隆(株式会社加速分析研究所)							
編集機関	財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250(25)3981							
発行年月日	2010(平成22)年3月31日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
せんなんみみなみいせき 前波南遺跡	市町村 新潟県糸魚川市大学 大和川字前波ほか	15216	276	37度 02分 54秒	137度 53分 55秒	20070423 ~ 20070806	1,300m ²	国道8号系魚川 東バイパス建設
でんごくらくじあと 伝極楽寺跡	新潟県糸魚川市大学 田伏字高畑1175-1 番地ほか	15216	158	37度 03分 07秒	137度 54分 30秒	20070801 ~ 20080123	2,585m ²	国道8号系魚川 東バイパス建設
所取遺跡名	種別	時期	主な遺構		主な遺物	特記事項		
せんなんみみなみいせき 前波南遺跡	遺物包含地	縄文時代			縄文土器	「出雲」の文字を含む木簡が出土した。当時の出雲(鳥根県)や都(京都府)以外の地で出土することは稀で、糸魚川と出雲の密接な関係(交流)を示唆する資料として注目される。		
		弥生時代			弥生土器			
		古墳時代	自然流路		土師器、須恵器、石器(橢円形石器)、石製品(砥石)、玉作関連資料(白玉・管玉・勾玉・剝片)、木製品(建築材・加工材等)			
		古代	ビット・土坑・溝・杭・性格不明遺構・自然流路		須恵器、土師器、木製品(木簡・曲物・形代・農具等)			
	中世			青磁、白磁、青花、珠洲焼、瀬戸美濃焼、越前焼、中世土師器、木製品、鉢貨				
	近世			肥前系陶器、越中瀬戸焼、鉢貨				
	不明			石器(磨石類)、石製品(石鍤・砥石)				
でんごくらくじあと 伝極楽寺跡	鎌倉時代 ~ 室町時代	掘立柱建物・礎石建物・櫛・ビット・土坑・溝・性格不明遺構			青磁、白磁、珠洲焼、瀬戸美濃焼、越前焼、中世土師器、瓦器、石製品(砥石・火輪)	寺院跡とは考え難く、「極楽寺」が存在した痕跡を確認できなかったが、12~13世紀の山際に立地する集落の様相がうかがえる。		
	近世	石垣・方形区画			肥前系陶磁器、越中瀬戸焼			
	遺物包含地	その他			須恵器、土師器、製塙土器、石器、土製品			

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第209集

一般国道8号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書V
前波南遺跡II・伝極楽寺跡

平成22年3月30日印刷 編集・発行 新潟県教育委員会
平成22年3月31日発行 〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1
電話 025(285)5511

財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1
電話 0250(25)3981
FAX 0250(25)3986

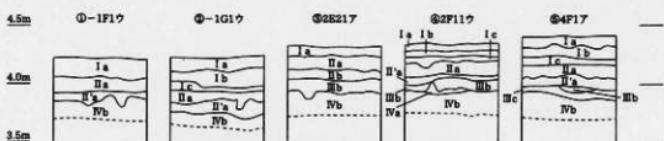
印刷・製本 新高速印刷株式会社
〒950-0963 新潟市中央区南出来島2-1-25
電話 025(285)3311

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第209集『前波南遺跡 伝極楽寺跡』正誤表追加

頁	位置	誤	正
抄録	前波南遺跡 北緯	37度02分54秒	37度03分06秒
抄録	前波南遺跡 東経	137度53分55秒	137度53分44秒
抄録	伝極楽寺跡 北緯	37度03分07秒	37度03分18秒
抄録	伝極楽寺跡 東経	137度54分30秒	137度54分18秒

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第209集
『前波南遺跡II 伝極楽寺跡』の訂正について

誤	正
14頁 第6図	下の欄外図
19頁 25行目 [鈴木・遠藤1998]	[鈴木ほか1988]
56頁 19行目 上田正昭 2003	上田正昭 1993
56頁 追加 加藤 学 2008 「第V章 遺物 3D石器」「姫御前遺跡I」新潟県埋蔵文化財調査報告書第184集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団	
57頁 追加 鈴木郁夫 2000 「I 概説 1.地形概説」「新潟県地質図説明書(2000年度版)」新潟県商工労働部 商工振興課	
61頁 報告番号 49 口径90mm 器高 - 底径 -	口径90mm 器高19mm 底径42mm
62頁 報告番号 96 口径200mm 器高 - 底径 -	口径180mm 器高 - 底径 -
図版18 スケール	



第6図 前波南遺跡グリッド設定と基本層序